

東金市道庭遺跡

—— 農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書2 ——

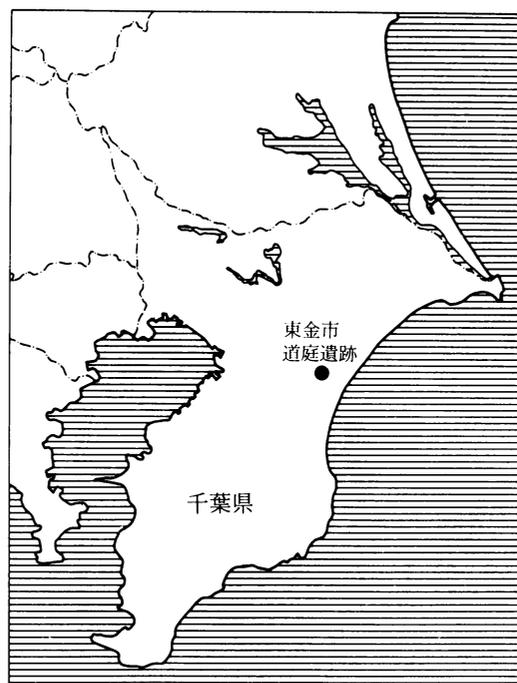
平成10年3月

千葉県農林部

財団法人 千葉県文化財センター

とう がね どう にわ 東 金 市 道 庭 遺 跡

— 農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書 2 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第332集として、千葉県農林部の千葉県農業大学校バイテク棟建設事業に伴って実施した東金市道庭遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代から平安時代に至る集落跡を発見するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財保護やその普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係諸機関、また、発掘調査から整理まで御労苦をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年3月31日

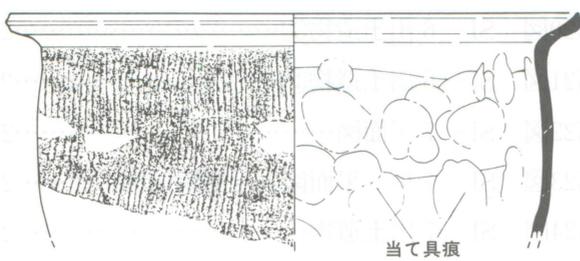
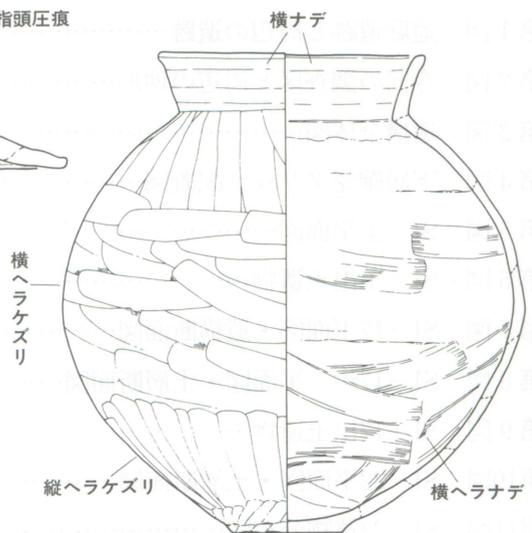
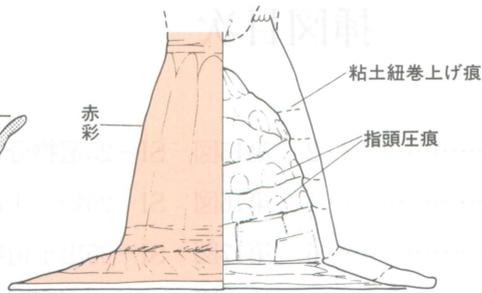
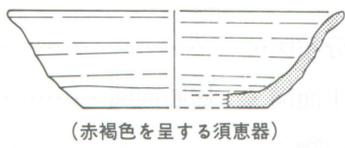
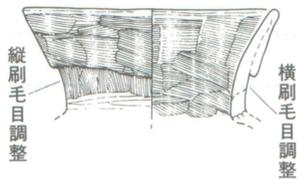
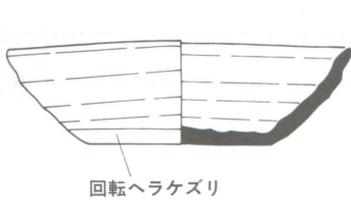
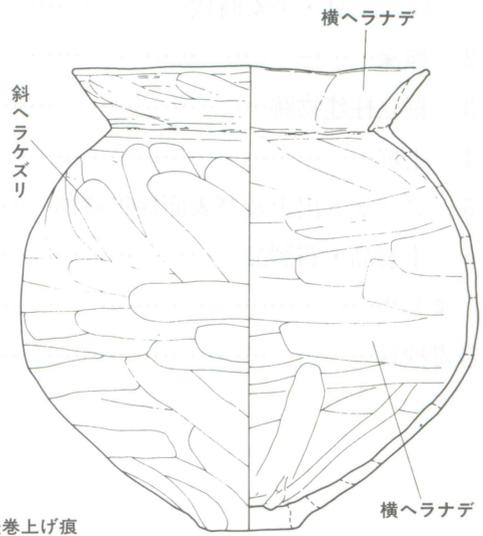
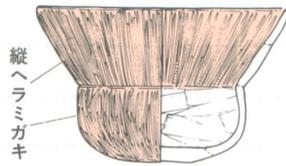
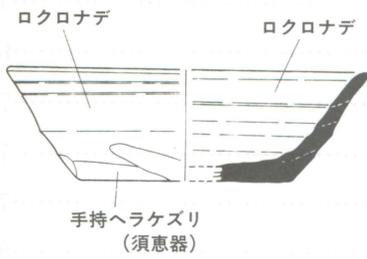
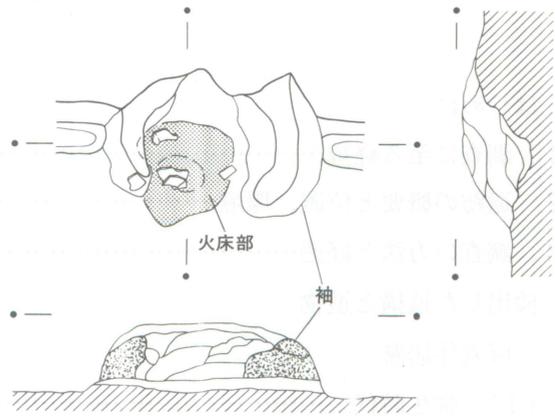
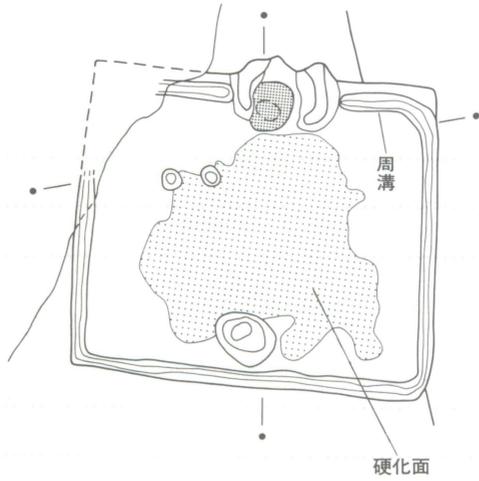
財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県農林部による農業大学校バイテク棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、東金市家之子字東大宮台1,017-1ほかに所在する道庭遺跡（遺跡コード 213-008）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県農林部の委託を受けた 財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 現地での発掘調査は平成8年度及び平成9年度、整理作業は引き続き平成9年度に実施した。調査期間及び各担当の職員は本文に記してある。
- 5 本書の執筆は、技師 城田義友が行った。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県農林部、千葉県農業大学校、東金市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
 第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「東金」
 第2図 東金市役所発行 1/2,500都市計画図
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』を使用し、その用例に従った。
- 10 遺構名を以下のように略記した。
 S I = 竪穴住居跡、S D = 環濠、S B = 掘立柱建物跡、S K = 土坑、P = ピット
- 11 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時のものと異なる。
- 12 遺物計測表の凡例は別に示した。

本 書	調査時	前 回	本 書	調 査 時	本 書	調査時	本 書	調査時
SD-01	SD-01	SD001	SI-18	SI-10	SI-29	SI-19B	SK-42	SK-07
SI-01	SI-09	SI001	SI-19	SI-12	SI-30	SI-20A	SK-43	SK-08
SI-06	SI-02	SI006	SI-20	SI-11・SI-21	欠番	SI-14	SK-44	SK-09
SI-07	SI-01	SI007	SI-21	SI-13A	欠番	SI-17C	SK-45	SK-10
SI-11	SI-05	SI011	SI-22	SI-13B	欠番	SI-17D	SK-46	SK-11
SI-12	SI-03	—	SI-23	SI-15B	欠番	SI-18	欠番	SK-01
SI-13	SI-04A	—	SI-24	SI-15A	欠番	SI-20B	欠番	SK-02
SI-14	SI-04B	—	SI-25	SI-16	SB-01	SB-03	欠番	SK-03
SI-15	SI-06	—	SI-26	SI-17B	SB-02	SB-01	欠番	SK-04
SI-16	SI-07	—	SI-27	SI-17A	SB-03	SB-02	欠番	SK-05
SI-17	SI-08	—	SI-28	SI-19A	SB-04	SB-04	欠番	SK-06

13 スクリーントーン及び記号の用例は下図に示すとおりである。



平行タタキ目

本文目次

I	はじめに	
1	調査に至る経緯	1
2	遺跡の概要と位置、環境	1
3	調査の方法と経過	5
II	検出した遺構と遺物	
1	竪穴住居跡	
(1)	弥生時代	9
(2)	古墳時代	20
(3)	奈良・平安時代	47
2	環濠	69
3	掘立柱建物跡	72
4	土坑	76
5	グリッド出土及び表面採集遺物	79
6	土製品・石製品	81
III	まとめ	83
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	道庭遺跡と周辺の遺跡	2	第15図	SI-25遺物分布図	17
第2図	今回の調査区と周辺の地形	4	第16図	SI-25炉 平面図・土層断面図	17
第3図	遺構全体図	6	第17図	SI-25出土遺物	18
第4図	下層確認グリッド配置図	7	第18図	SI-6 平面図・土層断面図・遺構断面図	20
第5図	SI-1 平面図	9	第19図	SI-6 カマド 平面図・土層断面図	21
第6図	SI-1 出土遺物	10	第20図	SI-6 出土遺物①	21
第7図	SI-17平面図・遺構断面図	11	第21図	SI-6 出土遺物②	23
第8図	SI-17炉 平面図・土層断面図	11	第22図	SI-7 平面図	24
第9図	SI-17出土遺物	12	第23図	SI-7 炉 平面図・土層断面図	24
第10図	SI-22平面図・土層断面図	14	第24図	SI-7 出土遺物	25
第11図	SI-22遺物分布図	14	第25図	SI-11平面図・土層断面図・遺構断面図	26
第12図	SI-22炉 平面図・土層断面図	15	第26図	SI-11貯蔵穴遺物出土状況	27
第13図	SI-22出土遺物	16	第27図	SI-11遺物分布図	27
第14図	SI-25平面図・土層断面図	17	第28図	SI-11出土遺物①	29

第29図	SI-11出土遺物②	31	第57図	SI-23・SI-24カマド 平面図・土層断面図	56
第30図	SI-11出土遺物③	32	第58図	SI-23・SI-24出土遺物	57
第31図	SI-16平面図	33	第59図	SI-26平面図	59
第32図	SI-16カマド 平面図・土層断面図	33	第60図	SI-26カマド 平面図・土層断面図	59
第33図	SI-16出土遺物	34	第61図	SI-26遺物分布図	60
第34図	SI-18・SI-19平面図・遺構断面図	35	第62図	SI-26出土遺物①	61
第35図	SI-18出土遺物	36	第63図	SI-26出土遺物②	63
第36図	SI-20平面図・土層断面図	38	第64図	SI-26出土遺物③	65
第37図	SI-20出土遺物	39	第65図	SI-27平面図・土層断面図	66
第38図	SI-21平面図・土層断面図	40	第66図	SI-27カマド 平面図・土層断面図	67
第39図	SI-21出土遺物	41	第67図	SI-27出土遺物	68
第40図	SI-28・SI-29平面図・土層断面図	44	第68図	SD-1平面図	69
第41図	SI-28・SI-29出土遺物	44	第69図	SD-1土層断面図	69
第42図	SI-30平面図	45	第70図	SD-1出土遺物	71
第43図	SI-30カマド 平面図・土層断面図	45	第71図	SB-1平面図・遺構断面図	72
第44図	SI-30出土遺物	46	第72図	SB-1出土遺物	73
第45図	SI-12平面図・土層断面図	47	第73図	SB-2～SB-4平面図	73
第46図	SI-12カマド 平面図・土層断面図	47	第74図	SB-3出土遺物	74
第47図	SI-12出土遺物	48	第75図	SB-4出土遺物	74
第48図	SI-13平面図・土層断面図	50	第76図	SK-42平面図	76
第49図	SI-13カマド 平面図・土層断面図	50	第77図	SK-43平面図	76
第50図	SI-13出土遺物	51	第78図	SK-43出土遺物	76
第51図	SI-14平面図	53	第79図	SK-44平面図・土層断面図	77
第52図	SI-14出土遺物	53	第80図	SK-44・SK-45出土遺物	77
第53図	SI-15平面図	54	第81図	SK-46平面図・土層断面図	78
第54図	SI-15カマド 平面図・土層断面図	54	第82図	グリッド出土遺物	80
第55図	SI-15出土遺物	54	第83図	石製品・土製品	82
第56図	SI-23・SI-24平面図	55			

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表

第2表 遺物計測表①（古墳・杯類）

第3表 遺物計測表②（古墳・甕類）

第4表 遺物計測表③（古代・杯類）

第5表 遺物計測表④（古代・甕類）

図版目次

- | | | | |
|------|--------------------------------------|------|------------------------------|
| 図版 1 | 遺跡遠景、調査区全景 | 図版14 | 遺物 (SI-1、SI-17①) |
| 図版 2 | SI-1(全景)、SI-17(全景)、SI-25(全景) | 図版15 | 遺物 (SI-17②、SI-22) |
| 図版 3 | SI-6・7(全景)、SI-6(カマド、堀型) | 図版16 | 遺物 (SI-25、SI-6①) |
| 図版 4 | SI-11(全景、遺物出土、貯蔵穴) | 図版17 | 遺物 (SI-6②、SI-7) |
| 図版 5 | SI-16(堀型)、SI-18・19(全景)、
SI-20(全景) | 図版18 | 遺物 (SI-11①) |
| 図版 6 | SI-28・29(全景)、
SI-30(カマド、遺物出土) | 図版19 | 遺物 (SI-11②) |
| 図版 7 | SI-12(全景、堀型、カマド) | 図版20 | 遺物 (SI-16、SI-18) |
| 図版 8 | SI-13(全景、カマド)、SI-15(堀型) | 図版21 | 遺物 (SI-20、SI-21、SI-28、SI-29) |
| 図版 9 | SI-23・26(全景)、SI-26(遺物出土) | 図版22 | 遺物 (SI-30、SI-12) |
| 図版10 | SI-27(全景、カマド遺物出土) | 図版23 | 遺物 (SI-13、SI-14、SI-15、SI-23) |
| 図版11 | SD-1(全景、土層断面) | 図版24 | 遺物 (SI-26①) |
| 図版12 | SB-1(全景)、SB-4(全景) | 図版25 | 遺物 (SI-26②、SI-27) |
| 図版13 | SK-42(遺物出土)、SK-44(全景)、
SK-46(全景) | 図版26 | 遺物 (SD、SB、SK) |
| | | 図版27 | 遺物 (遺構外、石製品・土製品) |

I はじめに

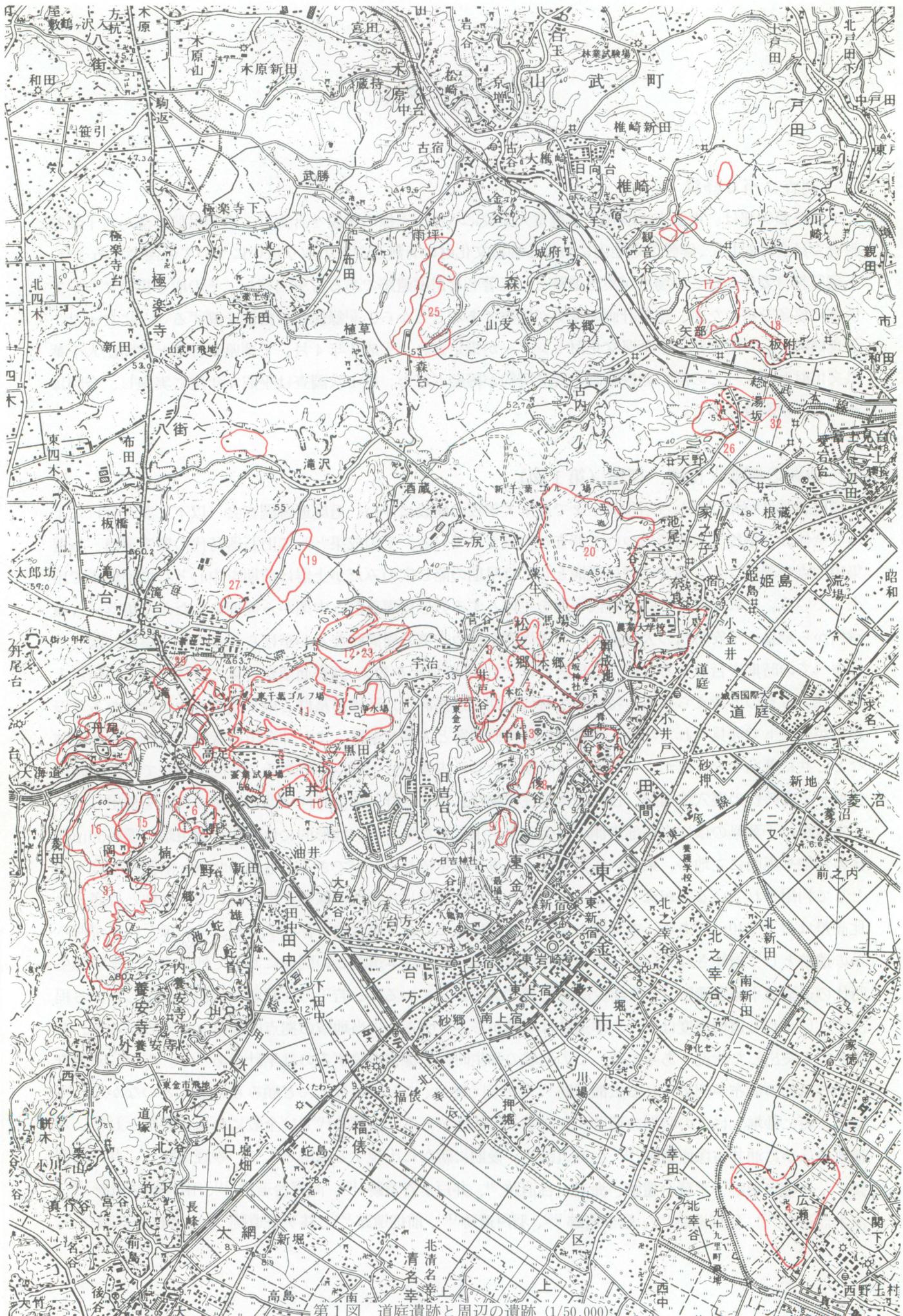
1. 調査に至る経緯

千葉県農林部は、東金市に所在する農業大学校にバイテク棟の建設を計画し、千葉県農林部から千葉県教育委員会に対して、建設予定地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについての照会があった。千葉県教育委員会はこの場所が集落遺跡として著名な道庭遺跡である旨を回答し、その取り扱いについて慎重に協議を重ねたが、事業計画の変更が困難であることから、記録保存の措置を講ずることになった。調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指定され、平成4年4月、千葉県農林部と財団法人千葉県文化財センターとの間に発掘調査の委託契約が締結された。第1次調査は平成4年度に実施し、今回はその第2次調査である。

2. 遺跡の概要と位置、環境（第1図）

道庭遺跡は昭和52年から昭和54年まで農業大学校の建設に伴い、道庭遺跡調査会（以下、調査会）によって全体の2割程度の面積について調査が実施されている。その成果として旧石器時代の竪穴遺構、石器集中地点や礫群など、縄文時代は遺構としては早期の陥し穴のみだが土器は前期を中心として晩期まで出土している。それ以降では弥生時代中期を主体とする方形周溝墓群と中期から後期にまたがる集落、古墳時代から奈良・平安時代の大集落及び二重周溝を持つ古墳の周溝跡などが挙げられる。特に集落に関してはすべての時期を合算すると竪穴住居跡だけでも400軒以上を数え、調査面積から見て全体ではこの倍以上は存在するものと考えられる。特に弥生時代中期の遺構群は方形周溝墓群という墓域と生活領域たる環濠集落がセットで発見されたため、佐倉市寺崎向原遺跡と大崎台遺跡、また神奈川県歳勝土遺跡と大塚遺跡などと共に著名となったが、中心となる時期はむしろ古墳時代中期以降である。今回の調査では弥生時代後期～平安時代の竪穴住居跡、古代の掘立柱建物跡、ピット群、弥生時代中期の環濠の続きを検出した。

本遺跡は千葉県のほぼ中央部東側の東金市家之子に所在する⁽¹⁾。地形的には下総台地東端の標高50m前後の台地平坦面に立地し、東側に広大な九十九里平野を望むことができる。台地の北側と南側からは水田として利用されている谷が深く入り込んでおり、半ば独立した台地の様相を呈している。台地と谷底との比高差はおおよそ40mである。本遺跡の周辺には他にもこのような台地が存在するが、そのほとんどが何らかの遺跡として周知されている。以下周辺遺跡のいくつかを本遺跡との関係において列挙する。まず弥生時代の遺構は平蔵台遺跡⁽²⁾、久我台遺跡⁽³⁾等でみつまっているが、若干の住居跡と土器が出土している程度で、いずれも遺構密度は薄い。本遺跡は規模からみて明らかに当地域の拠点集落と考えられるが、あまりにも突出した状況であるため、この地域の弥生時代の様相を論ずるのは早計であろう。ただ、未調査ながら遺物の散布が認められる広瀬遺跡⁽⁴⁾等の例もあり、これまでほとんど顧みられることのなかった平野部、特に砂堆上にこの時期の遺跡が存在する可能性がある。古墳時代では全般にわたる集落として、本遺跡のほかに油井古塚原遺跡⁽⁵⁾、小野遺跡⁽⁶⁾、後期に新たに出現する遺跡として、妙経遺跡⁽⁷⁾、井戸向遺跡⁽⁸⁾、久我台遺跡、平蔵台遺跡、海老ヶ谷遺跡⁽⁹⁾、井戸ヶ谷遺跡⁽¹⁰⁾、滝東台遺跡⁽¹¹⁾、南外輪戸遺跡⁽¹²⁾、滝木浦遺跡⁽¹³⁾、作畑遺跡⁽¹⁴⁾、尾亭遺跡⁽¹⁵⁾、羽戸遺跡⁽¹⁶⁾、前畑遺跡⁽³⁰⁾、鉢ヶ谷遺跡⁽³¹⁾など枚挙に暇ない。



第1図 道庭遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)

集落は後期になると遺構数と遺跡数が飛躍的に増加するようである。一方古墳は鏡を4面出土した島戸境1号墳⁽¹⁷⁾と森台古墳群⁽²⁵⁾で2基見つかっているのみで、板附古墳群⁽¹⁸⁾、滝沢古墳群⁽¹⁹⁾、家之子古墳群⁽²⁰⁾、松之郷馬場古墳群⁽²¹⁾、井戸谷古墳群⁽²²⁾、菅谷古墳群⁽²³⁾、焼山古墳群⁽²⁴⁾、森台古墳群、天野古墳群⁽²⁶⁾、油井古塚原遺跡、小野遺跡などの古墳群はほとんどが後期である。集落と同様に古墳も後期になるとその数が増加する。奈良・平安時代は前代の集落がほとんど継続して営まれ、廃絶するのは数例である。また、新たにあらわれる遺跡には滝台遺跡⁽²⁷⁾、中谷遺跡⁽²⁸⁾、外荒遺跡⁽²⁹⁾等が挙げられ、特に滝台遺跡は「山邊郡印」を出土したことで有名である。ほとんどの遺跡で古墳時代後期より更に規模を増大させているが、規模の小さい分村的な集落も多く、規模格差は明確なものとなっている。その他第1図範囲外ではあるが、武射郡衙推定地である嶋戸東遺跡、古代寺院では湯坂廃寺跡⁽³²⁾、武射郡の郡寺と考えられる真行寺廃寺跡等がある。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な時代	種別	地形	調査年度	備考
1	道庭遺跡	旧石器～平安	集落・墓地	台地上		
2	平蔵台遺跡	弥生～平安	集落	台地上	S45・46	
3	久我台遺跡	旧石器～平安	集落	台地上	S57～S60	
4	広瀬遺跡	縄文～古墳	散布地	砂丘列上	未調査	
5	油井古塚原遺跡	縄文～平安	集落・古墳群	台地上	S41・57・60・63	
6	小野遺跡	縄文・古墳～平安	集落・古墳群	台地上		
7	妙経遺跡	縄文・古墳～平安	集落	台地上	S50	東金台第3地点
8	井戸向遺跡	古墳～平安	集落	台地上	S50	東金台第4地点
9	海老ヶ谷遺跡	古墳～平安	集落	台地上	S50	東金台第1地点
10	井戸ヶ谷遺跡	奈良・平安	散布地	台地上		
11	滝東台遺跡	縄文・古墳～平安	集落	台地上	S61・62	
12	南外輪戸遺跡	旧石器～平安	集落	台地上	S58～S60	
13	滝木浦遺跡	縄文・奈良・平安	集落	台地上	S48・58・59	
14	作畑遺跡	縄文・古墳～平安	集落	台地上		
15	尾亭遺跡	縄文・奈良・平安	集落	台地上		
16	羽戸遺跡	縄文・奈良・平安	集落	台地上		
17	島戸境古墳群	古墳	古墳群	台地上		
18	板附古墳群	古墳	古墳群	台地上		
19	滝沢古墳群	古墳	古墳群	台地上		
20	家之子古墳群	古墳	古墳群	台地上	S36	
21	松之郷馬場古墳群	古墳	古墳群	台地上		
22	井戸谷古墳群	古墳	古墳群	台地上		
23	菅谷古墳群	古墳	古墳群	台地上	S58～S60	
24	焼山古墳群	古墳	古墳群	台地上		
25	森台古墳群	古墳	古墳群	台地上		
26	天野古墳群	古墳	古墳群	台地上		
27	滝台遺跡	奈良・平安	散布地	台地上		
28	中谷遺跡	奈良・平安	集落	台地上	S50	東金台第2地点
29	外荒遺跡	縄文・古墳～平安	集落	台地上	S61	
30	前畑遺跡	古墳～平安	集落	台地上		
31	鉢ヶ谷遺跡	縄文・古墳～平安	集落	台地上		
32	湯坂廃寺跡	古代	寺院跡	台地上		
	嶋戸東遺跡	奈良・平安	官衙推定地	台地上	H9	
	真行寺廃寺跡	古代	寺院跡	台地上		



第2図 今回の調査区と周辺の地形 (1/5,000)

3 調査の方法と経過

道庭遺跡の全面積およそ250,000㎡のうち、本事業に伴う調査対象面積は1,544㎡である（第2図）。そのうちの480㎡については平成4年度に調査を実施し、すでに報告書が刊行されている（以下、第1次調査）。今回はその残り部分1,064㎡の調査であるが、平成9年2月1日から同年3月31日までにまず東側824㎡の上層本調査、年度の明けた平成9年4月3日から同年5月6日までに西側240㎡の上層本調査と全体の下層確認調査を実施した。

今回の調査はまず表土をバックホウなどの重機で除去した後、国家座標に基づいて基準点測量を行い、調査区内東西方向西よりA～K、南北方向北より1～6まで、4m毎に方眼杭を設定した。これにより調査区は一辺4mのグリッドで区画されたわけであるが、グリッドはA1、B2、C3……というようにその北西隅にある杭の名前で呼称した。なお、第1次調査でも同様の命名法を用いているため、混同する恐れがあるが、本書ではあえて調査時のものをそのまま使用した。下層確認グリッド配置図（第4図）の前回調査区域内に括弧で示したグリッド名が第1次調査のものである。

上層本調査では第1次調査で検出された環濠の続きと竪穴住居跡3軒の未調査部分、及び今回新たに竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡4棟、土坑3基及びピット群を検出した（第3図）。調査区の西側部分ではハードローム上面まで削平されており遺構密度が薄いことが第1次調査によって判明したため、上層本調査と同時に下層確認調査を実施した。下層確認調査は一辺2m程度の確認グリッドを調査区内の任意の場所に8個設定し、武蔵野ローム上面まで順次手掘りで掘り下げてゆく方法をとったが、遺構・遺物ともに検出されなかったため、確認調査で終了している（第4図）。下層確認調査終了後、器材の撤収、現場の埋め戻しを行い、現地での発掘調査を終了した。

整理作業は発掘調査終了と同時に開始し、水洗・注記から記録整理、復元、実測、トレース、挿図・図版の作成、写真撮影、原稿執筆、報告書の刊行まで、すべての作業を平成9年度内に完了した。本事業の担当職員は下記のとおりである。

発掘調査

平成9年2月1日～同年3月31日

調査部長 西山太郎、調査事務所長 石田廣美、担当職員 研究員 菅原修

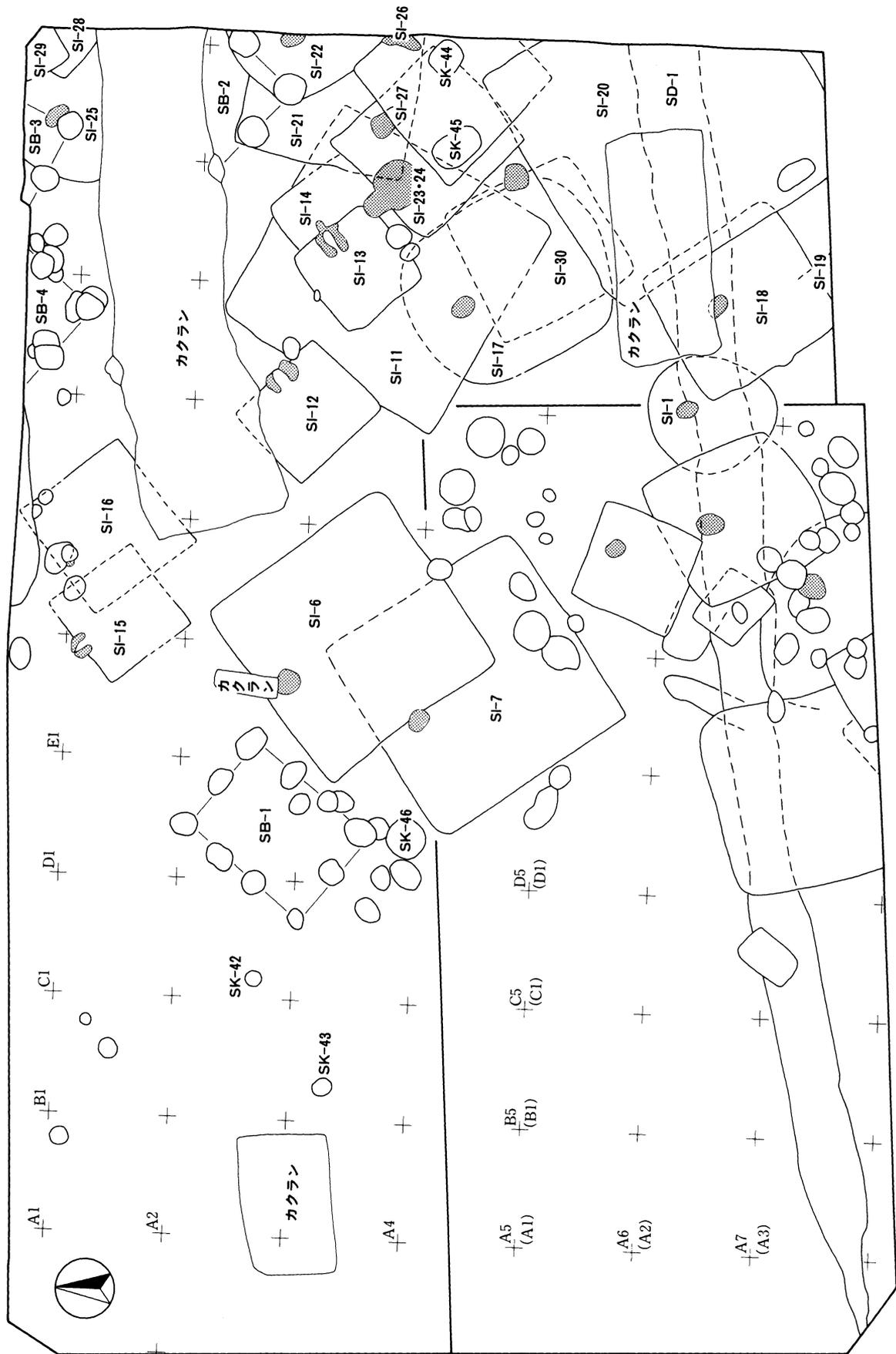
平成9年4月3日～同年5月6日

調査部長 西山太郎、調査事務所長 石田廣美、担当職員 技師 城田義友

整理作業

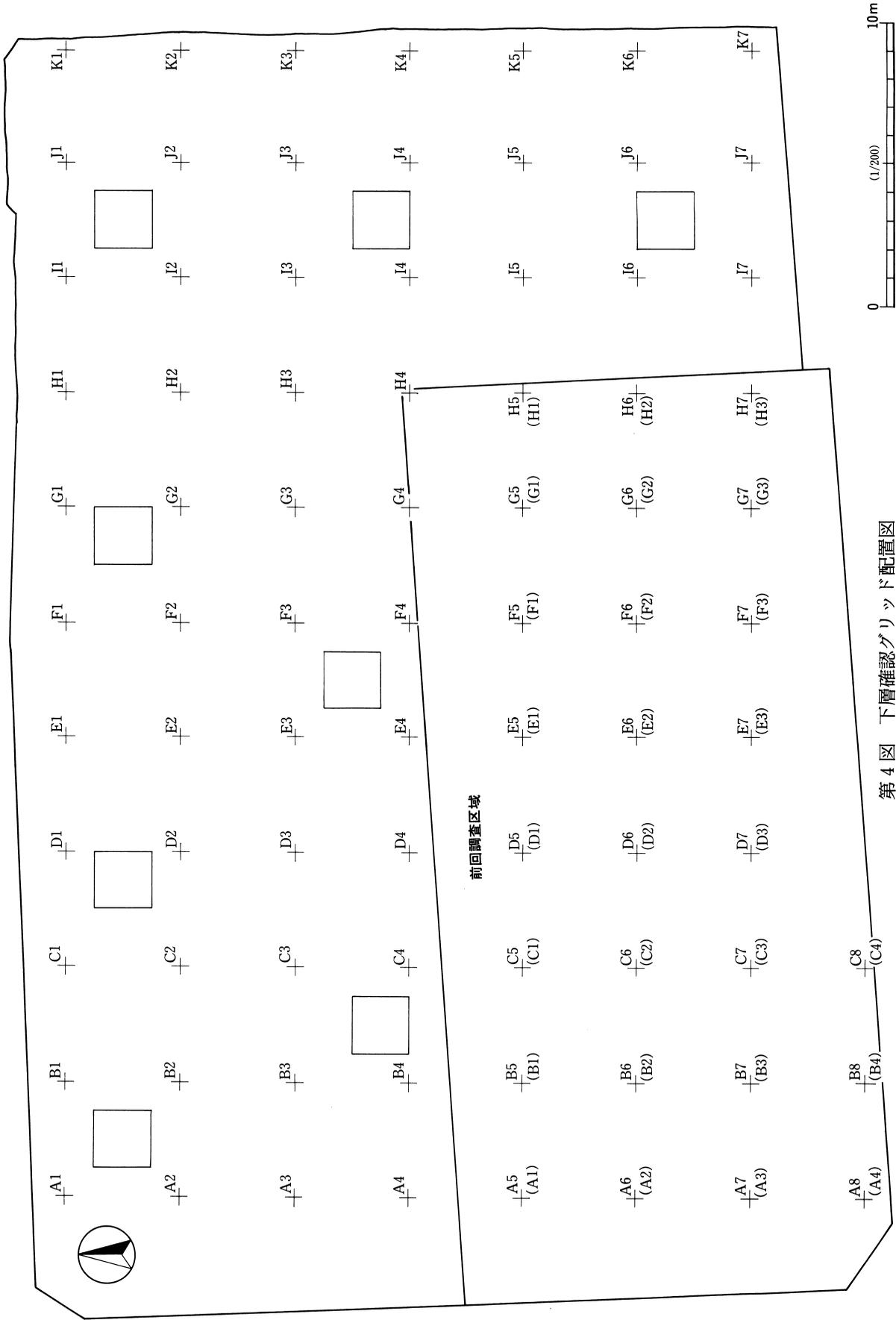
平成9年5月7日～同年9月30日

調査部長 西山太郎、調査事務所長 石田廣美、担当職員 調査室長 鳴田浩二、技師 城田義友



第3図 遺構全体図





第4図 下層確認グリッド配置図

周辺遺跡参考文献（番号は本文、第1図、第1表と一致する）

- (1) 小高春男他 1983『道庭遺跡発掘調査報告書』第1分冊・第2分冊（道庭遺跡調査会）
川島利通 1994『東金市道庭遺跡』（財千葉県文化財センター）
- (2) 丸子亘他 1970『東金平蔵台遺跡発掘調査概報』（千葉県教育委員会）
- (3) 萩原恭一・小林信一 1988『東金市久我台遺跡』（財千葉県文化財センター）
- (5・11・14・29) 椎名信也他 1996『油井古塚原遺跡群』（財山武郡市文化財センター）
- (6) 1989-1994『財団法人山武郡市文化財センター年報』No.4-9
- (7・22) 沖松信隆 1994『東金市妙経遺跡・井戸谷9号墳』（財千葉県文化財センター）
- (8・9) 梶山林繼他 1980『東金台遺跡Ⅰ』（東金台遺跡調査団）
- (10) 谷旬・糸川道行 1992『東金市井戸ヶ谷遺跡』（財千葉県文化財センター）
- (12・13・23) 中西克也他 1985『東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡 滝・木浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会）
- (14) 桐谷優他 1988『作畑遺跡』（作畑遺跡調査会）
- (15・16) 1995『財団法人山武郡市文化財センター年報』No.10
- (17) 平山誠一他 1994『島戸境1号墳～山武町不特定遺跡発掘調査報告書』（山武町教育委員会）
- (18) 軽部慈恩 1955「千葉県山武郡板附不動塚古墳」『日本考古学年報』4（日本考古学協会）
軽部慈恩 1958「千葉県山武郡成東町板附西ノ台古墳」『日本考古学年報』7（日本考古学協会）
白石太一郎他 1987「千葉県成東町駄ノ塚古墳の調査」『日本考古学協会第53回総会発表要旨』
- (25) 吉田章一郎他 1983『千葉県山武郡森台古墳群の調査』（青山学院大学森台遺跡発掘調査団）
- (32) 1975『湯坂遺跡群調査報告』（山武考古学研究会）
- (29) 矢戸三男 1988『東金市外荒遺跡発掘調査報告書』（財千葉県文化財センター）
天野努他 1984『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』（財千葉県文化財センター）

II 検出した遺構と遺物

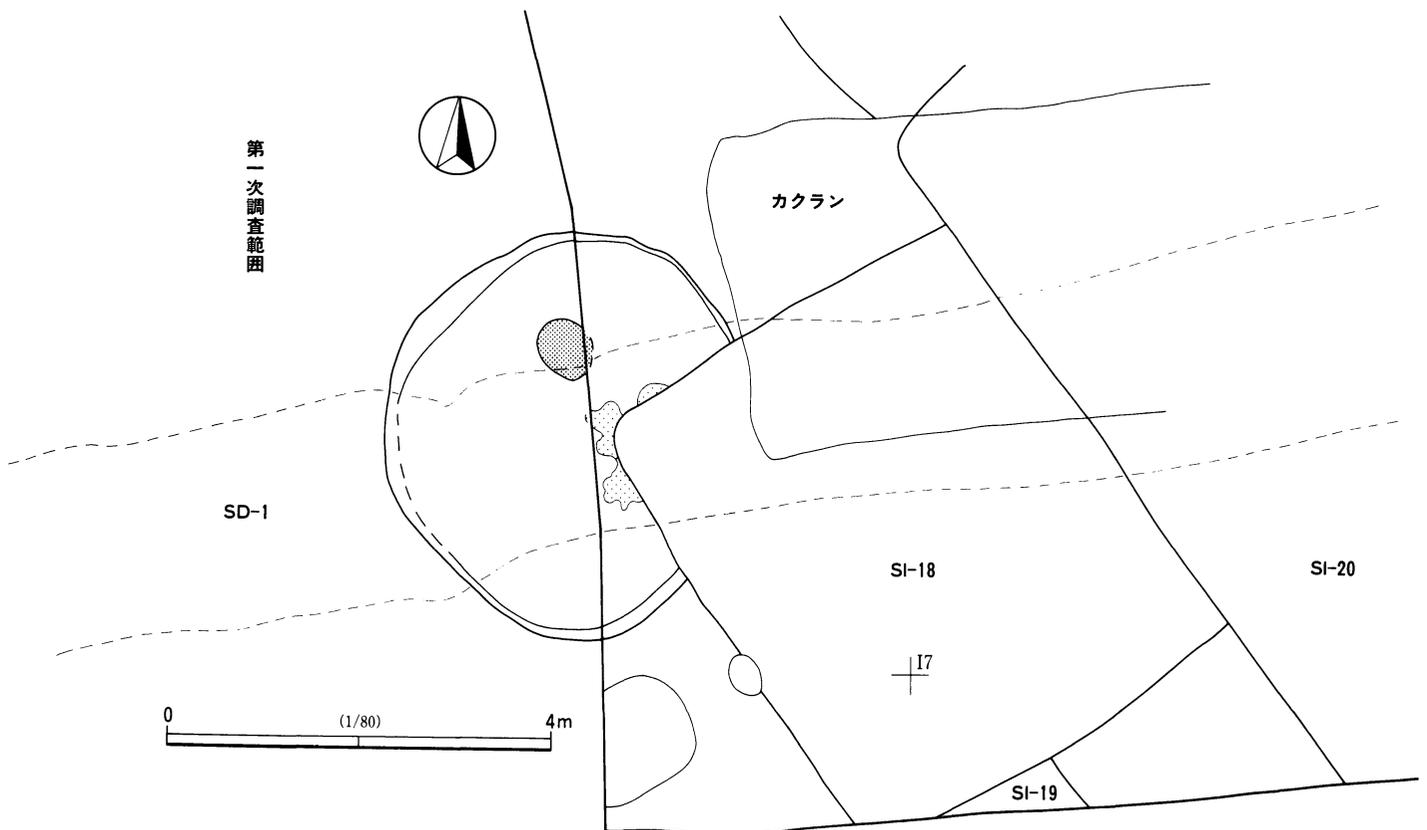
1. 竪穴住居跡

(1) 弥生時代

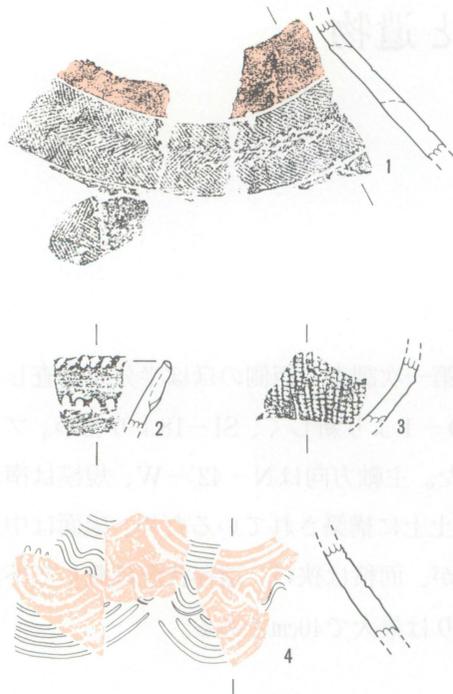
SI-1 (第5図・第6図、図版2・図版14)

遺構

調査区南側西端のG5グリッドからH6グリッドに所在し、第一次調査で西側のほぼ半分を調査している。SD-1及びSI-18と重複関係をもつ。調査時の所見よりSD-1より新しく、SI-18より古い。プランは隅丸方形であるが円形に近く、周溝、柱穴等は見出せなかった。主軸方向はN-42°-W、規模は南北が3.6m、東西が3.8mで、推定面積は11.2m²である。SD-1の覆土上に構築されているため、床面は中央部分がやや沈んでおり、硬化面は本住居跡中央付近に認められたが、面積は狭い。遺存状況は概して不良である。なお炉は第一次調査時に検出されている。壁の立ち上がりは最大で40cmである。



第5図 SI-1平面図



第6図 SI-1出土遺物 (S=1/3)

遺物 (第6図、図版2・図版14)

大部分がSI-18により破壊されているため出土量は少なく、ほとんど接合しなかった。図示した遺物はすべて弥生土器だが、古墳時代の遺物も若干出土している。

1は大型の壺の肩部で、床面付近より出土した。体部が強く張り、やや下膨れとなるタイプと考えられる。胴部上半に文様帯がめぐる。上部文様帯は上からLR・RL・L・LRの羽状縄文を施し上下を細沈線で区画した文様帯で、中位に無節の原体を使用した2条のS字結節文が残る部分がある。下部文様帯は、上からLR・RLの羽状縄文施文後に沈線で鋸歯文を区画し、枠外を磨消したものと考えられる。外面の文様帯以上は赤彩される。胎土には石英粒や黒色砂粒を多く含み、灰黄色を呈するやや軟質の焼き上がりである。

2は甕の口縁部で、床面付近から出土した。口縁部が長くラップ状に外反するタイプで、折り返しにより複合口縁を形成する。内面外面共に横刷毛目調整、口唇部と

縁部下端にはへら状工具による細かいキザミを施す。胎土には石英粒や灰色砂粒を含むが、総じて混入物は少なく、黒褐色を呈する硬質の焼き上がりである。

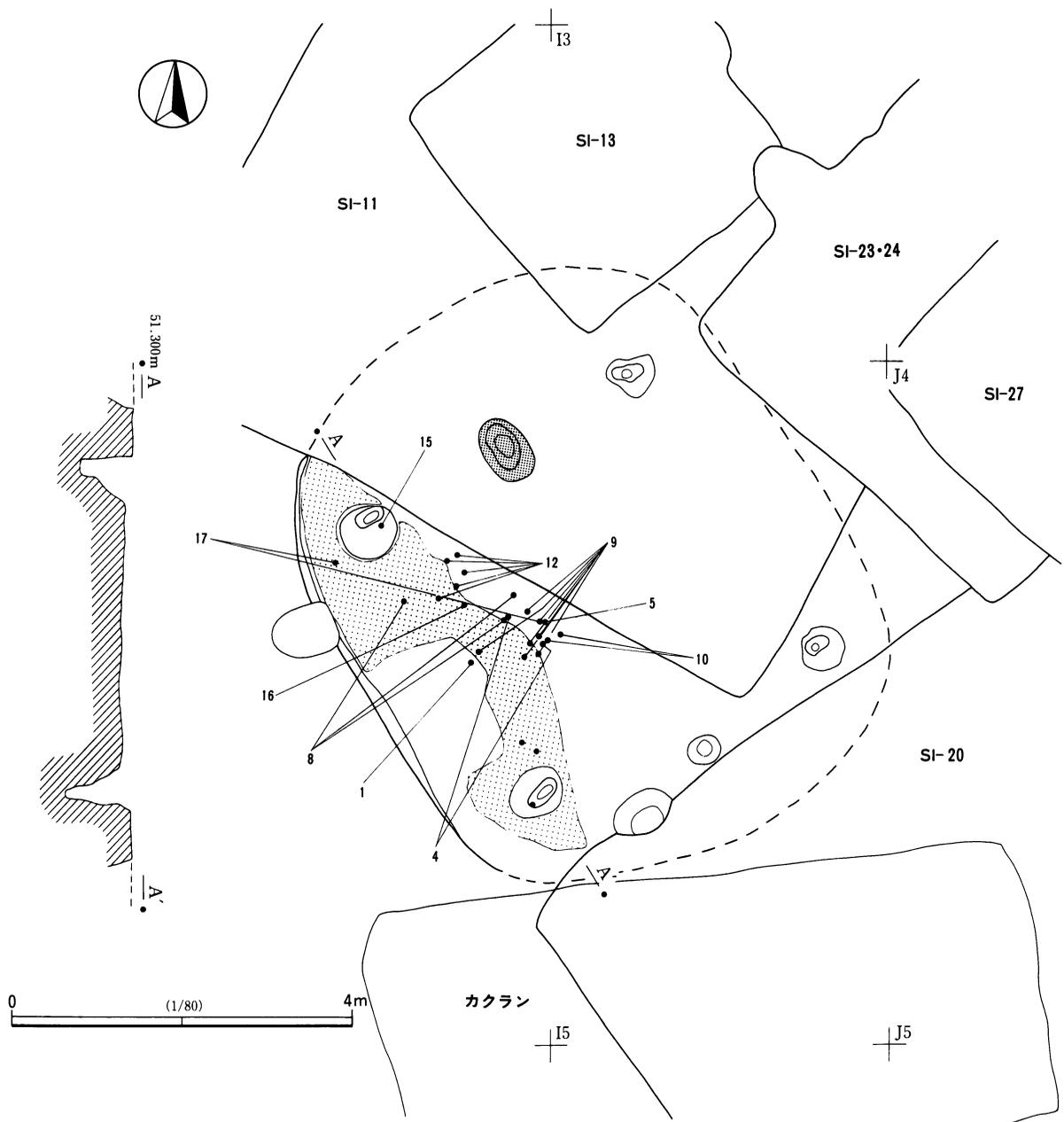
3は小型の壺の胴部で、覆土下層から出土した。球胴型を呈し、最大径が胴部中位にあるものと考えられる。内面は丁寧な横へらナデ、外面にはLR縄文を施す。胎土には石英粒を少量含む程度で混入物は少なく、黒褐色を呈する硬質の焼き上がりである。

4は壺の肩部で、覆土中層ないし上層から出土した。断片的であるためはっきりしないが、胴部と頸部が明瞭に区別されず、最大径が胴部中位にあるタイプと考えられる。内面には丁寧な横ナデ、外面には太い楯状工具により上から重弧文、波状文、重弧文を施す。外面は赤彩される。胎土には白色粒子や石英粒、黒色砂粒などを多量に含み、灰白色を呈するやや軟質の焼き上がりである。

SI-17 (第7図～第9図、図版2・図版14・図版15)

遺構

調査区東側ほぼ中央、H3グリッドからI5グリッドに位置する。SI-11、SI-13、SI-20、SI-30と重複関係を持ち、これらのなかで最も古い。SI-11により半分以上を破壊されているためプランははっきりしないが、やや縦長の小判形を呈するものと考えられる。主軸方位はN-33°-W、長軸長7.1m程度、短軸長は5.7m程度と推定される。主柱穴は4本、柱穴はいわゆる板状柱穴で、床面からの深さ1.0m～1.2mでほぼ均等である。柱のあたりは極めてよくしまっていた。柱穴間の距離は桁間が3.8m～3.9m、梁間が3.5m～3.6m、内区は長方形を呈し、面積は13.6m²である。手前側主柱穴の中間やや南寄りに梯子ピット、その西側に貯蔵穴が検出された。なお貯蔵穴はSI-18によって半裁されており、遺物は出土しなかった。周溝・壁柱穴は存在しない。炉は奥側主柱穴のほぼ中間、SI-11の硬化面の除去後その下より検出された。

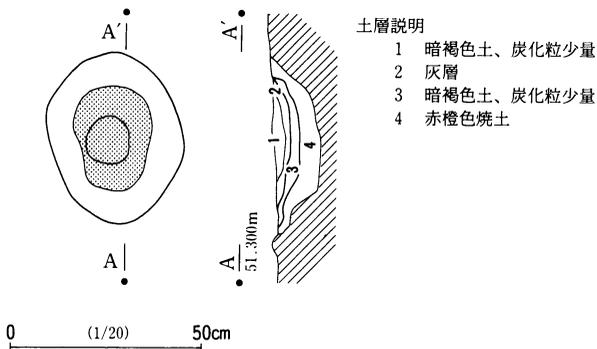


第7図 SI-17平面図・遺構断面図

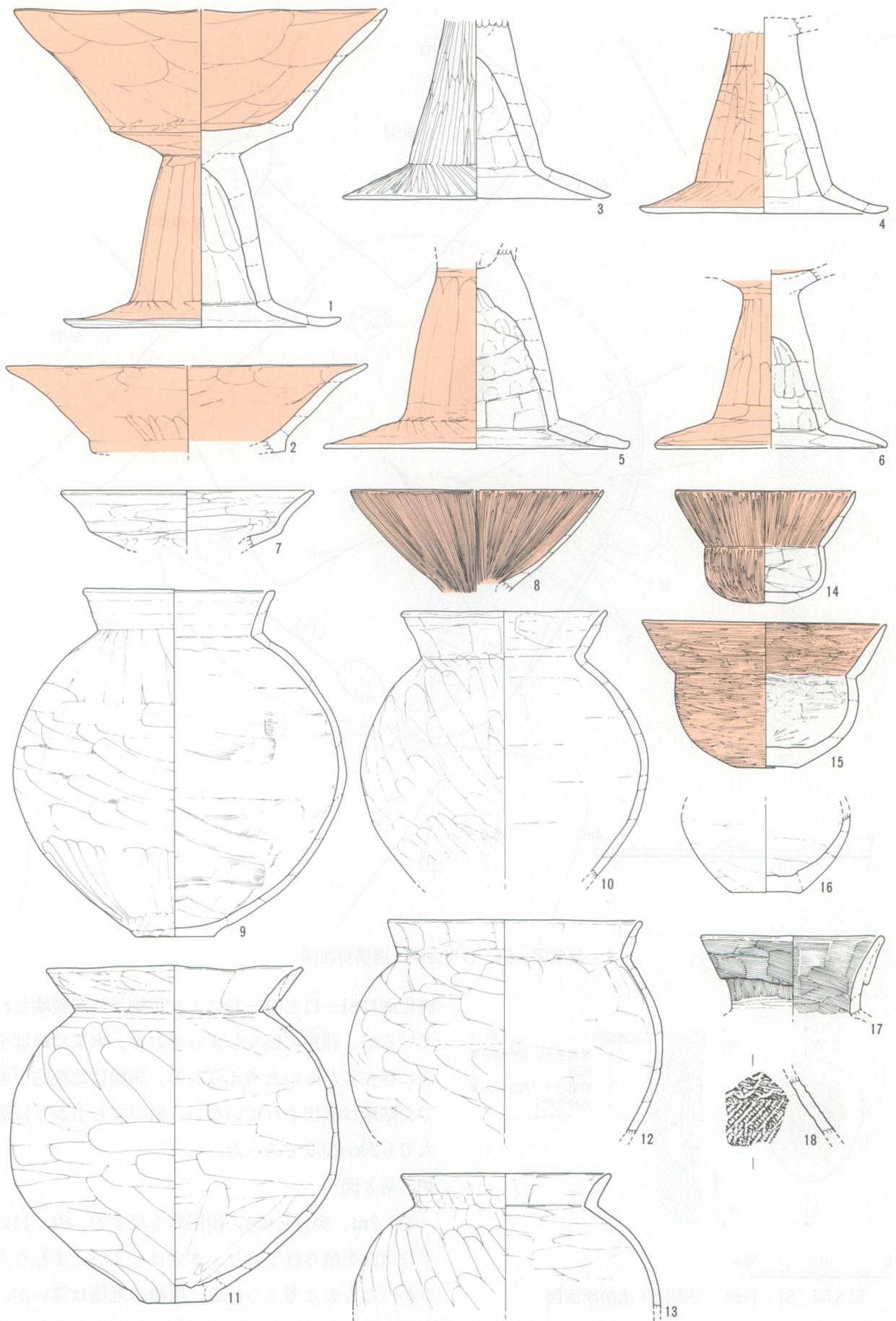
硬化面はSI-11とSI-30により東側半分が破壊されているが、非常に堅くしまっており、本来はほぼ全面に存在したものと考えられる。床面は比較的平坦で、貼床は検出されていない。壁の立ち上がりは最大でも20cm程度であった。

炉（第8図）

幅0.7m、奥行1.0cmの楕円形を呈する。SI-11により上部を削られており、本来はもうひとまわり大きかったものと考えられる。灰層の堆積は薄い、火床部分は良く焼けており、焼土の堆積は厚い。



第8図 SI-17炉 平面図・土層断面図



第9図 SI-17出土遺物 (7~13・17はS=1/4、他はS=1/3)

遺物（第9図、図版14・図版15）

遺存面積の割に出土量は多いが、覆土中層ないし上層出土の土師器がほとんどである。本住居跡が完全に埋没しないうちに一括廃棄されたものと推察される。

1～6は土師器高杯で、覆土中層ないし上層から出土した。3を除きすべて赤彩される。いずれも脚柱部と裾部が明瞭に区別されるタイプだが、形や技法がそれぞれ異なる。まず脚部の形態では脚柱部がやや膨らみをもつもの（1・5）と背の高い円錐状を呈するもの（3・4・6）、裾部はいずれも強く開くがやや反るもの（1・4）と直線的なもの（3・5・6）があり、杯部は下端に明瞭な段をもつが、口縁がやや急角度で立ち上がるもの（1）と、若干浅く立ち上がるもの（2）がある。次に技法では、どれも脚柱部外面に縦ヘラケズリを施すが、その後ヘラナデを施すもの（1・5）、ヘラミガキを施すもの（3）、無調整のもの（5・6）があり、またいずれも内面には上部にヘラアテ痕を残すが、その他全体にヘラケズリを施すもの（4）、部分的にヘラケズリを施し、巻上げ痕と指頭圧痕を残すもの（1・3・5・6）がある。また脚部と杯部の接合方法では杯部のホゾを脚部に差し込むもの（1・5・6）と、円形の粘土板を脚部上端に貼り付けるもの（3・4）がある。

7は土師器壺の口縁部で、覆土中層から出土した。中位に“く”字形に折れ曲がる明瞭な稜をもち、口縁はさらに外反する。内面外面共に粗いヘラミガキを施しており、にぶい光沢がある。

8・14・15は土師器甕で、覆土中層から出土した。8は口縁部である。ごくわずかに内湾するが、ほぼ直線的に広がる。内面外面共に細密な縦ヘラミガキが施され、全体が赤彩される。きわめて薄手のつくりで、丁寧に仕上げられる。14は小型・15は中型で、いずれも平底で体部が強く膨らむが、頸部はすぼまらず“く”字形に外反する。口縁部は直線的に広がり、口唇部は尖る。底部以外の外面と口縁部内面は赤彩される。14は口縁部には内面外面共に細密な縦ヘラミガキ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリの後細密な縦ヘラミガキを施す。15は口縁部には内面外面共に斜刷毛目調整後細密な横ヘラミガキ、体部は内面が斜ヘラナデ後粗い横ヘラミガキ、外面には細密な横ヘラミガキを施す。

9～13は土師器甕で、覆土中層から出土した。いずれも体部は球胴型を呈し、胴部最大径は中位にある。9～11は頸部が狭くすぼまり、“く”字形に強く折れ曲がる。口縁部はやや短く、9・10は直線的に立ち上がり、11はやや強く開く。12は頸部がやや狭くすぼまり、“く”字形にやや弱く折れ曲がる。口縁部は短く直線的に立ち上がる。いずれも口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。13は頸部があまりすぼまらず、“く”字形に強く折れ曲がる。口縁部は短く開く。口唇部は肥厚し、断面は丸みを帯びる。10～13は底部が遺存しないため不明だが、9・11の底部は平坦だが極端に小さいため若干不安定である。すべて口縁部は内面外面共に横ヘラナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面はヘラケズリを施す。調整の方向は個体差がある。薄手のつくりで比較的丁寧に仕上げられており、特に9は外面に光沢をもつ。

16は土師器小型壺で、覆土中層から出土した。体部が球胴型で、胴部最大径は中位にある。底部はやや窪むが安定する。体部は内面外面共に横ヘラナデ、底部はヘラナデを施す。丁寧に仕上げられている。

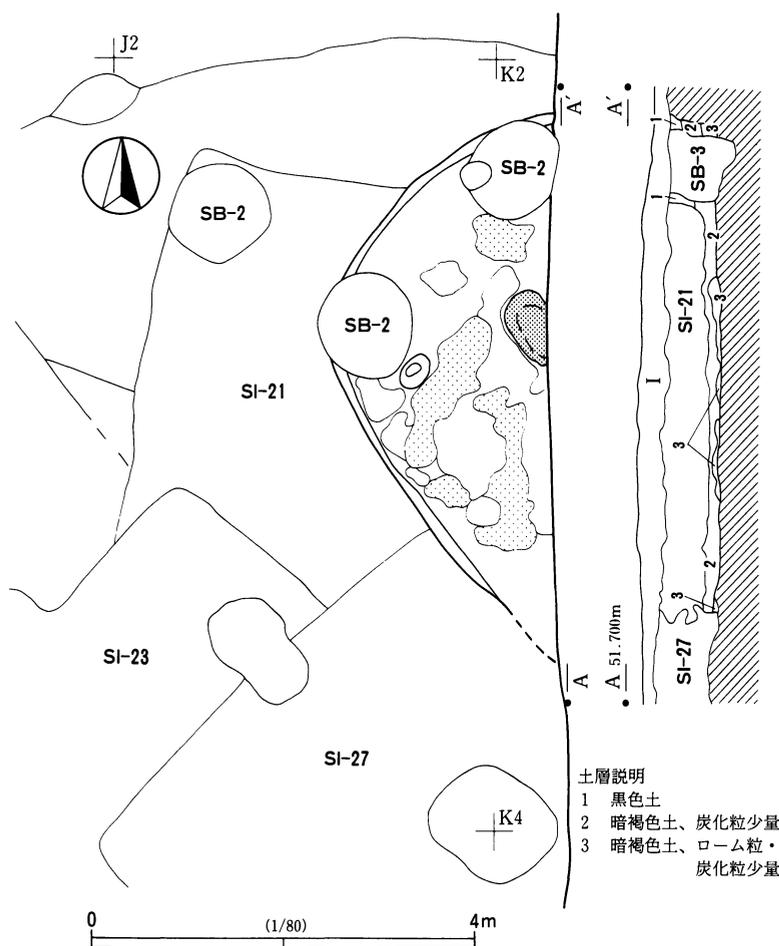
17は土師器甕の口縁部で、覆土中層から出土した。頸部は狭くすぼまり“く”字形に強く折れ曲がる。体部は遺存しないが球胴型と考えられる。口縁部は長くわずかに外反し、折り返しにより幅広の縁帯を形成する。口縁部は内面外面共に横刷毛目調整を施す。焼き上がりは軟質で、表面の摩耗が著しい。

18は弥生土器壺の肩部で、覆土下層一括で出土した。外面に横長のS字結節文2条とL異条縄文を施す。胎土に混入物は少なく、黒褐色ないし暗褐色を呈する硬質の焼き上がりである。

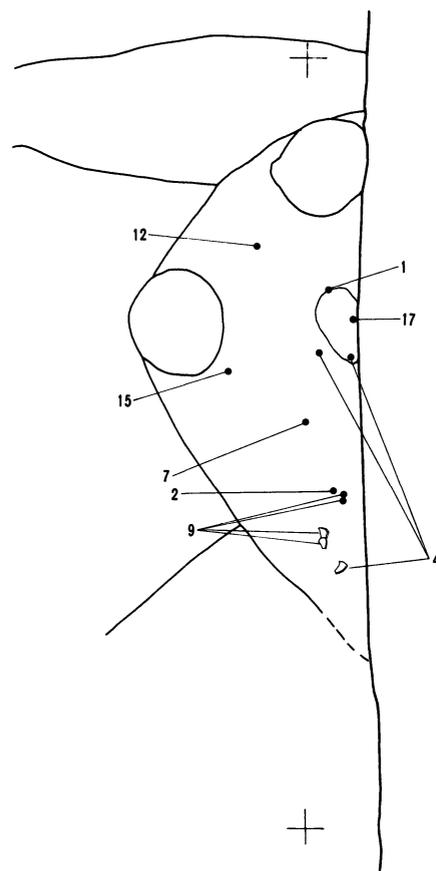
SI-22 (第10図～第13図、図版15)

遺構

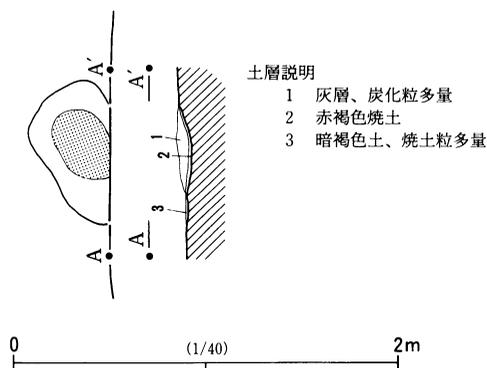
調査区東端ほぼ中央付近、J 2 グリッドからK 3 グリッドに位置し、東側 2 / 3 程度が調査区域外にかかっている。SI-21、SI-26、SI-27、SB-2 と重複関係を持ち、これらの中で最も古い。主軸方位はN-42°-Wで、平面プランは小判形を呈するものと考えられる。支柱穴は4本と推定されるが、左奥の1本のみ検出した。他の3本は調査区域外に存在するものと考えられる。梯子ピットや貯蔵穴も見出されなかったため、これらも調査区域外に存在するものであろう。柱穴は平面が楕円形で、深さは1.0mである。周溝や壁柱穴は存在しない。炉は調査区東壁にかかって検出された。住居の規模ははっきりしないが、この炉が住居の中央やや奥寄りに存在するものと仮定すると、幅は4.5mほどになるものと推定される。硬化面は主に炉の南西側で斑状に検出されており、非常に強くしまっている部分とやや軟弱な部分が混在する。その周囲には軟弱な床面があってその部分のみ若干低いが、硬化面を含めて貼床は検出されていない。本住居跡の直上に存在したSI-21により削平されているため、中央付近の覆土は20cm程度しか遺存していないが、ちょうどパックされているような状況であったため、下層部分の状態は良好である。なお壁の立ち上がりは土層観察から最大で50cmである。



第10図 SI-22平面図・土層断面図



第11図 SI-22遺物分布図



第12図 SI-22炉平面図・土層断面図

炉 (第12図)

約半分が調査区域外にかかっているためはつきりしないが、幅0.5m、奥行0.9m程度の楕円形を呈するものと考えられる。火床部はよく焼けており、灰や炭化粒が厚く堆積していた。遺存状態は非常に良好である。

遺物 (第13図、図版15)

量的には決して少なくはないが、遺構の半分程度が調査範囲外にかかっているため復元できる遺物は限られているが、覆土内出土の

遺物はすべて弥生時代に比定される土器である。これらは大まかに、胎土に混入物が多く、灰褐色ないし灰黄色系の明るい色調を呈しやや軟質な焼き上がりのもの(9・19)、混入物は少なく暗褐色ないし黒褐色系の暗い色調を呈し硬質な焼き上がりなもの(4・5・8・10~14)、混入物を中量含み灰褐色系のやや明るい色調で硬質な焼き上がりなもの(1~3・6・7・15~18)の三者に分けられそうである。なお7は前回調査のSI-7一括遺物と接合した。

1は壺の頸部~口縁部で、床面直上から出土した。頸部は狭くすぼまり、口縁部はラッパ状に広がる。ともにやや長い。口縁部には折り返しにより幅3.5cmの不明瞭な縁帯を形成する。文様は口唇部と縁帯にLR縄文、頸部にLR縄文を施し上部をはZ字結節文2条で区画する。その間は無文である。

2・3は壺の口縁部である。やや急角度に立ち上がり、折り返しにより縁帯を形成する。2は覆土下層一括で出土した。縁帯部が幅2.5cm、口唇部と縁帯部にLR縄文、縁帯部下端にはヘラキザミを施す。3は覆土下層から出土した。縁帯部が幅2.5cm、口唇部はRL原体の押捺、縁帯部にRL縄文を施す。

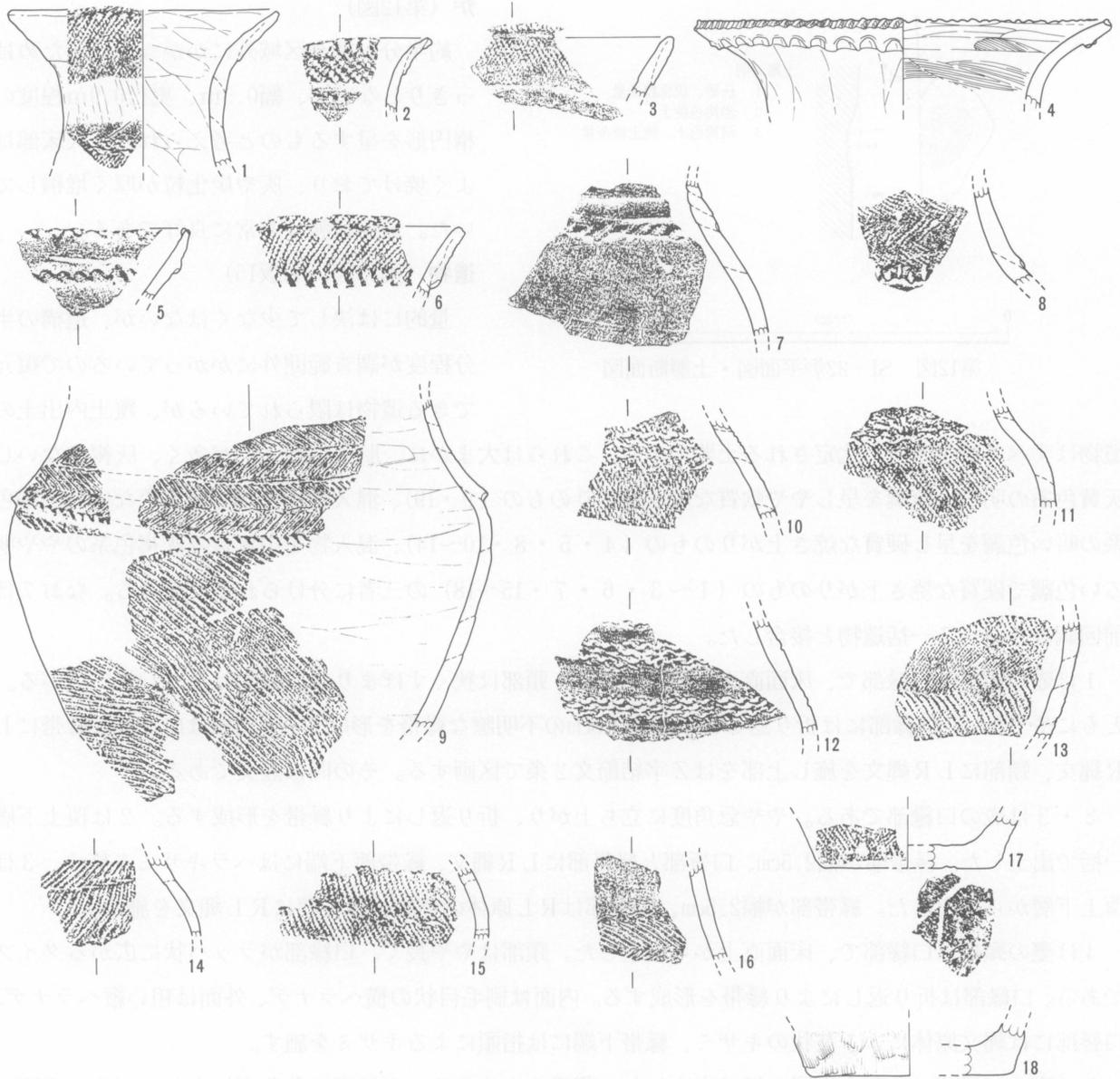
4は甕の頸部~口縁部で、床面直上から出土した。頸部はやや長く、口縁部がラッパ状に広がるタイプである。口縁部は折り返しにより縁帯を形成する。内面は刷毛目状の横ヘラナデ、外面は粗い縦ヘラナデ、口唇部には縄文原体による波状のキザミ、縁帯部下端には指頭によるキザミを施す。

5は甕の口縁部で、覆土下層一括で出土した。薄手のつくりで、口縁部は急角度に立ち上がり、不明瞭な縁帯を形成する。口唇部はヘラ状工具による波状キザミ、縁帯部下端はR縄文原体によるキザミを施す。

6は壺ないし甕の口縁部で、床面直上から出土した。薄手のつくりで、口縁部は強く外反し、折り返しにより不明瞭な縁帯を形成する。口唇部にはヘラ状工具によるキザミ、縁帯部にはRL縄文を施す。

7は甕の頸部~体部で、覆土下層から出土した。体部はやや強く張り、最大径が胴部中位にあるものと考えられる。頸部には明瞭な輪積痕を少なくとも3段残すが、最下段の輪積痕の下端にはL縄文原体の押捺によるキザミを施す。体部は内面外面共に横ヘラナデで整形される。

8・9は装飾甕である。8は覆土下層一括で出土した。頸部はあまりすぼまらないが、体部はやや強く張り、最大径が胴部中位にあるものと考えられる。頸部下位には輪積痕を1段残し、その下端には段違いのヘラキザミ、頸部外面には上からRL・LR・RLの羽状縄文を施す。9は床面直上ないし覆土下層から出土した。頸部はほとんどすぼまらず体部はあまり張らない。最大径が胴部上位にある。頸部下位には明瞭な輪積痕を1段残し、その下端にはヘラキザミを施す。遺存部分の外面はすべて施文されるが、頸部には端部を明瞭に残した異条原体によるRL羽状縄文が2段、体部にはR異条縄文が施される。



第13図 SI-22出土遺物 (S=1/3)

10～15は壺の胴部で、12・15は覆土下層、他は覆土下層一括で出土した。いずれも体部の張りはやや強く、最大径が胴部中位にあるものと考えられる。10・11の文様は結節文3条とRL縄文で、連動して施文されている様子が伺えるが、結節文が10はS字であるのに対し、11ではZ字である。12はやや幅の狭いS字結節文3条を単位として2段、13は上からRL縄文・L異条縄文・RL縄文で、中位にZ字結節文1条、14はL異条縄文施文後、その中央付近にやや角度を変えて横長のZ字結節文と連動するL異条縄文を施す。15はRL縄文中にやや横長で不明瞭なZ字結節文を施す。

16は壺の頸部で、覆土下層から出土した。上半部は無文だが、下半には端部を明瞭に残したRLの羽状撚糸文が施され、その上部を横長のZ字結節文1条で区画する。

17・18は壺の底部で、覆土下層から出土した。17はやや厚手のつくりで体部は急角度で立ち上がる。底面には木葉痕を残し、体部にはRL縄文を施す。18は小型で底面はきれいにナデられ木葉痕などは見出せない。外面には縦刷毛目調整を施す。

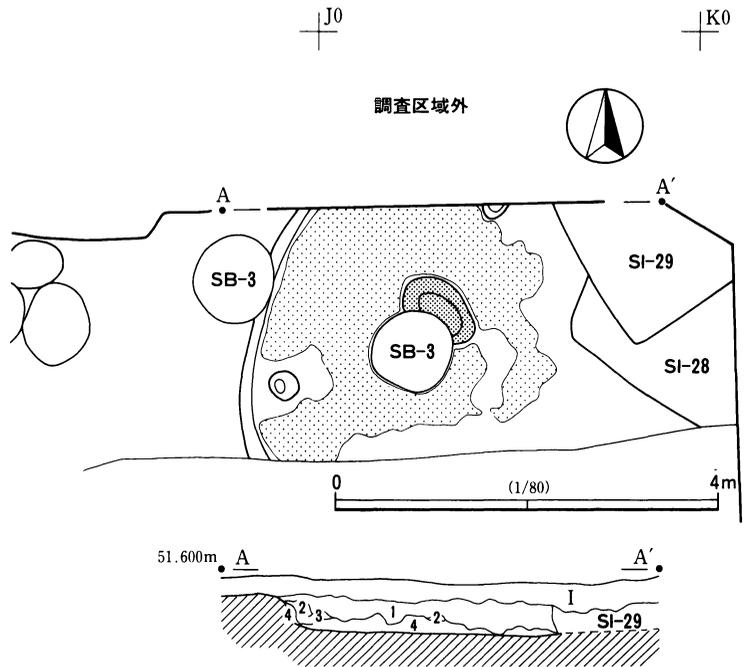
SI-25 (第14図～第17図、図版2・図版16)

遺構

調査区北端の東部、I 0グリッドからJ 1グリッドに位置する。SI-28、SI-29、SB-3と重複関係を持ち、これらの中で最も古い。また北側1/5程度が調査区域外にかかり、南側ほぼ半分が攪乱により破壊されている。また東側はSI-28・SI-29によって破壊されている。主軸方位はN-42°-Wと推定され、平面プランは小判形を呈するものと考えられる。支柱穴は4本と推定されるが、実際に検出したのは右奥と左奥の2本で、その他の柱穴は攪乱区域内に存在したものと推定される。柱穴はいずれも平面が楕円形を呈し、深さ0.6m及び0.7mと比較的そろっている。柱穴間の距離は梁間で3.0mである。周溝や壁柱穴は存在しない。炉は支柱穴のほぼ中間から見出された。住居の規模ははっきりしないが、この炉が奥側支柱穴のほぼ中間に位置すると仮定した場合、幅が4.5m程度になるものと考えられるが、奥行は不明である。硬化面はほぼ全面から検出されており、特に炉の周囲が非常に堅くしまっている。床面は比較的平坦で、貼床などは検出されなかった。覆土上部は削平されているが、下層覆土は焼土と炭化粒を多く含み、状態は比較的良好である。壁の立ち上がりは土層観察から最大で25cmである。

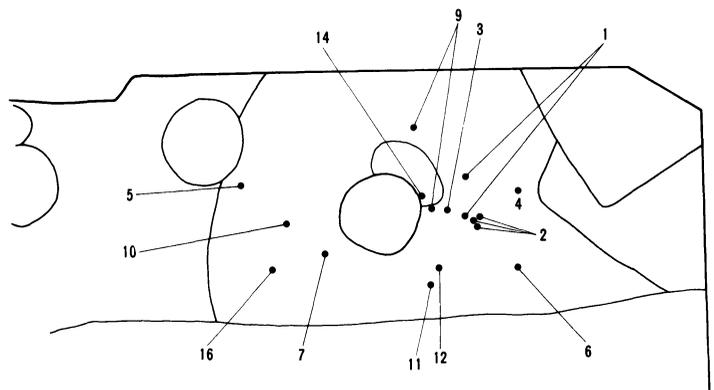
炉 (第16図)

幅0.6m、奥行1.0mの楕円形を呈し、SB-2によって1/3程が切り取られてしまっている。火床部は非常に良く焼けていて焼土の堆積が厚い。遺存状態は良好で、炭化粒などを少量含んだ比較的厚い灰層が検出された。

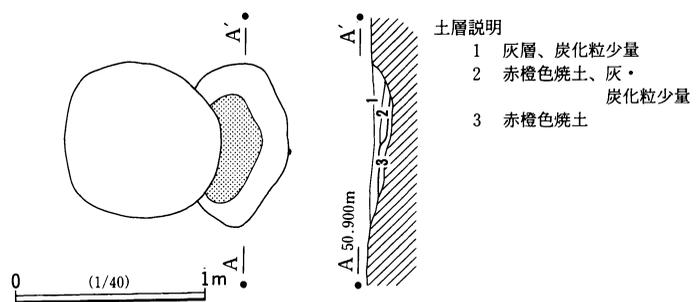


- 土層説明
- 1 黒色土、炭化粒少量
 - 2 暗褐色土、ローム粒多量
 - 3 暗褐色土、ロームブロック多量
 - 4 暗褐色土、焼土粒・ローム粒・炭化粒多量

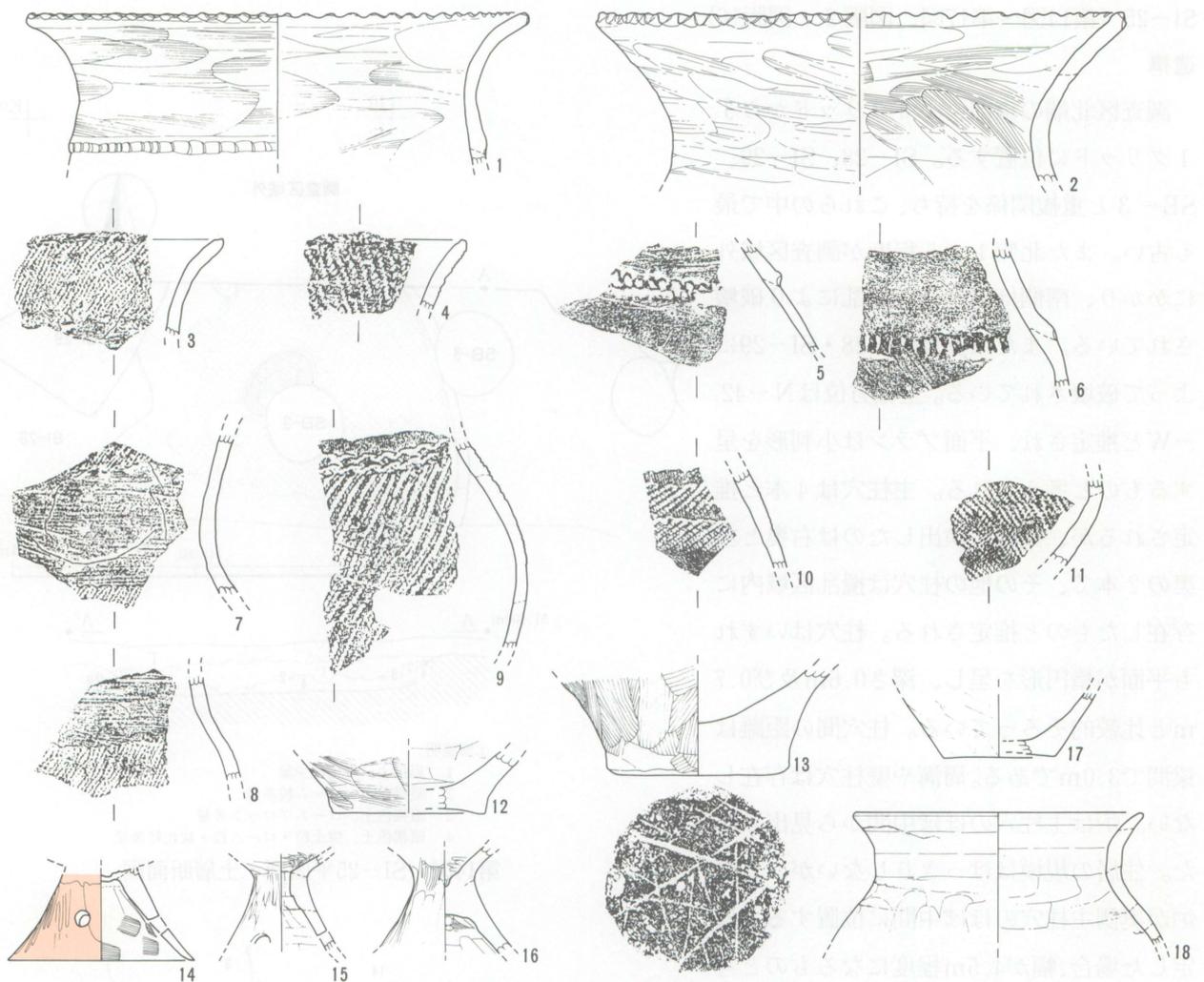
第14図 SI-25平面図・土層断面図



第15図 SI-25遺物分布図



第16図 SI-25炉 平面図・土層断面図



第17図 SI-25出土遺物 (S=1/3)

遺物 (第17図、図版16)

調査面積の割に量は多いが、覆土中層から出土するものが多いため、本住居跡に伴うと考えられるものはそれほど多くはない。遺構全体を完掘したわけではないのであまり接合せず、復元できる遺物も限られてしまっている。図示したものの多くは弥生土器だが、実際の出土量は古墳時代前期に比定される土師器が最も多いようである。

1～13は弥生土器である。これらは胎土などの特徴から大まかに、胎土に混入物が多く、灰褐色ないし灰黄色系の明るい色調を呈しやや軟質な焼き上がりのもの (10・12・13)、混入物は少なく暗褐色ないし黒褐色系の暗い色調を呈し硬質な焼き上がりのもの (1・2・7・8・11)、混入物を中量含み灰褐色もしくは橙色系のやや明るい色調で硬質な焼き上がりのもの (3～6・9) の三者に分けられる。

1・2は甕の頸部～口縁部で、床面直上から出土した。1は頸部があまりすぼまらず、下端には1段の輪積痕を残し指先でキザミを入れている。口縁部はヘラ状工具を用いた波状口縁で、やや長くゆるやかに外反する。体部は遺存しないが、あまり胴が張らないタイプと考えられる。比較的薄手のつくりで、口縁部は内面外面共に刷毛目状の横ヘラナデを施す。2は頸部が若干すぼまってゆるやかに外反するが、輪積痕はみられない。口縁部はヘラ状工具を用いた波状口縁で、長く直線的に広がる。体部は遺存しないが、やや膨らみが強いタイプと考えられる。比較的薄手のつくりで、口縁部は内面が刷毛目状の横ないし斜へ

ラナデ、外面には横ヘラナデを施す。

3・4は壺の口縁部で、覆土下層から出土した。3は薄手で、口唇部端面と口縁部外面にはL R縄文が施される。文様帯の幅は3.0cmである。4はやや薄手で、口唇部端面と口縁部外面にはR L縄文が施される。文様帯の幅は2.2cmである。いずれも頸部が長く、口縁がゆるやかに外反する素口縁タイプである。

5・6は甕の頸部で、覆土下層から出土した。いずれも頸部下端に1段の輪積痕を残す。5は胴部が強く張るタイプで、輪積痕には棒状工具により刺突状のキザミを入れている。6はあまり胴部が張らないタイプで、輪積痕にはヘラ状工具で縦長のキザミを入れ、その後横ヘラナデを施す。

7～9は装飾甕の頸部～体部で、7・9は床面付近、8は覆土下層一括で出土した。7は頸部があまりすぼまらず、口縁部と頸部下端に文様帯をもつ。無文部分と内面は刷毛目状の横ヘラナデで整形し、文様とともに端部を明瞭に残したR L縄文である。8は胴部があまり張らないタイプである。頸部下端には文様帯をもち、無文部分と内面は刷毛目状の横ヘラナデで整形される。文様は端部を明瞭に残したR L縄文である。また両者は同一個体の可能性がある。9は頸部があまりすぼまらないタイプで、胴部全面にR異条縄文、その上端はこれと連動しない横長のZ字結節文を2条施して頸部の無文部分と区画する。

10は壺の頸部～胴部で、覆土下層から出土した。頸部と胴部とは明瞭には区別されず、頸部が狭くすぼまるタイプと考えられる。内面には横ヘラナデ、外面には比較的粗い縦刷毛目調整後、上端を明瞭に残したL R縄文を2段施す。

11は中型の壺の胴部で、覆土下層から出土した。球胴型を呈するものと考えられる。内面は横ヘラナデ、外面にはL R縄文を施す。

12・13は壺の底部で、床面直上から出土した。12は体部がやや浅い角度で立ち上がり、胴部が強く張るタイプと考えられる。底部は厚くしっかりしており、底面はやや窪むが安定している。内面外面共に横ヘラナデを施す。13は体部がやや急角度で立ち上がり、あまり胴部が張らないタイプと考えられる。底部は厚くしっかりしており、底面には明瞭な木葉痕を残し、平坦で安定している。重厚なつくりで、内面は斜ヘラナデ、外面には明瞭な縦刷毛目調整を施す。

14～16は土師器器台で、覆土下層から出土した。14は脚部がラップ状に広がり、下端は断面が尖る。脚部中位には3箇所の透孔が穿たれるが、受部中央は穿孔されない。内面は横刷毛目調整後丁寧な縦ヘラナデ、外面には縦ヘラミガキを施し、外面は赤彩される。15は受部が浅い皿形を呈し、脚部はラップ状に広がる。受部中央には穴が穿たれ、脚部中位には3箇所の透孔がある。受部は内面外面共に横ヘラナデ、脚部は内面が横ヘラナデ、外面には縦ヘラミガキを施す。16は受部がやや急角度で立ち上がり、脚部は下半を欠くがラップ状に広がるものと考えられる。受部中央には窪みがあるが貫通していない。また脚部の透孔の有無は不明である。受部は内面が細密な横ヘラミガキ、外面が細密な縦刷毛目調整、脚部は内面が縦ヘラナデ、外面には細密な縦ヘラミガキを施す。丁寧なつくりで外面にはにぶい光沢をもつ。

17は土師器小型甕の底部で、覆土下層から出土した。体部はあまり膨らまず比較的急角度で立ち上がる。底部はやや窪むが安定している。内面は丁寧な横ヘラナデ、外面は丁寧な斜ヘラナデを施す。

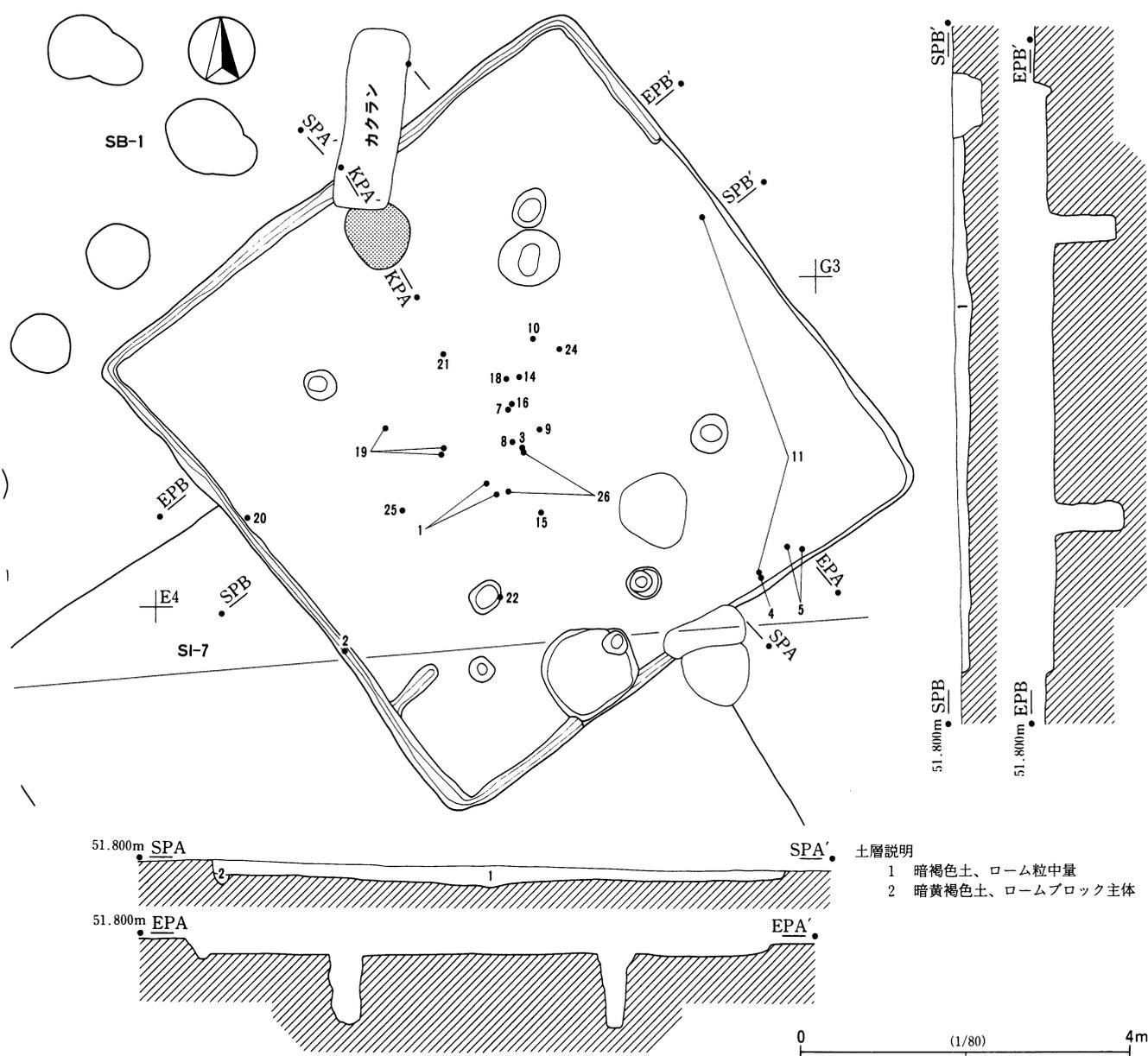
18は土師器小型甕で、覆土下層から出土した。球胴型で、最大径が胴部中位にある。頸部はやや狭くすぼまり如意形に外反する。口縁部は短く、わずかに受口状に立ち上がる。比較的薄手のつくりで、口縁部は内面外面共に横ナデ、体部上半は内面が横ヘラナデ、外面が細かく明瞭な斜刷毛目調整、体部下半は内面が縦ヘラナデ、外面には斜刷毛目調整後斜ヘラケズリを施す。

(2) 古墳時代

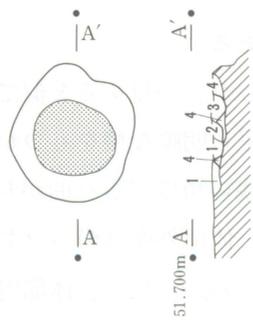
SI-6 (第18図～第21図、図版3・図版16・図版17)

遺構

調査区ほぼ中央付近、E 2 グリッドから F 4 グリッドおよび G 3 グリッドに位置し、南側の一部が第 1 次調査で調査済みである。SI-7 と重複関係をもつが、調査時の所見から本住居跡のほうが古い。主軸方位は N-39°-W、一辺 6.9m のほぼ方形のプランで、主柱穴は 4 本、深さは 0.8m~0.9m とほとんど均等である。このほか第 1 次調査時の P-1 が梯ピットと考えられる。主柱穴間の距離は桁間が 3.3m~3.5m、梁間が 3.3m~3.4m、内区の面積は 11.3m²、全体の面積は 47.7m² である。壁際には壁溝がめぐるが壁柱穴はなく、前回の調査では間仕切り溝が検出されているが、今回は遺存していなかった。カマドは北側主柱穴のほぼ中間に位置する。硬化面は調査以前の転圧が激しく範囲を明確にできなかったが、床全面があき



第18図 SI-6 平面図・土層断面図・遺構断面図



土層説明

- 1 灰層
- 2 灰層、焼土粒少量
- 3 灰層、焼土粒多量
- 4 赤橙色焼土

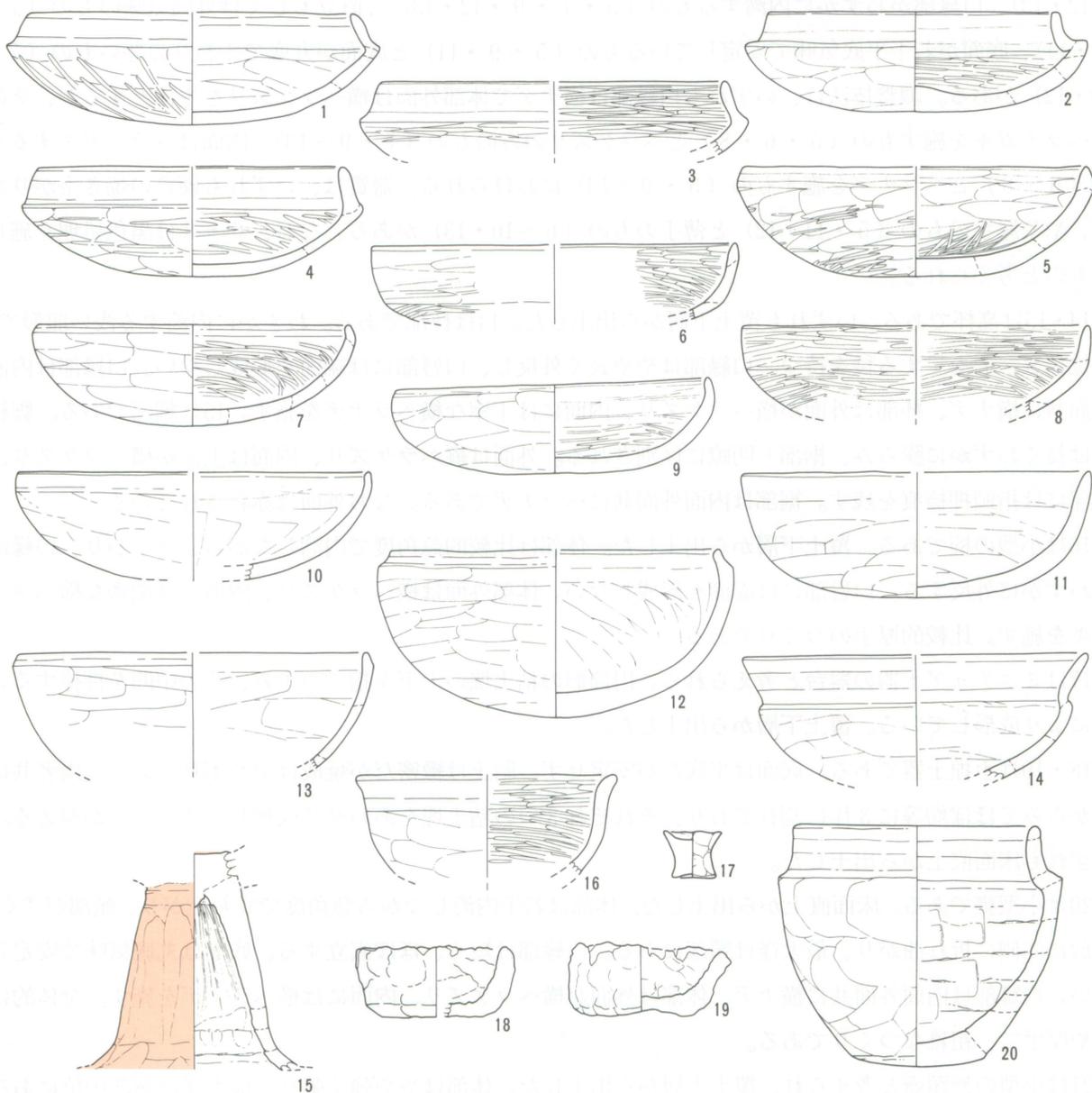
0 (1/40) 1m

第19図 SI-6 カマド 平面図・土層断面図

らかな貼床である。覆土の上部はかなり削平されており、壁の立ち上がりは最大でも10cmしか残っていない。

カマド (第19図)

攪乱坑などにより破壊されていたため袖や煙道はまったく遺存していないが、火床とその周囲に若干の灰黄色山砂と灰白色粘土が散在していた。火床部は幅0.6m、奥行0.7mの楕円形を呈するが、本来はもうひとまわり程度大きかったものと考えられる。遺存状態はあまり良くないが、非常に良く焼けている。



第20図 SI-6 出土遺物① (S=1/3)

遺物（第20図・第21図、図版16・図版17）

量は多く、比較的まとまった印象を受ける。図示したものはすべて土師器である。

1～4は杯蓋模倣杯である。1～3は床面直上から、4は覆土下層から出土した。一見すると似ているが、細部ではかなり異なっている。まず器形では、いずれも体部は浅い皿形を呈し明瞭な稜をもつが、稜が比較的急角度で強く折れ曲がり、かえりが内向するもの（1・2・4）、稜が浅い角度で折れ曲がり、かえりが若干内向するもの（3）がある。技法では、いずれもかえり部は横ナデ、体部外面は横ヘラケズリを施すが、その後若干のヘラミガキを施すもの（1・3・4）、ヘラケズリのみもの（2）、体部内面はヘラナデを施すもの（1）とヘラミガキを施すもの（2～4）がある。また器質では、やや軟質の焼き上がりで比較的厚手のもの（2・4）と硬質の焼き上がりで薄手のもの（1・3）がある。

5～13は杯である。5と7および9～12は床面直上、他は覆土下層から出土した。これらも一見すると似ているが、それぞれ細部ではかなり異なっている。まず器形では、浅いもの（5～11）とやや深いもの（12・13）、口縁部がわずかに内湾するもの（5・7・9・12・13）と直立もしくは外向気味のもの（7・9・11）、底面が若干平底気味で安定しているもの（5・9・11）と底面が丸底ですわりの悪いもの（7・10・12）がある。調整技法は、いずれも口縁部は横ナデで体部外面は横ヘラケズリを主体とするが、その後ヘラミガキを施すもの（5・6・8）とヘラケズリのみもの（7・9～13）、内面はヘラミガキするもの（6～8）とヘラナデを施すもの（5・9～13）にわけられる。器質は、いずれも硬質の焼き上がりだが、やや厚手のもの（5・11・12）と薄手のもの（6～10・13）がある。なお、6・8は黒色処理を施したものと考えられる。

14・15は高杯である。いずれも覆土下層から出土した。14は杯部である。わずかに内湾する浅い皿形で、中位にS字形を呈する稜を持つ。口縁部はやや長く外反し、口唇部には端面を形成しない。口縁部は内面外面共に横ナデ、杯部は外面が横ヘラケズリ、内面には丁寧な横ヘラナデを施す。15は脚部である。脚柱部は長くわずかに膨らみ、裾部と明瞭に区別される。外面は縦ヘラケズリ、内面は上部が横ヘラケズリ、下部には指頭押捺痕を残す。裾部は内面外面共にヘラナデである。なお外面は赤彩されている。

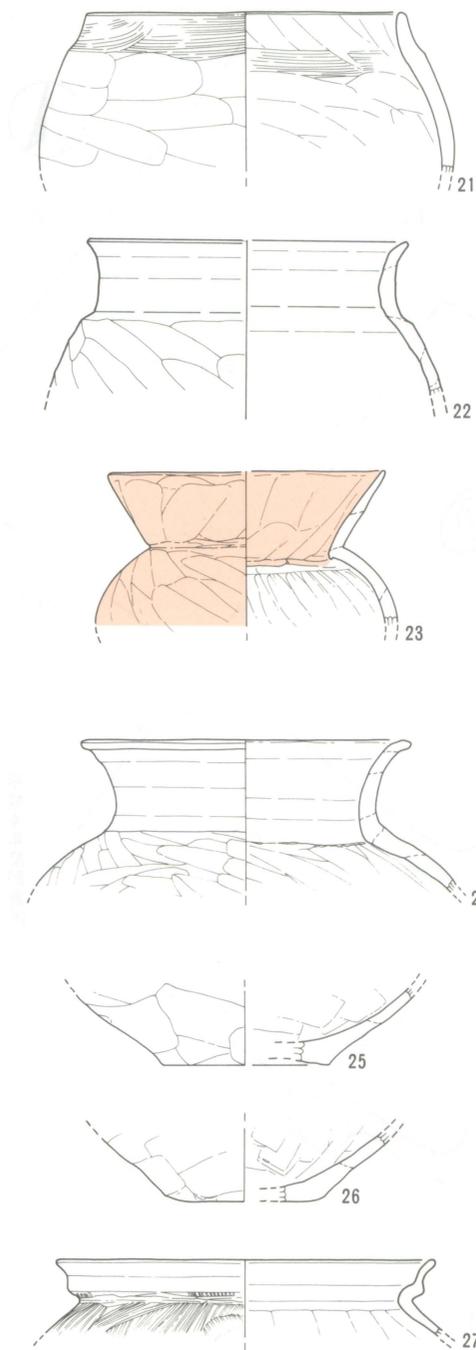
16は小型の椀である。覆土下層から出土した。体部は比較的急角度で内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口唇部には端面を形成しない。体部外面は横ヘラケズリ、内面には細密な横ヘラミガキを施す。比較的厚手のつくりである。

17はミニチュア土器の器台と考えられる。円筒形の粘土塊の上下を指でつまみ、その中間を押捺することにより成形している。覆土下層から出土した。

18・19は手捏土器である。底面は平底だが安定せず、胎土は緻密だが焼成はやや不良である。両者共に上からみてほぼ均等に3片に割れており、それぞれ3つの粘土塊をあわせて成形したことがうかがえる。いずれも床面直上から出土した。

20は小型甕である。床面直上から出土した。体部は若干内湾しながら急角度で立ち上がり、頸部が“く”字形に内側に折れ曲がり、最大径は頸部にある。口縁部は短く、ほぼ直立する。底面は丸底気味で安定しない。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は外面が横ヘラケズリ、内面には横ヘラナデを施す。全体的にやや厚手で、粗雑なつくりである。

21は小型の無頸壺と考えられ、覆土下層から出土した。体部はやや強く張り、最大径が胴部中位にあるタイプであろう。口唇部には端面を形成しない。口縁部は外面が刷毛目状の横ナデ、内面が横刷毛目状調



第21図 SI-6 出土遺物② (21~23は1/3、他は1/4)

整後、斜ヘラナデ、体部は外面が横ヘラケズリ、内面には横ヘラナデを施す。

22は中型の甕で、覆土下層から出土した。体部は若干膨らむがあまり張らない。最大径が胴部中位にあるタイプである。頸部は若干すぼまり、口縁部は短いが緩く外反する。口唇部には端面を形成しない。口縁部から頸部は内面外面共に横ナデ、体部は外面が斜方向のヘラケズリ、内面には丁寧な横ヘラナデを施す。やや薄手のつくりで、比較的丁寧に仕上げられている。

23は小型壺で、覆土下層から出土した。体部は球胴型を呈し、胴部最大径は中位にある。頸部は狭くすぼまり、“く”字形に外反する。口縁部は長く直線的に広がる。口縁部は内面外面共に縦ヘラナデ、体部は内面が縦ヘラナデ、外面には斜ヘラケズリを施す。薄手のつくりで、外面と口縁部内面は赤彩される。

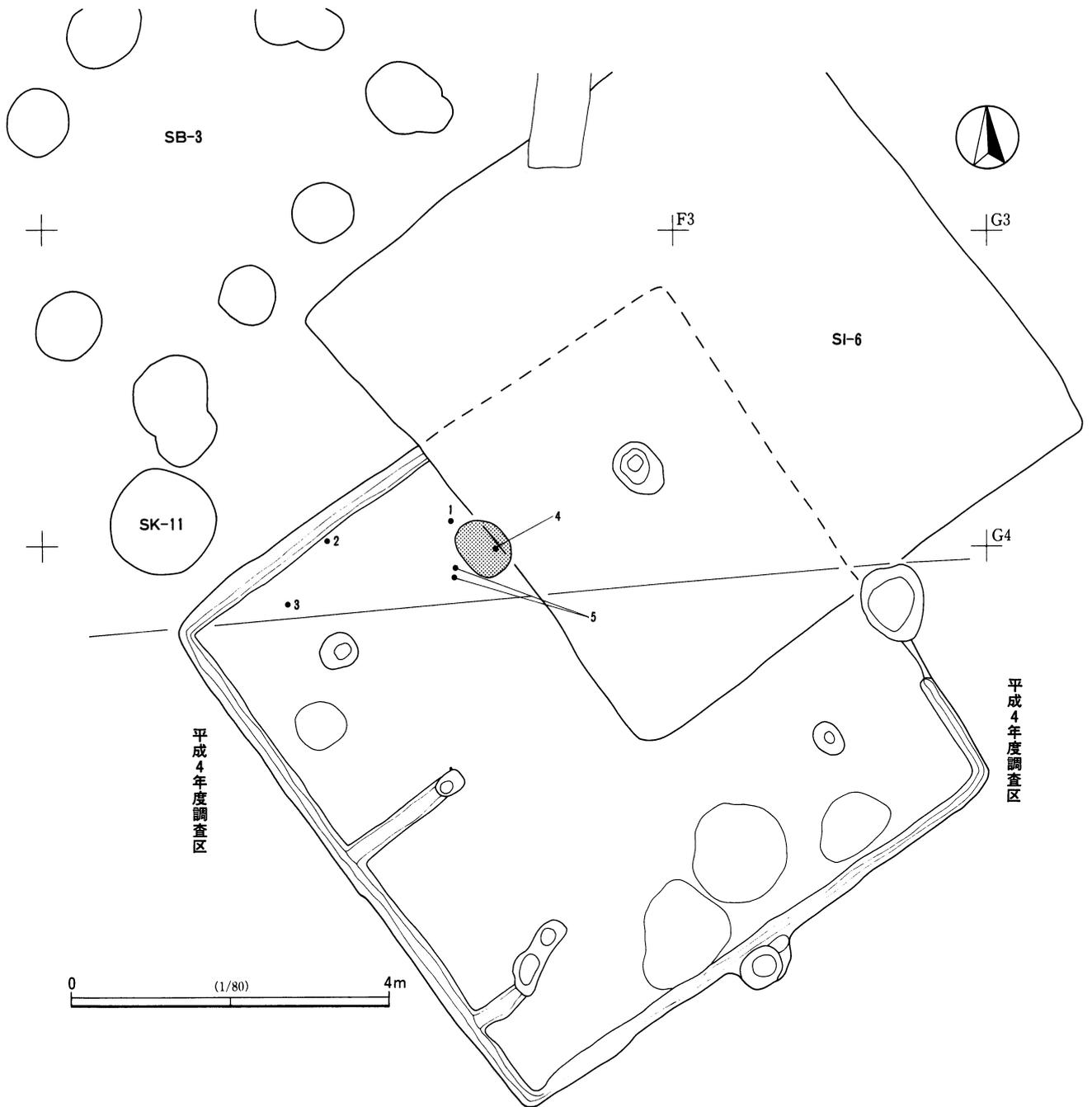
24~26は甕である。24は床面直上から、25・26は覆土下層から出土した。24は胴部が球胴型を呈し、最大径が胴部中位にあるタイプと考えられる。頸部は狭くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部はやや長く、ゆるやかに外反する。口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部内面は横ヘラナデ、外面には斜方向のヘラケズリを施す。体部は比較的薄手で、焼き上がりは非常に堅い。25・26はいずれも球胴型を呈するタイプの底部と考えられる。底面は26がやや窪むが、両者とも安定している。

27はいわゆるS字状口縁の甕で、覆土下層から出土した。体部以下は遺存しないが、おそらく球胴型を呈するものと考えられる。口縁部はさほどでもないが、体部は非常に薄手で、体部外面には粗く明瞭な縦刷毛目調整を施す。色調や胎土、焼成からみて在地の模倣品ではなく、搬入品と考えられる。

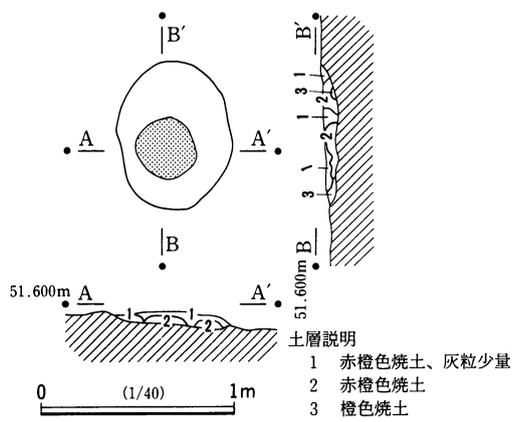
SI-7 (第22図~第24図、図版3・図版17)

遺構

調査区ほぼ中央付近、D3グリッドからF4グリッドに位置し、南西側の大部分は第1次調査で調査済みである。SI-6と重複関係を持ち、調査時の所見から本住居跡のほうが新しい。主軸方位はN-36°-Wで、一辺7.3mの方形プランである。主柱穴は4本だが、桁間に補助的な柱穴が見られる。主柱穴間の距離

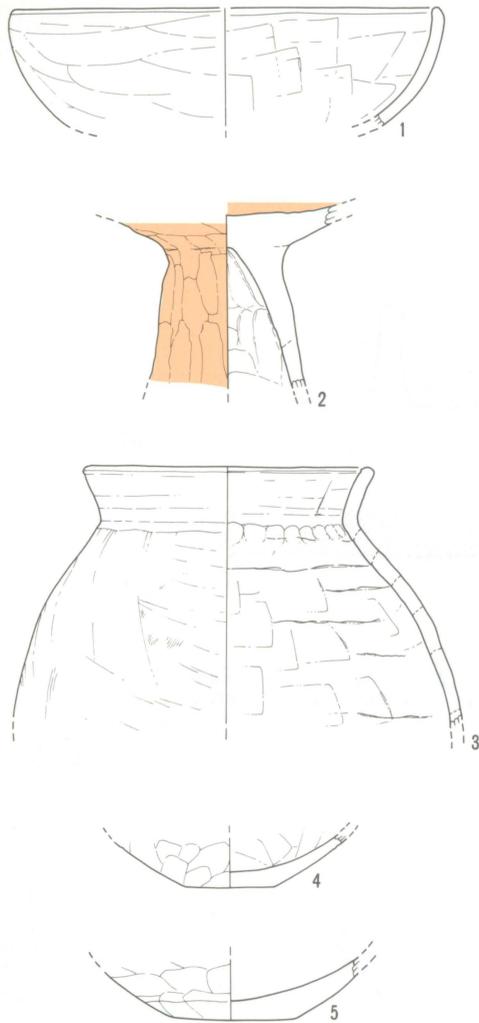


第22図 SI-7 平面図



第23図 SI-7 炉 平面図・土層断面図

は梁間桁間共に4.4m、内区の面積は19.0㎡、全体の面積は54.2㎡である。壁際には壁溝がめぐるが全周はせず、壁柱穴も見出せなかった。第1次調査では間仕切り溝が検出されているが、今回の調査部分では検出されていない。炉は北側支柱穴のほぼ中間に位置する。調査以前の転圧が著しく硬化面の範囲ははっきりしなかったが、床面はあきらかに貼床である。上面は削平されており、壁の立ち上がりは最大で10cmである。



第24図 SI-7 出土遺物 (1・2は1/3、他は1/4)

炉 (第23図)

幅0.6m、奥行0.8mの楕円形を呈する。遺存状態は比較的良好である。火床部は非常に良く焼けており焼土が厚く堆積していたが、灰層は見られなかった。

遺物 (第24図、図版17)

今回は調査面積が狭いため、量は少ない。ただし、第1次調査を含めると、比較的まとまっている。

1は土師器杯で、覆土下層から出土した。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部でほぼ直立する。口唇部は断面が丸みを帯びる。内面は横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。薄手のつくりである。

2は土師器高杯で、覆土下層から出土した。脚柱部は若干膨らむ円錐形で、杯部は平坦である。脚柱部は内面が横ヘラナデ、外面には縦ヘラケズリを施す。厚手のつくりで、外面と杯部内面が赤彩される。

3は土師器甕で、ほぼ床面直上から出土した。胴部は膨らむが、ラグビーボール形を呈するものと考えられる。頸部は“く”字形に折れ曲がり、口縁部は短く直線的に立ち上がる。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は外面が丁寧な縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデを施し、頸部内面には指頭押捺痕、体部内面には明瞭な巻上げの痕跡を残す。

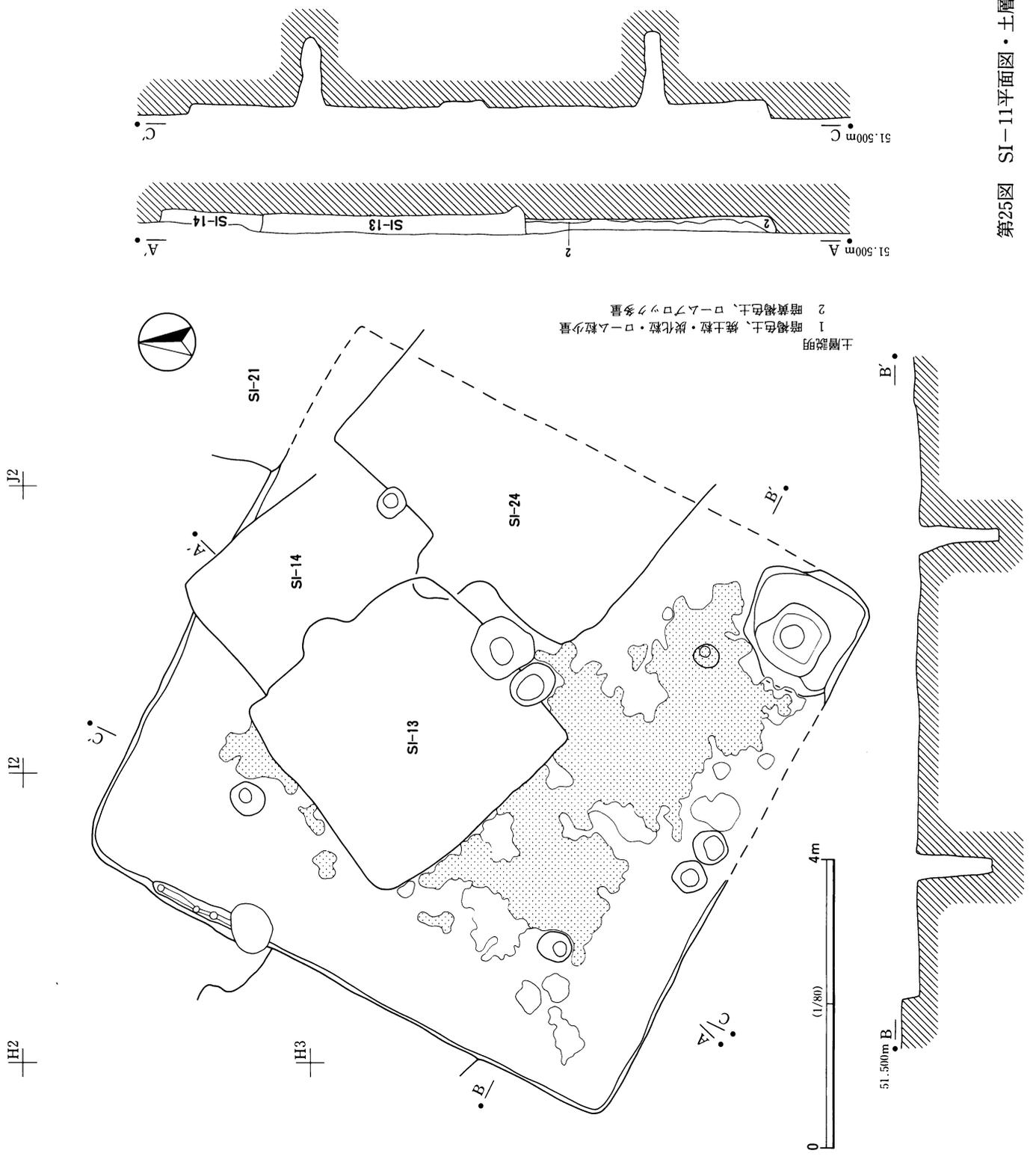
4・5は土師器杯の底部で、いずれも覆土下層から出土した。ともに体部が浅い角度で立ち上がり、口縁が直立するタイプと考えられる。底面は比較的平坦で安定している。内面は丁寧な横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。

SI-11 (第25図～第30図、図版4・図版18・図版19)

遺構

調査区東側のほぼ中央付近、G3グリッドおよびH2グリッドからJ4グリッドにまたがる大型住居である。西隅のごく一部が第一次調査で調査済みである。多くの住居跡と重複関係をもつが、調査時の所見から、SI-17より新しく、SI-12～SI-14・SI-19・SI-21・SI-23・SI-24・SI-30より古い。主軸方位はN-26°-Eで、一辺8.1mの方形プランである。支柱穴は4本で、支柱穴間の距離は梁間が4.9m～5.0m、桁間が4.6m、内区の面積は22.6㎡、全体の推定面積は67.7㎡である。支柱穴の深さはほぼ等しく、平均1.2mとかなり深い。このほか西辺に梯ピットと南東隅に貯蔵穴が見つまっている。壁際には壁溝がめぐり壁柱穴も若干見つまっているが、全周はしない。カマドは確認できなかったが、SI-12によって破壊されたものと考えられる。硬化面は堅くしまっている部分がほとんどだが、やや軟弱な部分が若干見られる。床面は外周部のみが貼床であった。壁の立ち上がりは最大で35cmである。

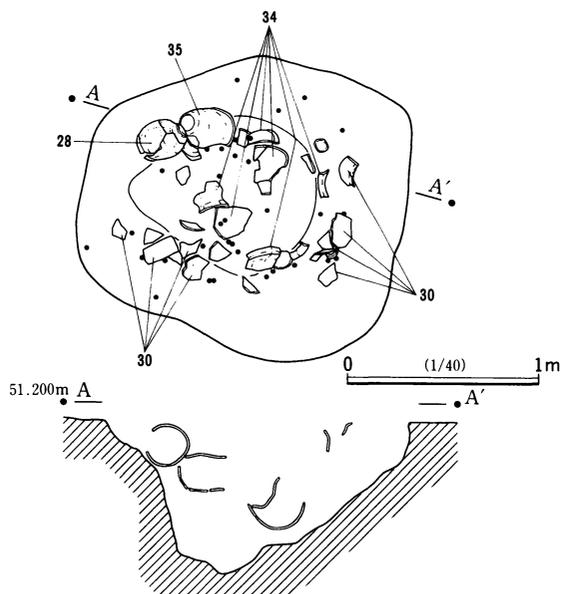
第25図 SI-11平面図・土層断面図・遺構断面図



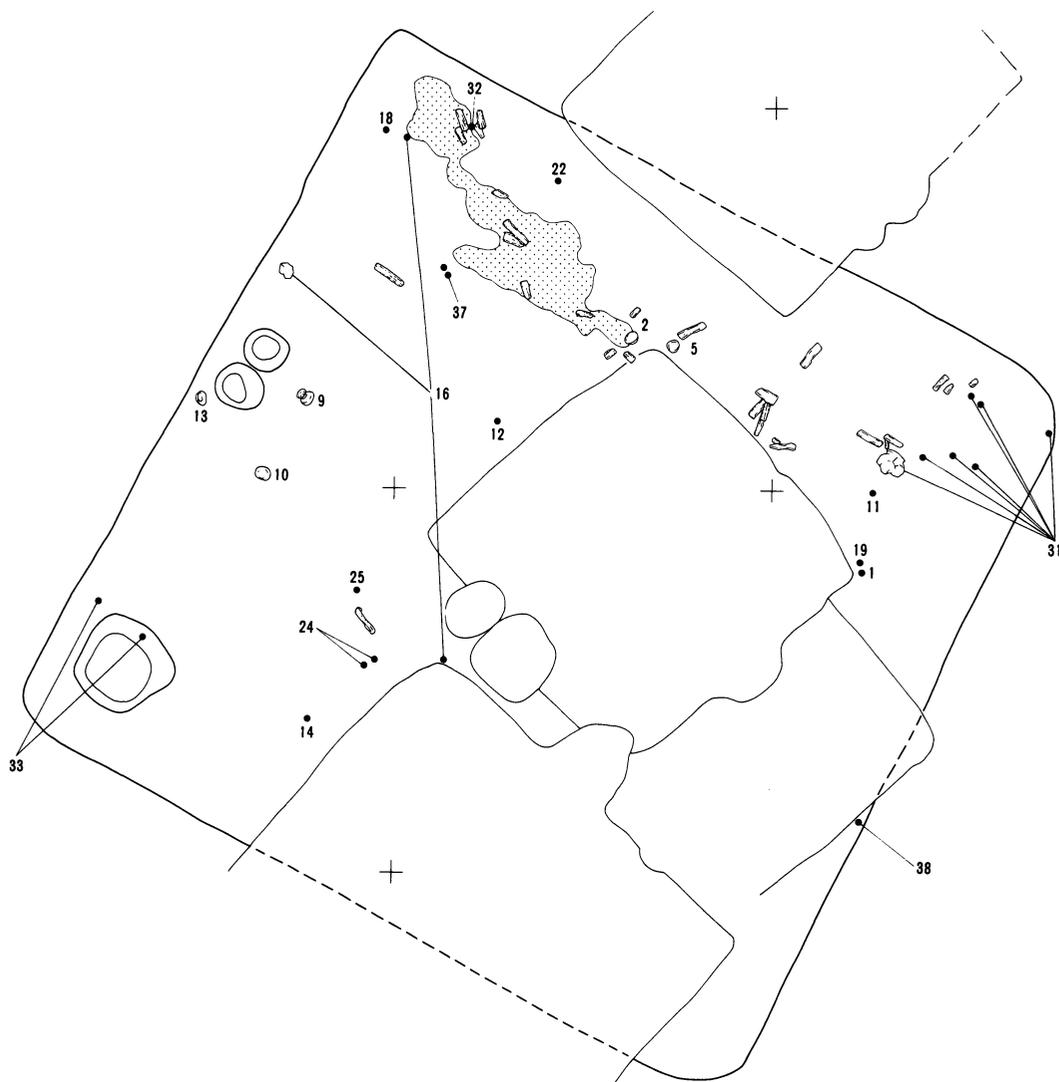
遺物（第28図・第29図、図版18・図版19）

出土量は非常に多く、遺物の時期も弥生時代から平安時代に及ぶ。ただ確実に本住居跡に伴うと考えられる遺物は貯蔵穴出土遺物のほかはそれほど多くない。

1・2は土師器の杯で、覆土下層から出土した。1は体部が浅い皿形を呈し、不明瞭な稜をもつ。口縁部はほぼ直立し、口唇部には端面を形成しない。底面は丸底だが、わずかに平坦面があり安定している。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。2は体部が浅い皿形を呈し、稜はやや不明瞭であるが、最大径は稜にある。口縁部はわずかに内向したあと直立する。口唇部には端面を形成せず、断面はやや尖り気味になる。底面は丸底で安定しない。



第26図 SI-11貯蔵穴遺物出土状況



第27図 SI-11遺物分布図

口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が刷毛目状の横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。比較的厚手のつくりで、内面が赤彩されるが、外面にも若干の赤彩痕跡が残る。

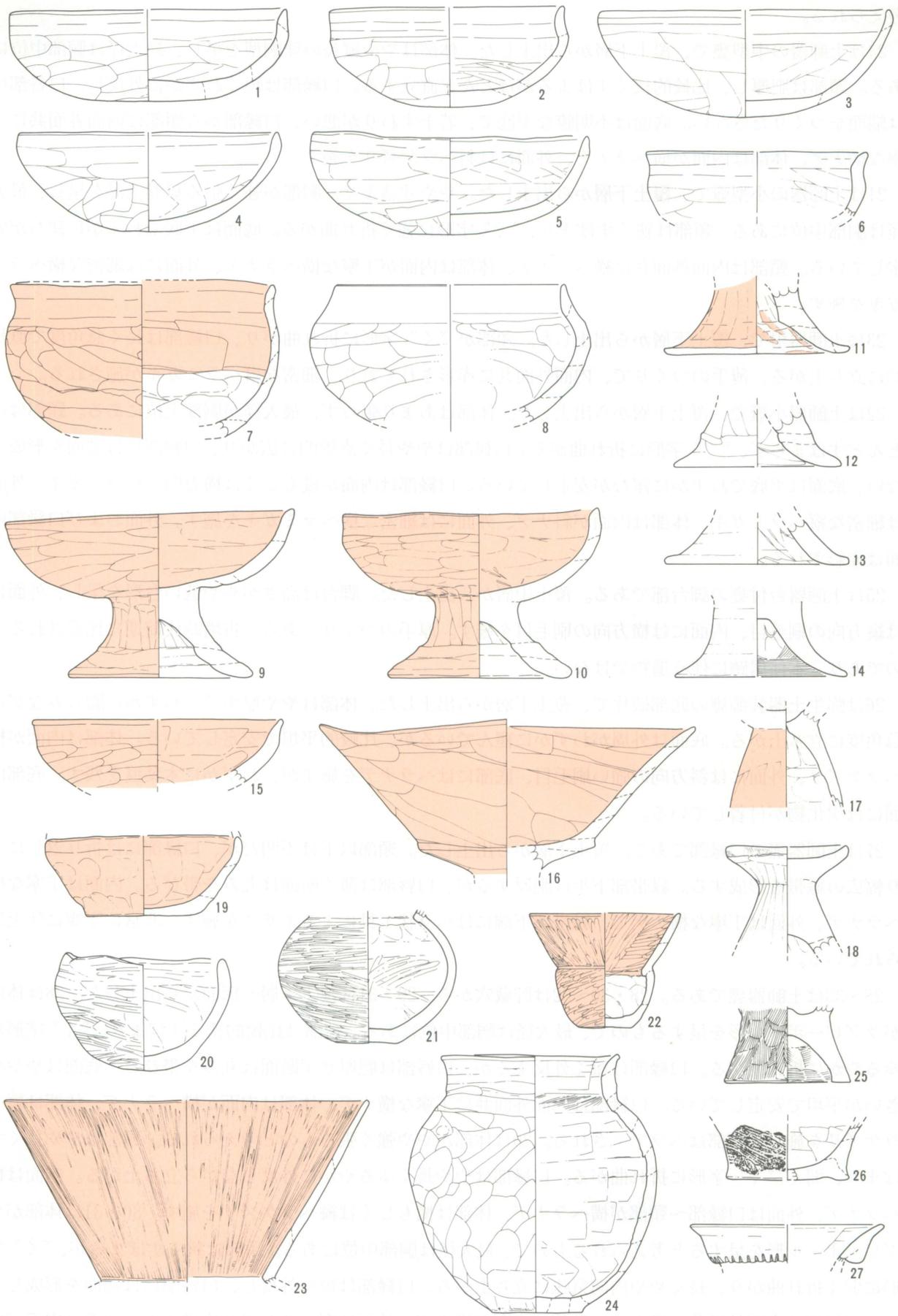
3～5は土師器杯である。3・4は覆土下層から、5は床面直上から出土した。3は体部が浅く内湾しながら立ち上がり、そのままの調子で口縁部に至る。口唇部には端面を形成しない。底面は丸底ですわりが悪い。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が丁寧な横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。薄手のつくりである。4・5はいずれも体部は浅い皿形を呈し、稜をもたずに口縁部のみが直立するタイプであるが、底面は4が丸底ですわりが悪いのに対し、5はわずかに平坦面があり安定している。ともに口縁部は内面外面共に横ナデだが、体部内面は4が横ヘラアテ、5は丁寧な横ヘラナデ、体部外面には4が横もしくは縦ヘラケズリ、5は横ヘラケズリを施す。

6～8は土師器碗である。6・8は覆土下層、7は貯蔵穴から出土した。6は体部が内湾しながら急角度で立ち上がり、口縁部はゆるくS字状に外反する。口唇部には端面を形成しない。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には浅い横ヘラケズリを施す。7は体部が強く内湾しながら立ち上がり、口縁部が浅い“く”字形にごくわずかに外反する。口唇部には端面を形成しない。最大径は体部中位にあるが、口縁部との差はあまりない。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。薄手のつくりで、外面全体と口縁部内面は赤彩される。8は体部中位が強く張り、口縁部はやや上向きに内向する。口唇部には端面を形成しない。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が粗い縦ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。やや厚手のつくりである。

9～17は土師器高杯である。12～15は覆土下層から、9～11および16は床面直上から、17は貯蔵穴から出土した。9・10は完型である。いずれも杯部は浅く内湾しながら立ち上がるが、口縁部は9がやや外向するのに対して、10はほとんど直立する。脚部は短い脚柱部が直線的に伸び、裾部がラッパ状に広がる。ともに口縁部は内面外面共に横ナデ、杯部は内面が横ヘラナデ、外面が丁寧な横ヘラケズリ、脚部は内面が横ヘラケズリ、外面が縦ヘラケズリ、裾部は内面外面共に横ヘラナデを施す。外面全体と杯部内面は赤彩される。11～14は脚部である。脚柱部は短く直線的に伸び、裾部がラッパ状に広がるタイプである。脚部内面は横ヘラナデ、外面には縦ヘラケズリを施し、外面は赤彩される。15は杯部で、浅い皿形を呈し口縁部がゆるくS字状に外反する。口唇部には端面を形成しない。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には比較的丁寧な横ヘラナデを施す。16は杯部である。下端に明瞭な段をもち、体部がわずかに外反しながら立ち上がる。口唇部は断面がやや丸みを帯びる。体部は内面外面共に横ヘラナデを施し、全面が赤彩される。17は脚柱部が膨らみ、裾部との境が明瞭なタイプと考えられる。内面は上部がヘラアテ、下部は横ヘラナデで、外面には縦ヘラケズリ後横ナデを施す。

18は土師器器台で、覆土下層から出土した。脚部は膨らまずに“ハ”字形に広がり、接合部は細くすぼまる。器受部は短く広がる。器受部内面は丁寧なナデ、外面には比較的丁寧な縦ヘラケズリを施す。透し穴がみられず、口唇部に弱いキザミが見られることから高杯などを再利用した可能性が考えられる。

19・20は土師器鉢で、いずれも覆土下層から出土した。19は体部がほぼ直線的に立ち上がり、口唇部のみわずかに内湾する。最大径は口唇部直下にある。底面は不明瞭な平底だが平坦で安定している。内面外面共に横ヘラナデを施すが、外面には指頭圧痕を残す。20は体部が内湾しながら立ち上がり、最大径が口唇部直下にある。底面は丸底で安定しない。比較的薄手のつくりである。内面は横ヘラナデ、外面には刷毛目状の横ヘラナデを施す。比較的厚手のつくりで、口縁部の形状から小型壺もしくは小型甕の再利用と



第28図 SI-11出土遺物① (1~25はS=1/3、26・27はS=1/4)

考えられる。

24は土師器の中型甕で、覆土下層から出土した。体部はやや縦長の球胴型を呈し、最大径は胴部中位にある。頸部は肥厚し、比較的狭くすぼまるがほとんど直立する。口縁部は短くわずかに外反し、口唇部には端面をつくりださない。底面は不明瞭な平底で、若干すわりが悪い。口縁部から頸部は内面外面共に丁寧な横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には斜ヘラケズリを施す。

21は土師器の小型壺で、覆土下層から出土した。やや寸詰まりで胴部が強く張る算盤玉形を呈し、最大径は胴部中位にある。頸部は狭くすぼまり、“く”字形に強く折れ曲がる。底面は平底でわずかに窪むが安定している。頸部は内面外面共に横ヘラナデ、体部は内面が丁寧な横ヘラナデ、外面には細密な横ヘラミガキを施す。

23は土師器甕で、覆土下層から出土した。頸部が“く”字形に折れ曲がり、口縁部は長く急角度で直線的に立ち上がる。薄手のつくりで、内面外面共に赤彩されており、細密な縦ヘラミガキが施される。

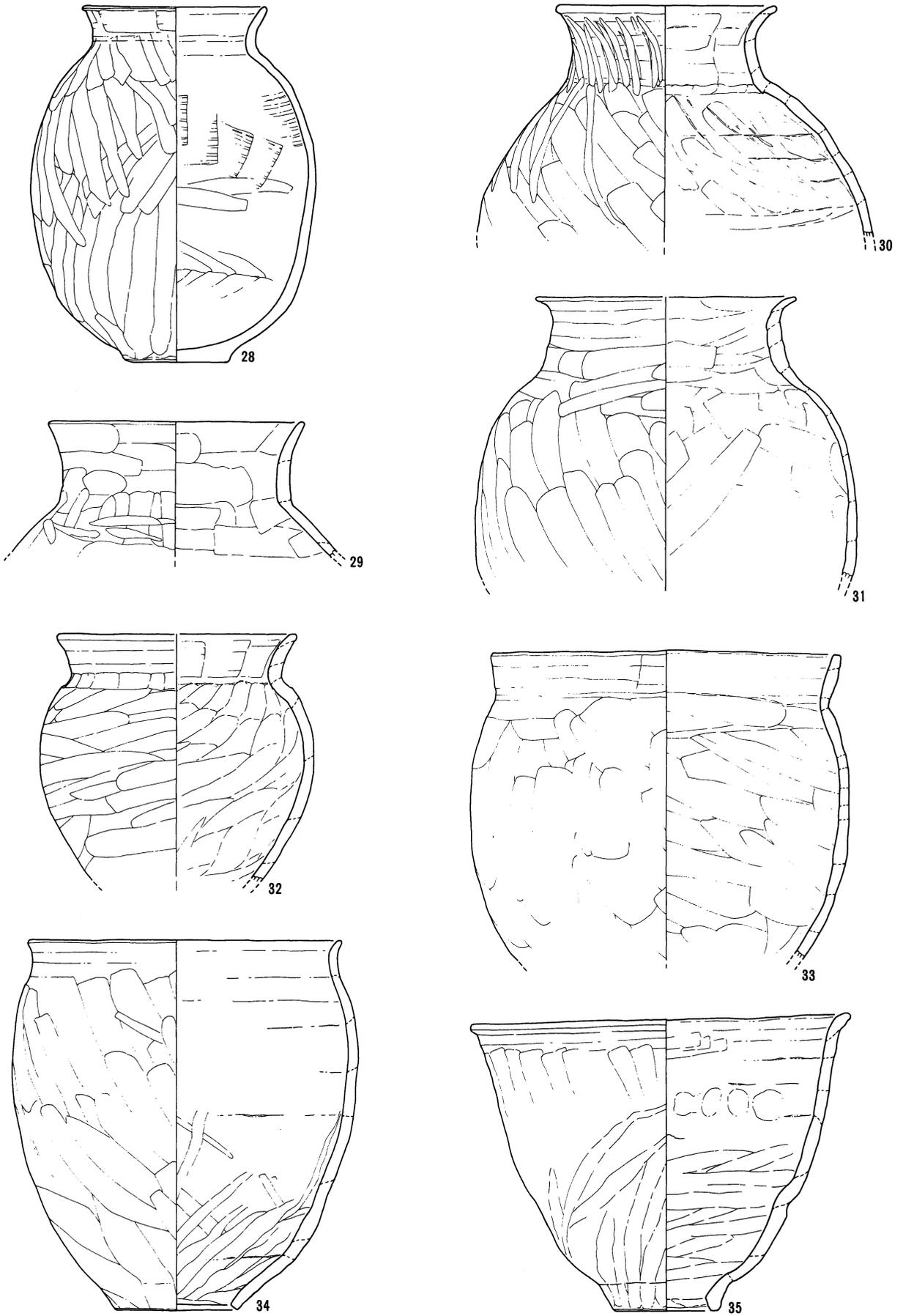
22は土師器小壺で、覆土下層から出土した。体部はあまり張らず、最大径が胴部上位にある。頸部はほとんどすぼまらず、“く”字形に折れ曲がる。口縁部はやや長く直線的に広がり、口唇部には端面を形成しない。底面は平底でわずかに窪むが安定している。口縁部は内面が縦もしくは横方向のヘラミガキ、外面は細密な縦ヘラミガキ、体部は内面が斜ナデ、外面には細密な横ヘラミガキを施す。外面および口縁部内面は赤彩される。

25は土師器台付甕の脚台部である。覆土中層から出土した。脚台は高さがやや低い台形を呈し、外面には縦方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目を施す。厚手のつくりである。古墳時代前期に比定されるものであり、本住居跡に伴う遺物ではない。

26は弥生土器装飾甕の底部破片で、覆土下層から出土した。体部はやや厚手で、わずかに膨らみながら急角度に立ち上がる。底面は外周がわずかに窪んでいるが、比較的平坦で安定している。体部は内面が横ヘラケズリ、外面には斜方向の強い刷毛目、底部にはヘラナデを施すが、わずかに木葉痕を残す。底部内面には炭化物が付着している。

27は土師器壺の口縁部である。覆土下層から出土した。頸部以下は不明だが、口縁部には折り返しにより幅広の縁帯を形成する。縁帯部下半は肥厚するが、口唇部は薄く断面は丸みを帯びる。内面は丁寧な横ヘラナデ、外面は丁寧な横ナデで、縁帯部下端にはヘラ状工具によるキザミを施す。非常に丁寧に仕上げられている。

28～33は土師器甕である。28・30～32は貯蔵穴から、29・31は覆土下層～床面から出土した。28は体部がラグビーボール形を呈するもので、最大径は胴部中位にある。頸部は比較的狭くすぼまり、“く”字形にゆるやかに折れ曲がる。口縁部は短く外反するが、口唇部は肥厚せず断面は丸みを帯びる。底部はやや小さいが平坦で安定している。口縁部は内面外面共に丁寧な横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、体部は縦ヘラケズリを施し、底部はヘラアテされる。29は体部がやや強く張るものと考えられる。頸部はやや狭くすぼまり、弱く“く”字形に折れ曲がる。口縁部はやや長くゆるやかに外反しながら立ち上がる。内面は横ヘラナデ、外面は口縁部～頸部が横ヘラナデ、体部は横もしくは縦ヘラケズリを施す。30・31は体部がラグビーボール形を呈すると考えられるもので、最大径は胴部中位にある。頸部は狭くすぼまるが、“く”字形に弱く折れ曲がり、長くやや内向気味に立ち上がる。口縁部は短く外反し、口唇部には端面を形成しない。口縁部は内面外面共に横ナデ、頸部は内面が横ナデ、外面は縦ヘラケズリ後横ナデ、体部は内面が横



第29図 SI-11出土遺物② (1/4)

もしくは斜のヘラナデ、外面は縦もしくは斜のヘラケズリである。32は体部が若干寸詰まりとなる器形で、最大径は肩部にある。頸部はあまりすぼまらず、強く“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く、ゆるやかに外反し、口唇部には端面を形成しない。口縁部は内面外面共に丁寧な横ヘラナデ、体部は内面が丁寧な縦ヘラナデ、外面には丁寧な横ヘラケズリを施す。33は体部の張りが弱く、最大径が胴部中位にあるタイプである。頸部はほとんどすぼまらず、弱く“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短くほぼ直立する。口唇部はわずかに肥厚し、わずかに端面を形成する。口縁部は内面外面共に横ヘラナデ、体部は内面が斜ヘラナデ、外面は縦ヘラケズリを施す。

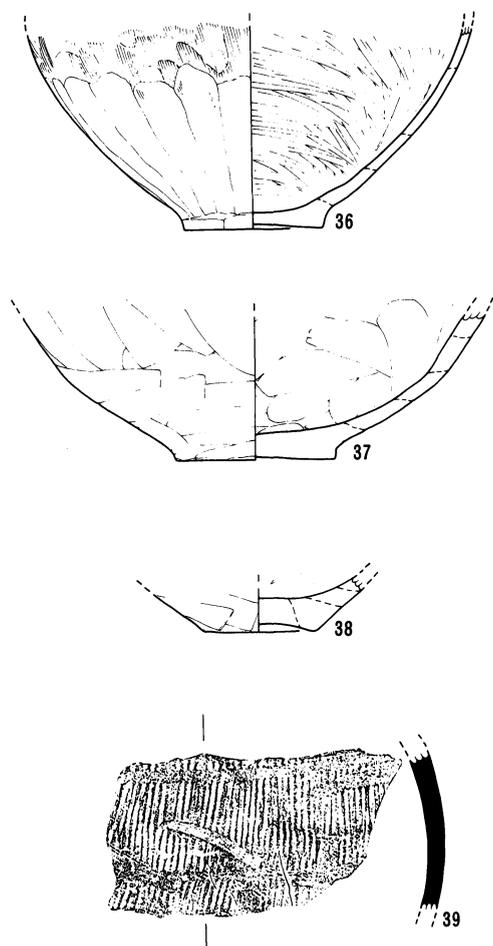
34・35は土師器甕である。いずれも貯蔵穴から出土した。34は体部がラグビーボール形で、最大径は胴部中位にある。頸部はごくわずかにすぼまり、口縁部は非常に短く外反する。口唇部には端面を形成しないが、下端にはやや幅の広い端面をつくりだす。口縁部および頸部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横もしくは縦方向のヘラナデ、外面には縦ないし斜方向のヘラケズリを施す。35は体部がやや寸詰まりな逆釣鐘形を呈する。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はさらに外向する。口唇部には端面を形成しないが、下端には断面三角形の端面をつくりだす。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面に

は横ヘラナデを施すが指頭圧痕と巻上げ痕を明瞭に残し、外面は粗い斜ヘラケズリを施す。

36～38は土師器甕の底部破片で、覆土下層から出土した。36は体部が球胴形を呈し、最大径が胴部中位にあるものと考えられる。底部は比較的小さくやや突出し、若干窪むが安定している。体部内面は丁寧な横ヘラナデ、外面は縦刷毛目調整の後、粗い縦ヘラミガキを施し、にぶい光沢を持つ部分がある。薄手のつくりで焼成も良好である。37は体部がやや強く張るタイプである。底部はやや突出し、わずかに窪むが安定している。内面は粗いヘラナデ、外面は体部中位が斜ヘラケズリ、下半は横ヘラケズリを施す。38はやや長胴気味となるものと考えられる。底部は比較的大きめで、やや窪んでいるが安定している。いずれも内面は横ヘラナデ、外面は横もしくは斜方向の粗いヘラケズリを施す。

39は須恵器大甕で、覆土中層から出土した。体部上半付近にあたるものと考えられる。体部内面には横ナデを施し、外面には縦平行タキの痕跡を明瞭に残す。色調は黒褐色で、焼成はあまり良くない。明らかな混入品であり、出土位置からSI-13に帰属する可能性が高い。

このほかに土製紡錘車が1点出土しているが、別に示した（II-6、第83図8）。

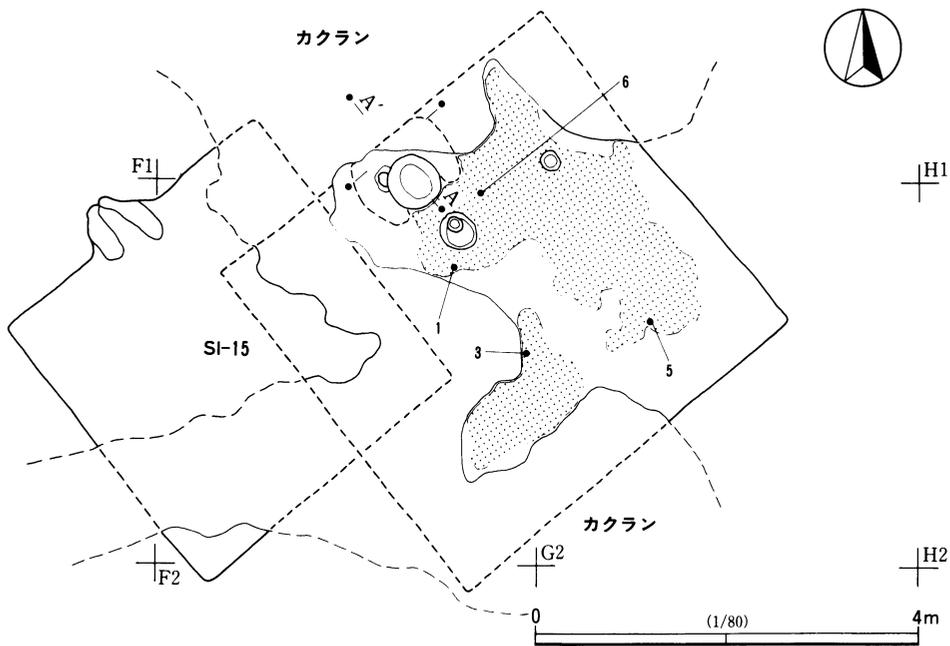


第30図 SI-11出土遺物③ (S=1/4)

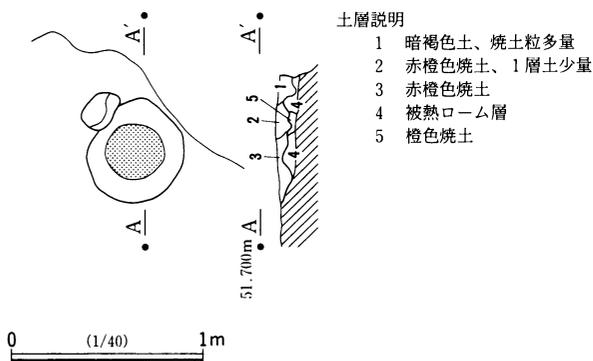
SI-16 (第31図～第33図、図版5・図版20)

遺構

調査区中央付近北端、F0グリッドからF2グリッドおよびG0、G1グリッドに位置する。SI-15と重複するが、床面の状況から本住居跡のほうが古い。主軸方向はN-39°-W、規模は奥行が4.0m、幅は推定で4.4m、やや横長の方形プランと考えられるが、西側1/2と北西隅を攪乱により破壊されているためはっきりしない。柱穴は右奥の1本のみ検出したが、本来は4本柱であろう。今回検出されなかったものは攪乱により破壊されたものと考えられる。梯子ピット、貯蔵穴、周溝は見つかっていない。このほか中心軸上の奥側に性格不明の浅いピットが1本見つかっている。カマドは北西辺中央付近にあるが遺存状況は非常に悪い。床面は遺存部分のほぼ全面から検出されており、硬化面と若干しまりの悪い部分が混在する。硬化面を含め床面はすべて貼床である。プラン全体が調査以前に床面まで削平されてしまっているため、壁は存在しない。



第31図 SI-16平面図



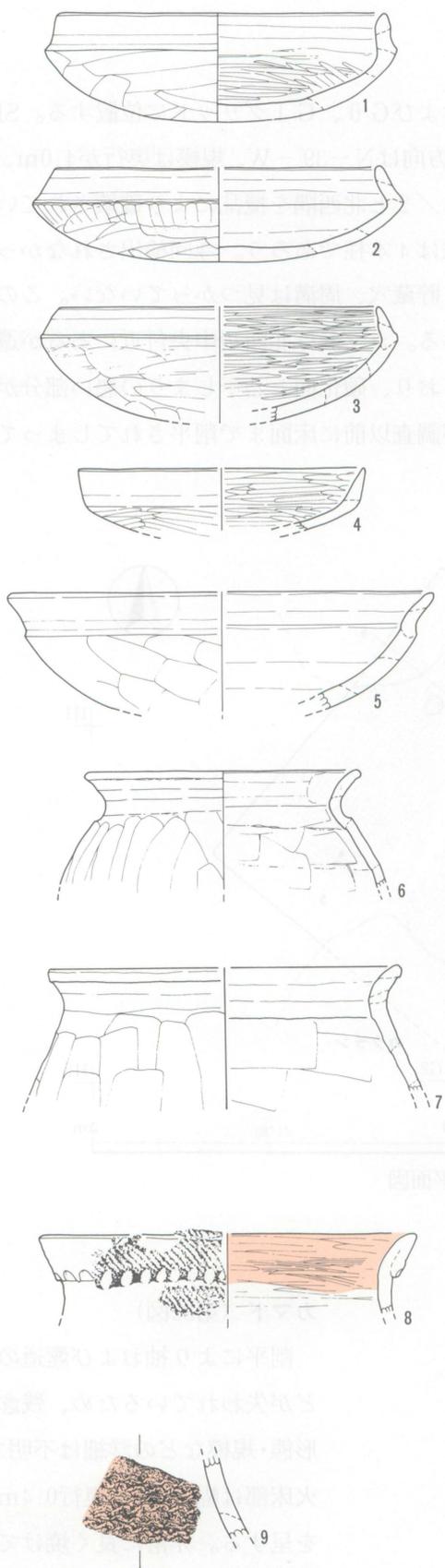
第32図 SI-16カマド 平面図・土層断面図

土層説明

- 1 暗褐色土、焼土粒多量
- 2 赤橙色焼土、1層土少量
- 3 赤橙色焼土
- 4 被熱ローム層
- 5 橙色焼土

カマド (第32図)

削平により袖および煙道のほとんどが失われているため、残念ながら形態・規模などの詳細は不明である。火床部は幅0.3m、奥行0.4mで卵形を呈する。非常に良く焼けており、焼土がやや厚く堆積していたが、灰層や炭化物などは検出されなかった。遺物も出土していない。



第33図 SI-16出土遺物 (S=1/3)

遺物 (第33図、図版20)

遺構の状態の割にまとまった印象を受ける。

1～4はいわゆる杯蓋模倣の土師器杯で、いずれも床面付近から出土した。1は浅い皿型の杯部に段状の明瞭な稜をもつ。かえりは直線的に立ち上がり、端面を形成しない。かえりは内面外面共に横ナデ、杯部は内面が粗い横ヘラミガキ、外面は周回ヘラケズリを施す。2は浅い皿型の杯部に明瞭な“く”字形の稜をもつ。かえりは内湾し端面を作り出さない。かえり部は内面外面共に横ナデ、杯部は内面が横ナデ、外面は周回ヘラケズリを施す。4は浅い皿型の杯部に不明瞭な稜をもつ。かえりは真上に立ち上がり、端面を形成しない。内面は全面に丁寧な横ヘラミガキ、外面は口縁部が横ナデ、杯部は周回ヘラケズリ後、丁寧な横ヘラミガキを施す。なお3は黒色処理されており、表面にはにぶい光沢がある。

5は土師器杯もしくは高杯の杯部で、床面直上から出土した。浅い皿型の杯部に明瞭な稜をもち、口縁部は強く外反する。内面全面と口縁部外面が横ナデ、杯部外面は周回ヘラケズリを施す。

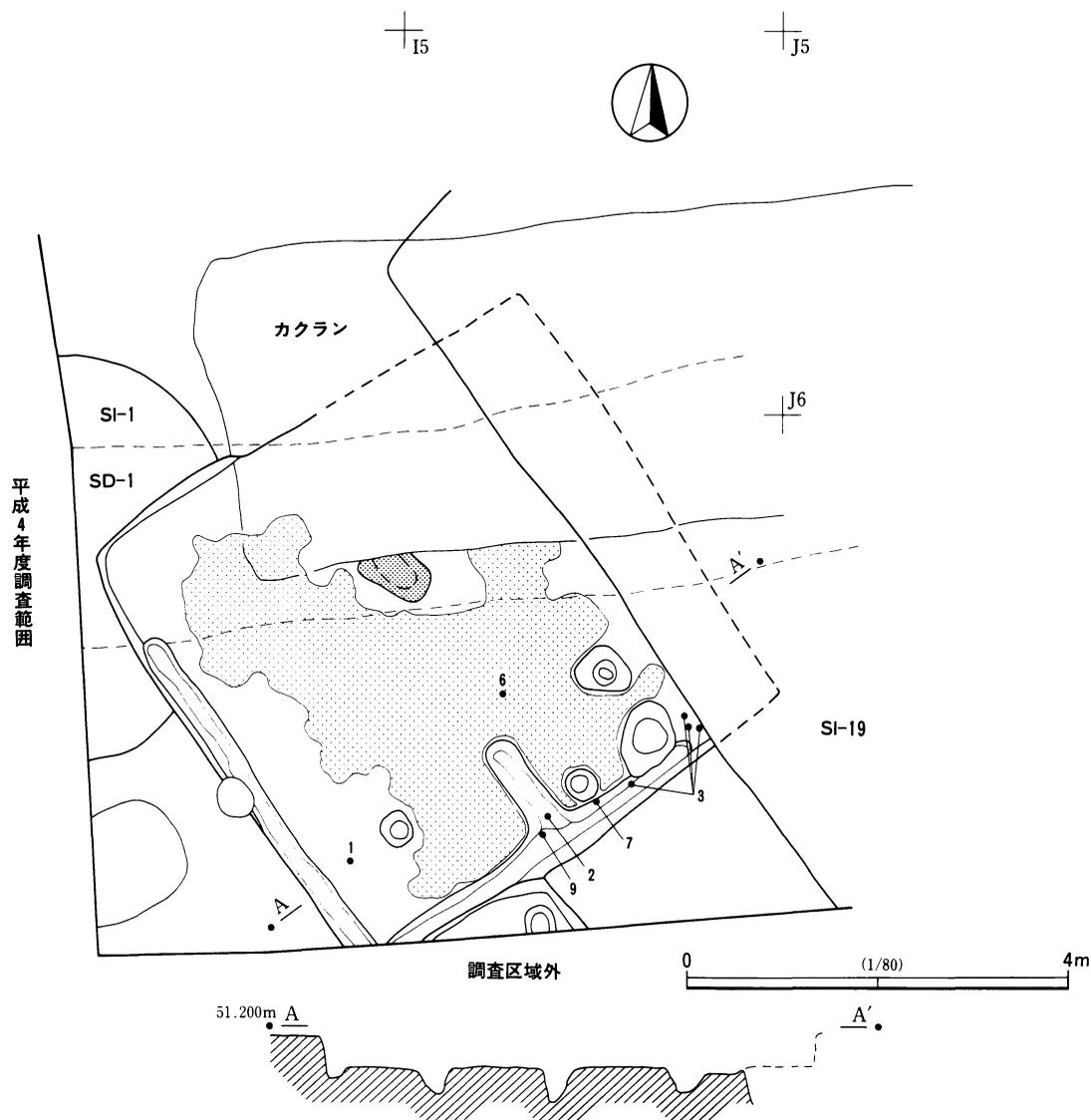
6・7は長胴甕の口縁部で、体部はラグビーボール形を呈するものと考えられる。いずれも口縁部は内面外面共に丁寧な横ナデ、体部外面は縦ヘラケズリ、内面には横ヘラナデを施す。ただ5は頸部がやや強くすぼまり、明瞭な段をもって口縁部がやや強く外反するのに対し、6は頸部があまりすぼまらず、口縁部が短く外反する。ともに覆土下層ないし床面直上から出土した。

8・9は弥生土器で、貼床下から一括出土した。8は広口壺の口縁部である。頸部はあまりすぼまらず、口縁部はわずかに外反し、折り返しにより縁帯を形成する。口唇部と縁帯部～頸部外面にはLR斜縄文、口唇部下端にはヘラ状工具によるキザミを施す。口縁部内面は赤彩される。9は壺の肩部である。外面には4条のS字結節を施し、その上部は赤彩される。

SI-18 (第34図～第36図、図版5・図版20)

遺構

調査区南部西寄り、H 5 グリッドから I 7 グリッドにかけて位置する。SD-1・SI-1・SI-19・SI-20と重複関係をもち、SD-1・SI-1・SI-19より新しく、SI-20より古い。また北側1/4程度を攪乱によって破壊されており、南西隅が調査区域外にかかっている。主軸方位はN-36°-Wで、南北5.1m、東西推定4.7mの比較的整った方形のプランである。支柱穴は手前側に2本検出されたが、実際は4本柱と推定され、奥側の柱穴は恐らくSD-1覆土中に構築されていたものと考えられる。深さはほぼ均等で平均0.8m、柱穴間の距離は梁間で2.7mである。壁際には周溝がめぐるが、壁柱穴は存在しない。南辺から間仕切り溝が、炉方向に南側柱穴間付近まで伸びる。梯ピットと貯蔵穴はこの間仕切り溝の東側にみつまっている。炉はプランの中央やや北寄りに位置する。硬化面は比較的広い範囲で見つかっており、堅くしまっている。硬化面を含めて床面はすべて貼床であった。壁の立ち上がりは最大で50cmである。



第34図 SI-18・SI-19平面図・遺構断面図

炉

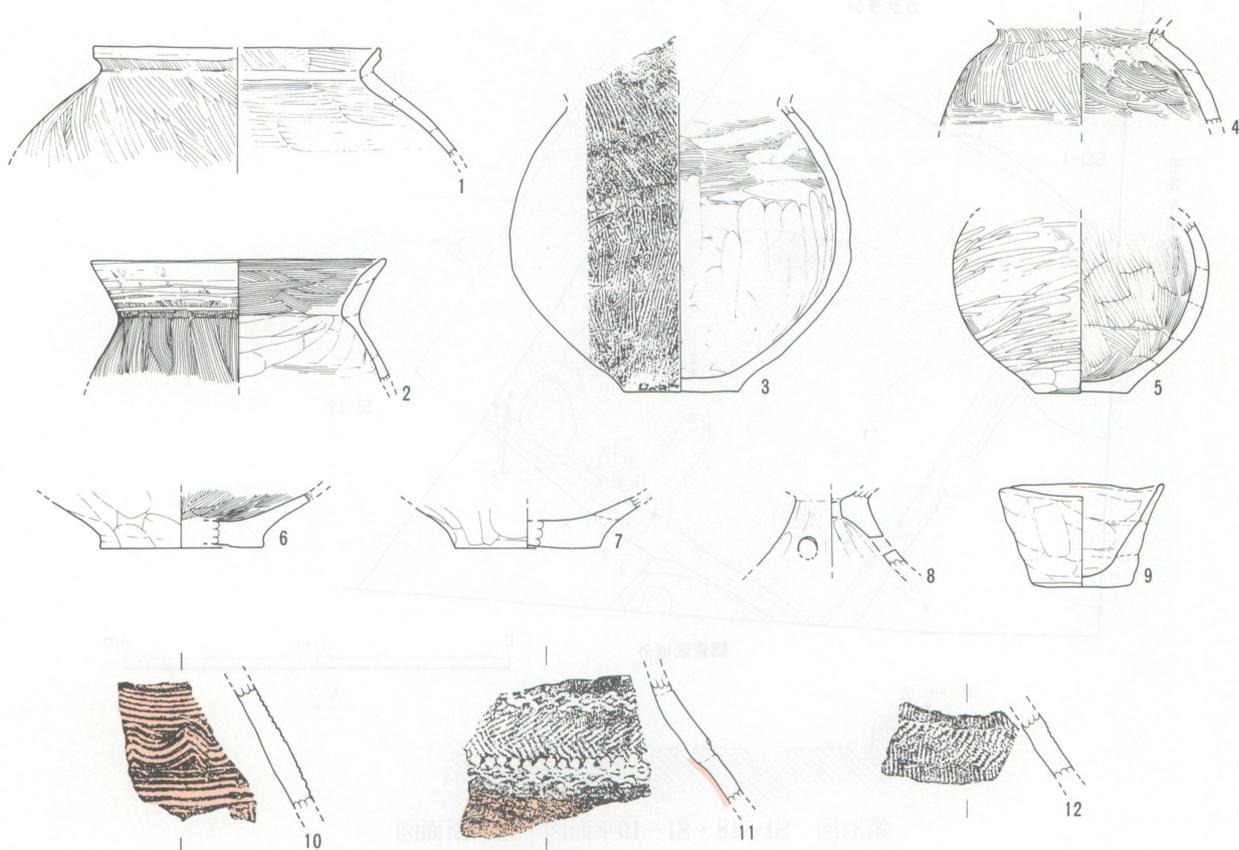
幅0.3m、奥行0.6mの楕円形を呈する。上部を攪乱によって破壊されていたため遺存状態は不良で、火床部のみ遺存していた。焼土の堆積は薄いが、比較的良く焼けている。

遺物 (第35図、図版20)

量は少ないが、比較的まとまっている。

1～3は土師器甕で、いずれも覆土下層～床面直上から出土した。1は口縁部で、体部は弱く膨らみ、胴部最大径が中位にあるものと考えられる。頸部はやや強くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く直線的に外向する。口縁部は内面が横刷毛目調整、外面が縦刷毛目調整後横ヘラナデ、体部は内面が斜ヘラナデ、外面には縦刷毛目調整を施す。刷毛目は非常に細かい。薄手で丁寧に仕上げられており、焼成も良好である。2は口縁部～体部である。頸部はやや狭くすぼまり口縁部は短く外反する。口唇部はつまみ上げられ、若干受口状を呈する。体部は球胴型を呈するものと考えられる。口縁部は内面外面共に斜刷毛目調整、体部は内面が横刷毛目調整、外面は斜刷毛目調整を施す。3は体部が強く膨らんで球状を呈し、最大径は胴部中位にある。頸部はやや強くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部は遺存していないのではっきりしないが、短く直線的に外向するタイプと考えられる。底部はわずかに窪むが安定している。内面は体部上半が横刷毛目調整後粗い横ヘラケズリ、下半には縦ヘラケズリ、外面には斜方向もしくは縦方向の刷毛目調整を施す。刷毛目は明瞭で細かい。厚手のつくりで、底部内面には炭化物が、外面全面にはススが付着する。

4・5は土師器小型甕で、床面直上ないし覆土下層から出土した。いずれも体部が強く張り球状を呈す



第35図 SI-18出土遺物 (1～3・6・7はS=1/4、他はS=1/3)

るタイプで、最大径は中位にある。4は頸部がやや強くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。頸部は内面が横刷毛目調整、外面は斜刷毛目調整、体部は内面が横刷毛目調整、外面には斜刷毛目調整を施し、頸部内面下端には指頭圧痕を残す。5は内面が縦刷毛目調整、外面には斜刷毛目調整後横ヘラミガキ、下端には横ヘラケズリを施す。底面はやや窪んでいるが安定する。

6・7は土師器甕もしくは壺の底部で、覆土下層から出土した。体部が強く張るタイプと考えられ、底部は平坦で安定している。いずれも外面には縦ヘラケズリを施し、6は内面に斜刷毛目調整の痕跡を残す。

8は土師器器台の脚部で、覆土下層から出土した。脚部がラッパ状に広がるタイプである。内面は縦ヘラアテ、外面には縦ヘラケズリを施す。脚部中位に透孔が3箇所穿たれ、受部の中央は穿孔される。

9は土師器ミニチュアの鉢で、床面直上から出土した。体部は急角度で直線的に立ち上がり、口唇部は断面が尖り気味になる。底面は平坦で安定している。内面外面共に指頭圧痕、内面には巻上げ痕を残す。底部は厚手だが、口縁部は薄い。

10は弥生土器大型壺の肩部で、覆土下層から出土した。外面には上から4本単位の櫛状工具により平行線文・波状文・平行線文・懸垂文が描かれ、赤彩されている。胎土には混入物を比較的多く含み、灰白色を呈するやや軟質の焼き上がりである。

11は弥生土器装飾甕の肩部で、覆土下層から出土した。外面には上から2条のS字結節文、RL・LRの羽状縄文がめぐり、文様帯下端には棒状工具による刺突が施される。内面外面共に文様帯より下部が赤彩される。胎土には混入物を多く含み、黄褐色を呈するやや軟質の焼き上がりである。

12は弥生土器壺の肩部で、覆土下層から出土した。外面には縦刷毛目調整を施し、RL斜縄文が1段めぐり。胎土には混入物を若干含み、灰白色を呈するやや軟質の焼き上がりである。

このほかに管玉が1点出土しているが別に示した（II-7、第83図16）。

SI-19（第4図、図版5）

遺構

SI-18の南側、I7グリッドから検出されたが、その大部分が調査区域外にかかるため規模などの詳細はまったくわからない。ただ検出されたのがコーナー部分と考えられるので、方形に類する平面プランであろう。壁の立ち上がりは最大で50cmである。

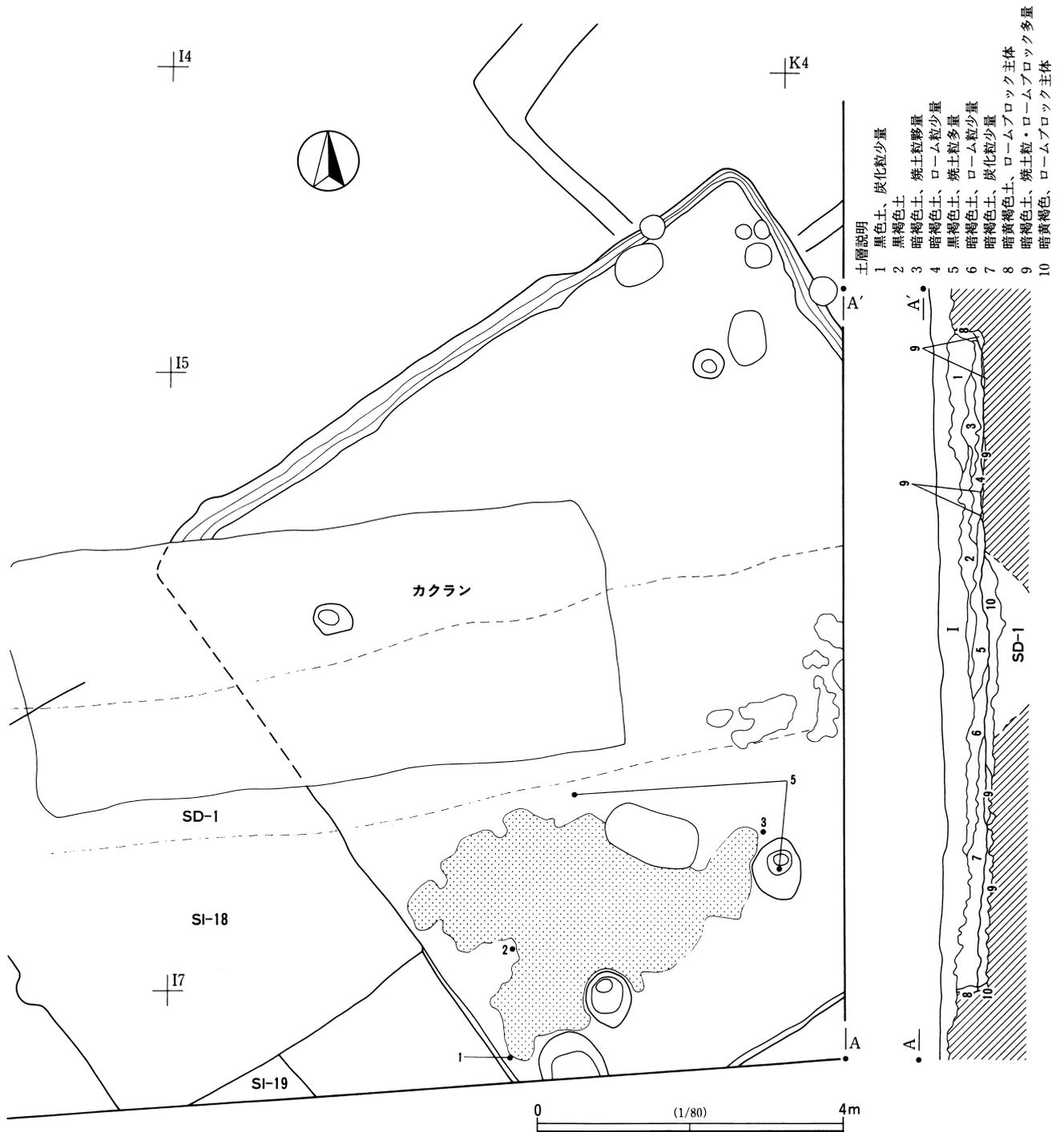
遺物

若干の土師器が出土したが図示できるものはない。

SI-20（第36図・第37図、図版5・図版21）

遺構

調査区南東隅、I4グリッドからK7グリッドにまたがる大型の住居である。多くの遺構と重複関係を持つが、SD-1・SI-17・SI-18より新しく、SI-26・SI-27・SI-30より古い。また西側が攪乱により破壊され、南隅と東側1/6程度が調査範囲外にかかっている。主軸方位はN-33°-W、奥行9.5m、幅9.0mの比較的整った方形のプランである。主柱穴は奥側左右と手前左側の3本が検出されているが、実際は4本柱であろう。深さは1.3m~1.4mとほぼ均一で、かなり深い。主柱穴間は梁間が5.9m、桁間が6.0mで、内区は推定34.4m²、全体の面積は推定86.8m²である。このほか梯ピットとその西側に貯蔵穴がみつか

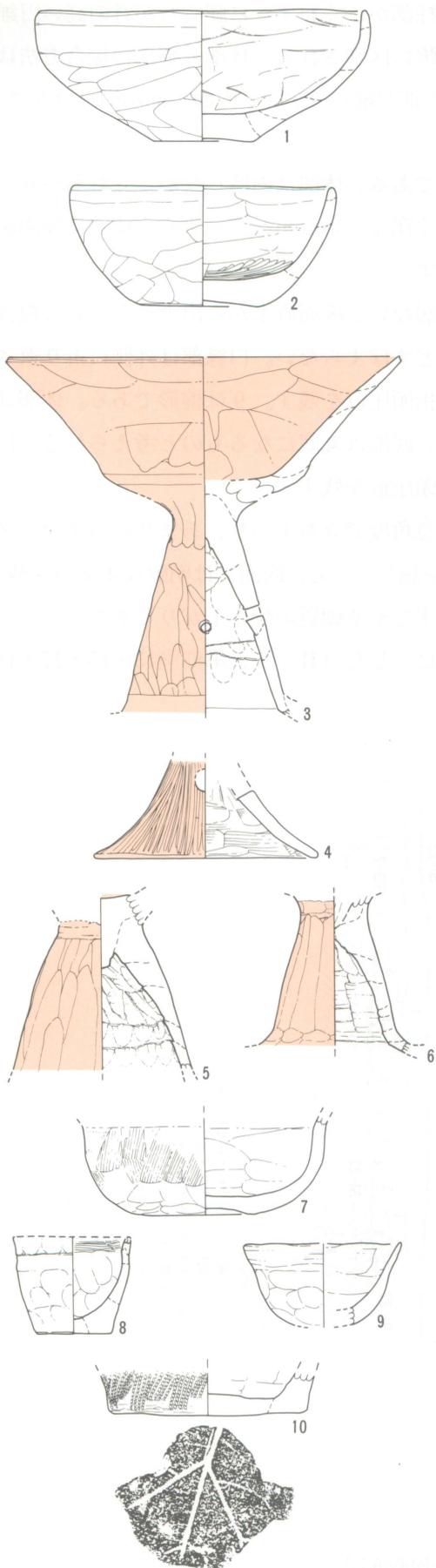


第36図 SI-20平面図・土層断面図

っている。貯蔵穴は南側半分程度が調査範囲外にかかる。壁際には周溝がめぐるが全周するか不明で、壁柱穴は存在しない。奥側支柱穴中間に焼土が散在する部分があり、ここに炉があったものと推定されるが、遺存状況が悪くはっきりしなかった。床面はほとんどすべて貼床で、硬化面はあまり残っていないが比較的堅くしまっている。ただしSD-1 覆土上にかかる部分のみ若干しまりが悪い。壁の立ち上がりは最大で40cmである。

遺物 (第37図、図版21)

遺物は比較的多く、時期幅も広いが、確実に本住居跡に伴うと考えられるものは多くはない。



第37図 SI-20出土遺物 (S=1/3)

1・2は土師器杯である。いずれも床面直上から出土した。1は体部が浅い角度でわずかに内湾しながら立ち上がり、上部で急に角度を増して口縁部はほとんど直立する。口唇部は断面が尖り気味になり、端面を作り出さない。底部は平底で、若干窪むが安定している。内面は全面がやや粗い横ヘラナデ、外面は口縁部が横ナデ、体部は横ヘラケズリで、底面はヘラアテを施す。底面を除く全面が赤彩される。2は体部がやや急角度で内湾しながら立ち上がる。口唇部は断面が丸みを帯びる。底部は平底で、窪んでいるが安定する。口縁部は内面が横ヘラナデ、外面がヨコナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面は丁寧な横ヘラケズリ、底部は内面が横ヘラミガキ、外面がヘラナデで、“×”形のヘラ記号が施される。

3は土師器高杯で、杯部と脚部の接点はないが、確実に同一個体である。杯部は下端に明瞭な稜をもち、体部はやや急角度で外反気味に立ち上がる。口唇部には狭い端面を形成する。脚柱部はごくわずかに膨らむが背の高い円錐形で、中位に小さな透孔が4箇所穿たれる。裾部は脚柱部と明瞭に区別され、“ハ”字形に広がる。接合方法は脚部ホゾはめ込みである。杯部は内面外面共に丁寧な横ヘラナデ、接合部は縦ヘラケズリ、脚柱部は内面が指頭圧痕、外面は粗い縦ヘラケズリを施し、脚柱部内面には巻き上げの痕跡が明瞭に残る。脚部内面を除いた全面が赤彩されるが、その際の刷毛状の痕跡が比較的明瞭に残っている。

4は裾部のみ遺存する土師器器台と考えられる。覆土下層から出土した。脚部は背が低くラップ状に広がるタイプで、中位やや上よりの4箇所透孔が穿たれる。裾部下端は断面丸みを帯びる。内面は横刷毛目調整、外面は細密な縦ヘラケズリを施し、外面のみ赤彩される。全体的に丁寧な作りである。

5・6は土師器高杯の脚部である。いずれも床面付近から出土した。5はやや大型の個体である。脚柱部は膨らみ、背の高い釣鐘形を呈する。杯部と脚部の接合方法は杯部ホゾはめ込みである。杯部内面はヘラナデ、接合部は丁寧な横ナデ、脚柱部は内面上部が縦ヘラアテ、内面下部が指頭圧痕、外面には縦ヘラケズリを施し、内面には巻き上げの痕跡を明瞭に残す。脚柱部下半は非常に薄手で、脚部外面

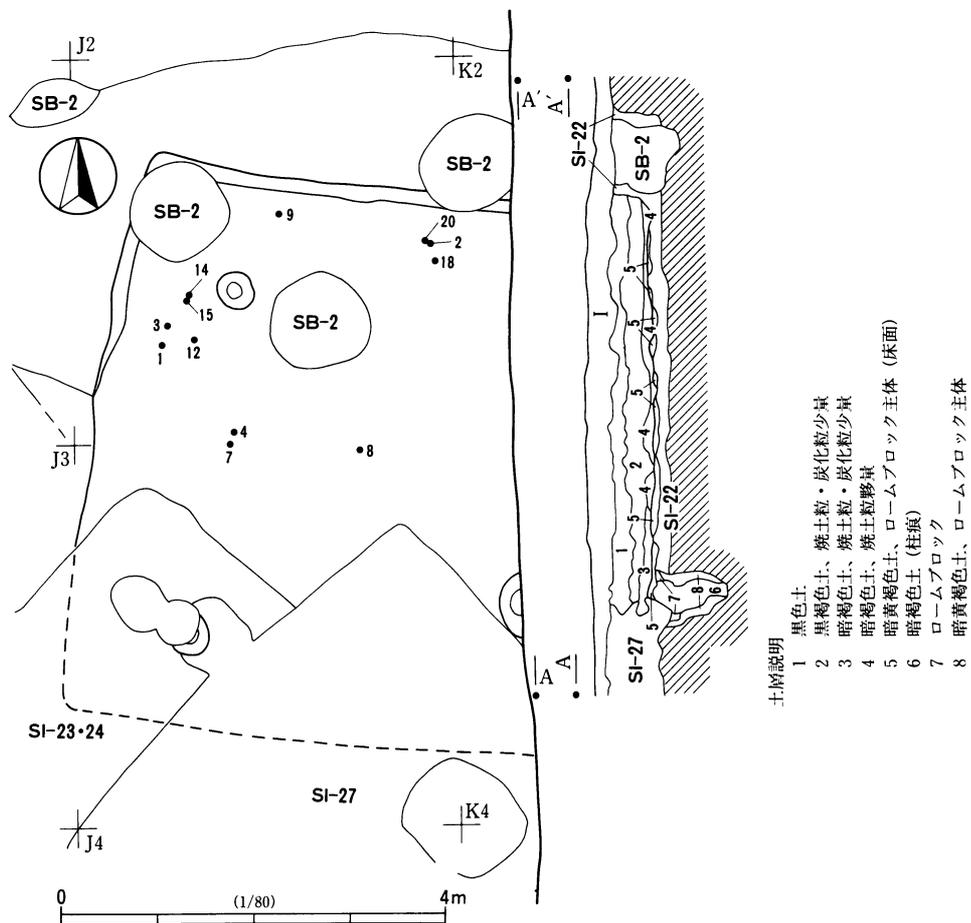
と杯部内面は赤彩される。6はやや小ぶりの個体である。脚柱部がごくわずかに膨らむが背の高い円錐形を呈し、裾部は強く“ハ”字状に広がる。脚柱部と裾部は明瞭に区別される。杯部と脚部の接合方法は杯部ホゾはめ込みである。接合部は横ヘラナデ、脚柱部は内面上部が縦ヘラアテ、内面下部が横ヘラケズリ、外面には縦ヘラケズリを施す。脚柱部外面は赤彩される。

7は土師器碗で、床面直上から出土した。寸詰まりな器形である。体部は内湾しながら立ち上がり、頸部で直立したあと“く”字形に弱く折れ曲がる。底部は大きく窪んでいるが、安定する。体部は内面が横ヘラナデ、外面は縦刷毛目調整後、下半のみ横ヘラナデを施す。

8・9は土師器のミニチュア土器である。いずれも覆土下層ないし床面直上から出土した。8は複合口縁の甕形である。体部は急角度で立ち上がり、頸部はほとんどすぼまらない。口縁部は外側に折り返される。底面は平坦で安定している。全体に内面外面共に明瞭な指頭圧痕を残す。9は碗形である。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部が直線的に外向する。底部は丸底になるものと考えられる。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ナデ、外面には指頭圧痕を残す。

10は弥生土器壺の底部で、覆土下層から出土した。体部は急角度で立ち上がり、あまり膨らまないタイプと考えられる。体部内面は横ヘラナデ、外面にはRL縄紋を施している。底面には明瞭な木葉痕を残し、平坦で安定している。胎土には混入物を多く含み、橙色を呈するやや硬質の焼き上がりである。

このほかに石製模造品2点と砥石2点が出土しているが別に示した（II-7、第83図13・15・17・18）。



第38図 SI-21平面図・土層断面図

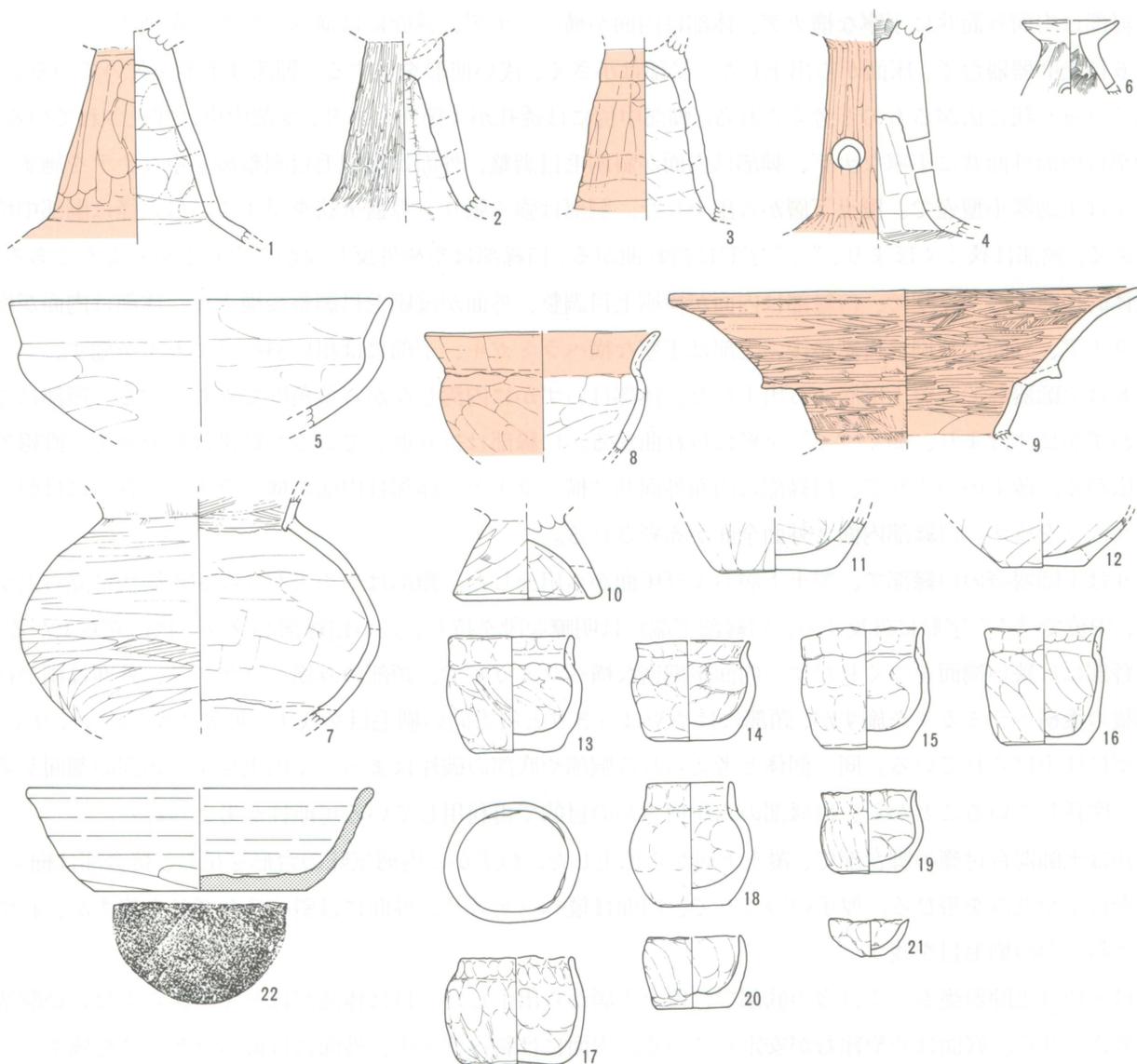
SI-21 (第38図・第39図、図版21)

遺構

調査区東隅中央付近、J 2グリッドからK 3グリッドにかけて位置する。多くの遺構と重複関係を持つが、SI-11・SI-22より新しく、SB-2・SI-14・SI-23・SI-24・SI-26・SI-27より古い。東側1/3程度が調査範囲外にかかっており、南側1/3程度をその他の住居跡によって破壊されている。主軸方位はN-5°-E、奥行5.7m、幅5.3mの方形のプランと推定される。4本柱と考えられるが、左奥および手前側左右の計3本が検出されている。深さは0.7m~0.8mと比較的揃っている。主柱穴間の距離は桁間が3.6m、梁間が3.5mで、内区は推定10.1㎡、全体の面積は推定30.0㎡である。壁際には周溝や壁柱穴は存在しない。炉は遺存状況が悪くはっきりしなかった。床面はやや軟弱で、はっきりした硬化面はないが全面が貼床状になっている。壁の立ち上がりは最大で40cmである。

遺物 (第39図、図版21)

遺物量は決して少なくはないが、他の遺構に破壊されている部分が多いため、あまり接合しなかった。



第39図 SI-21出土遺物 (1/3)

ただミニチュア土器が多く出土したことは特筆に値する。

1～4は高杯の脚部で、いずれも覆土中層ないし下層から出土した。1は脚柱部がやや膨らみ、裾が“く”字形に強く広がるタイプである。脚柱部内面は上半がヘラナデ、下半が指頭押捺後横ヘラナデ、外面は縦ヘラケズリ、裾部は内面外面共に横ナデを施す。外面はすべて赤彩されるが、ほとんどはがれてしまっている。2は脚柱部が円錐形を呈し、裾部が“く”字形に強く開くタイプである。脚柱部は内面が比較的丁寧なヘラナデ、外面は縦ヘラケズリ後横ナデ、裾部ははっきりしないが内面外面共に横ナデを施す。3は脚部が膨らまず円錐形を呈し、裾部が強く開くタイプである。脚柱部は内面が横ヘラケズリ、外面は縦ヘラケズリ後、丁寧な縦ヘラミガキを施す。4は脚柱部が背の高い円柱状で、裾部が“く”字形に強く広がるタイプである。杯部と脚部の接合方法は杯部ホゾはめ込みで、脚柱部中位には大きな透孔が3箇所穿たれる。脚柱部は内面上部が縦ヘラアテ、内面下部は横ヘラケズリ、外面が細密な縦ヘラミガキ、裾部は内面が横刷毛目調整、外面は縦ヘラミガキを施す。3・4は外面全体が赤彩されている。

5は土師器高杯の杯部と考えられる。覆土下層から出土した。体部は浅い角度で直線的に広がったあと急に内湾して直立する。そこから浅く“く”字形に折れ曲がり、口縁部が外向する。やや厚手のつくりで、口縁部は内面外面共に丁寧な横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。

6は土師器器台で、床面から出土した。受部は小さく、浅い皿形を呈する。脚部は下半を欠いているが、緩くラップ状に広がるものと考えられる。脚部中位には透孔が4箇所にあり、受部中央は穿孔されている。受部は内面外面共に丁寧なナデ、脚部は内面が斜刷毛目調整、外面は縦刷毛目調整後丁寧なナデを施す。

7は土師器小型壺で、覆土下層から出土した。胴部は強く張り、算盤玉状を呈する。最大径は胴部中位にある。頸部は狭くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部はやや外反しながら立ち上がるようである。全体的に薄手のつくりで、口縁部は内面が横刷毛目調整、外面が縦刷毛目調整後横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面が斜刷毛目調整後、上部は丁寧な横ヘラミガキ、下部には粗い斜ヘラミガキを施す。

8は土師器鉢で、覆土下層から出土した。体部はわずかに内湾しながら急角度で立ち上がる。頸部はごくわずかにすぼまり、弱く“く”字形に折れ曲がる。口縁部は折り返しているが縁帯は形成せず、直線的に広がる。薄手のつくりで、口縁部は内面外面共に横ヘラナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には斜ヘラケズリを施す。口縁部内面と外面全面が赤彩される。

9は土師器壺の口縁部で、覆土下層および床面から出土した。頸部はやや広がりながら筒状に立ち上がり、中位で“く”字形に外反する。口縁部下端には明瞭な段を持ち、長い口縁部がラップ状に立ち上がる。口唇部には狭い端面をつくりだす。内面が細密な横ヘラミガキで、頸部のみ横ヘラケズリ、外面は刷毛目調整の後横ヘラミガキを施すが、頸部にはややはっきりと斜方向の刷毛目を残す。非常に薄手のつくりで、丁寧に仕上げられている。同一個体と考えられる胴部や底部の破片はまったく出土せず、頸部の割面が著しく摩耗していることから、口縁部のみを何らかの目的で再利用している可能性が考えられる。

10は土師器台付甕の脚部で、覆土下層から出土した。わずかに内湾気味の台形を呈し、接合部は細く、下端はやや丸みを帯びる。厚手のつくりで、内面は縦ヘラケズリ、外面には斜ヘラケズリを施すが、わずかに斜方向の刷毛目を残す。

11・12は土師器甕もしくは壺の底部で、覆土下層から出土した。11は体部がほとんど膨らまない長胴型と考えられる。底面はやや窪むが安定している。内面には斜ヘラナデ、外面には縦ヘラケズリを施す。12は体部が球胴型を呈するタイプと考えられる。底面は平坦で安定している。内面には縦ヘラナデ、外面に

は斜ヘラケズリを施す。

13～21はミニチュア土器である。13・18～20はほぼ床面から、14～17・21は覆土下層から出土した。13・15・16は複合口縁の甕形である。いずれも平底で体部の膨らみは弱く、頸部はあまりすぼまらずに口縁部が直立している。口縁部はすべて貼り付けである。体部は外面がヘラナデ若しくは指ナデ、内面はすべてが指ナデで、口縁部は内面外面共に指頭圧痕を残す。14・17・19は素口縁の甕形である。形態、技法は複合口縁の甕形とほぼ同様である。17は歪みが著しい。18は複合口縁の壺形である。胴部は丸く膨らみ、頸部がやや強くすぼまる。口縁部は貼り付けで、やや長く直立する。整形技法については甕形と同じである。20は鉢形である。底面は平底で、体部はあまり膨らまずに立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。内面外面共に斜方向の明瞭な指ナデ痕跡を残す。21は碗形で、体部が内湾しながら立ち上がるタイプを表現している。底部は丸底で安定しない。内面外面共に明瞭な指頭圧痕を残す。

22は須恵器の杯で、覆土中層～下層から出土した。体部はわずかに内湾しながらやや急角度に立ち上がり、口唇部が若干外反する。体部には内面外面共に弱い口クロ目を残し、体部外面下端と底面に手持ちヘラケズリを施す。本住居跡に伴う遺物ではない。

このほかに土製紡錘車と砥石破片が各1点出土しているが別に示した（II-6、第83図7・14）。

SI-28・SI-29（第40図・第41図、図版6・図版21）

遺構

SI-28

J0グリッドおよびK0グリッドに位置する。SI-25・SI-29と重複関係を持ち、SI-25・SI-29より新しい。本住居跡のほとんどは調査区域外にかかっているため規模ははっきりしない。主軸方向はN-35°-WもしくはN-55°-Eで方形に類するプランと考えられる。壁際には周溝がめぐり、若干の壁柱穴と壁板と考えられる炭化材が見出された。柱穴、貯蔵穴、梯子ピット、炉などは調査区域外にあるものと考えられる。覆土内には多量の焼土と若干の炭化材が含まれており、焼失住居と考えられる。床面ははっきりしないが貼床状になっている。壁の立ち上がりは最大で55cmである。

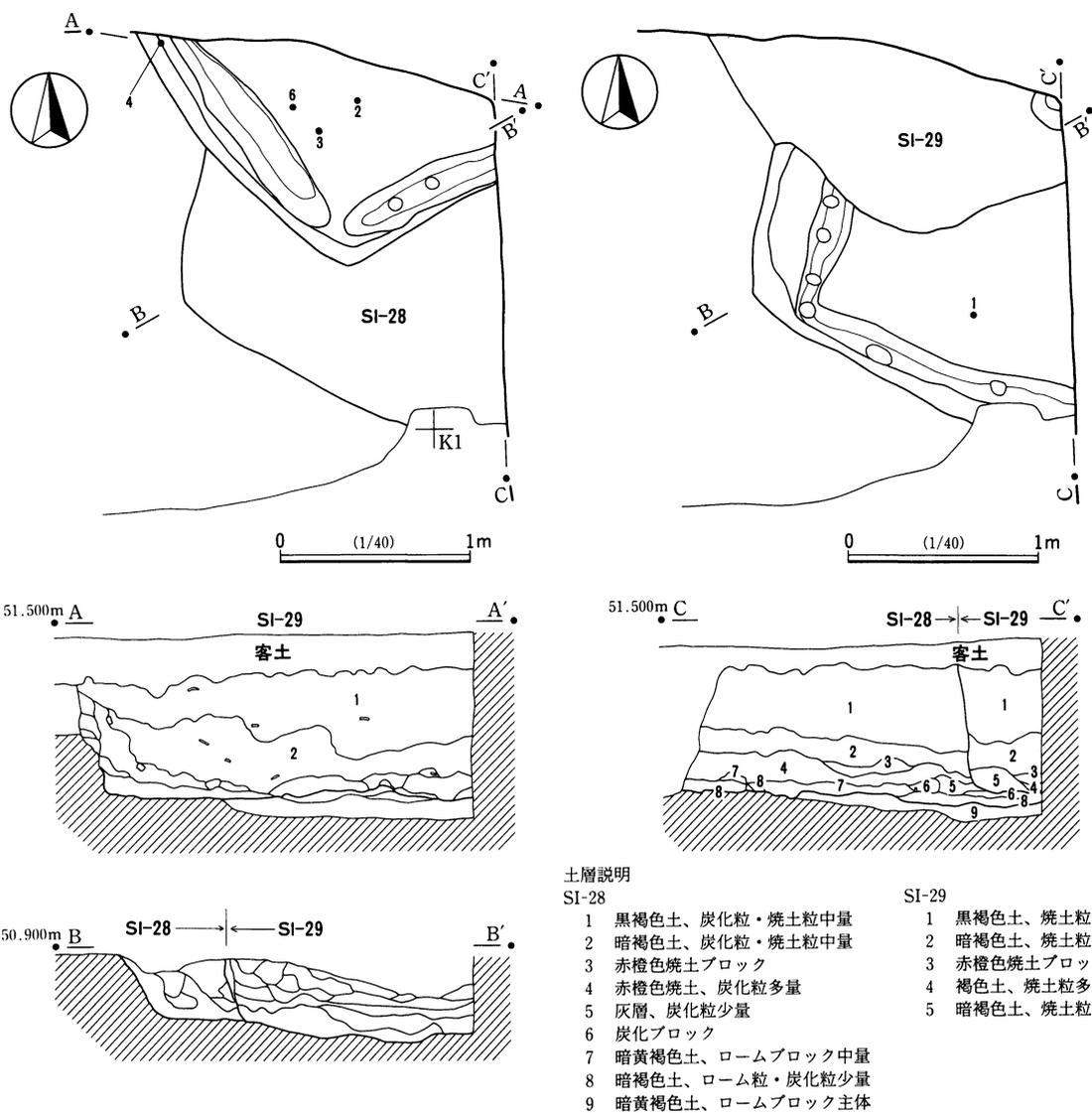
SI-29

SI-28と同様にJ0グリッドおよびK0グリッドに位置する。SI-25・SI-28と重複関係を持ち、SI-25より新しくSI-28より古い。本住居跡もほとんどが調査区域外にかかっているため規模ははっきりしない。主軸方向はN-69°-WもしくはN-21°-Eで方形に類するプランと考えられる。壁際には周溝がめぐり、若干の壁柱穴が見出された。柱穴、貯蔵穴、梯子ピット、炉などは調査区域外にあるものと考えられる。SI-28と同様に覆土内には多量の焼土と炭化材が含まれており、焼失住居と考えられる。床面はかなり軟弱であるが貼床状になっていた。壁の立ち上がりは最大で60cmである。

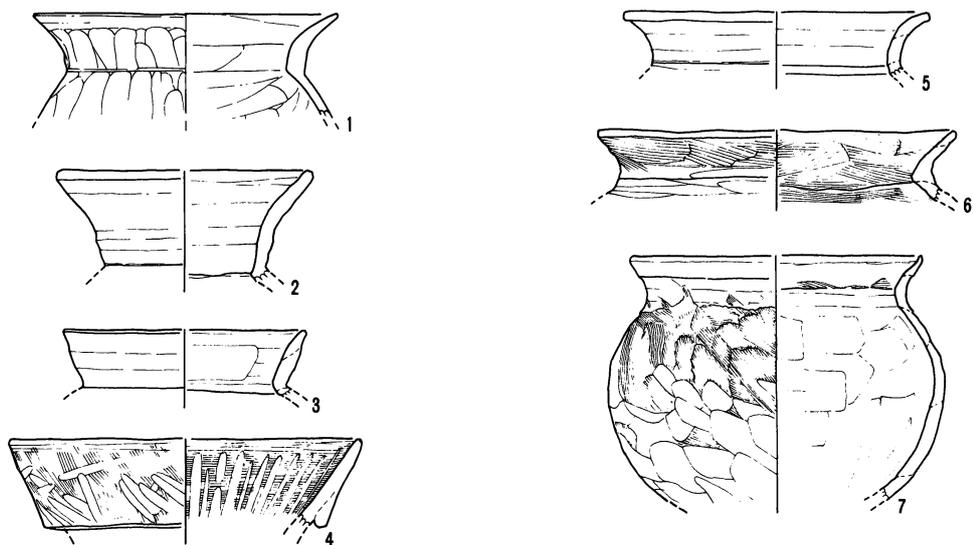
遺物（第41図、図版21）

調査土量の割に遺物は多いが、なにぶん部分的な調査であるためほとんど接合しなかった。また床面付近から出土するものではなく、両遺構の差はほとんど認められない。図示したものはすべて土師器である。

1・2は小型の甕である。いずれも覆土下層から出土した。1は体部はあまり張らず長胴気味になるものと考えられる。頸部はやや狭くすぼまり、“コ”字形に折れ曲がる。口縁部は短く、ゆるやかに外反する。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。薄手のつくりで、内面は口縁部が横ヘラナデ、体部は斜ヘラナ



第40図 SI-28・SI-29平面図・土層断面図



第41図 SI-28・SI-29出土遺物 (1~3・7はS=1/3、4~6はS=1/4)

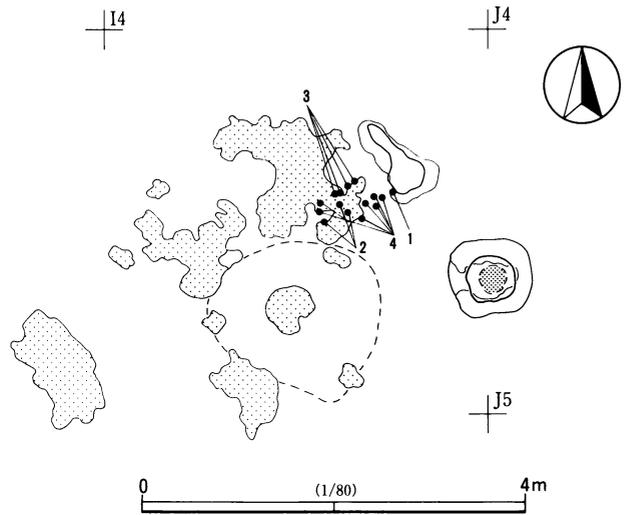
デ、外面は口唇部が横ナデ、口縁部～頸部が縦ヘラナデ、体部は縦ヘラケズリを施す。2は体部がやや強く張り、球胴型を呈するものと考えられる。頸部は狭くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く、直線的に立ち上がる。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。内面外面共に横ヘラナデを施す。

3は小型の壺で、覆土下層から出土した。体部は遺存しないので不明だが、強く張るものと考えられる。頸部は狭くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部は長く、わずかに外反しながら立ち上がる。口唇部は肥厚せず、端面は丸みを帯びる。比較的薄手のつくりで、内面外面共に横ヘラナデを施す。

4は壺で、覆土下層から出土した。口縁部は折り返しによる複合口縁を形成し、やや急角度で直線的に立ち上がる。内面は横刷毛目調整後、粗い縦ヘラミガキ、外面は斜刷毛目調整後粗いヘラミガキを施す。

5・6は甕で、いずれも覆土下層から出土した。5は頸部がやや狭くすぼまり、緩く“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く、強く外反する。口唇部は肥厚せず、断面はわずかに端面を形成する。内面外面共に横ヘラナデを施す。6は体部が強く張り、球胴型を呈するものと考えられる。頸部はあまりすぼまらず、“く”字形に折れ曲がる。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。口縁部は内面外面共に横刷毛目調整、体部は内面が横刷毛目調整、外面は横ヘラナデもしくは横ヘラケズリを施す。

7は小型の甕で、覆土下層から出土した。体部はやや強く張るが頸部はあまりすぼまらず、口縁部は短い。薄手のつくりで、外面には斜刷毛目調整を施す。

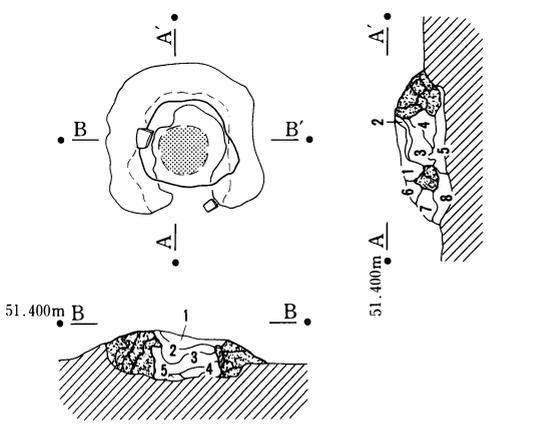


第42図 SI-30平面図

SI-30 (第42図～第44図、図版6・図版22)

遺構

調査区東側やや南寄り、I 4グリッドおよびJ 4グリッドに位置する。SI-11・SI-17・SI-20と重複するが、これらの中で最も新しい。規模は奥行が推定で6m程度だが、幅は不明である。平面プランもはっきりしないが方形に類するものと考えられる。主軸方位もはっきりしないが、東向きであろうと考えられる。カマドは例外的にしっかり残っていたが、柱穴、梯子ピットなどは見出せなかった。ただしカマドの北西側に灰黄色の山砂に伴って遺物が集中する部分があり、ここが貯蔵穴となる可能性はあるが、はっきりした掘り込みは確認できなかった。



- 土層説明
- 1 暗褐色土、灰黄色山砂少量
 - 2 黄灰色山砂
 - 3 暗褐色土、焼土粒・炭化粒多量
 - 4 赤暗褐色土、焼土ブロック主体
 - 5 赤褐色山砂、暗褐色土少量
 - 6 暗褐色土、焼土粒・炭化粒少量
 - 7 暗褐色土、焼土粒・炭化粒微量
 - 8 暗黄褐色、ロームブロック多量

第43図 SI-30カマド 平面図・土層断面図

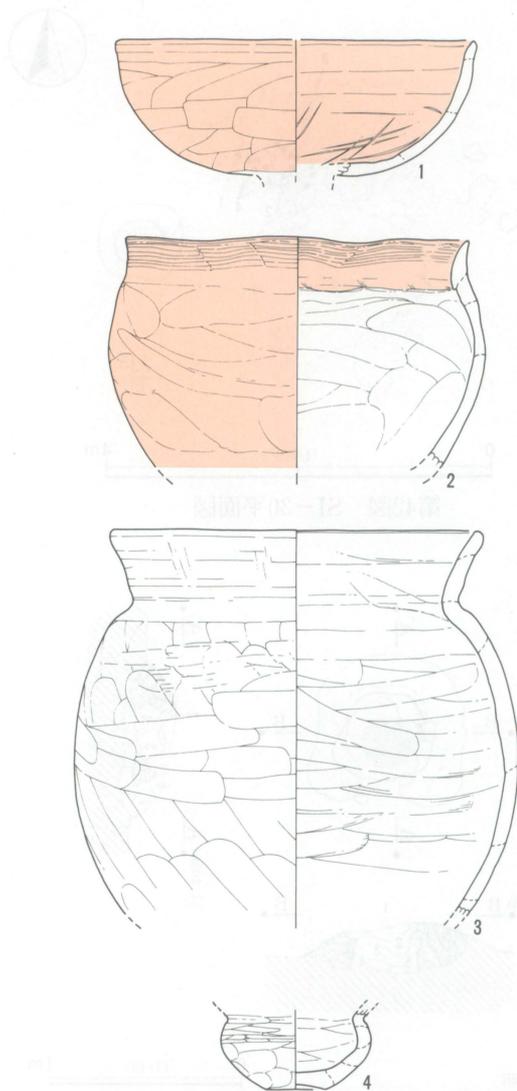
またカマドの西側には斑状に硬化面が遺存しており、貼床状になっている。硬化面のレベルはほぼ同一であるがSI-11貯蔵穴にかかる部分のみわずかに沈んでいる。表土を除去した段階では本遺構を検出する事ができず、先にSI-11とSI-17を掘削してしまったため、壁の立ち上がりは検出できなかった。

カマド (第43図、図版6)

鮮やかな赤褐色を呈して堅く硬化する。火床部は幅・奥行ともに0.6mで、非常に良く焼けており、若干の灰層を伴っている。火床面は床面レベルよりわずかに低い。燃烧室内からは若干の土師器が出土しているが、図示しうるものではなかった。

遺物 (第44図、図版22)

量は比較的多く、遺物の時期幅も広い。ただし遺構の遺存状態がきわめて悪いため、本住居跡に伴うと考えられる遺物は特定しがたい状況である。図示した遺物はすべて土師器である。



第44図 SI-30出土遺物 (3は1/4、他は1/3)

1は高杯の杯部である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部でほぼ直立する。口唇部は断面が尖り気味になり、端面を形成しない。非常に薄手のつくりで、口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。内面外面共に赤彩の痕跡が残るがはっきりしない。

2は碗で、床面から出土した。体部は球状に張り、最大径は体部中位にある。頸部はあまりすぼまらず“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短くわずかに外反し、口唇部は尖る。口縁部は内面外面共に刷毛目状の横ヘラナデ、体部は内面が斜ヘラナデ、外面には斜ヘラケズリを施す。口縁部内面と外面全面が赤彩される。

3は中型の甕で、カマド北側の山砂ブロック上から出土した。体部はやや強く張り、最大径は胴部中位にある。頸部はやや狭くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く直線的に広がり、口唇部は肥厚せず、断面が丸みを帯びる。比較的厚手のつくりで、口縁部は内面外面共に横ヘラナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には横もしくは縦のヘラケズリ後、上部のみ横ヘラナデを施す。

4は小壺で、床面から出土した。体部は強く張り、最大径が中位にある。頸部はほとんどすぼまらず“く”字形に折れ曲がる。底面は窪むが安定している。体部は内面が横ナデ、外面上部には横ヘラミガキ、下部には横ヘラケズリを施す。

(3) 奈良・平安時代

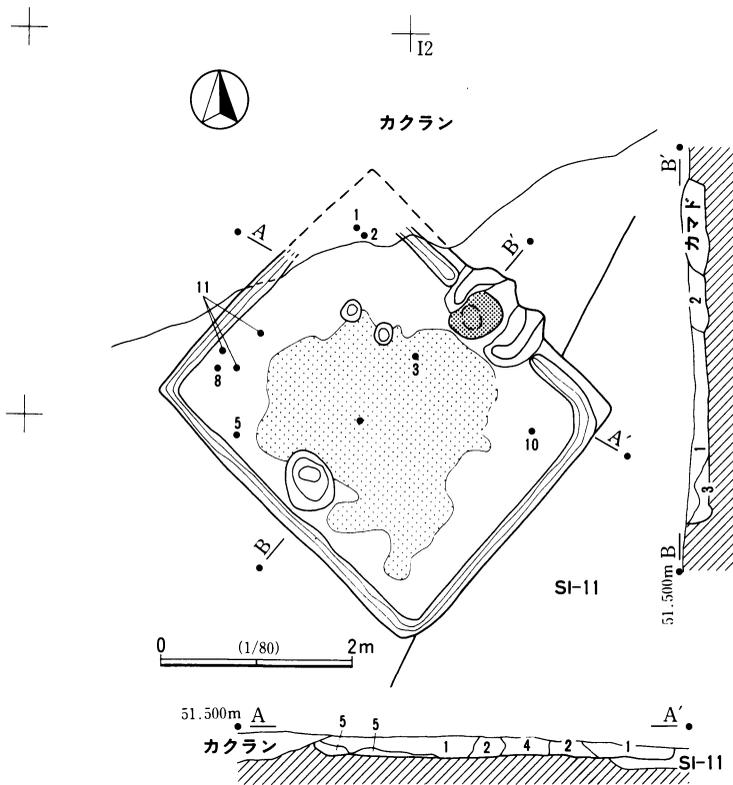
SI-12 (第45図～第47図、図版7・図版22)

遺構

調査区東寄り中央付近、G 2 グリッドから H 3 グリッドに位置し、北隅の一部を攪乱によって破壊されている。SI-11と重複関係をもち、本住居跡のほうが新しい。主軸方向はN-43°-E、奥行3.1m～3.2m、幅3.2m～3.6mの方形に近い横長の台形プランである。支柱穴は見出せなかったが、南辺に梯子ピットが検出された。壁際には周溝が全周するが、壁柱穴は存在しない。カマドは北東壁の中央付近にある。貯蔵穴ははっきりしなかったが、攪乱との境付近で床面レベルより下から遺物が比較的多く出土しており、ここが貯蔵穴となる可能性がある。硬化面は中央付近にあって非常に堅くしまっている。その周囲にはやや軟弱な床面があり、この部分のみ貼床である。床面の遺存状態は良好であった。全体の面積は10.6㎡、硬化面の面積は4.0㎡、壁の立ち上がりは最大で25cmである。

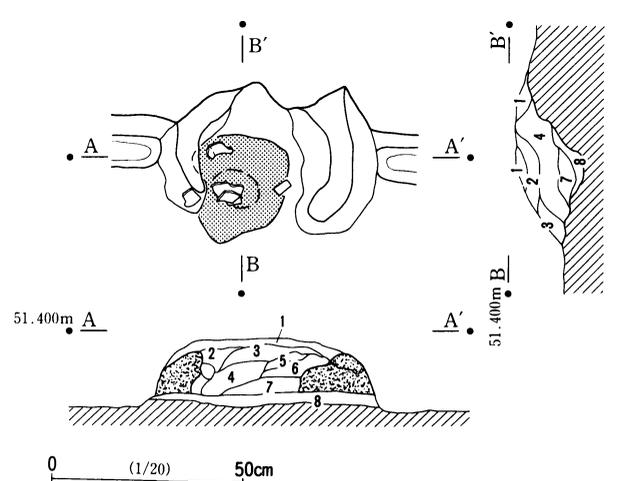
カマド (第46図、図版7)

幅0.7m、奥行0.5m、高さ0.2mで、両袖の一部が住居壁面より若干外側に突出するが、煙道ははっきりしなかった。袖の遺存状態は比較的良好で、天井部分は崩落している。火床部は幅0.3m、奥行0.4mの楕円形を呈し、良く焼けている。火床面は床面よりやや低く、若干の遺物が出土した。



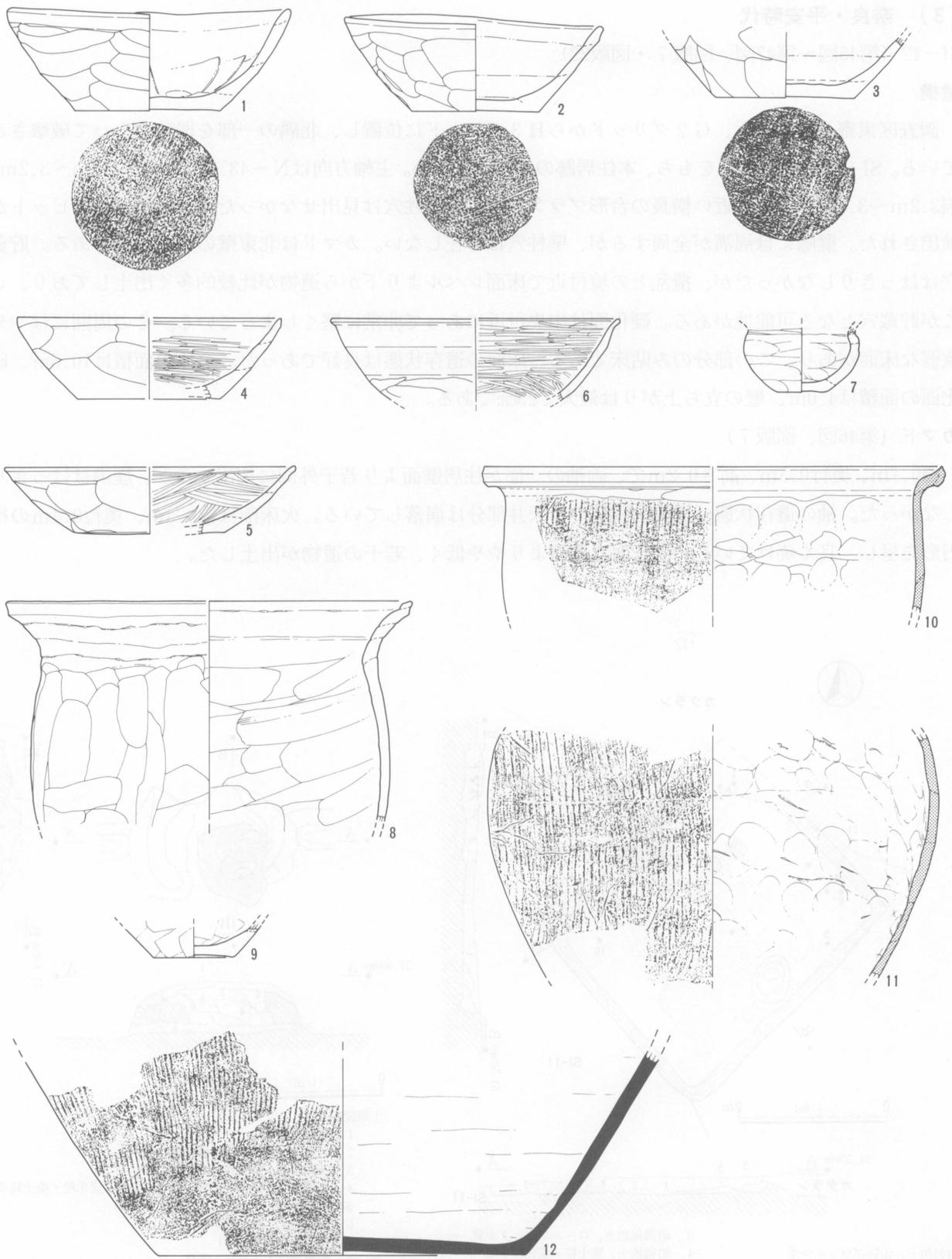
- 土層説明
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 暗褐色土、山砂ブロック少量 | 3 暗黄褐色土、ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色土、焼土粒・山砂ブロック中量 | 4 暗褐色土、焼土粒・炭化粒少量 |
| | 5 暗黄褐色土、灰黄色山砂ブロック少量 |

第45図 SI-12平面図・土層断面図



- 土層説明
- | |
|------------------------------|
| 1 暗褐色土 |
| 2 暗褐色土、灰黄色山砂中量 |
| 3 黒褐色土、焼土粒・炭化粒少量 |
| 4 黒褐色土、灰黄色山砂ブロック少量、炭化粒・焼土粒多量 |
| 5 暗褐色土、焼土粒・炭化粒少量 |
| 6 暗褐色土、焼土粒少量 |
| 7 赤橙色焼土(火床) |
| 8 暗黄褐色土、ローム主体 |

第46図 SI-12カマド 平面図・土層断面図



第47図 SI-12出土遺物 (1~9はS=1/3、他はS=1/4)

遺物（第47図、図版22）

量はそれほど多くはないが、ややまとまった印象を受ける。

1～3は非ロクロ成形の土師器杯で、いずれも床面直上の出土である。体部外面のほぼ全面に手持ちヘラケズリ、内面は横ナデとヘラ押捺を施す。底部は1が静止ヘラ切り無調整、2・3は切り離し後手持ちヘラケズリを施す。やや厚手のつくりで、胎土・色調とも良く似ている。

4～6はロクロ土師器杯で、いずれも覆土下層から出土した。4・6は底部と体部外面全面に手持ちヘラケズリ、内面には丁寧なミガキを施す。5は薄手のつくりで、体部外面下端に手持ちヘラケズリ、内面には丁寧なミガキを施す。底部を欠くためはっきりしないが、高台付の可能性はある。

7は土師器の小壺で、覆土中層から出土した。体部は強く張り、胴部最大径は中位にある。頸部はあまりすぼまらないが“く”字形に折れ曲がる。底面は窪むが安定している。内面は横ナデ、外面共には横ヘラナデを施す。古墳時代中期に比定されるもので、本住居跡に伴うものではない。

8・9は土師器甕で、覆土下層から出土した。8は口縁部～胴部で、体部はやや丸みを帯び頸部はあまりすぼまらない。口縁部は巻上げ痕を残しゆるやかに外反する。口唇部はつまみ上げられわずかに内湾する。口縁は内面外面共に横ナデ、体部は外面が縦ヘラケズリ、内面は横ヘラナデを施す。9は底部で体部がやや強く張るタイプと考えられる。内面は横ヘラナデ、外面は斜ヘラケズリ、底面はヘラケズリを施す。

10は須恵器甕で、覆土下層から出土した。体部は直線的に立ちあがり、頸部はほとんどすぼまらず“く”字形に折れ曲がる。口縁は短く、折り返しにより断面半円形の縁帯を形成する。口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部外面は縦平行タタキ後横ナデ、内面は横ヘラナデを施すが当て具痕が残る。

11・12は須恵器甕で、11は北西部の攪乱との境付近から、12は床面直上から出土した。11は肩部および底部の破片で、胴部はあまり膨らまないが、頸部は狭くすぼまる。胴部の最大径は肩部～胴部中位付近にある。口縁部は長くラップ状に外反するタイプであると考えられる。頸部は内面外面共に横ナデ、体部は内面外面共にタタキ整形の後横ナデが施されているが、外面には縦平行タタキ、内面には当て具（卵石）の痕跡が残る。12は胴部で、最大径が肩部～胴部上半にあるものと考えられる。内面外面共にタタキ整形後横ナデを施すが、外面には縦平行タタキ、内面には当て具（卵石）痕を残す。

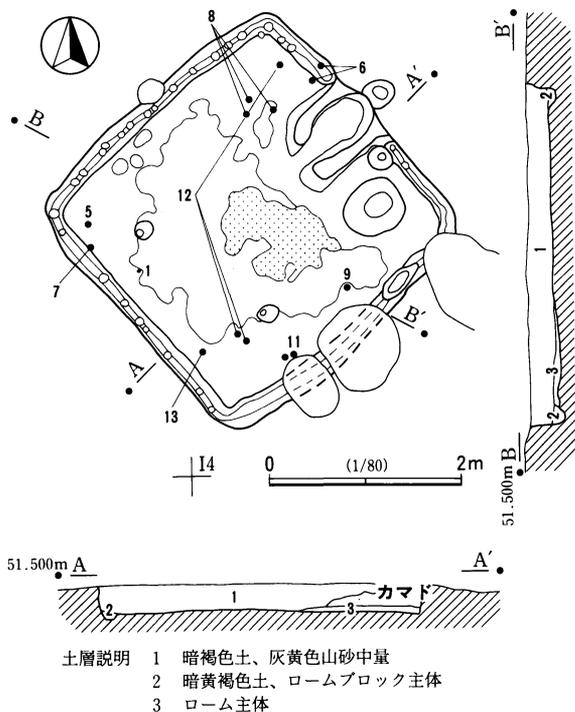
SI-13（第48図～第50図、図版8・図版23）

遺構

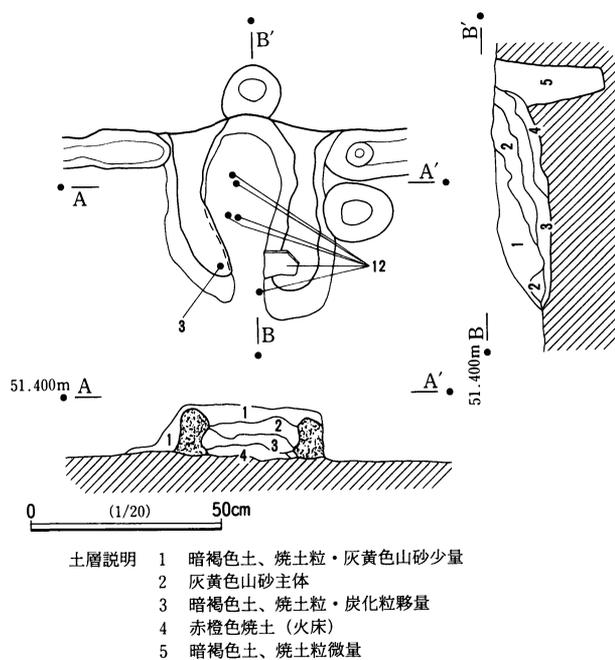
調査区東寄り中央付近、H2グリッドからI3グリッドに位置する。多くの遺構と重複関係を持つがSI-11・SI-14・SI-17より新しく、SI-23・SI-24より古い。主軸方向はN-48°-E、規模は奥行が3.2m、幅3.0mの方形プランである。手前左右に直径5cmほどの炭化した柱痕を2本検出したが、本来は4本柱と考えられる。柱間は梁間で1.5mである。壁際には周溝が全周し、その内に壁柱穴が存在する。カマドは北東壁の中央付近にある。貯蔵穴はカマドの東隣で、床面には白色粘土が敷き詰められており堅くしまっていた。白色粘土と黄灰色山砂を多量に含む硬化面はカマドと貯蔵穴のそばにあって、非常に堅くしまっているが面積は狭い。その周囲にはロームを中心とするやや軟弱な床面がある。床面はすべて浅い貼床であった。全体の面積は9.7㎡、床面の面積は3.4㎡、壁の立ち上がりは最大で30cmである。

カマド（第49図、図版8）

幅0.5m、奥行0.8m、高さ0.2mで、袖の基部が若干外側に突出する。煙道ははっきりしないが、袖の基



第48図 SI-13平面図・土層断面図



第49図 SI-13カマド 平面図・土層断面図

部付近中央に深さ0.7mのピットがある。袖の遺存状態は良好で天井部分は崩落している。火床部はあまり焼けておらず、範囲を明確にできなかった。火床面は床面よりやや低く、若干の遺物が出土した。

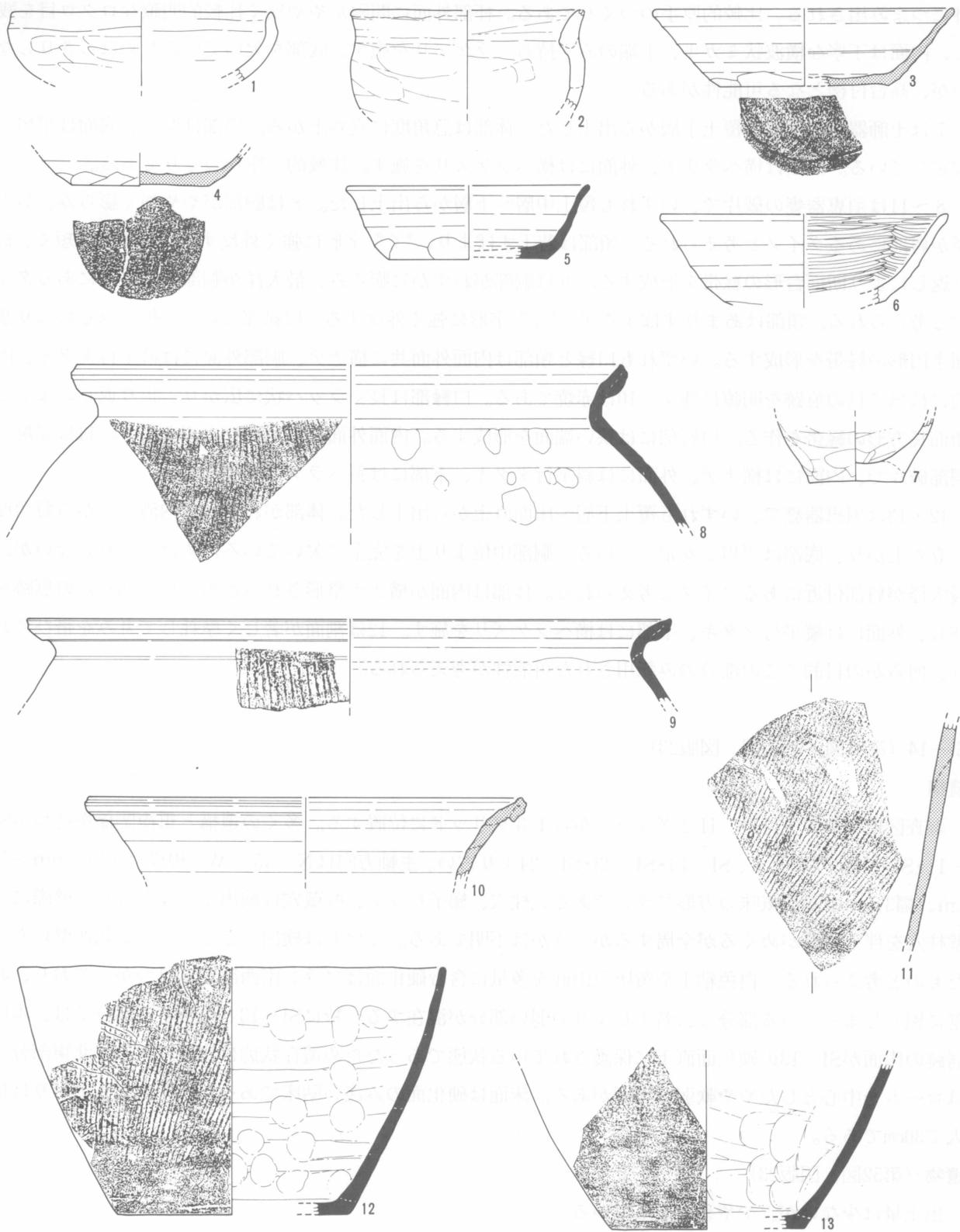
遺物（第50図、図版23）

比較的量が多く、ややまとまった印象を受ける。

1・2は土師器で、覆土中層から出土した。いずれも古墳時代に比定されるもので、本住居跡に伴うものではない。1は杯蓋模倣杯である。体部はやや深い皿形を呈し、内湾しながら立ち上がる。口縁部は内向し下端に比較的明瞭な稜をもつ。2は鉢である。体部は内湾しながら急角度で立ち上がる。頸部はわずかにすぼまり、口縁部が若干外反する。ともに、口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。

3～5は須恵器杯でいずれも覆土下層から出土した。3は体部がやや浅い角度で直線的に立ち上がり、口縁部が外反せず、口唇部は断面が丸みを帯びる。薄手のつくりで、底部最大厚は中央付近にあるものと考えられる。底面は平坦で安定している。内面には弱く間隔の広いロクロ目、外面には弱く間隔の狭いロクロ目、底部内面には弱い渦状のロクロ目を残し、体部外面下端と底部には手持ちヘラケズリを施す。4は体部がやや浅い角度で立ち上がるものと考えられる。底部最大厚は中央付近にあり、底面は平坦で安定している。体部は内面外面共に弱く間隔が広いロクロ目、底部内面にはやや強い渦状のロクロ目を残し、体部外面下端と底部には手持ちヘラケズリを施す。5は体部がやや急角度で直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口唇部は断面が丸みを帯びる。体部は薄い底部は比較的厚手である。体部は内面外面共にやや強く間隔の狭いロクロ目、底部内面には強い渦状のロクロ目を残し、底部と体部外面下端に手持ちヘラケズリを施す。

6はロクロ土師器で、覆土下層から出土した。杯部は内湾しながら立ち上がり、口唇部のみがわずかに



第50図 SI-13出土遺物 (1~7・11はS=1/3、他はS=1/4)

外につまみ出される。比較的厚手のつくりである。杯部外面に間隔がやや狭く比較的明瞭なロクロ目を残し、内面は丁寧な横波状ミガキ、下端のみ手持ちヘラケズリを施す。底部を欠いているためはっきりしないが、高台付椀となる可能性がある。

7は土師器小型甕で、覆土下層から出土した。体部は急角度に立ち上がる。底部は厚く、底面は平坦で安定している。内面は横ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。比較的丁寧なつくりである。

8～11は須恵器甕の破片で、いずれも覆土中層～下層から出土した。8は胴部がやや強く膨らみ、最大径が肩部にあるタイプと考えられる。頸部は若干すぼまり、「く」字形に強く外反する。口縁部は短く、折り返しにより断面台形の縁帯を形成する。9は胴部がわずかに膨らみ、最大径が胴部中央付近にあるタイプと考えられる。頸部はあまりすぼまらず、「く」字形に強く外反する。口縁部は短く、折り返しにより断面半円形の縁帯を形成する。いずれも口縁と頸部は内面外面共に横ナデ、胴部外面には縦平行タタキ、内面には当て具の痕跡を明瞭に残す。10は赤焼である。口縁部は長くラップ状に広がり、折り返しによって断面長方形の縁帯を作る。口唇部には狭い端面を形成する。内面外面共にロクロナデを施す。11は赤焼の胴部破片で、内面には横ナデ、外面には斜平行タタキ、下部には斜ヘラケズリを施す。

12・13は須恵器甕で、いずれも覆土下層～床面直上から出土した。体部がわずかに内湾しながら急角度で立ち上がり、底部は平坦で安定している。胴部中位より上を完全に欠いているためはっきりしないが、最大径が肩部付近にあるタイプと考えられる。体部は内面が横ナデ整形されるが当て具（卵石）の痕跡を残し、外面には縦平行タタキ、下部には横ヘラケズリを施す。12は剖面が著しく摩耗して丸みを帯びており、何らかの目的でこの部分のみ転用された可能性が考えられる。

SI-14（第51図・第52図、図版23）

遺構

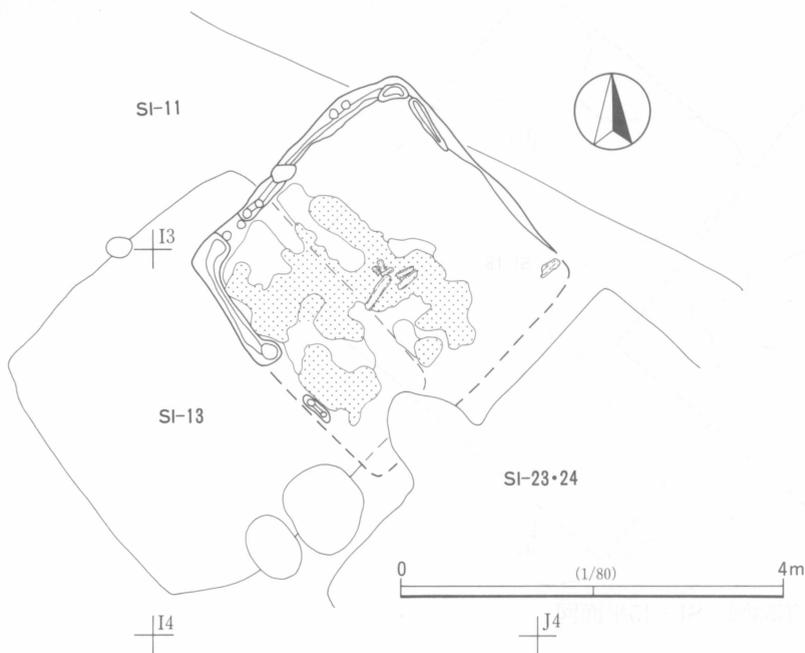
調査区東寄り中央付近、H 2グリッドからI 3グリッドに位置する。多くの遺構と重複関係を持つがSI-11・SI-21より新しく、SI-13・SI-23・SI-24より古い。主軸方向はN-45°-W、規模は奥行3.0m～3.1m、幅3.0mの菱形気味の方形プランである。柱穴、梯子ピット、貯蔵穴は検出できなかった。壁際には壁柱穴を伴う周溝がめぐるが全周するかどうかは不明である。カマドは検出できなかったが北西壁にあったものと考えられる。白色粘土や黄灰色山砂を多量に含む硬化面はプラン南西部から見つかっており、非常に堅くしまっている部分と、若干しまりの弱い部分が混在する。特にSI-13と重複する部分では、本住居跡の床面がSI-13の硬化面直下に保護されている状態であったため遺存状態は良好である。北東部分にはロームを中心としたやや軟弱な床面がある。床面は硬化面のみ浅い貼床であった。壁の立ち上がりは最大で30cmである。

遺物（第52図、図版23）

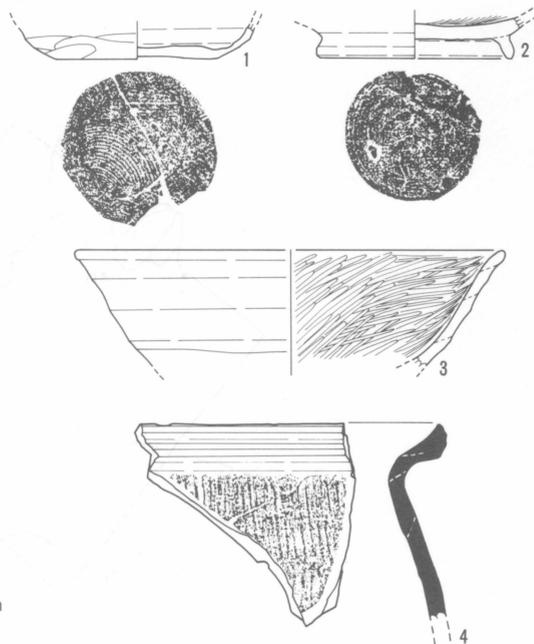
出土量は少ないが、ややまとまっている。

1は須恵器の杯で、覆土中層から出土した。口縁部を欠いているので不明だが、体部が急角度で立ち上がるいわゆる「箱杯」と呼ばれる形態と考えられる。底部は回転糸切りの後周囲のみ手持ちヘラケズリする。体部は内面に明瞭なロクロ目を残し、外面下端に手持ちヘラケズリを施す。

2・3はロクロ土師器で、覆土中層ないし下層から出土した。2は高台付椀で、底部回転糸切り後周囲を回転ヘラケズリし、高台を貼り付ける。高台は輪高台で、器内面には細密なミガキを施す。3は体部が



第51図 SI-14平面図



第52図 SI-14出土遺物 (S=1/3)

わずかに内湾しながら急角度で立ち上がり、口唇部が外側につまみ出される。内面に丁寧な斜ヘラミガキ、外面ははっきりしたロクロ目を残すが下端のみ回転ヘラケズリを施す。

4は須恵器甕である。体部は若干膨らみ、最大径が胴部中位にあるタイプと考えられる。頸部はほとんどすぼまらず、“く”字形に強く折れ曲がる。口縁は短く、折り返しにより縁帯を形成する。口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部は外面が縦平行タキ後横ナデ、内面も横ナデを施すが当て具痕を若干残す。

SI-15 (第53図～第55図、図版8・図版23)

遺構

調査区中央北端付近のE1グリッドおよびF0グリッドからF2グリッドに位置する。この部分は全体的に削平されており、表土を除去した段階でほぼ床面であった。SI-16と重複しているが、本住居跡のほうが新しい。主軸方位はN-39°-W、奥行が3.4m、幅が推定3.5m程度の方形プランであると考えられるが、東側と南側のおよそ半分程度が複雑に攪乱されているためはっきりしない。カマドを除く付帯施設は検出できなかった。カマドは北西壁の中央付近にある。硬化面はプランの中央付近にあって堅くしまっている。硬化面をふくめ床面はすべて貼床であった。壁の立ち上がりは最大でも2cm程度しかない。

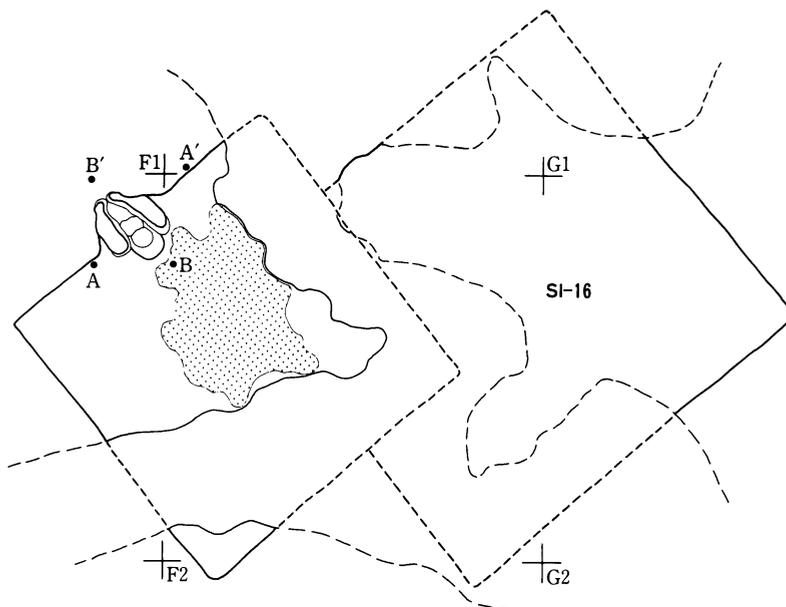
カマド (第54図)

幅0.7m、奥行0.8m、高さ0.2m、煙道長は0.3mで、袖の半分ほどがプランの外側に突出する。両袖は遺存しているが、天井部分は削平されている。火床部は幅0.3m、奥行0.4mで良く焼けており、住居の壁とほぼ並んでいる。火床面は床面よりやや低く、若干の遺物が出土したが図示できるものはない。

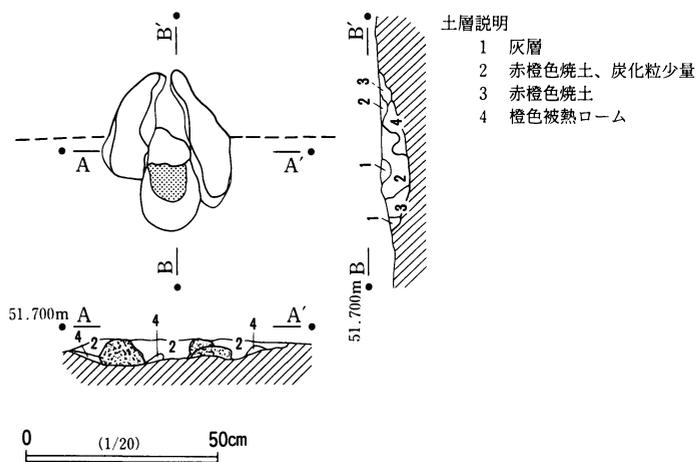
遺物 (第55図、図版23)

遺構の遺存状況が悪く量はきわめて少ないが、以下の2点の遺物は本住居跡に伴うものと考えられる。

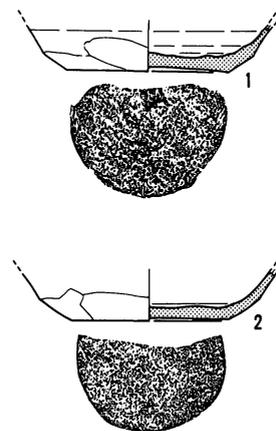
1・2は須恵器の杯で、ほぼ床面直上から出土した。いずれも体部は急角度で立ちあがる。底部は手持



第53図 SI-15平面図



第54図 SI-15カマド 平面図・土層断面図



第55図 SI-15出土遺物 (S=1/3)

ちヘラケズリ、体部内面には明瞭なロクロ目を残し、外面下端のみ手持ちヘラケズリを施している。胎土は粗いが、硬質の焼き上がりである。

SI-23・SI-24 (第56図～第58図、図版9・図版23)

調査区東端中央付近、I 3グリッドからJ 4グリッドに位置する。SI-23はSI-24を若干拡張した、同地点の建替住居である。多くの遺構と重複関係をもつが、両者ともにSI-11・SI-13・SI-14・SI-17・SI-21より新しく、SI-26・SI-27・SI-30・SK-44・SK-45より古い。主軸方位は共通でN-47°-Wである。

遺構

SI-23

奥行4.8m、幅4.4mのわずかに縦長の方形プランである。柱穴は4本検出されたが、そのうちの手前側2本は後述のSI-24の手前側柱穴をそのまま利用しているため柱の当たり部分が非常に堅くしまっている。それぞれの間隔は桁間が2.8m～3.1m、梁間が2.6m、深さは1.0m～1.1mと比較的揃っており、やや深い。壁際には周溝がめぐるが全周はしないようである。梯子ピットと貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁中央付近にある。硬化面は中央付近に認められ、焼土・炭化粒・灰白色砂をきわめて多量に含んでおり非常に特徴的である。きわめて堅くしまっているが、南側がSI-26によって破壊されているため遺存面積は少ない。硬化面のまわりには、焼土粒や炭化粒などを多量に含むやや軟弱な床面がほぼ全面に見られる。硬化面を含め、床面はすべて貼床であった。全体の面積は20.9㎡、内区の面積は7.6㎡で、壁の立ち上がりは最大で20cmである。

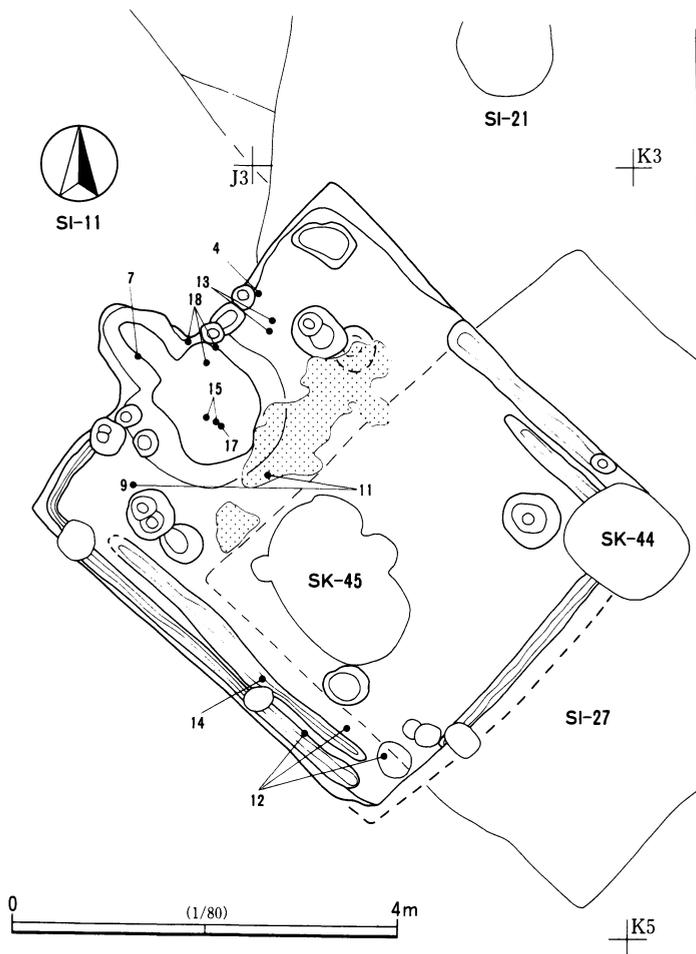
SI-24

奥行4.8m、幅4.0～3.8mの縦長の方形プランと考えられる。柱穴は4本で、それぞれの間隔は桁間が2.8m～3.1m、梁間が2.6mである。柱穴の深さは0.8m～0.9mと比較的揃っている。梯子ピットと貯蔵穴は検出できなかった。SI-23の床下に周溝が見出されているが全周はしない。床面はSI-23構築時に破壊さ

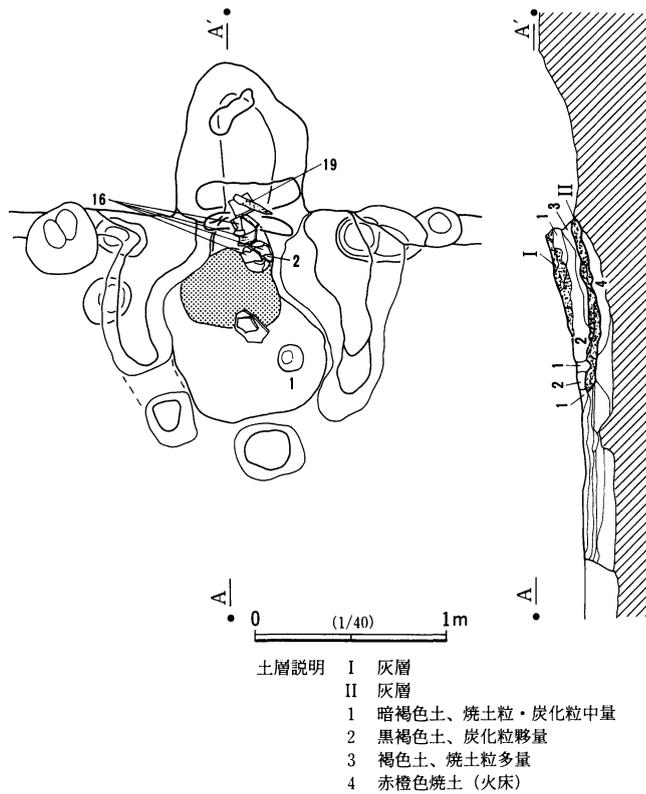
れたものと考えられる。全体の面積は推定で20.9㎡、内区の面積は7.6㎡である。

カマド (第57図)

幅1.5m、奥行1.8m、高さ0.3m、煙道長0.5mという大型のカマドである。袖は住居の壁から外に突出せず、煙道のみが外側に掘り込まれる。また両袖の外側周溝内に深さ0.4m～0.5mのピットが3対存在する。天井部分は崩落しているが、攪乱はされていないようである。火床部は幅0.5m、奥行0.4mで、灰層を伴っており非常に良く焼けている。火床面は床面よりかなり低い。火床からは須恵器や鉄製刀子など多くの遺物が出土している。またこの下には厚い灰層を間に挿んでもう一面火床が検出されたが、これがSI-24に伴うカマドであろうと考えられる。



第56図 SI-23・SI-24平面図



第57図 SI-23・SI-24カマド 平面図・土層断面図

遺物 (第58図、図版23)

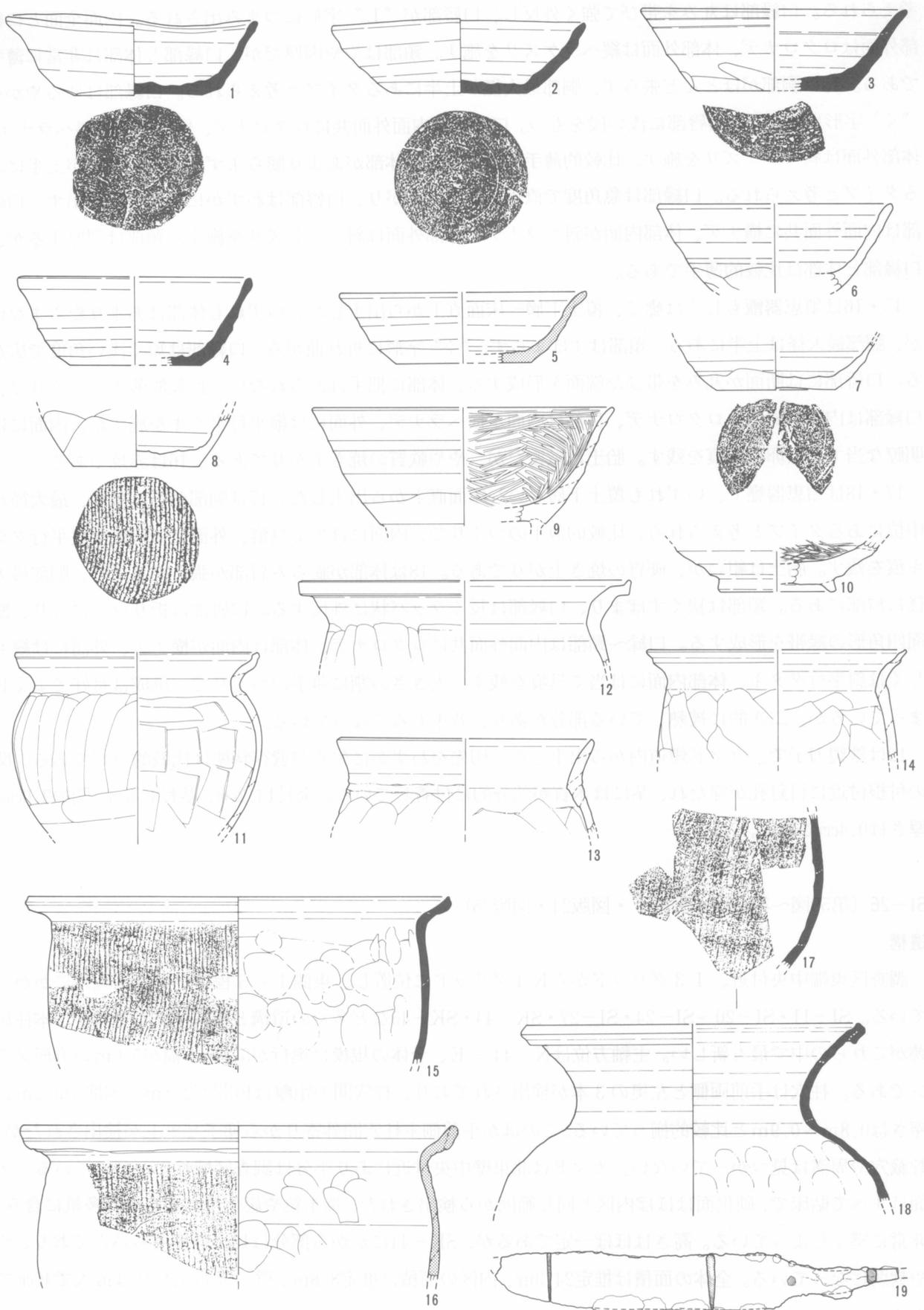
出土量は非常に多く、比較的まとまった印象を受ける。

1～5は須恵器杯である。1・2はカマド燃焼室から火床に伏せた状態で、3・4は住居覆土下層、5は覆土中層から出土した。1は完型である。体部が急角度で直線的に立ち上がり、口唇部のみわずかにつまみ出される。内面外面共に明瞭なロクロ目を残し、外面下端と底部には手持ちヘラケズリを施す。焼歪みが著しくすわりが悪い。2はほぼ完型である。体部がやや急角度で直線的に立ちあがる。内面外面共に非常に明瞭なロクロ目を残し、外面下端と底部には回転ヘラケズリを施す。若干の焼歪みがみられるが、安定している。3は体部が急角度に立ち上

がり、口唇部がごくわずかに肥厚する小型の碗のような形態である。内面外面共に非常に明瞭なロクロ目を残し、外面下端と底部に回転ヘラケズリを施す。4は厚手のつくりで、体部がやや急角度で直線的に立ち上がる。内面外面共に比較的明瞭なロクロナデの痕跡を残し、体部下端に手持ちヘラケズリ、底部は回転糸切り後周囲のみ回転ヘラケズリを施している。5は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口唇部のみ若干外反する。内面外面共に明瞭なロクロ目を残し、外面下端と底部には回転ヘラケズリを施す。

6～10はロクロ土師器で、いずれも覆土中層ないし下層から出土した。6は杯の口縁部破片である。体部はごくわずかに内湾しながら立ち上がる。内面外面共にロクロ目を残し、外面下端のみ手持ちヘラケズリを施す。7・8は杯の底部破片である。いずれも体部は薄手のつくりで、直線的に立ちあがる。内面外面共にロクロ目を残すが、7は外面下端に回転ヘラケズリ、8は手持ちヘラケズリを施す。底部は7が回転ヘラ切り無調整、8は静止糸切無調整で、ややすわりが悪い。9は高台付碗の体部破片である。体部はやや内湾しながら急角度で立ち上がり、口唇部のみごくわずかに外側につまみ出される。内面全面に丁寧な波状ミガキ、外面にはロクロナデの痕跡を残すが、下端のみ回転ヘラケズリを施す。底部は回転ヘラケズリ後高台を貼り付けている。10はいわゆる内黒の高台付碗の底部破片である。体部内面には丁寧なミガキ、外面は明瞭なロクロナデの痕跡を残す。高台は貼付けだが低く、断面は三角形に近い。なお底部外面にはヘラ記号が書かれている。

11～14は土師器の小型甕で、覆土下層から出土した。11は胴部が球形に近く胴部最大径が中位にある。口縁部は強く外反し、口唇部がつまみ上げられ受口状になっており、わずかに縁帯を作り出している。口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部内面は横ヘラナデ、体部外面上半は縦ヘラケズリ、下半は横ヘラケズリを施す。非常に薄手のつくりである。12は胴部がほとんど張らず、胴部最大径が上半にあるタイプと



第58図 SI-23・SI-24出土遺物 (1~14・17はS=1/3、15・16・18はS=1/4、19はS=1/2)

考えられる。口縁部は丸みを帯びて強く外反し、口唇部が“L”字形につまみ出される。内面全面と口縁部外面はロクロナデ、体部外面は縦ヘラケズリを施す。頸部はやや肉厚だが、口縁部と体部は非常に薄手である。13は胴部がほとんど張らず、胴部最大径が上半にあるタイプと考えられる。口縁部はゆるやかな“く”字形に外反し、口唇部に浅い段をもつ。口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部内面は斜ヘラナデ、体部外面は斜ヘラケズリを施す。比較的薄手である。14は体部があまり膨らまず、胴部最大径が上半にあるタイプと考えられる。口縁部は急角度で直線的に立ち上がり、口唇部はわずかに端面を作り出す。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部内面が斜ヘラナデ、体部外面は斜ヘラケズリを施す。頸部は肥厚するが、口縁部と体部は比較的薄手である。

15・16は須恵器甕もしくは甕で、覆土下層～床面直上から出土した。いずれも体部はあまり膨らまないが、胴部最大径は上半にある。頸部はすぼまらず、“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く浅い角度で広がる。口唇部には断面が丸みを帯びた端面を形成する。体部に把手はみられない。比較的薄手のつくりで、口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には縦平行タタキを施すが、内面には明瞭な当て具（卵石）痕を残す。胎土は緻密だが、やや軟質の焼き上がりである。16は赤焼である。

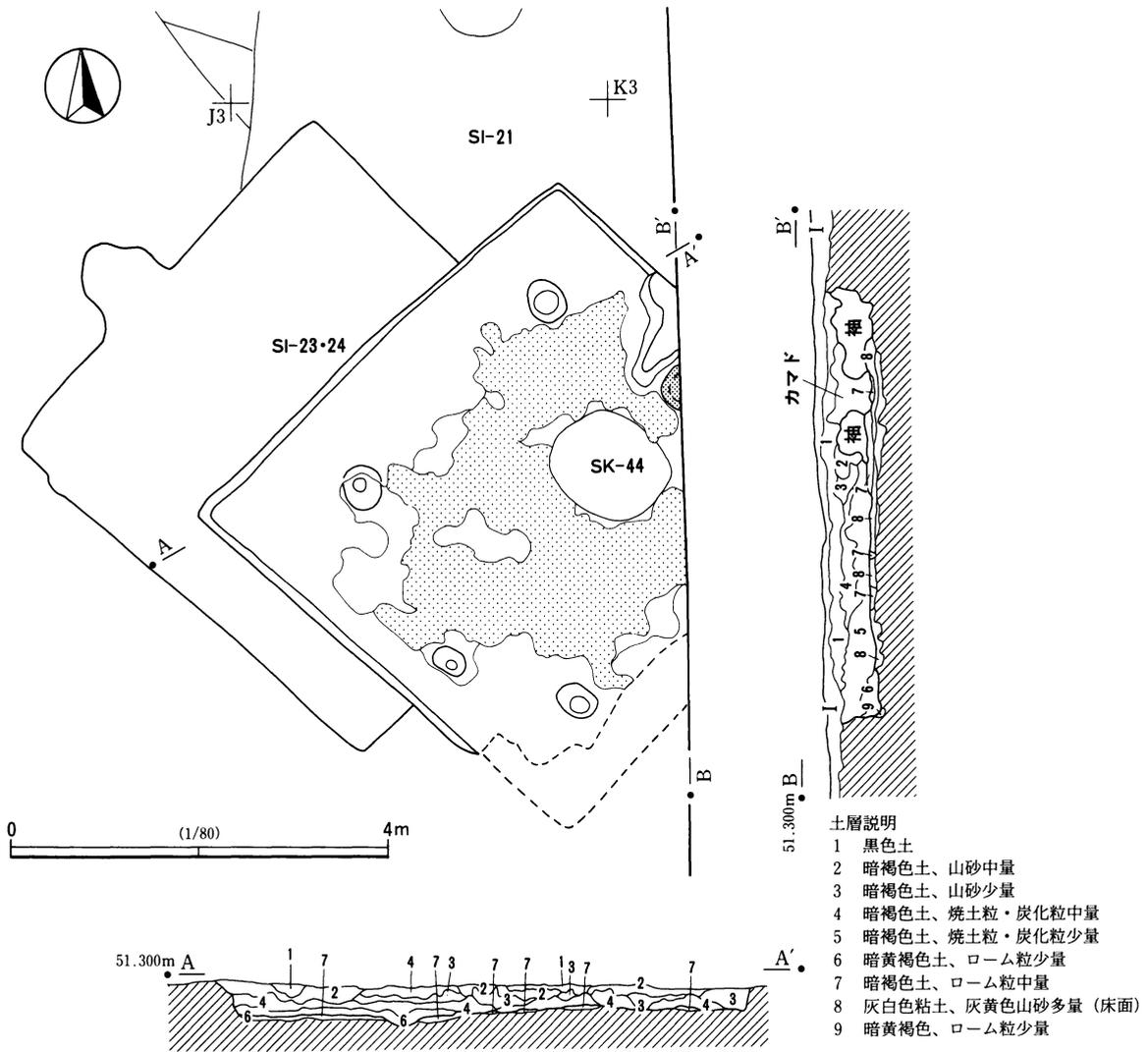
17・18は須恵器甕で、いずれも覆土下層ないし床面直上から出土した。17は胴部が強く張り、最大径が中位にあるタイプと考えられる。比較的薄手のつくりで、内面には当て具痕、外面には明瞭な縦平行タタキ痕を残す。胎土は粗いが、硬質の焼き上がりである。18は体部が膨らみ肩部が張るタイプで、胴部最大径は肩部にある。頸部は狭くすぼまり、口縁部は長くラップ状に外反する。口唇部は折り返しにより、断面四角形の縁帯を形成する。口縁～頸部は内面外面共にロクロナデ、体部は内面が横ナデ、外面には縦もしくは斜平行タタキ、体部内面には当て具痕を残す。大きさの割に薄手のつくりで、焼成は良好でよくしまっているが、二次的に被熱している部分があり、若干もろくなっている。

19は鉄製刀子で、カマド煙道内から出土した。切先をわずかに欠くが遺存状態は比較的良好である。関の付根付近に目釘孔が穿たれ、茎には木質が部分的に付着している。全長14.2cm、茎長4.4cm、関幅2.0cm、厚さは0.4cmである。

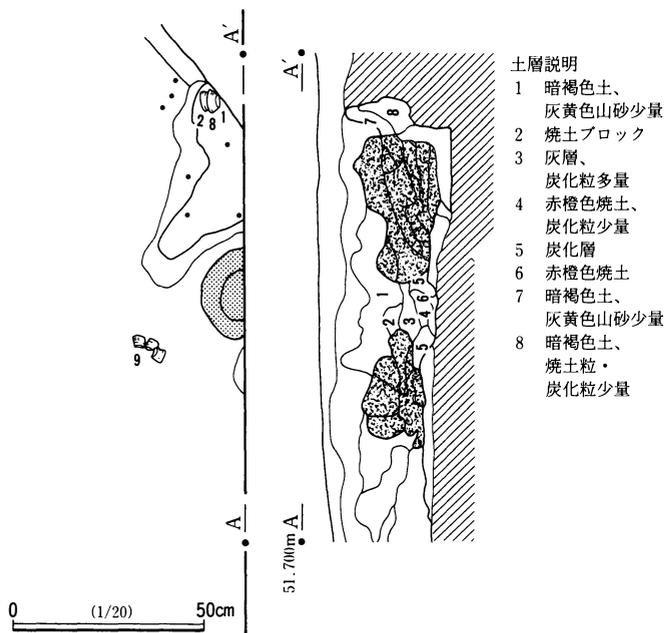
SI-26（第59図～第63図、図版9・図版24・図版25）

遺構

調査区東端中央付近、I 3グリッドからK 4グリッドに位置し、東側1/5程度が調査区域外にかかっている。SI-11・SI-20～SI-24・SI-27・SK-44・SK-45など多くの遺構と重複関係をもつが、本住居跡がこれらの中で最も新しい。主軸方位はN-44°-E、全体の規模は奥行が5.1m、幅が5.0mの方形プランである。柱穴は手前両側と左奥の3本が検出されており、柱穴間の距離は桁間が2.8m、梁間が3.3m、深さは0.8m～0.9mと比較的揃っている。このほか手前側主柱穴間外寄りから梯子ピットが検出されたが、貯蔵穴や周溝は見つかっていない。カマドは北東壁中央付近にあり半分は調査区域外にかかっている。床面はすべて貼床で、硬化面はほぼ内区と同じ範囲から検出された。焼土粒や炭化粒をきわめて多量に含み、非常に堅くしまっている。高さはほぼ一定であるが、SK-44にかかる部分は10cm程度落ち込んでおり、やや軟弱になっている。全体の面積は推定24.3㎡、内区の面積は推定8.8㎡、壁の立ち上がりは最大で40cmである。



第59図 SI-26平面図



第60図 SI-26カマド 平面図・土層断面図

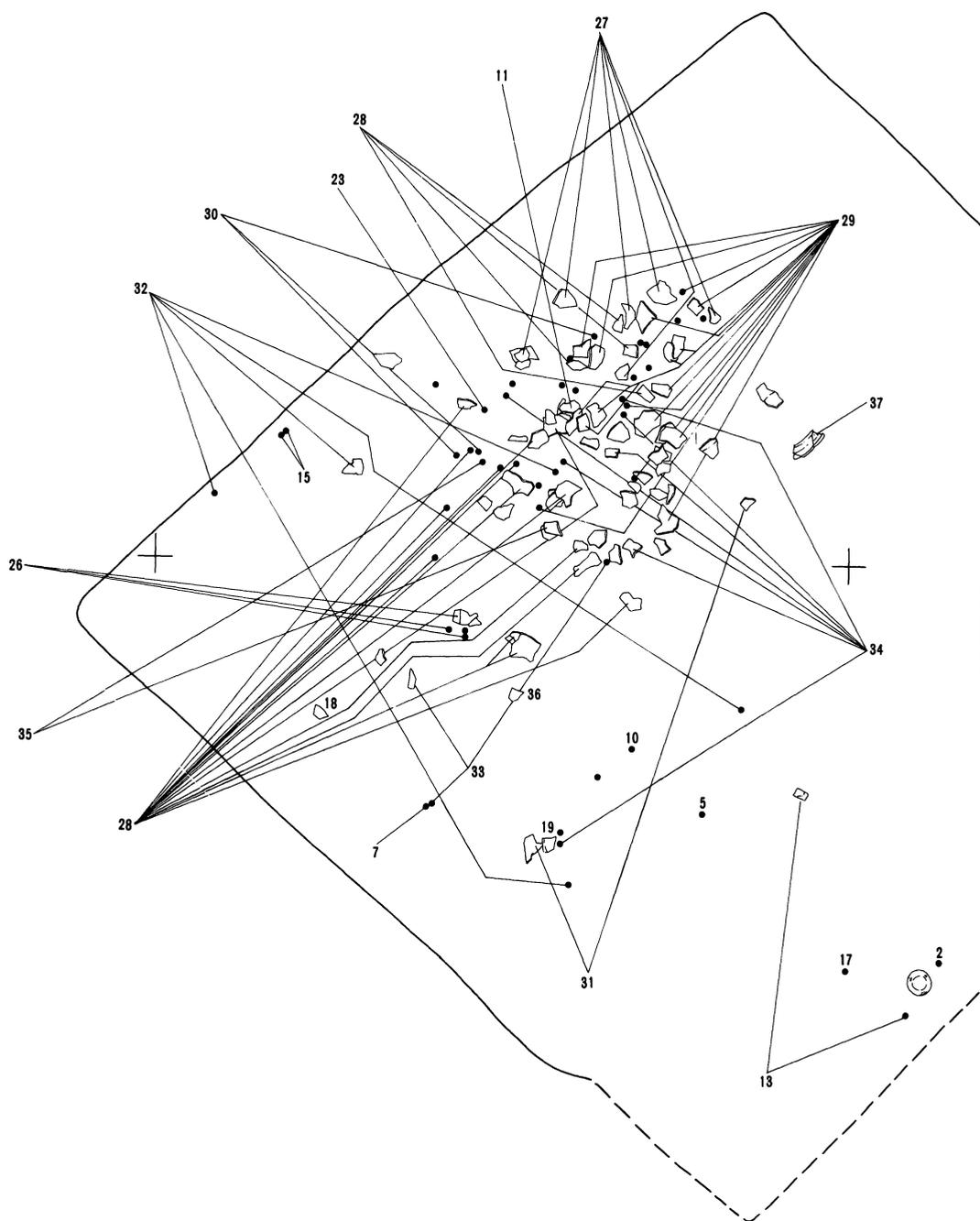
カマド (第60図)

半分が調査区域外にあるため幅と奥行は不明であるが、高さは0.3m程度である。袖の基部が若干遺構外に突出する。煙道は調査区域外にかかるため不明である。天井部は燃焼室内に崩落しているが、攪乱されていない。火床部は幅0.2m、奥行0.3mの楕円形で灰や炭化粒を含む層をやや厚く伴っており、非常に良く焼けている。火床面は住居床面より5cm程度低い。袖上から若干の遺物が出土している。

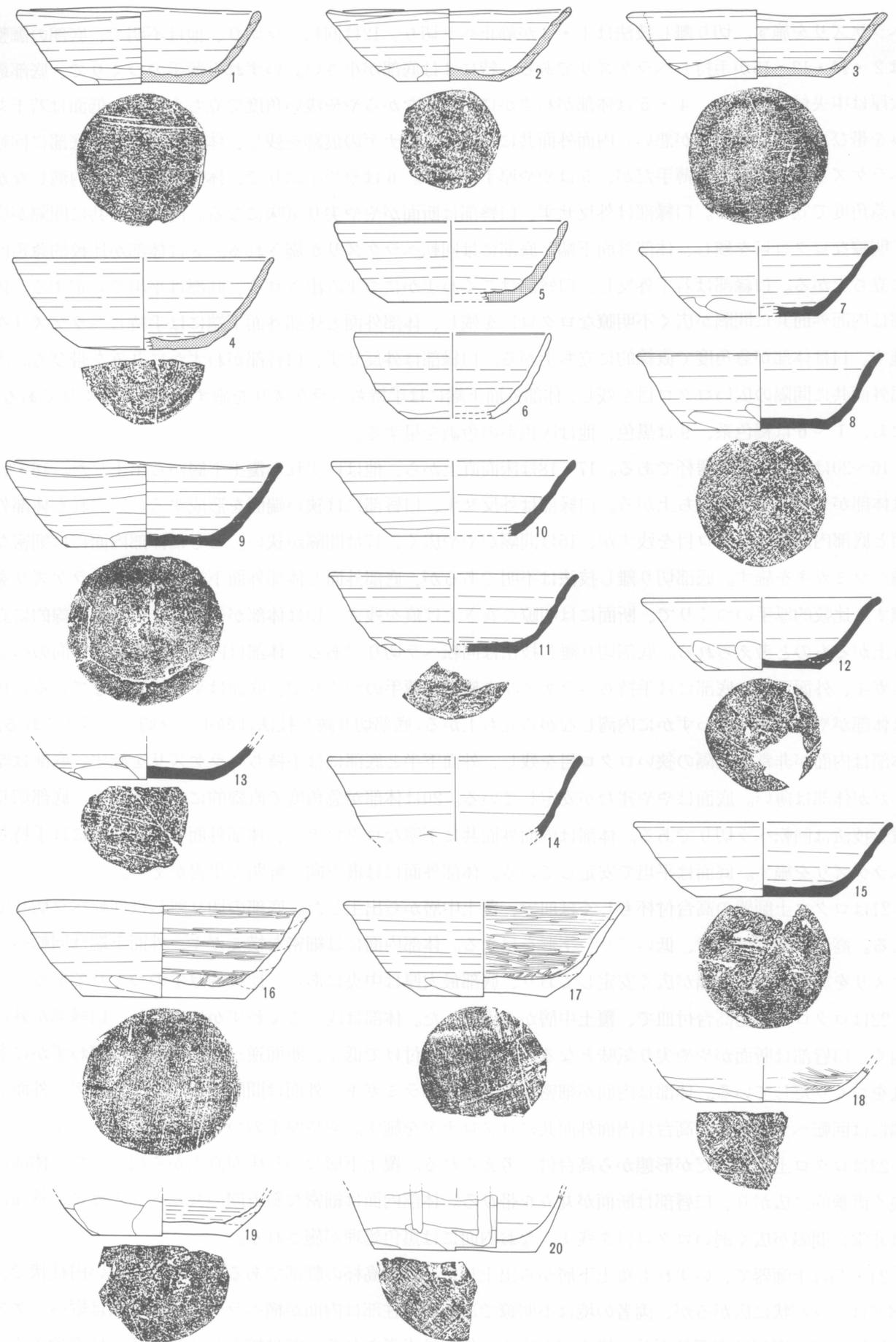
遺物 (第61図～第64図、図版24・図版25)

今回調査した各遺構の中で出土した遺物の密度がもっとも濃い遺構だが、確実に本住居跡に伴うと考えられる遺物は決して多くない。遺物の時期は弥生時代から平安時代に及んでいるが、最も多いのはやはり奈良・平安時代に比定されるものである。

1～15は須恵器杯である。1・2はカマド燃焼室内、3はカマド煙道内から、5・8・9・11・15は床面直上から、他は覆土下層から出土した。1～3・7・9～13・15は体部がやや浅い角度で直線的に立ち上がる。口縁部は外反せず、口唇部が丸みを帯びわずかに肥厚する。底面は平坦で安定している。内面外面共に明瞭なロクロ目を残し、10を除き体部外面下端には手持ちヘラケズリを施す。10は体部下端に回転



第61図 SI-26遺物分布図



第62図 SI-26出土遺物① (S=1/3)

ヘラケズリを施す。切り離し技法は1・3が静止ヘラ切り、12は回転ヘラ切り、他は不明で、底部の調整は2・11・12・15が手持ちヘラケズリである。特に2は底部が小さい。いずれも薄手のつくりで、底部最大厚は中央付近にある。4・5は体部がわずかに内湾しながらやや浅い角度で立ち上がる。低面は若干丸みを帯びており、すわりが悪い。内面外面共に弱いロクロナデの痕跡を残し、体部外面下端と底部に回転ヘラケズリを施す。4は薄手だが、5はやや厚手である。6はやや小ぶりで、体部がわずかに内湾しながら急角度で立ち上がる。口縁部は外反せず、口唇部は断面がやや尖り気味になる。内面外面共に間隔が広く明瞭なロクロ目を残し、体部外面下端と底部には回転ヘラケズリが施される。8は体部が比較的急角度に立ち上がる。口縁部は若干外反し、口唇部はごくわずかにつまみ出される。底部は平坦で安定する。体部は内面外面共に間隔が広く不明瞭なロクロ目を残し、体部外面と体部外面下端には手持ちヘラケズリを施す。14は体部が急角度で直線的に立ち上がる。口縁部は外反せず、口唇部がわずかに丸みを帯びる。内面外面共に間隔の広いロクロ目を残し、体部外面下端には手持ちヘラケズリを施す。薄手のつくりである。なお、1～6は褐色系、9は黒色、他は灰色系の色調を呈する。

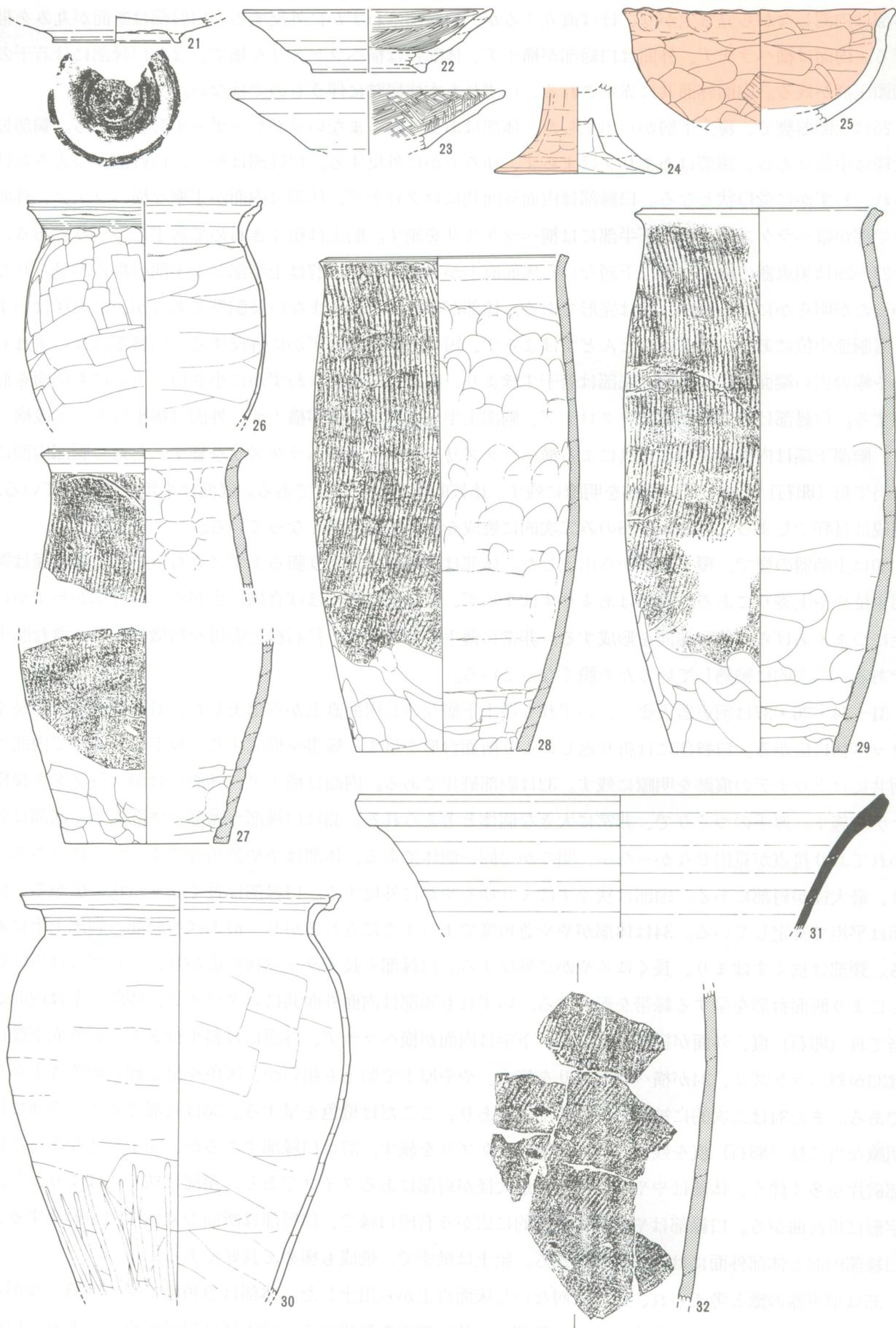
16～20はロクロ土師器杯である。17・18は床面直上から、他はいずれも覆土下層から出土した。16・17は体部がやや急角度で立ち上がる。口縁部は外反せず、口唇部には狭い端面を形成する。いずれも体部外面と底部内面にはロクロ目を残すが、16は間隔がやや広く、17は間隔が狭い。ともに体部内面には細密な横ヘラミガキを施す。底部切り離し技法は不明であるが、底部外面と体部外面下端に手持ちヘラケズリを施す。比較的厚手のつくりで、断面には明瞭な巻き上げ痕を残す。18は体部がやや浅い角度で直線的に立ち上がるものと考えられる。底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。体部は内面が細密な斜方向のヘラミガキ、外面下端と底部には手持ちヘラケズリを施す。薄手のつくりで、底面は平坦で安定している。19は体部がやや急角度でわずかに内湾しながら立ち上がる。底部切り離し技法は静止ヘラ切りと考えられる。体部は内面が非常に間隔の狭いロクロ目を残し、外面下半と底部には手持ちヘラケズリを施す。底部は厚手だが体部は薄い。底面はやや窪むが安定している。20は体部が急角度で直線的に立ち上がる。底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。体部は内面外面共に丁寧なロクロナデ、体部外面下端と底部には手持ちヘラケズリを施す。底面は平坦で安定している。体部外面には縦方向の鮮明な墨書がある。

21はロクロ土師器の高台付杯もしくは皿で、覆土中層から出土した。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。高台は貼り付けで、低い“ハ”字形を呈する。体部内面には細密な横ミガキ、外面下端は回転ヘラケズリを施す。糸底は幅が広く安定しており、底部最大厚は中央にある。比較的厚手のつくりである。

22はロクロ土師器高台付皿で、覆土中層から出土した。体部は浅くごくわずかに内湾し、口縁部が外に開く。口唇部は断面がやや尖り気味となる。高台は貼り付けで低く、断面逆三角形を呈するがわずかに糸底をつくりだしている。体部は内面が細密な斜方向のヘラミガキ、外面は間隔の広いロクロナデ、外面下端には回転ヘラケズリ、高台は内面外面共にロクロナデを施す。やや厚手のつくりである。

23はロクロ土師器皿だが形態から高台付と考えられる。覆土下層ないし床面直上から出土した。体部は浅く直線的に広がり、口唇部は断面が丸みを帯びる。体部内面は細密な斜方向の交差ヘラミガキ、外面には非常に間隔が広く弱いロクロ目を残す。なお内面には黒色処理が施される。

24・25は土師器で、いずれも覆土下層から出土した。24は高杯の脚部である。脚柱部は短い円柱状で、裾部はラッパ状に広がるが、両者の境は不明瞭である。脚柱部は内面が横ヘラケズリ、外面は縦ヘラケズリ後横ナデ、裾部は内面外面共に横ナデを施す。外面は赤彩される。25は碗もしくは高杯の杯部である。



第63図 SI-26出土遺物② (21~25・32はS=1/3、他はS=1/4)

体部は内湾しながら立ち上がり、ほぼ直立するが、口縁部はわずかに外反する。口唇部は断面が丸みを帯びる。内面は横ヘラナデ、外面は口縁部が横ナデ、体部には横ヘラケズリを施す。なお口縁部には若干の指頭圧痕が残る。内面外面共に赤彩される。いずれも本住居跡に伴うものではない。

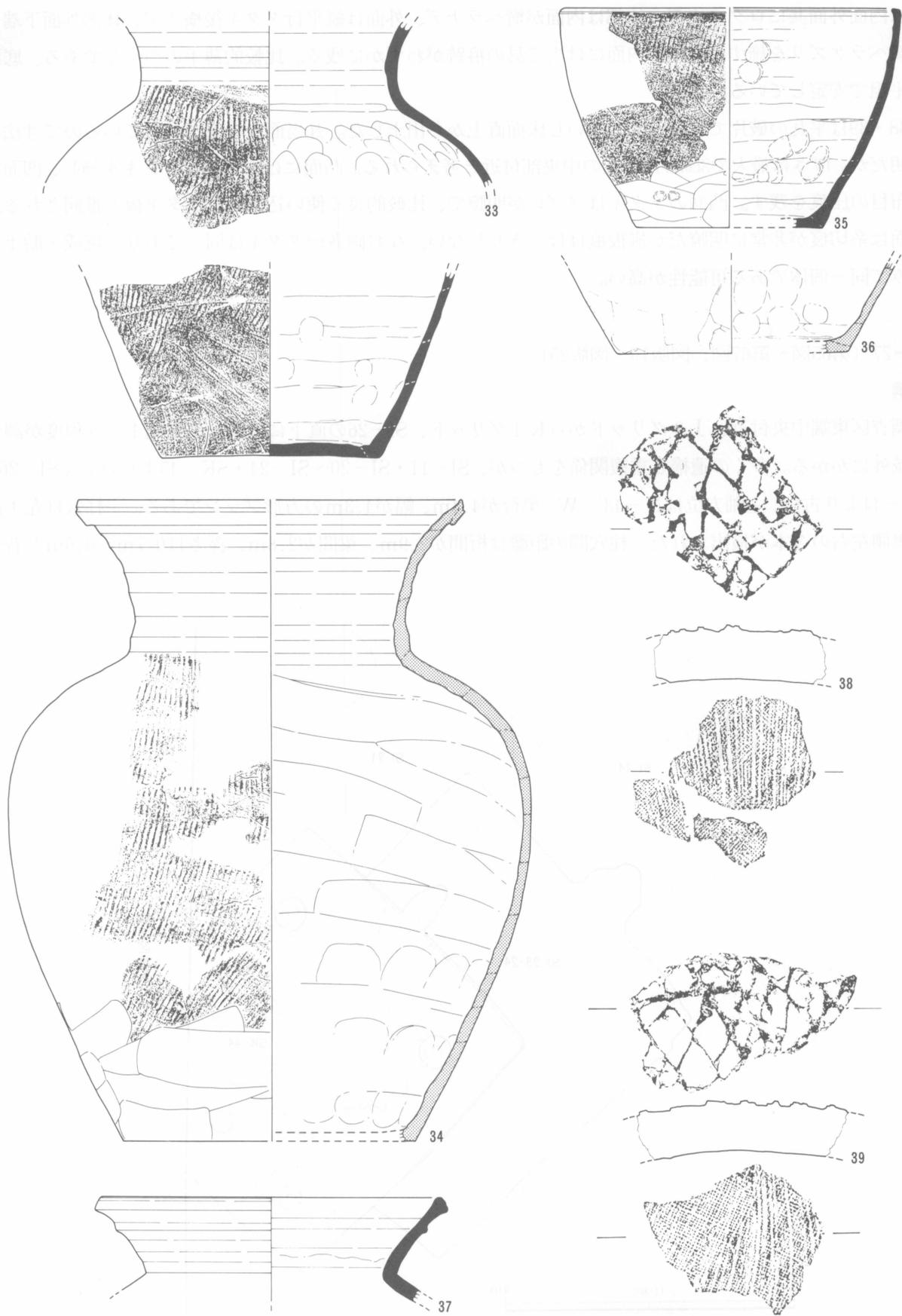
26は土師器甕で、覆土下層から出土した。体部はあまり膨らまないラグビーボール形を呈する。胴部最大径は中位にある。頸部はあまりすぼまらず、ゆるやかに外反する。口縁部は短く、口唇部がつまみあげられ、わずかに受口状となる。口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部は内面が丁寧な横ヘラナデ、外面上半部が縦ヘラケズリ、外面下半部には横ヘラケズリを施す。胎土は粗くきわめて薄手のつくりである。

27～29は須恵器の甕で、覆土下層ないし床面直上から出土した。27は上半部と下半部の接点が見られなかったが明らかに同一個体、29は完形である。体部がほとんど膨らまない長胴型であるが、最大径はいずれも胴部中位にある。頸部はほとんどすぼまらず、短い口縁部がわずかに外反する。口唇部にはいずれもやや幅の広い端面を作り出す。底部は若干すぼまり、底径は口径よりわずかに小さい。下端にも端面を形成する。口縁部は内面外面共にロクロナデ、胴部上半～中位な内面が横ナデ、外面は縦平行タタキ後横ナデ、胴部下端は内面が鋭利な工具による横ヘラケズリ、外面には横ヘラケズリを施す。ただし胴部内面には当て具（卵石）と巻上げの痕跡を明瞭に残す。比較的薄手のつくりである。底面は平坦で安定している。焼成は良好でしまっているが、28のみ二次的に焼成を受けており脆くなっている。

30は土師器の甕で、覆土下層から出土した。体部は急角度であまり膨らまずに立ち上がり、最大径は胴部中位やや上寄りにある。頸部はあまりすぼまらず、口縁部は短くほぼ真横に広がる。口唇部がわずかに上につまみあげられ狭い端面を形成する。非常に薄手のつくりで、長石粒と雲母を特徴的に多く含む胎土である。二次的に被熱しているため脆くなっている。

31～34・36・37は須恵器大甕で、いずれも覆土下層ないし床面直上から出土した。31は口縁部で、長くラップ状に広がる。口唇部には折り返しにより断面台形を呈する縁帯を形成する。厚手のつくりで内面外面共にロクロナデの痕跡を明瞭に残す。32は胴部破片である。内面は横ナデ、外面には斜平行タタキ後横ナデを施す。厚手のつくりで、非常に大きな個体と考えられる。33は口縁部～頸部と体部下半～底部に分かれており接点が見出せなかったが、明らかに同一個体である。体部はやや急角度でまっすぐに立ちあがり、最大径が肩部にある。頸部は狭くすぼまりゆるやかに外反する。口縁部は長くラップ状に広がる。底面は平坦で安定している。34は体部がやや急角度でまっすぐに立ちあがり、最大径が肩部～胴部上半にある。頸部は狭くすぼまり、長くゆるやかに外反する。口縁部も長くラップ状に広がり、口唇部には折り返しにより断面台形を呈する縁帯を形成する。いずれも頸部は内面外面共にロクロナデ、体部上半は内面が当て具（卵石）痕、外面が縦平行タタキ、下半は内面が横ヘラナデ、外面には斜平行タタキ、外面下端には33が斜ヘラケズリ、34が横ヘラケズリを施す。やや厚手で胎土も粗いが、灰色を呈し硬質の焼き上がりである。また34は二次的に被熱している部分があり、ここだけ橙色を呈する。36は底部である。内面には明瞭な当て具（卵石）痕を残し、外面は横ヘラケズリを施す。37は口縁部であるが、図示しえなかった体部破片を多く伴う。体部はやや強く膨らみ最大径が肩部にあるタイプである。頸部は狭くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部はやや長く直線的に広がる有段口縁で、口唇部は断面の丸い端面を形成する。口縁部内面と体部外面には自然釉がかかる。胎土は緻密で、焼成も極めて良好である。

35は須恵器の甕と考えられ、覆土下層ないし床面直上から出土した。体部は急角度でやや内湾しながら立ち上がり、口縁部でほぼ直立する。口唇部には狭い端面を形成する。最大径は口唇部直下にある。口縁



第64図 SI-26出土遺物③ (33~37はS=1/4、38・39はS=1/3)

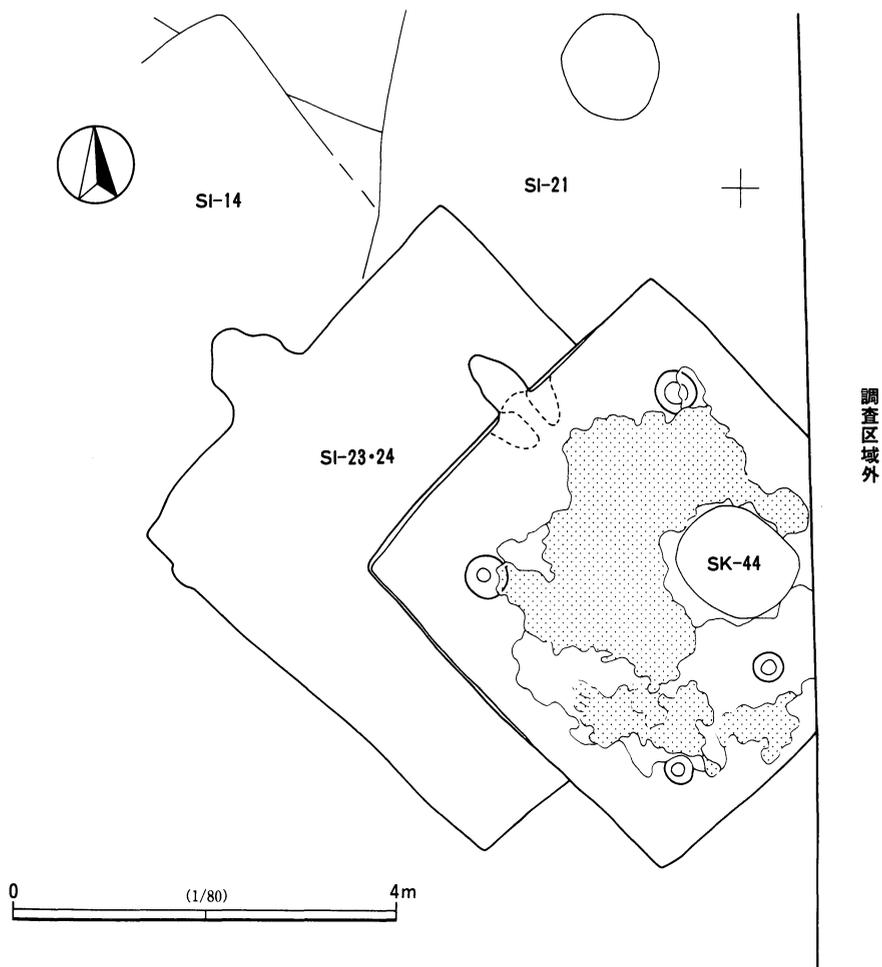
部は内面外面共にロクロナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面は縦平行タタキ後横ナデ、体部外面下端には横ヘラケズリを施すが、体部内面には当て具の痕跡がわずかに残る。比較的薄手のつくりである。底面は平坦で安定している。

38・39は平瓦の破片で、覆土下層ないし床面直上から出土した。瓦当面や端部を欠いているので寸法は不明だが、厚さは最大で3cm程度、瓦の中央部付近と考えられる。凸面には斜格子目タタキを施し、凹面には布目の圧痕を残す。凸面のタタキはツブレが明瞭で、比較的良く使い込まれたタタキ板と推測される。凹面は糸切痕が非常に明瞭だが揃板痕ははっきりしない。なお両者のタタキは同一であり、焼成・胎土からみて同一個体である可能性が高い。

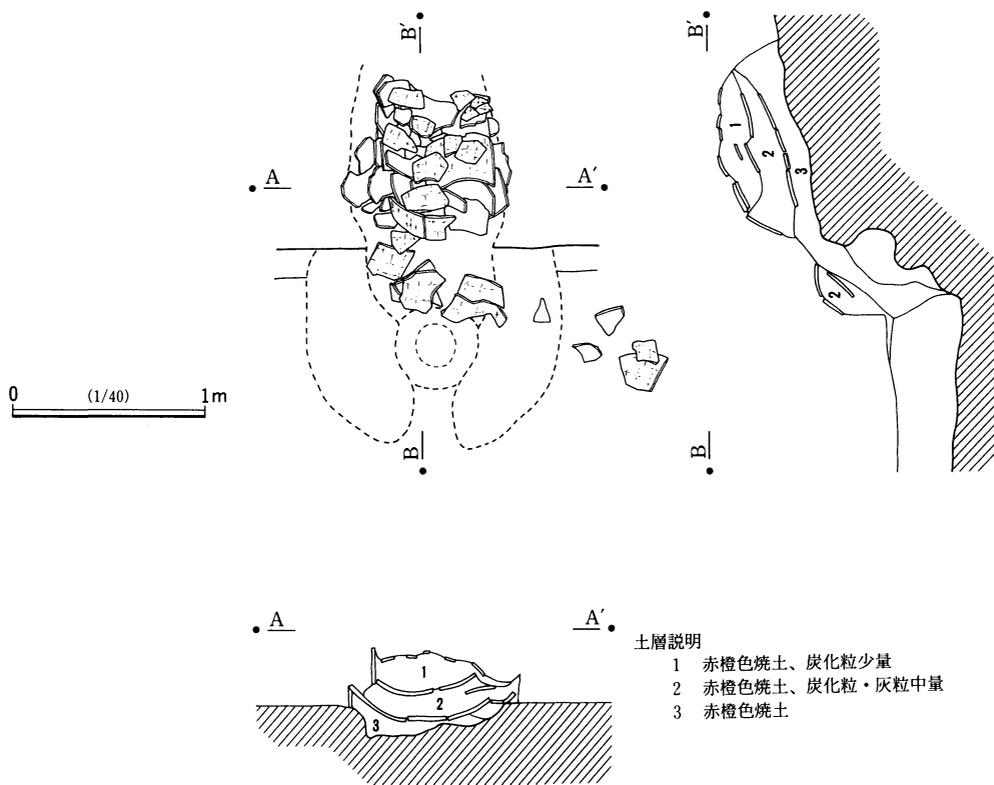
SI-27 (第65図～第67図、図版10・図版25)

遺構

調査区東端中央付近、J 3グリッドからK 4グリッド、SI-26の直下に位置し、東側1/5程度が調査区域外にかかる。多くの遺構と重複関係をもつが、SI-11・SI-20～SI-24・SK-45より新しくSI-26・SK-44より古い。主軸方位はN-43°-W、奥行が4.4m、幅が4.3mの方形プランである。支柱穴は左手前と奥側左右の3本が検出された。柱穴間の距離は桁間が2.9m、梁間が2.8m、深さは0.7m～0.9mと若干



第65図 SI-27平面図・土層断面図



第66図 SI-27カマド 平面図・土層断面図

のばらつきがある。また手前側支柱穴間より梯子ピットが検出されたが、貯蔵穴や周溝は見出せなかった。カマドは北西壁中央付近にある。床面はすべて貼床で、硬化面はほぼ内区と同じ範囲から検出された。焼土粒や炭化粒を非常に多量に含み、きわめて強くしまっている。なお本住居跡の床面と硬化面はSI-26の床面直下にあり、その間に土の堆積がまったく認められないことから、本住居がSI-26の建替前住居であった可能性がある。全体の面積は推定19.4㎡、内区的面積は推定で7.8㎡、壁の立ち上がりは遺存していないので不明である。

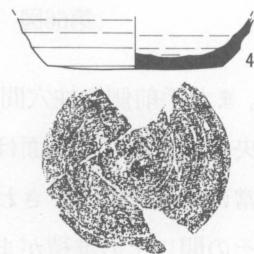
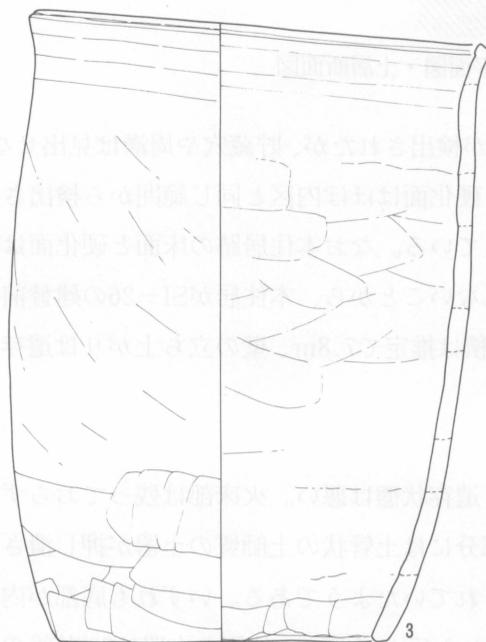
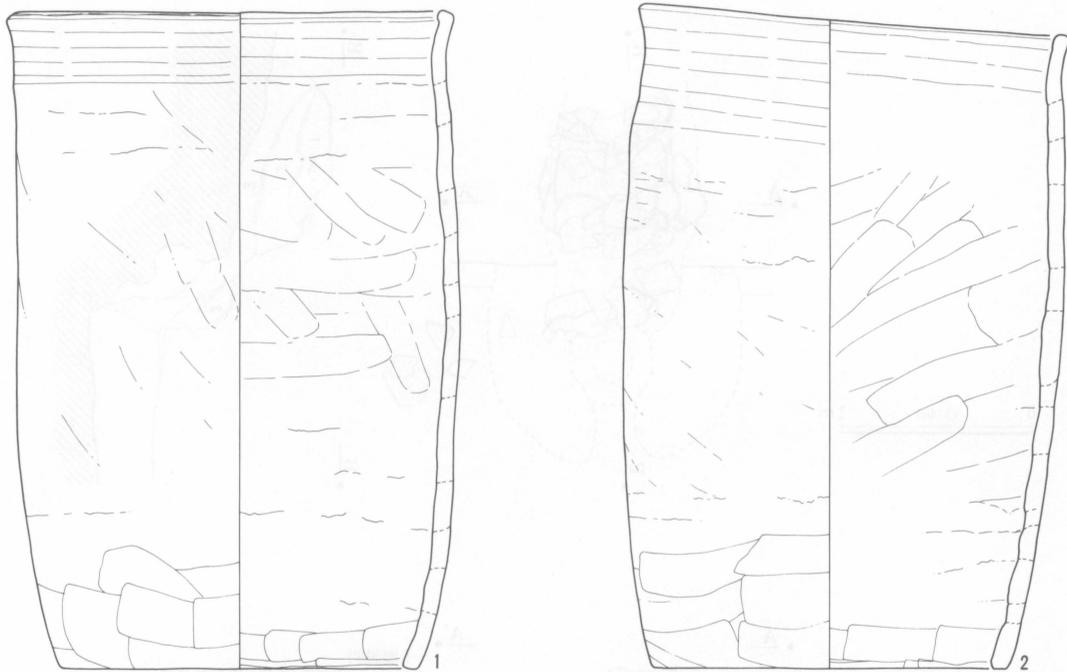
カマド (第66図、図版10)

本体はSI-26構築の際に破壊されたものと考えられ、遺存状態は悪い。火床部は残っておらず、袖の基部と煙道部分のみが北東壁外側に遺存していた。煙道部分には土管状の土師質の土器が押し潰されたような状態で重なって出土したが、そのうち2個体は連結されていたようである。いずれも底部が内側に、口縁部が外側に向けられていた。住居内側の土器は住居内から45°の角度で、外側の土器は20°前後の勾配で斜めに設置されており、手前側の土器よりやや内側に火床があったものと推察される。土器の隙間には多量の焼土と炭化粒が詰まっていた。

遺物 (第67図、図版25)

本住居跡はプランのほとんどがSI-26に破壊されているため、出土量が非常に少ない。ただしカマドから出土したものについては、確実に本住居跡に伴うものと考えられる。

1～3は土管状の土師器である。煙道内から潰れた状態で出土した。いずれも体部はあまり膨らまず、ほとんど直線的に立ちあがるが、最大径は胴部中位にある。口縁部は直立するものと若干外反するものがあり、口唇部にやや丸みを帯びた端面を形成する。成形は巻上げで、口縁部は内面外面共にロクロナデ、



第67図 SI-27出土遺物 (4はS=1/3、他はS=1/4)

体部内面は横ヘラナデ、外面は斜ヘラナデで、体部外面下端には粗い横ヘラケズリ、内面下端は鋭利な工具による横ケズリを施す。厚手のつくりで、内面には所々に指頭圧痕を残す。胎土は比較的緻密で、焼成は良好だが、二次的に被熱しているため若干脆くなっており、摩耗しているものもある。

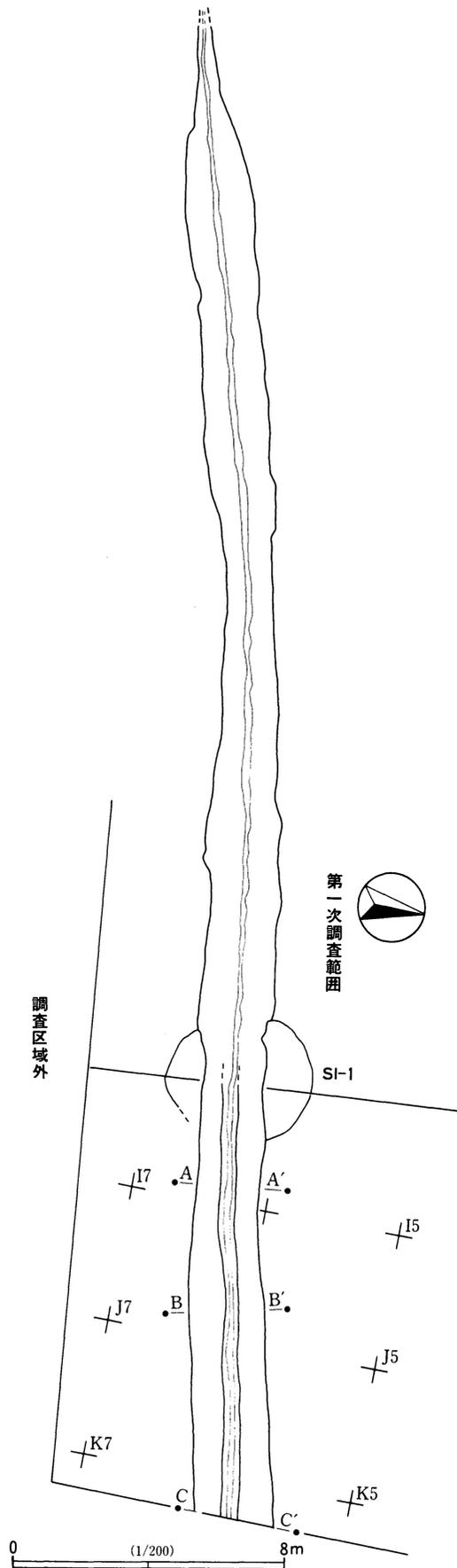
4は須恵器杯で、煙道内から伏せた状態で出土した。体部はやや急角度で直線的に立ち上がる。薄手のつくりだが、下部はやや厚い。底面はやや丸底ですわりが悪い。内面と外面にはロクロ目を残し、体部外面下端と底部には回転ヘラケズリを施す。

2. 環濠

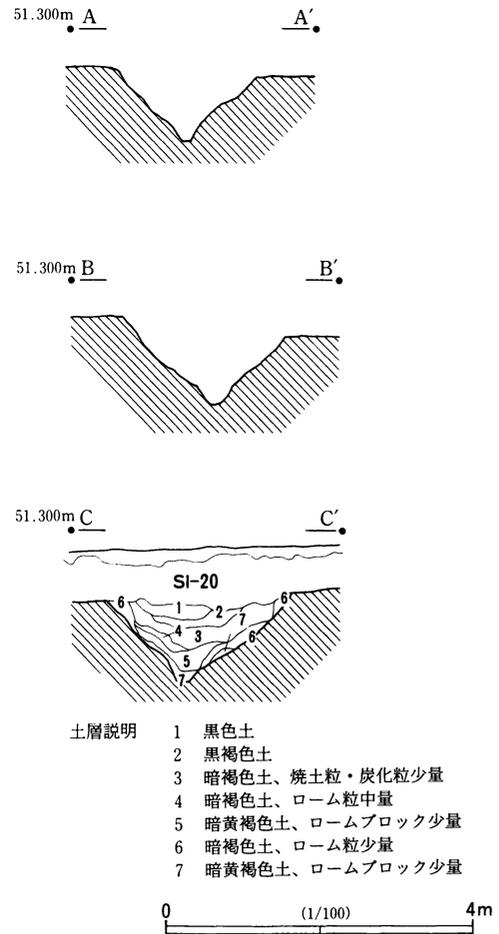
SD-1 (第68図・第69図、図版11・図版26)

遺構

調査区西部南側、H6グリッド～J6グリッドにかけて検出された。SI-1・SI-18・SI-20と重複関係を持つが、これらの中でもっとも古い。調査区を東西に横切っており、東側はさらに調査区域外に伸びている。第1次調査で検出された部分を含めた長さは44mである。断面はやや急角度のV字形を呈し、検出面での上面の幅が最大2.0m、深さは最大1.5mである。また床面は幅0.2m程度で、深さ0.1mほど薬研状に落ち込んでいる。覆土は両側からの自然堆積の様相を示し、最下層がロームブロックを中心とする黄褐色土、下層がロームブロックを中量含む暗黄褐色土、中層が暗褐色土、上層は黒色土が堆積する。なお重複する住居跡はすべて上層の黒色土中に掘り込まれていることから、本来の深さは最大で2m程度と推察される。



第68図 SD-1 平面図



第69図 SD-1 土層断面図

遺物（第70図、図版26）

出土量はそれほど多くはないが、比較的まとまった印象を受ける。出土遺物は弥生土器が大半を占めており、そのほとんどが中層付近に集中している。なお上層出土の土師器は重複する住居跡（SI-20）に帰属するものである可能性が高い。

1・3・4は弥生土器壺で、覆土中層から出土した。1は頸部下半から胴部上半、3は胴部中位、4は胴部下半で、接点は見られなかったが同一個体と考えられる。頸部は狭くすぼまり長く、体部がやや下膨れ気味で強く張るタイプである。最大径は胴部中位にある。外面は頸部下端に2条のS字結節文、それ以下の全面にRL縄文を施す。胎土は粗く、石英粒や黒色砂もしくは灰色砂などの混入物を多く含み、赤褐色を呈するやや軟質の焼き上がりである。

2は復元完形の弥生土器壺で、覆土中層から出土した。体部の張りは強く球胴型を呈し、最大径は胴部中位にある。頸部は長く、比較的狭くすぼまり、ゆるやかに立ち上がる。口縁部はラップ状に外反し、貼りつけにより幅の狭い縁帯を形成する。底部はやや小さいが、平坦で安定している。外面には縁帯部と頸部および肩部に文様帯がめぐる。縁帯部はLR縄文、下端には先端の丸い棒状工具によるキザミを施す。頸部文様帯は上からLR・RLの羽状縄文、肩部文様帯は上からLR・RL・LRの羽状縄文を施し、それぞれ上下を2条のZ字結節文で区画する。胎土は粗く、石英粒や黒色砂もしくは灰色砂などの混入物を比較的多く含み、灰褐色を呈するやや硬質の焼き上がりである。なお肩部には直径2cmの円形の孔が穿たれ、底部には内側からの穿孔が認められるが、前者は焼成前、後者は焼成後と考えられる。

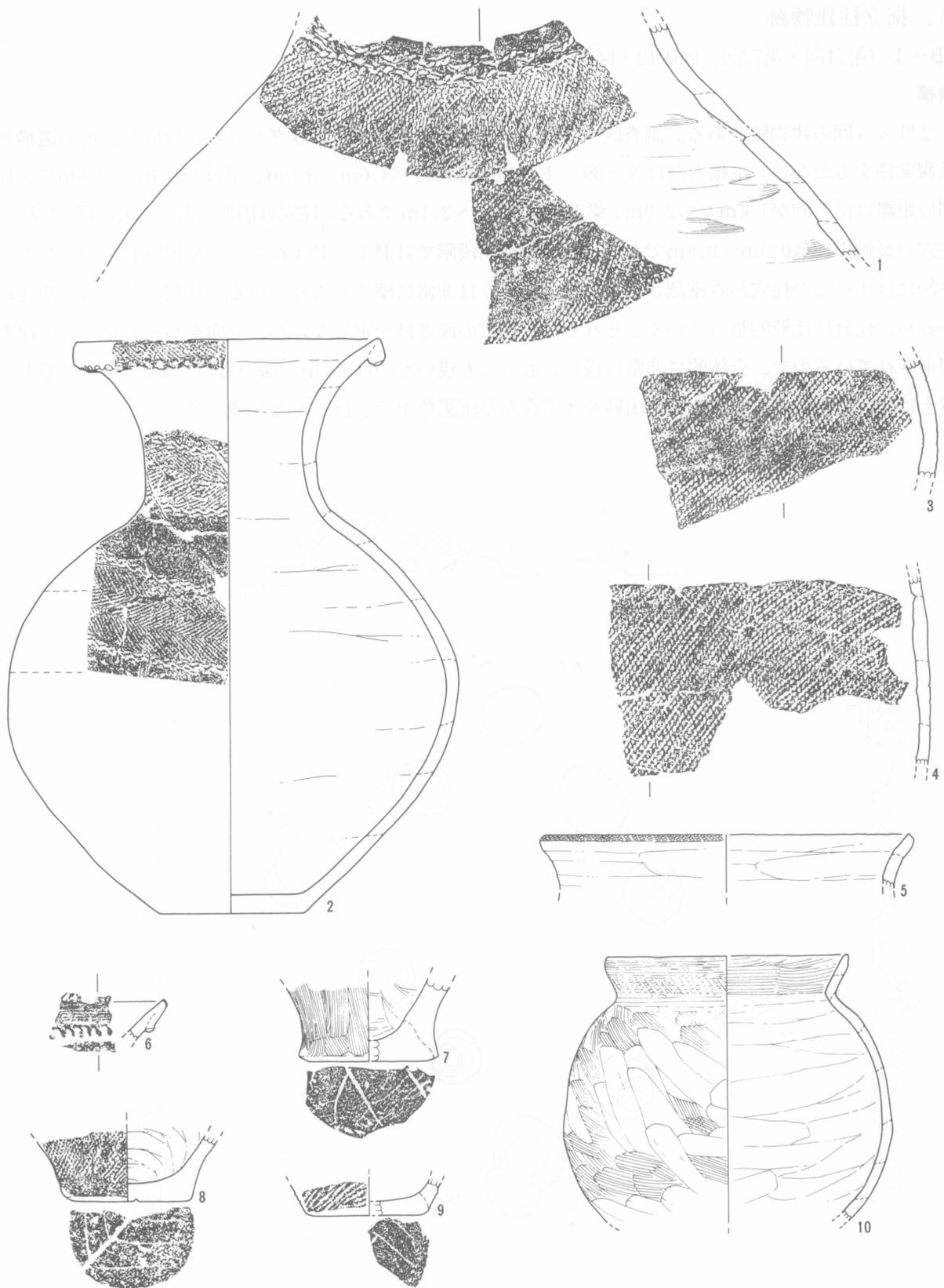
5は弥生土器甕で、覆土中層から出土した。頸部はあまりすぼまらず、口縁部は短く外反する。内面外面共に丁寧な横ヘラナデ、口唇部端面にはRL縄文を施す。胎土は比較的緻密で、石英粒や灰色砂を含むが総じて混入物は少なく、黒褐色ないし赤褐色を呈する硬質の焼き上がりである。

6は弥生土器裝飾甕で、覆土中層から出土した。口縁部はやや強く外反し、折り返しによる縁帯を形成する。内面外面共にやや粗い横刷毛目調整、口唇部端面と縁帯部下端にはヘラ状工具による細かいキザミを施す。胎土は比較的緻密で、石英粒や灰色砂を含むが総じて混入物は少なく、黒褐色を呈する硬質の焼き上がりである。

7は弥生土器壺で、覆土中層～下層から出土した。体部は急角度で立ち上がり、胴部があまり張らないタイプと考えられる。底部は大きくしっかりした厚手のつくりである。内面は刷毛目状の横ヘラナデ、外面には明瞭な縦刷毛目調整を施し、底面には明瞭な木葉痕を残す。胎土はやや粗く、石英粒や黒色砂および灰色砂を比較的多く含み、淡黄色ないし灰黄色を呈する軟質の焼き上がりである。

8・9は弥生土器裝飾甕もしくは壺で、いずれも覆土中層から出土した。体部はやや急角度で立ち上がり、胴部の張りが比較的弱いタイプと考えられる。内面は斜ヘラナデ、外面にはRL縄文を施し、底面には明瞭な木葉痕を残す。胎土は粗く、石英粒や黒色砂などを含むが総じて混入物は少なく、黒褐色ないし赤褐色を呈する比較的硬質の焼き上がりである。

10は土師器甕で、覆土上層から出土した。体部は球胴型で、最大径が胴部中位にある。頸部はやや狭くすぼまり“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く直線的に立ち上がり、口唇部には縁帯を形成しない。口縁部は内面が横刷毛目調整、外面が横ヘラナデ後、下半のみ斜刷毛目調整、体部は内面が横ヘラナデ、外面には斜刷毛目調整後、斜ヘラケズリを施す。



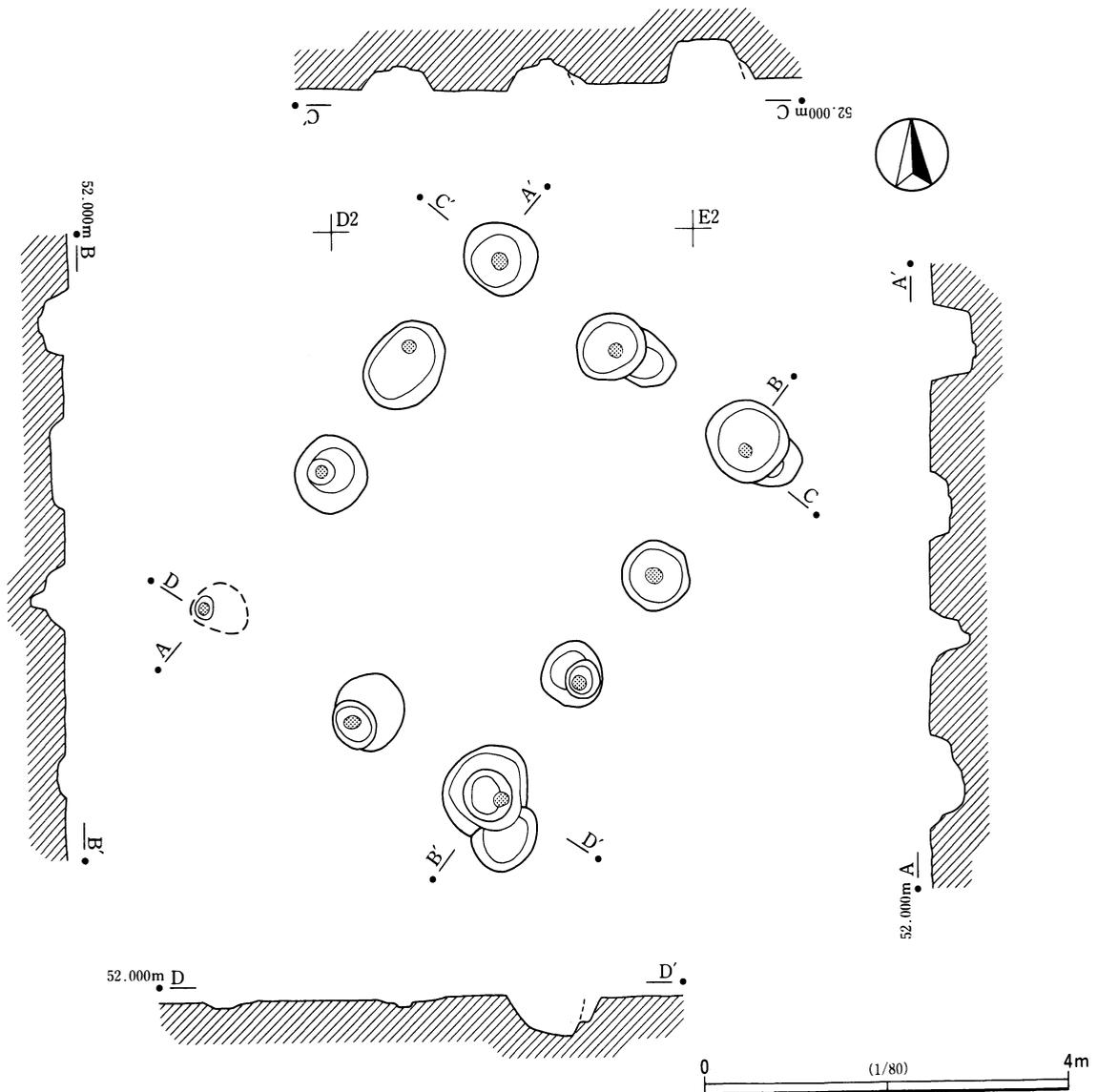
第70図 SD-1 出土遺物 (10はS=1/4、他はS=1/3)

3. 掘立柱建物跡

SB-1 (第71図・第72図、図版12・図版26)

遺構

2間×3間の建物跡である。調査区中央付近、C 2グリッドからE 3グリッドに位置し、他の遺構とは重複関係をもたない。主軸方向はN-39°-E、規模は桁行が4.6m~5.0m、梁行が3.4m~3.9mで、柱穴間の距離は桁方向が1.4mから2.0m、梁方向が1.7m~2.1mである。柱穴は円形もしくは楕円形プランで、柱穴の長軸規模は0.5m~0.8mである。柱痕は検出段階ではP 1とP 4からしか見出されなかったが、最終的にはすべての柱穴から確認された。柱のあたりは非常に堅くしまっている。柱穴の並びはやや乱れているが、柱痕は比較的整っている。それぞれの柱穴の深さは一定しないが、全面をハードローム上面まで削平されているので、全体的に非常に浅い。もっとも浅いものは0.1m、深いものでも0.5m程度である。覆土は灰白色粘土もしくは灰黄色山砂を多く含んだ灰褐色土で、ほとんど共通している。



第71図 SB-1 平面図・遺構断面図



第72図 SB-1 出土遺物 (S=1/3)

遺物 (第72図、図版26)

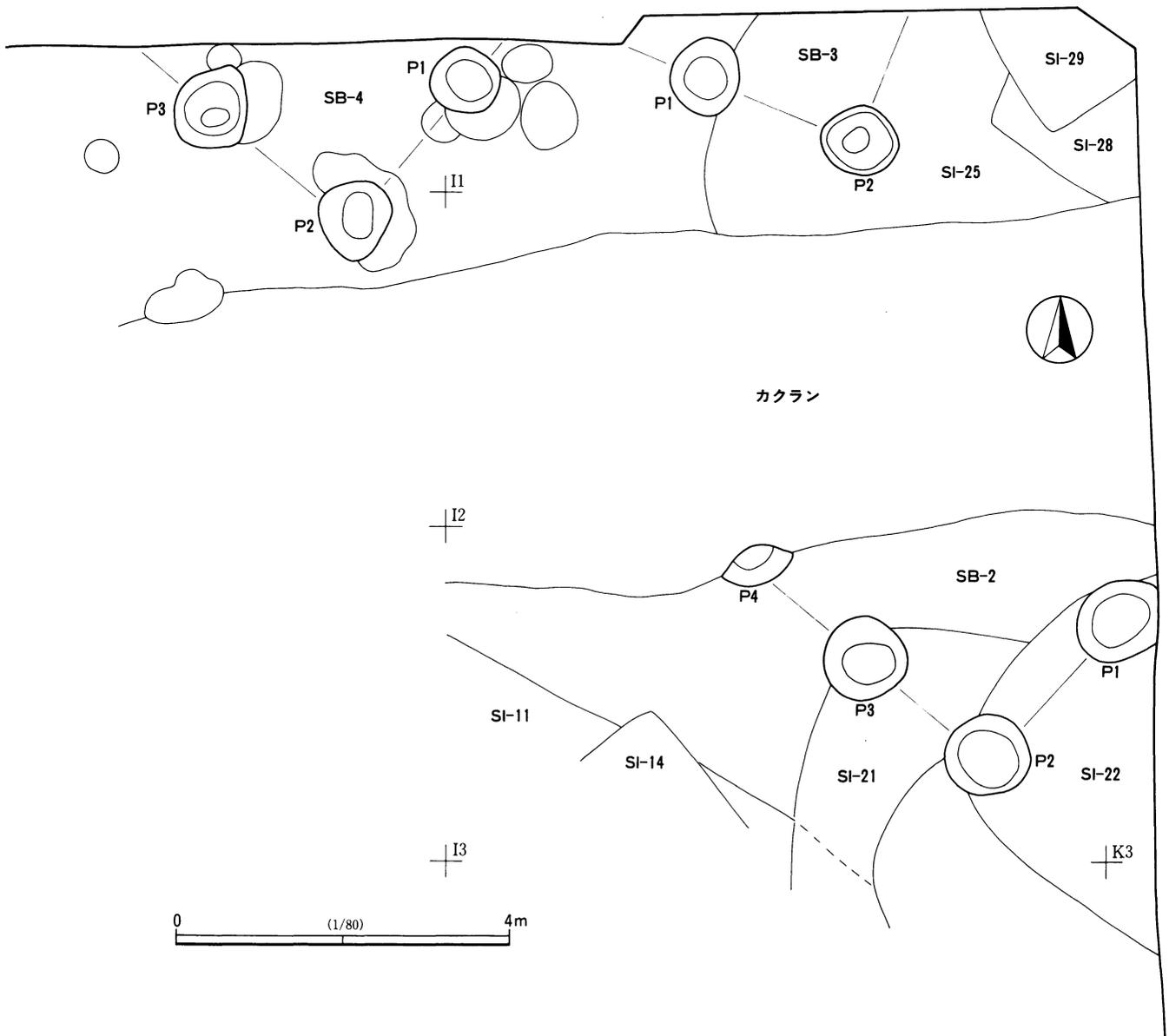
ロクロ土師器の杯で、P-1床面直上から出土した。器高は低く、体部はやや浅い角度で直線的に立ち上がる。口唇部は肥厚せず断面は三角形を呈する。底面は平坦で

安定する。体部は内面外面共に間隔がやや広く、明瞭なロクロ目を残す。底部は回転ヘラ切り無調整で円柱技法と考えられる。

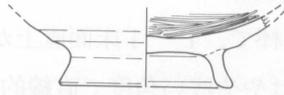
SB-2 (第73図)

遺構

調査区東部北端、I 0グリッドとJ 0グリッドに位置する。SI-25と重複するが、本遺構のほうが新しい。柱穴2基のみの検出であり、大部分が調査区域外に存在するものと考えられるため、規模は不明であ



第73図 SB-2～SB-4 平面図



第74図 SB-3 出土遺物 (S=1/3)

るが、主軸方向はN-21°-Eと考えられる。柱穴間の距離は梁間で2.0mである。柱痕は検出されなかった。柱穴のプランは比較的整った円形で、深さは0.4m程度である。床面のレベルはほぼ等しい。覆土はロームブロックを少量含む暗褐色土の単層である。

遺物

P-1から土師器片および須恵器片が若干量出土したが、図示できるものはない。

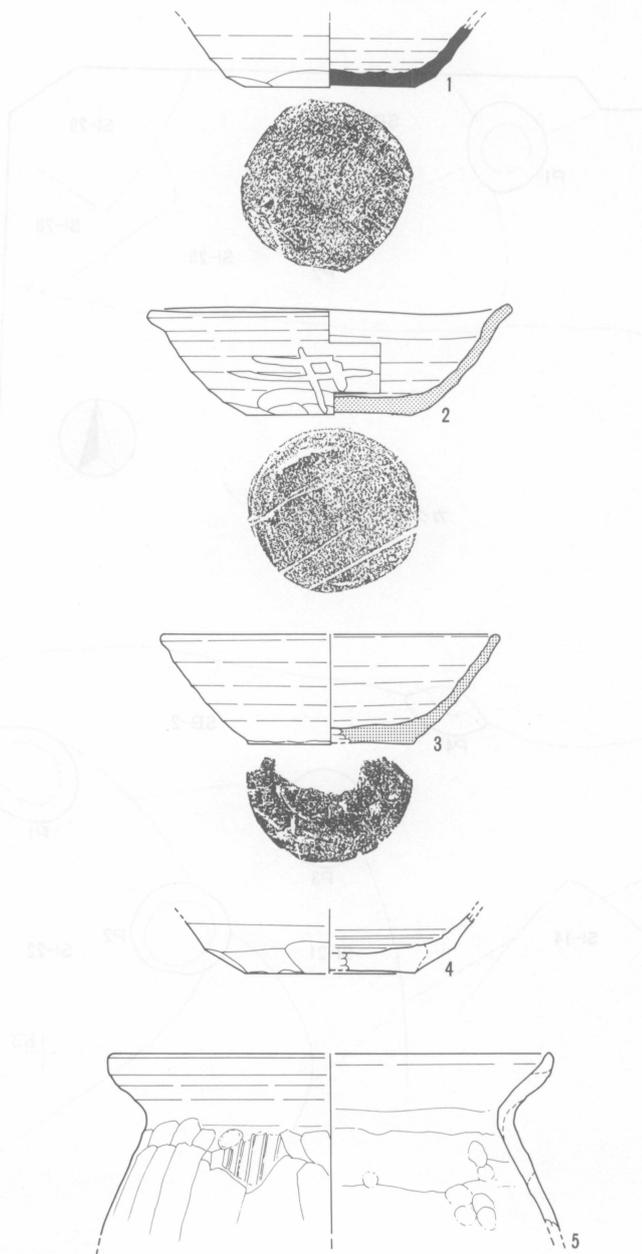
SB-3 (第73図・第74図、図版26)

遺構

調査区東部北側、I1グリッドからK2グリッドに位置する。SI-21およびSI-22と重複関係を持つが、これらの中で最も新しい。北側1/2程度を攪乱によって破壊され、東側1/4程度が調査区以外にかかるため規模ははっきりしないが、主軸方向はN-40°-Eである。柱穴間の距離は桁間が2.3m、梁間は1.9m~2.0mである。柱痕は検出されなかった。柱穴のプランはすべて比較的整った円形で、深さは0.7m前後である。床面のレベルはほぼ等しい。覆土は上層から中層がロームブロックを少量含む暗褐色土、下層はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土である。

遺物 (第74図1、図版26)

ロクロ土師器高台付杯で、P-2覆土から出土した。高台は背が高くわずかに外反する、いわゆる足高高台と呼ばれるものに類し、貼り付けにより成形している。下端はやや丸みを帯びているがやや内傾気味の端面を形成する。底部切り離し技法は不明である。体部は内面が細密なヘラミガキ、外面には間隔が狭く明瞭なロクロ目、高台部内面外面と底面にはやや不明瞭なロクロナデの痕跡を残す。やや厚手だが比較的丁寧なつくりで、底部最大厚は中央にある。



第75図 SB-4 出土遺物 (1~4はS=1/3、5はS=1/4)

遺構

調査区東部北端、H0グリッドからI1グリッドに位置する。ピット群と重複するが本遺構のほうが新しい。北側2/3以上が調査区域外にかかるため規模ははっきりしないが、主軸方向はN-43°-Eである。柱穴間の距離は桁間が2.2m、梁間が2.1mである。柱痕は検出されなかった。柱穴のプランはすべて楕円形で、深さは0.5m～0.7mである。床面のレベルはほぼ等しい。覆土は上層が灰黄色山砂ブロックや焼土粒、灰白色粘土ブロックを多量に含んだ褐色土、下層はロームブロックを多量に含んだ暗褐色土で、共通している。なお、本遺構は建替の痕跡が認められる。

遺物 (第75図、図版27)

出土量はほかの掘立柱建物跡と比較して多いが、小破片が多く、図示しえたのは以下の5点である。

1は須恵器杯で、P-3の覆土下層から出土した。体部は急角度で直線的に立ち上がる。底面はやや窪んでいるためすわりが悪い。底部は静止ヘラ切り無調整、体部は内面外面共に明瞭で間隔の狭いロクロ目を残し、外面下端のみ手持ちヘラケズリを施す。

2・3は赤褐色を呈する須恵器の杯で、2はP-1の覆土中層から、3はP-2の覆土から出土した。2は体部がやや浅い角度で直線的に立ち上がり、口縁部のみ若干外側につまみ出される。口唇部は若干肥厚するが、断面が尖り気味となる。底面は窪んでいるが安定する。若干の焼き歪みがみられる。底部は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整、体部は内面外面共に間隔が狭く比較的強いロクロ目を残すが、外面下端のみ手持ちヘラケズリを施す。ロクロ回転方向は時計まわりである。なお体部外面には、向かって右側を上にして「井」墨書がある。3は体部がやや浅い角度で直線的に立ち上がる。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。底面はほぼ平坦だが、ややすわりが悪い。若干の焼き歪みがみられる。底部は回転ヘラ切り後手持ちヘラナデ、体部は内面外面共に間隔が狭くやや弱いロクロ目を残す。ロクロ回転方向は反時計まわりである。なお体部内面には靦の圧痕がある。

4はロクロ土師器の杯で、P-1覆土下層から出土した。体部はやや急角度で直線的に立ち上がる。体部は比較的薄手だが、底部は厚くしっかりしている。底部は静止ヘラ切り無調整、体部は内面外面共に間隔が狭く非常に明瞭なロクロ目を残すが、外面下端のみ手持ちヘラケズリを施す。体部外面にはタール状の油膜が付着する部分があり、灯明具として使用された可能性がある。

5は土師器甕である。P-2覆土下層から出土した。体部はあまり膨らまず、やや縦長のラグビーボール形を呈し、最大径は胴部中位にあるものと考えられる。頸部はやや狭くすぼまり、「く」字形に折れ曲がる。口縁部は短く、ごくわずかに内湾気味に広がる。口唇部はほとんど肥厚せず、断面が丸みを帯びる。やや厚手のつくりで、口縁部は内面外面共にロクロナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面には縦ヘラケズリを施す。

4. 土坑

SK-42 (第76図、図版13)

遺構

調査区西側中央付近、C 2 グリッドに位置する。重複する遺構はない。形態・規模からみるとピットに類するものだが、まとまった遺物が出土した事から土坑に含めた。主軸方向はN-10°-Eで、長さ1.1m、幅0.9mの楕円形を呈する。底面は船底形である。全体的に削平されているため遺存状況は悪く、深さ3cm程度しか遺存していなかった。覆土は暗褐色で、ローム粒子を若干含む。

遺物

床面に密着した状態で、土師器甕の体部が1個体分出土したが、大部分を削平されており、かつ劣化が著しかったため図示しえなかった。形態的にはSK-43出土のものと酷似している。

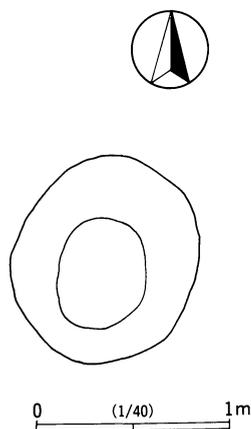
SK-43 (第77図・第78図、図版26)

遺構

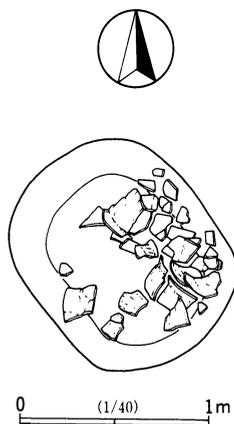
調査区西側中央付近、B 3 グリッドに位置する。重複する遺構はない。当初重機で表土を除去した際に遺物が露出しており、その状況からみて竪穴住居跡の貯蔵穴と考えられたが、周囲に柱穴などが見出せなかったため土坑として扱った。主軸方向はN-35°-Wで、長さ1.2m、幅1.0mの卵形を呈する。底面は船底形である。全体的に削平されているため遺存状況は悪く、深さ5cm程度しか遺存していなかった。覆土は黒褐色で、ローム粒子と焼土粒をわずかに含む。

遺物 (第78図、図版26)

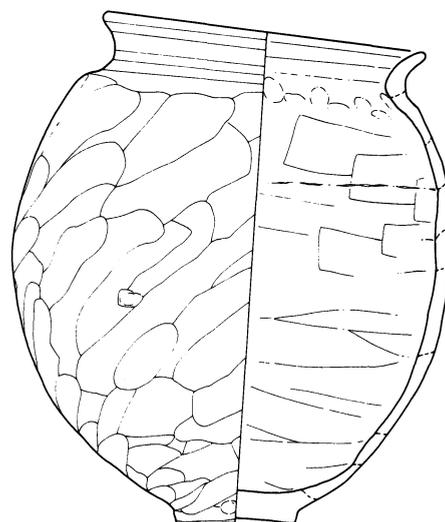
土師器甕である。床面直上から横倒しの状態で出土した。体部はやや強く張るが長胴型を呈し、最大径は胴部中位にある。頸部は比較的明瞭な段をもち、あまりすぼまらず、“く”字形に強く折れ曲がる。口縁部は短く、強く外反する。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。底部は極端に小さく、わずかに窪んでおりやや不安定である。口縁部～頸部は内面外面共に丁寧な横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面は斜ヘラケズリ、底部外面はヘラケズリ後ヘラアテを施す。成形時の歪みが著しい。



第76図 SK-42平面図



第77図 SK-43平面図



第78図 SK-43出土遺物 (S=1/4)

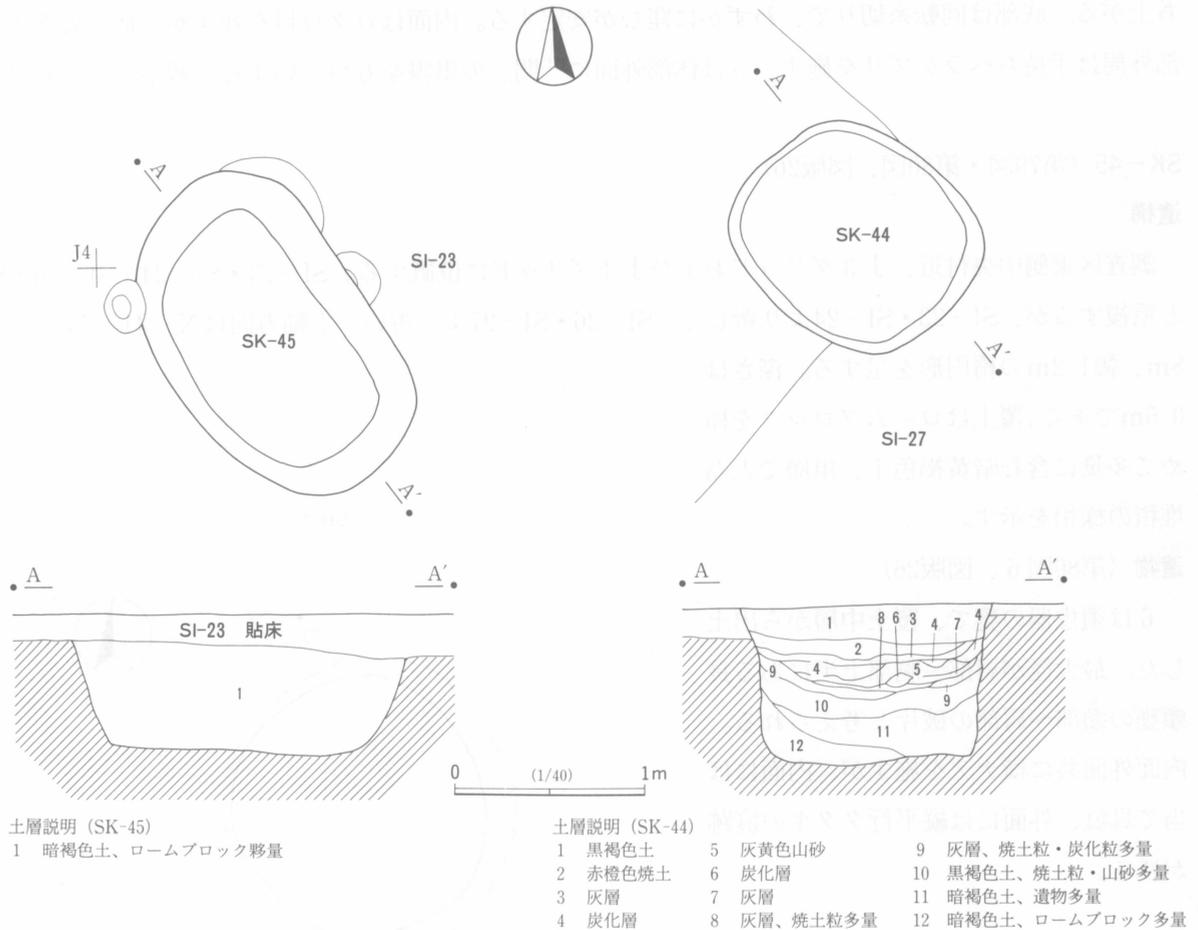
SK-44 (第79図・第80図、図版13・図版26)

遺構

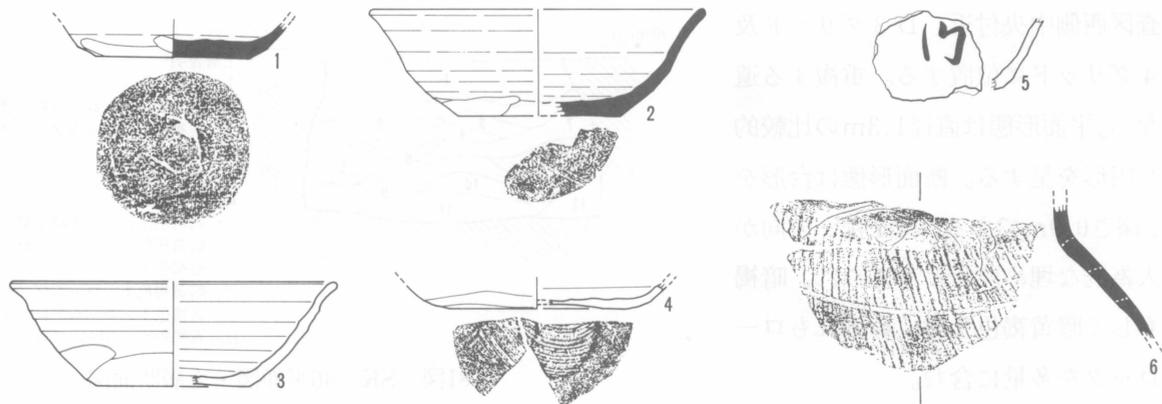
調査区東端中央付近、K 4 グリッド杭下に位置する。SI-23・SI-24・SI-26・SI-27と重複するが、SI-23・SI-24より新しく、SI-26・SI-27より古い。主軸方向はN-45°-Wで、長さ1.3m、幅1.2mの隅丸方形を呈する。深さは0.8mである。覆土は上層が灰黄色山砂や焼土粒を多く含む暗褐色土、中層から下層がローム粒や焼土粒を少量含む暗褐色土で、人為堆積の様相を示す。

遺物 (第80図1~5、図版27)

出土量は多く、古代の遺物がほとんどを占める。図示したものはいずれも覆土下層から出土した。



第79図 SK-44平面図・土層断面図



第80図 SK-44・SK-45出土遺物 (S=1/3、1~4がSK-44、5がSK-45)

1・2は須恵器の杯である。1は体部がやや浅い角度で立ち上がる。底部は回転ヘラ切りで、平坦で安定している。内面外面共に間隔が狭く弱いロクロ目を残し、体部外面下端には手持ちヘラケズリを施す。底部は無調整である。2は体部がやや浅い角度で、若干内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに開く。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。底部は平坦で安定しており最大厚が外周にあるものと考えられる。内面外面共に間隔が狭くやや弱いロクロ目を残し、体部外面下端と底面には手持ちヘラケズリを施す。

3～5はロクロ土師器の杯である。3は体部が浅い角度でわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部が若干外反する。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。底部はやや窪むが安定する。内面外面共に間隔が狭く明瞭なロクロ目を残し、体部外面下端と底部に手持ちヘラケズリを施す。4は体部が浅い角度で立ち上がる。底部は回転糸切りで、わずかに窪むが安定する。内面はロクロ目を残すが、体部外面下端と底部外周は手持ちヘラケズリを施す。5は体部外面に「門」の墨書をもつ。いずれも薄手のつくりである。

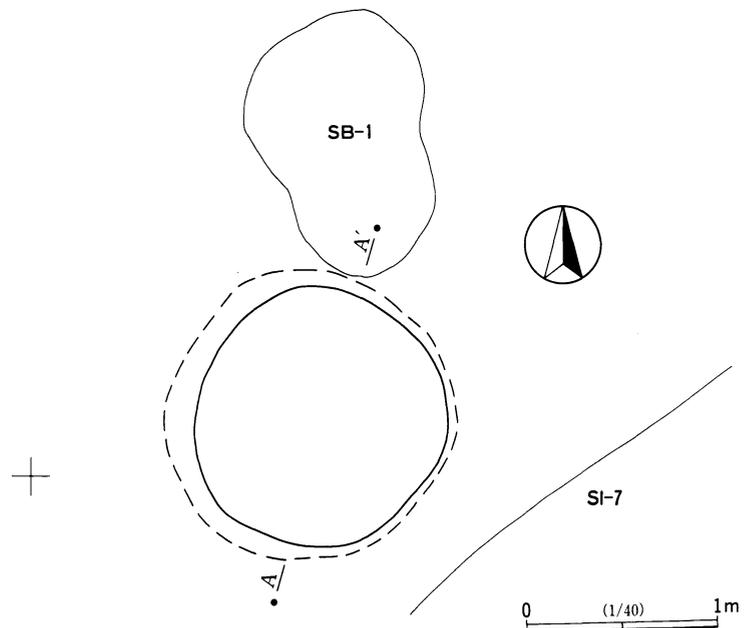
SK-45 (第79図・第80図、図版26)

遺構

調査区東側中央付近、J 3グリッドおよびJ 4グリッドに位置する。SI-23・SI-24・SI-26・SI-27と重複するが、SI-23・SI-24より新しく、SI-26・SI-27より古い。主軸方向はN-41°-Wで、長さ1.8m、幅1.2mの楕円形を呈する。深さは0.6mである。覆土はロームブロックを極めて多量に含む暗黄褐色土、単層で人為堆積の様相を示す。

遺物 (第80図6、図版26)

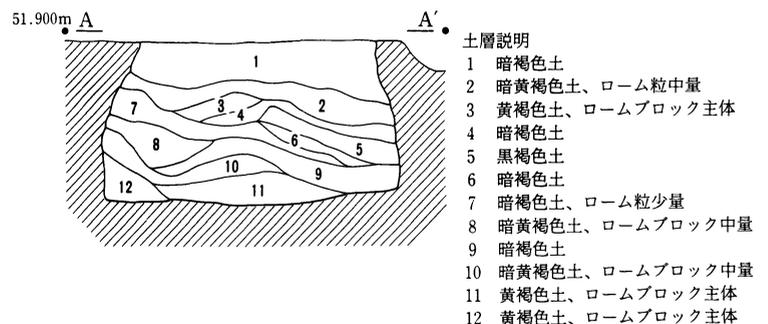
6は須恵器の甕で、覆土中層から出土した。最大径が肩部～胴部上半にある長頸甕の頸部～肩部の破片と考えられる。内面外面共に横ナデを施すが、内面には当て具痕、外面には縦平行タタキの痕跡が残る。



SK-46 (第81図、図版13)

遺構

調査区西側中央付近、D 3グリッド及びD 4グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は直径1.3mの比較的整った円形を呈する。断面形態は台形を呈し、深さ0.9mである。覆土は一方向からの人為的な埋め戻しと考えられ、暗褐色土もしくは暗黄褐色土で、いずれもロームブロックを多量に含む。



第81図 SK-46平面図・土層断面図

遺物

遺物は古墳時代の土師器を主体として、弥生時代から中世に及ぶが、いずれも小破片ばかりで図示できるものはない。

5. グリッド出土及び表面採集遺物（第82図、図版27）

今回の調査区域の西部南側～南側調査区域外には黒色土ないし黒褐色土が厚く堆積した埋没谷があり、その覆土の中におびただしい量の遺物が含まれていた。遺物の時期は縄文時代、弥生時代中期～奈良・平安時代に及ぶ。結果的にその部分のみ近年の削平を逃れ、比較的良好な保存状態を保ち得たわけであるが、多数の遺構が狭い範囲に構築されていたため、遺構の重複が著しく、調査の当初段階には遺構の検出に手間取った。そのためやむなくグリッド一括として取り上げたものが本項でとりあげる遺物の大多数を占める。今回の調査で検出されていない時期の遺物もみうけられるが、これは本来存在した遺構が後代の攪乱で破壊され、そこに帰属していた遺物のみが散乱したものと解釈することができるだろう。

1は黒曜石製の石鏃で、I 2～J 3グリッドからの出土である。断面は浅い菱形を呈し、長さ2.6cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmである。

2は弥生土器壺で、肩部～体部上半と考えられる。G 2～H 3グリッドから出土した。外面にはR L斜縄文を施し、その下部を半裁竹管による2条の爪形文で区画している。胎土には石英粒や灰色砂などを少量含み、橙色ないし黄褐色を呈する比較的硬質の焼き上がりである。

3～14は古墳時代に比定される土師器である。4・5・11はG 2～H 3グリッド、3・6～10・12・13はH 4～J 5グリッドから出土した。

3は杯蓋模倣杯である。体部は浅い皿形を呈し、稜は明瞭で、“く”字形に折れ曲がる。かえりは長く直立し、口唇部は肥厚せず、断面は尖り気味になる。底部は丸底で不明瞭である。かえりは内面外面共に横ナデ、体部は内面が丁寧な横ヘラナデ、外面は横ヘラケズリを施し、全面が赤彩される。

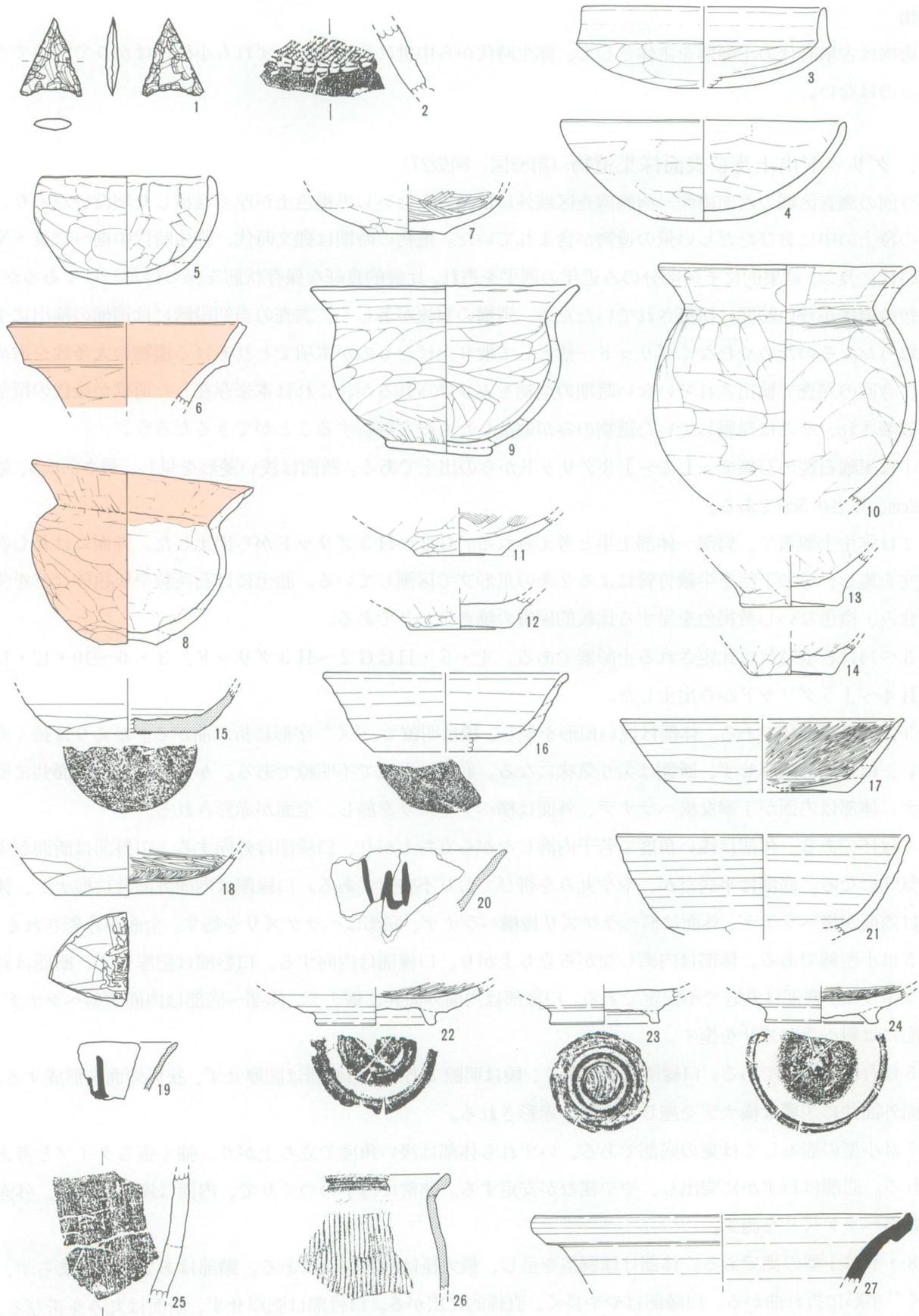
4は杯である。体部は浅い角度で若干内湾しながら立ち上がり、口縁部は外向する。口唇部は断面が尖り気味になる。底部は平底だが、やや丸みを帯びており不安定である。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が横ヘラナデ、外面は横ヘラケズリ後横ヘラナデ、底部はヘラケズリを施す。全面が赤彩される。

5は小型鉢である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内向する。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。底部は丸底で不安定である。口縁部は内面外面共に横ナデ、体部～底部は内面が斜ヘラナデ、外面には斜ヘラケズリを施す。

6は有段口縁壺である。口縁部はやや長く、段は明瞭である。口唇部は肥厚せず、狭い端面を形成する。内面外面共に丁寧な横ナデを施し、全面が赤彩される。

7は小型の壺もしくは甕の底部である。いずれも体部は浅い角度で立ち上がり、強く張るタイプと考えられる。底部はわずかに突出し、やや窪むが安定する。非常に薄手のつくりで、内面は刷毛目調整、外面には斜ヘラケズリを施す。

8・9は小型の甕である。体部は球胴型を呈し、最大径は胴部中位にある。頸部はあまりすぼまらず、“く”字形に折れ曲がる。口縁部はやや長く、直線的に広がる。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。底部は平坦で安定するが、9は底面と口縁面のねじれが著しい。円形の粘土板を貼り付ける際に、位置がずれたものと推定される。いずれも口縁部は内面外面共に横ナデ、体部は内面が斜ヘラナデ、外面には斜



第82図 グリッド出土遺物 (1は原寸、2~9・15~22はS=1/3、他はS=1/4)

ヘラケズリを施す。

10は甕である。体部は強く張るがやや長胴気味で、最大径は胴部中位にある。頸部はやや狭くすぼまり、“く”字形に折れ曲がる。口縁部はやや長く、わずかに外反する。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。口縁部は内面外面共に横ヘラナデ、体部は内面が斜ヘラナデ、外面が縦ヘラケズリ後中位～下半にかけて横ヘラケズリを施す。比較的厚手のつくりである。

11～14は甕もしくは壺の底部である。11は体部が強く張り球胴型となるものと考えられる。底部はやや突出し、わずかに窪むが安定する。内面は斜ヘラナデ、外面には横ヘラケズリを施す。12は体部が比較的急角度に立ち上がり、長胴型を呈する。底部は突出せず、わずかに窪むが安定する。内面は縦ヘラアテ、外面は斜ヘラケズリを施す。13・14は体部が比較的急角度で立ち上がり、長胴型を呈するものと考えられる。共に底部は突出し、やや窪むが安定する。内面外面共に斜ヘラナデを施す。

15～27は古代に比定される遺物である。15・20・22・24・26はG 2～H 3グリッド、16～19・21・23・25・27はH 4～J 5グリッドから出土した。

15・19・20は須恵器の杯である。15は体部がやや浅い角度で、わずかに内湾しながら立ち上がる。底部最大厚は外周にある。体部は内面外面共に弱く間隔の広いロクロ目、底部内面には弱い渦状のロクロ目を残し、体部外面下端と底部には手持ちヘラケズリを施す。19・20は外面に「山」墨書をもつ。

16～18はロクロ土師器の杯である。16は体部が急角度で直線的に立ち上がり、口縁部のみわずかに外反する。口唇部の断面は若干丸みを帯びる。粘土紐巻上げ後ロクロ成形され、底部切り離し技法は回転糸切りである。体部は内面外面共にやや強く間隔の狭いロクロ目を残し、体部外面下端には回転ヘラケズリ、底部は周囲のみ静止ヘラケズリを施す。体部はさほどでもないが底部は厚い。17は体部がやや浅い角度で直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。口唇部の断面はやや尖り気味になる。粘土紐巻上げ後ロクロを使用して成形するが、底部切り離し技法は不明である。体部は内面が細密な斜方向のヘラミガキ、外面上半は弱いロクロ目を残し、体部外面下半と底部には回転ヘラケズリを施す。体部はさほどでもないが、底部は非常に薄い。最大厚は外周にある。18は体部がやや浅い角度でわずかに内湾しながら立ち上がるものと考えられる。ロクロ引きにより成形され、底部は回転ヘラ切りである。体部は内面が細密な斜方向のヘラミガキ、外面下半は手持ちヘラケズリ、底部は丁寧なヘラナデ後放射状の粗いヘラミガキを施す。底面には非常に明瞭な墨書があり、「山邊□」と判読できる。なお内面は黒色処理を施す。

21～24はロクロ土師器の高台付杯もしくは高台付椀である。21は体部が急角度で内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口唇部は肥厚せず、断面は丸みを帯びる。薄手のつくりで、ロクロ水引きにより成形される。体部は内面外面共に強く間隔の狭いロクロ目を残し、体部外面下端のみ手持ちヘラケズリを施す。22～24は底部で、いずれも高台部分は底部切り離し後に貼り付けており、ロクロナデにより底部になじませている。21は底部最大厚が外周にある。高台は低く、やや丸みを帯びる端面を形成し、わずかに“ハ”字形を呈する。切り離し技法は回転ヘラ切り、内面には細密なヘラミガキ、体部外面下端には強いロクロ目を残す。底部には“×”形のヘラ記号が描かれる。23は底部が厚くほぼ均等である。高台は低く貧弱で、細い端面を形成する輪高台である。切り離しは低速の回転糸切り、内面には細密なヘラミガキを施す。24は底部最大厚が中央にある。高台は低く、明瞭な端面を形成し、断面は“ハ”字形を呈する。切り離し技法は回転ヘラ切り、内面には細密なヘラミガキ、体部外面には強いロクロ目を残す。

25は土師器甕の体部下半と考えられる。非常に厚手の粗いつくりで、内面は縦ヘラナデ、外面は縦ヘラ

ケズリを施す。また、外面には「五」もしくは「丑」と読めるヘラ書がある。

26は須恵器の甕である。体部はあまり張らず、また頸部がほとんどすぼまらず、“く”字形に折れ曲がる。口縁部は短く開き、口唇部が肥厚する。外面には非常に明瞭な縦平行タタキの痕跡を残す。

27は須恵器の長頸甕と考えられる。口縁部は長くラッパ状に広がり、折り返しにより断面長方形の縁帯を形成する。口唇部はわずかにつまみ上げられる。内面外面共に比較的明瞭なロクロ目を残す。

6. 土製品・石製品 (第83図、図版27)

1・2は小型の土玉で、1はSI-13から、2はSI-23から出土した。1は比較的整った球形だが、2は楕円形に近く、いずれもわずかに白玉状を呈し、片側から穿孔されている。1は直径1.6cm、孔径0.2cm、2は径1.3cm~1.8cm、孔径0.2cm~0.5cmである。

3~6は土玉もしくは土錘で、3はSI-6、4はSI-28、5はSI-26、6はSB-3から出土した。いずれも比較的整った球形を呈し、片側から穿孔されている。3は直径3.2cm、高さ3.2cm、孔径0.4cm、4は推定直径2.8cm、高さ3.0cm、推定孔径0.3cm、5は推定直径3.0cm、高さ2.8cm、推定孔径0.6cm、6は推定直径2.7cm、高さ3.0cm、推定孔径0.4cmである。

7・8は土製紡錘車で、7はSI-21覆土下層、8はSI-11覆土下層から出土した。7は横断面が整った円形、縦断面がやや背の高い台形を呈する。上面の直径1.4cm、下面の直径2.6cm、高さ2.4cm、孔径0.5cmで、側面には指ナデの痕跡が残る。8は横断面は比較的整った円形、縦断面は長方形を呈する。直径4.1cm、厚さ2.2cm~2.6cm、孔径0.8cmで、側面には指頭押捺の痕跡と若干の指紋が残る。

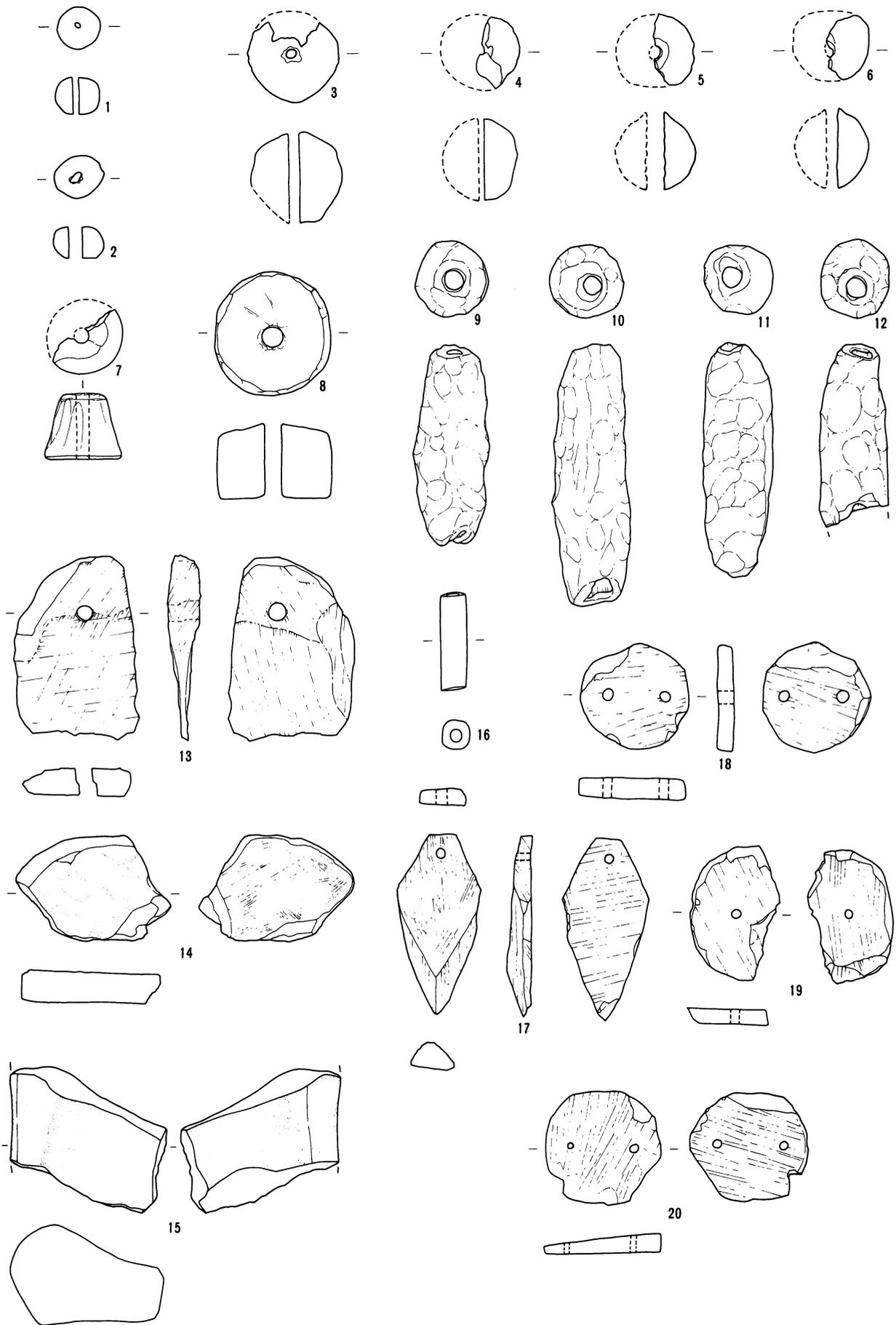
9~12は土錘で、9・10はSI-26覆土下層、11・12はH4~J5グリッドから出土した。いずれも直径0.7cmほどの棒に粘土を巻き付け、それを手で握るようにして成形されたものと考えられ、表面には指紋が多く残っている。ちょうど“つくね”のような形態である。9は全長7.0cm、太さ2.8cm、10は全長9.2cm、太さ2.6cm、11は全長8.2cm、太さ2.6cm、12は折れているので遺存部分の全長6.4cm、太さ2.4cmである。

13・14は砥石で、13はSI-20覆土下層、14はH4~J5グリッドから出土した。13は側面が細かく欠けてしまっているため不整形であるが、本来は縦長の台形に近い形になるものと考えられる。上部には両面からの穿孔がみられ、上側面を除く全面に縦方向の使用痕が見られる。全長6.5cm、最大幅4.4cm、最大厚1.2cm、孔径0.6cmである。14は破片であるため形状ははっきりしないが、円形に類するものと考えられる。表面と裏面に使用痕が見られる。

15は小型の石皿の破片で、SI-20覆土下層から出土した。破片であるため寸法は不明だが、本来は楕円形を呈するものと考えられる。使用痕は両面に認められる。

16は滑石製の管玉で、SI-18覆土下層から出土した。側面には擦痕がみられるが製品と考えてよいだろう。全長1.7cm、直径0.5cm、孔径0.2cmである。

17は滑石製の剣形石製模造品、18~20は同じく滑石製の石製有孔円板で、17・18はSI-20、19はSI-26、20はSI-16から出土した。いずれも穿孔されているが、全面に強い擦痕を残し、形があまり整っていない事から仕上げ調整未製品と考えてよいだろう。17は全長3.2cm、最大幅1.6cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、18は直径1.8cm~2.0cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、19は遺存部分の直径2.4cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、20は直径2.0cm~2.1cm、厚さ0.2cm~0.3cm、孔径0.2cmである。



第83図 石製品・土製品 (1~15はS=1/2、16~20は原寸)

III まとめ

第1次調査とあわせてわずか2,000㎡足らずの調査であったが、本文に記したものを含め整理箱に換算して総数50箱を超える量の遺物と、また多くの遺構とを検出した。そのなかには貴重な資料も多く含まれている。今回の成果からさまざまな問題が指摘できようが、ここではそのうちのいくつかの目立った点について、第1次調査の成果も含めて簡単にまとめ、今後の展望を示しておきたい。

1. 弥生時代

本事業の調査範囲で検出された弥生時代の遺構は、環濠と竪穴住居跡であるが、いずれもその後の遺構あるいは近年の攪乱によって大なり小なり破壊されており、残念ながら全容を把握しうるものはない。出土した土器も断片的なものが多く、本来の姿を伺うことができるものは数えるほどである。また確実に該期の遺構に伴うと考えられるものはさらに少ないというような状況だが、量はともかく質的には比較的時間がまとまっているという印象を受けた。弥生土器は中期後葉～後期中葉という時間幅で、後期前葉に比定されるものが多いようである。掘立柱建物跡や一部の土坑を除くすべての遺構から出土しており、弥生時代以外に比定される遺構から出土したものはほとんどすべてが断片で摩耗が著しい。

まず環濠である。西日本のものと違って、関東地方、特に千葉県内で見出される弥生時代の環濠は一般に貧弱なものが多いが、本遺跡の環濠は堂々たるものである。調査会が調査した部分を含めた総延長は150m以上、台地の南東部を囲むようにまわっているが、東側の調査区域外でどのように伸びているのかは不明である。遺物の出土量は多くはないが、これまでの調査で出土した遺物のうち、下層から出土したものは弥生時代中期後半から後期前半に比定されるものであり、調査会の調査で中期に比定される集落がこの内部に営まれていることからこの時期には築かれていたと考えてよいだろう。ただし、再掘削されたような痕跡がなく、覆土が自然堆積の様相を示していること、弥生時代後期に比定される竪穴住居跡(SI-1)が自然堆積による環濠上層の覆土を床面として構築されていること、中層以上から出土する弥生土器のほとんどすべてが後期中葉以降に比定されること、調査会調査地点では中期末～後期初頭にかけて集落が環濠外に進出することなどからみて、築かれてから比較的早い時期にその機能が失われ、埋没していったものと考えられる。

第1次調査のものを含め、検出された弥生時代の竪穴住居跡は5軒だが、すべて後期に比定される。プランが判明しているものではSI-1を除いたすべてがいわゆる小判形で、支柱穴は4本、梯子ピットが手前に、炉が奥側支柱穴の中央付近にある定型的なものである。主軸方向はSI-1とSI-2が北東方向であるほかはすべて北西方向にあり、偏りも少なく比較的そろっている。これら竪穴住居跡同士では切り合い関係を持たず、適度な間隔をあけて構築されていることから、比較的短い時間幅場合によってはほぼ同時期に営まれていたと考えることができよう。中心的な時期はそれぞれの住居跡から出土した遺物からみて弥生時代後期前半～後期中葉であると考えられる。

遺物はすべて土器で、前述のとおり全容を把握しうるものはわずかだが、量的には決して少なくはない。中期の遺物はすべて南関東系のもので、SI-1(第6図4)、SI-18(第35図10・12)、SI-25(第17図10・

13)、SD-1 (第70図7)などが挙げられる。このうちSI-1、SI-18出土の櫛描紋をもつものは宮ノ台式でもやや古い段階に位置づけられる。後期では宮ノ台式の系譜を引く一群(南関東系土器)と、北関東系もしくはその影響を受けた下総地域に見られる土器と類似する一群(北関東系土器)の2つの大きなまとまりが見られる。前者ではSI-1 (第6図1)、SI-16 (第33図8・9)、SI-18 (第35図11)、SI-22 (第13図7・12)、SI-25 (第17図1・2・5・6・9)、SD-1 (第70図1~4)など、後者ではSI-1 (第6図2)、SI-11 (第28図26)、SI-22 (第13図1~6・9)、SI-25 (第17図3・4・7・8)、SD-1 (第70図6・8・9)などが挙げられる。

2. 古墳時代

古墳時代の遺構はすべて竪穴住居跡で、第1次調査で検出したものを含めると18軒である。これらのうち、前期~中期に比定されるものが4軒(SI-3、SI-18、SI-28、SI-29)、中期~後期に比定されるものが5軒(SI-7、SI-8、SI-9、SI-20、SI-21)、後期に比定されるものが4軒(SI-6、SI-11、SI-16、SI-30)、時期不明のもの3軒(SI-4、SI-5、SI-19)である。主軸方位は判明しているものはおおよそN-30°~45°-WもしくはN-30°-E前後に収まり、平面プランはすべて方形に類するものである。規模は3m~5mクラスが3軒、5m~7mクラスが6軒、7m~9mクラスが1軒である。主柱穴はすべて4本と考えられるが、補助的な柱穴をもつもの(SI-6、SI-20)もみつまっている。硬化面はハードロームブロックもしくは黒色土を主体としており、貼床を施すものも多い。第1次調査では中期が中心で、該期の石製模造品製作工房が検出されたが、今回の調査範囲ではこれに類するものは見出せなかった。また今回の調査範囲に限れば、後期が主体となっている。

遺構から出土した遺物は図示しえなかったものを含めて、後期に比定される甕類が量的に最も多く、ついで中期の甕類、後期の杯類、中期の杯類、前期の甕類となる。ただグリッド出土遺物を含めると前期の遺物も決して少なくはなく、本来存在した前期の遺構がそれ以後の遺構によって破壊され、遺物のみが後期の住居跡内外に混入したものと考えられる。

3. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、今回調査したものがほぼすべてで、竪穴住居跡が8軒、掘立柱建物跡が5棟、土坑が2基である。竪穴住居跡の主軸方位はN-45°-EもしくはN-30°-Wの間に収まり、平面プランはすべて方形に類する。規模は一辺3m~4mクラスが3軒、7m~8mクラスが5軒である。後者のうち4軒は2組の同地点立替え住居であるから実際は3軒と数えることができるだろう。カマドはさまざまなものがあるが、基本的には、袖の長いものが3軒(SI-13、SI-23、SI-24)、袖の短いものが4軒(SI-12、SI-15、SI-26)である。主柱穴はほとんどが4本と考えられるが、発見できないものもあった。貯蔵穴は判明しないものも多かったが、推定も含めると、すべてカマドの両脇のいずれかに存在する。硬化面は灰黄色山砂と灰白色粘土がほとんどで、これにロームブロックを含むのが一般的であった。また床面はほとんどがすべて貼床だが、中には硬化面以外の周囲の部分が貼床となっているものも見受けられた。

掘立柱建物跡は前回調査のピット群で掘立柱建物の可能性があるものを含めると、合計6棟になる。明らかに規模が分かるものはSB-1のみだが、他のものも基本的には2間×3間程度の規模であると考えられる。掘立柱建物同士の新旧関係ははっきりしないが、主軸方位に関してSB-2のみがやや東寄りに向く

ほかは、大体揃っていることから、比較的近接した時期に機能していたと考えることができそうである。

遺物は土師器・須恵器を中心として刀子などの鉄製品、土錘などの土製品、灰釉陶器、瓦などが出土しているが、特筆すべきものとして、土管状土師質土器、墨書土器、平瓦破片が挙げられるだろう。

まず土管状の土師質土器に関して、形態的には土師質の甑にあたるのだが、底部の孔径と口径との差がほとんどなく、甑としての使用には到底耐えられるものではないことから、仮称としてこのように呼称した。3点見比べてみると若干の寸法の相違はあるが、器形はほとんど同じで、いずれも粘土紐巻上げ後ロクロを使用し、体部下端に静止ヘラケズリを施すなど、ごく普通の土器の制作技法が用いられている。本文で報告したとおり、SI-27のカマド煙道内に設置されたままの状態出土したことから、明らかにカマドの煙道そのものとして用いられたことは疑念の余地がなく、前述のとおり形態的に甑として使用されたとは考えられないことから、カマドの煙道として使用することを前提に制作された土器と考えざるを得ないのである。甑もしくは甕をカマドの煙道に転用する例はあるが、このようなものは例がないようである。

今回は5点の墨書土器が出土しているが、ほとんどが断片資料であるため、文字が判読できるのはSB-4から出土した須恵器杯の体部に書かれた「井」、SI-27から出土したロクロ土師器杯の体部に書かれた「門」、H4～J5グリッドで出土した土師器杯体部に書かれた「山」、そして同じグリッド出土の土師器杯底部に書かれた「山邊□」のみである。「山邊□」に関しては「□」の部分が断片的であるため判読できないが、「ウ(うかんむり)」第1画の“、”と考えられることから、「家」であった可能性がある。なお「山邊」墨書は東金市山田水呑遺跡95号竪穴住居出土例および同遺跡谷部覆土から出土した「山邊大」墨書、及び財団法人山武郡市文化財センターが調査した大網白里町砂田中台遺跡71号、74A号、88A号、98号などの竪穴住居出土諸例に次いで3例目、仮に「山邊家」であった場合は砂田中台遺跡98号竪穴住居例に次ぐ2例目である。いずれも9世紀前半ないし中葉に比定されている。本遺跡の場合は残念ながら断片で、グリッド出土であるため時期ははっきりしないが、器形から同様な時期を想定しておきたい。

SI-27から出土した平瓦は、瓦当面もしくは端面を遺存していないため時期ははっきりしない。格子目は大きな菱形で、近隣の寺院跡として挙げられる成東町真行寺廃寺跡、同湯坂廃寺跡にはこのような格子目は存在しないため、これらとの関連は薄いものと考えられる。ただ、胎土や焼成は異なるが、タタキ目に関しては上総国分寺創建時瓦と酷似していることが指摘できる。

4. おわりに

今回の調査では、弥生時代から平安時代にわたり非常に大きな成果が得られた。250,000㎡にも及ぶ広大な道庭遺跡全体の中では、ほんの1%にも満たない調査面積ながら、さまざまな時代の遺構がまさに所狭しと築かれたさまは、この台地が古より良好な居住域として認識されつづけてきたことを物語っている。しかし、今回の調査は極めて部分的なものであり、調査会による調査も虫食い状のものであるから本遺跡の全容が解明されたとはいえない。近年の開発事業の増加によって本遺跡の周辺でも数多くの調査が実施されており、各時代の遺跡もそれなりに増加してきているが、弥生時代に関して、周囲からあまりにも突出した状況の本遺跡の位置づけを論ずるにはまだ早く、今後の資料の増加を待つほかない。また古墳時代以降に関しては残念ながら後期以降の調査会調査部分についての成果は未報告であり、筆者の勉強不足もあってこれ以上は踏み込めないが、周辺の遺跡との関連などからみた本遺跡の位置付けなど、さらに詳細な分析を行う事によって興味深い事実も出てきそうである。

遺物計測表凡例

1. 各計測数値の単位はcm、－は計測不能、() は遺存部分での計測値を示す。
2. 計測値の上段は最大値、下段は最小値を示す。
2. 焼成はA+ (極めて良好)、A (良好)、B+ (比較的良好)、B (普通)、C+ (やや不良)、C (不良) である。
3. 遺物の色調の上段は内面、下段は外面を示す。
4. 胎土の混入物は目立つものや特異なもののみを記載し、一般的に見られるものは割愛した。
5. 第4表・第5表「技法」
 - 成形 A (非ロクロ)、B (巻上げロクロ使用)、C (ロクロ使用)、－ (不明)
 - 底部 A (静止ヘラ切り)、B (回転ヘラ切り)、C (静止糸切り)、D (回転糸切り)、－ (不明)
 - 調整 A (底部のみ静止もしくは手持ちヘラケズリ)
 - A' (底部周囲のみ手持ちヘラケズリ)
 - B (底部のみ回転ヘラケズリ)
 - C (底部および体部下端を静止もしくは手持ちヘラケズリ)
 - C' (体部下端と底部周囲のみ手持ちヘラケズリ)
 - C'' (体部下端のみ手持ちヘラケズリ)
 - D (底部および体部下端を回転ヘラケズリ)
 - E (体部下端のみ静止もしくは手持ちヘラケズリ)
 - F (その他)
 - 叩 (タタキ)、削 (ヘラケズリ)、撫 (ヘラナデ)、磨 (ヘラミガキ)

第2表 出土遺物計測表（古墳・杯類）①

遺構	挿図	図版	遺物	器種	口径	稜径	底径		器高	脚部					かえり部		焼成
							内面	外面		脚高	脚柱高	裾高	裾径	基部径	径	高さ	
SI-06	20	16	1	杯蓋模倣杯	14.0	16.2	-	-	4.9						15.0	1.5	A
			2	杯蓋模倣杯	12.4	15.0	8.0	5.0	4.4						13.0	1.3	B
			3	杯蓋模倣杯	15.0	17.0	-	-	(3.2)						15.4	1.7	B
			4	杯蓋模倣杯	13.0	14.8	4.0	3.8	4.8						13.2	1.7	A
			5	杯	14.6	15.4	5.0	5.0	4.7								A
			6	杯	15.8	14.8	-	-	(3.3)								A
			7	杯	13.4	14.0	3.0	-	4.4								A
			8	杯	15.0	15.0	-	-	(3.9)								A
			9	杯	15.5	16.2	7.6	4.4	4.2 3.8								A
			10	杯	15.0	-	-	-	(4.6)								A
			11	杯	15.0	-	4.0	2.0	5.4								A
			12	杯/椀	14.4	15.4	-	-	7.3								A
			13	杯	15.0	15.6	-	-	(5.0)								A
			14	高杯	15.4	13.6	-		(5.4)	-	-	-	-	-			A
			15	高杯	-	-	-		(9.5)	(7.9)	6.9	(1.0)	-	4.1			A
			16	椀	11.0	-	-	-	(4.4)								A
SI-07	24	17	1	杯	16.4	-	-	-	(4.8)								A
			2	杯	-	-	4.2	4.8	(2.7)	-	-	-	-	-			A
			3	杯	-	-	4.0	5.0	(2.4)	-	-	-	-	-			A
			4	高杯	-	-	-		(7.2)	(5.6)	(5.6)	-	-	4.4			A
SI-11	28	18	1	杯	14.6	15.0	5.8	4.4	5.0						13.8	1.5	A
			2	杯	12.7	12.9	4.8	2.5	5.4						11.8	1.6	A
			3	杯	15.2	15.8	6.4	-	-								A
			4	杯	13.6	14.2	3.8	3.0	5.4								A
			5	杯	14.6	-	7.4	2.4	5.5 5.2								A
			6	椀	11.6	11.6	-	-	(3.4)								A
			7	椀/鉢	14.0	14.6	-	-	8.4 8.0								A
			8	椀/鉢	12.2	15.1	-	-	7.3								B
			9	高杯	13.8	14.0	-		9.0 8.6	4.3 4.0	2.4 2.1	1.9 1.7	10.0	4.7			A
			10	高杯	14.2	-	4.2		9.0 8.4	4.7 4.2	3.0 2.5	1.7	9.9	4.8			A
			11	高杯	-	-	-		(5.3)	(4.5)	(4.5)	-	-	3.4			A
			12	高杯	-	-	-		(3.2)	(3.2)	(1.4)	1.8	9.0	-			B+
			13	高杯	-	-	-		(2.4)	(2.4)	-	(2.4)	9.8	-			C+
			14	高杯	-	-	-		(4.5)	4.5	-	-	9.2	4.8			B
			15	高杯	13.2	13.0	-		(3.4)	-	-	-	-	-			A
			16	高杯	20.0	9.6	6.8		7.5 6.8	-	-	-	-	-			A
			17	高杯	-	-	-		(5.2)	(4.6)	(4.6)	-	-	3.2			B+
			18	器台	6.4	-	3.6		(5.8)	(3.8)	-	-	-	4.0			A

色調	胎土		備考
	色調	混入物	
5YR-6/4(にぶい橙色)～5YR-3/1(黒褐色) 5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-3/2(暗赤褐色)	7.5YR-8/3(浅黄褐色)		
7.5YR-5/4(にぶい褐色)～7.5YR-2/1(黒色)	7.5YR-7/3(にぶい橙色)	砂粒、白色粒子	
10YR-3/1(黒褐色) 10YR-5/2(灰黄褐色)	10YR-7/3(にぶい黄褐色)	白色粒子 白色針状物質	
5YR-3/4(暗赤褐色)～5YR-1.7/1(黒色) 5YR-4/6(赤褐色)～5YR-1.7/1(黒色)	5YR-4/6(赤褐色)	砂粒、白色粒子	
5YR-5/8(暗赤褐色)～5YR-1.7/1(黒色) 5YR-6/6(橙色)～5YR-7/3(にぶい橙色)	5YR-7/3(にぶい橙色)	白色針状物質	
10YR-2/3(黒褐色)	5YR-5/4(にぶい褐色)		
7.5YR-6/8(橙色) 7.5YR-6/8(橙色)～7.5YR-4/2(灰褐色)	7.5YR-8/3(浅黄褐色)	白色粒子 白色針状物質	
7.5YR-6/4(にぶい橙色)～7.5YR-2/1(黒色) 7.5YR-5/6(明褐色)	10YR-4/2(灰黄褐色)	白色粒子	
7.5YR-7/6(橙色) 7.5YR-6/6(褐色)	7.5YR-7/6(褐色)	白色粒子 白色針状物質	
2.5YR-5/6(明赤褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～N-1.5/0(黒色)	10YR-7/4(にぶい黄褐色)	白色粒子 白色針状物質	
10R-6/6(赤褐色) 10YR-7/3(にぶい黄褐色)～N-1.5/0(黒色)	10YR-7/3(にぶい黄褐色)		内面赤彩
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10YR-2/1(黒色) 7.5YR-5/6(明褐色)～N-1.5/0(黒色)	7.5YR-5/6(明褐色)	砂粒	
7.5YR-3/2(黒褐色)～7.5YR-1.7/1(黒色) 7.5YR-1.7/1(黒色)～10YR-5/4(にぶい黄褐色)	7.5YR-1.7/1(黒色)	砂粒	
5YR-5/8(明赤褐色)	10YR-8/4(浅黄褐色)～10YR-1.7/1(黒色)		
10YR-7/4(にぶい黄褐色) 10R-5/6(赤色)	10YR-7/4(にぶい黄褐色)	砂粒、白色粒子	外面赤彩
7.5YR-3/4(暗褐色)～7.5YR-1.7/1(黒色) 7.5YR-5/4(にぶい褐色)～7.5YR-1.7/1(黒色)	7.5YR-6/6(褐色)	砂粒	
7.5YR-3/4(暗褐色)～10R-2/1(赤黒色) 7.5YR-3/4(暗褐色)～10R-2/1(赤黒色)	2.5YR-6/6(褐色)	砂粒	
2.5YR-5/6(明赤褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～N-1.5/0(黒色)	5YR-4/4(にぶい赤褐色)	砂粒	内面赤彩
2.5YR-5/6(明赤褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～N-1.5/0(黒色)	5YR-4/4(にぶい赤褐色)	砂粒	内面赤彩
(脚):10R-6/6(赤褐色)(杯):2.5YR-5/6(明赤褐色) 10R-4/6(赤色)～10R-5/6(赤色)	2.5YR-6/8(褐色)～2.5YR-6/6(褐色)	白色針状物質	外面赤彩
10R-4/6(赤色) 10R-4/6(赤色)～2.5Y-2/1(黒色)	10YR-8/4(浅黄褐色)	白色針状物質	全面赤彩
10R-5/6(赤色)～5YR-5/3(にぶい赤褐色) 10R-4/4(赤褐色)～5YR-4/3(にぶい赤褐色)	5YR-5/2(にぶい褐色)～N-1.5/0(黒色)	砂粒、白色針状物質	全面赤彩
10R-5/8(赤色) 10R-5/8(赤色)～2.5YR-7/8(褐色)	2.5YR-7/8(褐色)～7.5YR-3/1(黒褐色)	砂粒、白色針状物質	全面赤彩
10R-5/8(赤色) 10R-4/6(赤色)～10YR-5/4(にぶい黄褐色)	10YR-8/3(浅黄褐色)～7.5YR-7/6(褐色)	砂粒	全面赤彩
10R-4/8(赤色) 10R-4/8(赤色)～10R-2/1(赤黒色)	5YR-6/8(褐色)	砂粒	全面赤彩
10R-5/6(赤色) 10R-6/6(赤褐色)	10R-6/6(赤褐色)	白色針状物質	全面赤彩
2.5Y-7/3(浅黄色)～2.5YR-5/6(明赤褐色) 7.5YR-6/6(褐色)～7.5YR-5/3(にぶい褐色)	7.5YR-6/6(褐色)～10YR-1.7/1(黒色)	白色針状物質	内面一部赤彩
2.5YR-6/8(褐色)～7.5YR-6/6(褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～7.5YR-6/6(褐色)	2.5YR-6/8(褐色)	白色針状物質	二次的に被熱
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10R-5/6(赤色) 10R-5/6(赤色)	7.5YR-1.7/1(黒色)	白色針状物質	全面赤彩
10R-4/4(赤褐色)～7.5YR-7/4(にぶい褐色) 10R-3/6(暗赤色)～10R-3/4(暗赤色)	-	白色針状物質	全面赤彩
10YR-7/4(にぶい黄褐色) 10R-5/6(赤色)	10YR-7/3(にぶい黄褐色)～10YR-1.7/1(黒色)	白色針状物質	外面赤彩
2.5Y-2/1(黒色)～10YR-7/4(にぶい黄褐色) 2.5YR-4/6(赤褐色)	2.5YR-2/1(黒色)～10YR-7/4(にぶい黄褐色)	雲母微粒 白色針状物質	外面赤彩
7.5YR-6/4(にぶい褐色)～2.5YR-6/6(褐色)	7.5YR-6/4(にぶい褐色)	白色針状物質	
5YR-6/6(褐色) 5YR-6/6(褐色)～10YR-7/3(にぶい黄褐色)	5YR-6/6(褐色)		
10R-5/6(赤色) 10R-6/6(赤褐色)	10R-6/6(赤褐色)	白色針状物質	全面赤彩
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～7.5YR-5/8(明褐色) 2.5YR-4/8(赤褐色)～10R-4/8(赤色)	N-3/0(暗灰色)～2.5YR-6/6(褐色)		全面赤彩
2.5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-4/2(灰赤色) 2.5YR-4/6(赤褐色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)	白色粒子	
5YR-3/2(暗赤褐色) 5YR-2/1(黒褐色)	5YR-4/6(赤褐色)	砂粒、白色針状物質	

第2表 出土遺物計測表(古墳・杯類)②

遺構	挿図	図版	遺物	器種	口径	稜径	底径		器高	脚部					かえり部		焼成
							内面	外面		脚高	脚柱高	裾高	裾径	基部径	径	高さ	
SI-11	28	19	19	鉢	10.0	10.4	2.4	5.8	4.4 4.2								A
			20	鉢	8.2	9.4	-	1.2	6.4 5.8								A
SI-13	51	23	1	杯	12.8	13.6	-	-	(3.5)								B+
			2	碗	11.4	11.8	-	-	(5.1)								B+
SI-16	33	20	1	杯蓋模倣杯	13.6	15.4	7.0	2.5	4.5						13.4	1.5	B+
			2	杯蓋模倣杯	13.6	14.8	6.8	4.0	(4.9)						14.2	1.4	A+
			3	杯蓋模倣杯	12.0	11.6	-	-	(2.7)						13.6	1.4	A
			4	杯蓋模倣杯	12.0	11.6	-	-	(2.6)	-	-	-	-	-	10.0	1.6	A
			5	高杯	17.6	16.4	-	-	(5.0)	-	-	-	-	-	15.0	1.8	A
SI-17	9	15	1	高杯	20.0	10.0	7.2	-	17.4 17.1	9.4	7.9	1.5	15.0	4.2			A+
			2	高杯	19.4	10.6	-	-	(4.7)	-	-	-	-	-			A
			3	高杯	-	-	-	-	(10.7)	10.0	8.4	1.6	16.4	4.2			B+
			4	高杯	-	-	-	-	(9.5)	8.5	7.0	1.5	12.8	3.0			A
			5	高杯	-	-	-	-	(10.7)	9.7	8.1	1.6	13.4	3.6			A
			6	高杯	-	-	-	-	(9.8)	9.8	8.1	1.7	14.4	3.4			A
SI-18	35	20	8	器台	-	-	-	-	(2.9)	(2.5)	(2.5)	-	-	3.0			A
SI-20	37	21	1	杯	14.3	15.0	4.6	6.4	5.9								B
			2	杯/碗	11.2	-	7.2	5.0	5.4 5.2								A
			3	高杯	17.4	9.0	6.0	-	(15.9)	(8.6)	7.5	-	-	2.8			A
			4	器台	-	-	-	-	(4.4)	(4.4)	-	-	10.0				A+
			5	高杯	-	-	-	-	(7.8)	(6.5)	(6.5)	-	-	3.8			A
			6	高杯	-	-	-	-	(7.0)	(7.0)	6.0	(1.0)	-	3.0			A
SI-21	40	21	1	高杯	-	-	-	-	(9.0)	(8.2)	7.1	(1.1)	-	3.2			A+
			2	高杯	-	-	-	-	(7.4)	(7.4)	6.8	(0.7)	-	3.4			A
			3	高杯	-	-	-	-	(7.6)	(7.1)	6.6	(0.5)	-	3.6			B
			4	高杯	-	-	-	-	(9.4)	(8.9)	7.4	(1.5)	-	3.8			A
			5	高杯	10.8	10.2	-	-	(3.8)	-	-	-	-	-			A
			6	器台	4.0	-	-	-	(3.0)	(2.2)	-	-	-	2.4			B
SI-25	17	16	14	器台	-	-	-	-	(4.3)	(3.0)	-	-	-	2.4			B
			15	器台	-	-	-	-	(3.8)	(3.0)	-	-	-	2.2			A
			16	器台	-	-	-	-	(3.7)	3.7	-	-	7.6	3.0			B+
SI-26	64	25	24	高杯	-	-	-	-	(4.9)	(4.9)	3.2	1.7	9.0	3.4			B+
			25	碗/高杯	14.2	-	-	-	6.3 6.0	-	-	-	-	-			B+
SI-30	45	22	1	高杯	13.6	-	7.0	-	(5.2)								B
			2	碗/鉢	15.2	14.6	-	-	(8.7) (8.5)								A
遺構外	81	28	1	杯蓋模倣杯	12.6	13.2	-	-	4.3						11.8	2.0	A
			2	杯	14.8	-	3.4	5.0	5.3								A+
			3	鉢	8.4	9.4	-	-	5.5								A+

色調	胎 土		備 考
	色調	混入物	
10R-4/6(赤色) 10R-4/6(赤色)～10R-4/3(赤褐色)	5YR-7/6(橙色)	砂粒、白色針状物質	小型壺再生品 内面赤彩
2.5YR-6/8(橙色) 2.5YR-6/8(橙色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)	—	灰色砂粒	小型壺再生品 内面赤彩
2TYR-5/6(赤褐色) 10R-4/6(赤色)	2.5YR-7/6(橙色)～7.5YR-4/1(褐灰色)	白色針状物質	全面赤彩
10YR-7/4(にぶい黄褐色)～5YR-7/6(橙色) 5YR-7/6(橙色)～5YR-5/6(明赤褐色)	10YR-7/3(にぶい黄褐色)～7.5YR-7/6(橙色)	砂粒、白色粒子	
7.5YR-5/6(明褐色)～10YR-3/2(黒褐色)	7.5YR-6/6(橙色)	白色針状物質	内面黒色処理 外面黒斑
7.5YR-4/6(褐色)～7.5YR-2/2(黒褐色) 7.5YR-5/6(明褐色)～2.5YR-4/6(赤褐色)	10YR-3/1(黒褐色)～10YR-5/2(灰黄褐色)	白色粒子 白色針状物質	内面外面黒斑
7.5YR-6/6(褐色)～7.5YR-3/1(黒褐色) 2.5YR-4/8(赤褐色)～7.5YR-6/4(にぶい橙色)	7.5YR-6/4(にぶい橙色)	白色粒子 白色針状物質	内面黒色処理 外面スス付着
5YR-2/2(黒褐色)～5YR-1.7/1(黒色) 5YR-5/4(にぶい赤褐色)～7.5YR-4/2(灰褐色)	10YR-7/3(にぶい黄褐色)	白色粒子	内面黒色処理 外面黒斑
10YR-6/4(にぶい黄褐色) 5YR-5/6(明赤褐色)	5YR-5/6(明赤褐色)	砂粒、白色粒子	外面赤彩
(脚):7.5YR-7/4(にぶい橙色)(杯):10R-5/6(赤色) 10R-5/6(赤色)	10YR-5/6(黄褐色)～10YR-4/6(褐色)	砂粒、白色粒子	全面赤彩 脚部内面黒斑
10R-5/6(赤色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)	砂粒、白色粒子	全面赤彩
5YR-7/6(橙色)～5YR-5/8(明赤褐色) 2.5YR-5/8(明赤褐色)～2.5YR-6/6(橙色)	5YR-7/6(橙色)	砂粒、白色粒子	外面赤彩
7.5YR-7/4(にぶい橙色)～5YR-6/8(褐色) 5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)	5YR-7/4(にぶい橙色)	砂粒、白色粒子 白色針状物質	外面赤彩
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10YR-4/6(褐色) 10R-4/6(赤色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10YR-4/6(褐色)	砂粒、白色粒子	脚部内面タール状物質
(脚):7.5YR-6/6(褐色)(杯):10R-3/4(暗赤色) 10R-4/6(赤色)	7.5YR-6/6(褐色)	砂粒、白色粒子	脚部外面タール状物質 外面赤彩
10R-3/3(明赤褐色)～10R-4/8(赤色) 10R-4/8(赤色)～10R-5/8(赤色)	5YR-5/8(明赤褐色)	砂粒、白色粒子	外面赤彩
10R-3/3(明赤褐色)～10R-4/8(赤色) 10R-4/8(赤色)～10R-5/8(赤色)	5YR-5/8(明赤褐色)	砂粒、白色粒子	全面赤彩
10R-4/6(赤色)～10R-6/6(赤褐色) 10R-5/8(赤色)～5YR-6/4(にぶい橙色)	5YR-5/6(明赤褐色)	白色粒子	底面“X”へら書 全面赤彩
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～2.5YR-5/6(明赤褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)	破碎土師器 砂粒、白色粒子	全面赤彩
7.5YR-6/4(にぶい褐色) 10R-4/6(赤色)～10R-5/6(赤色)	7.5YR-6/4(にぶい褐色)	白色針状物質	外面赤彩
7.5YR-4/2(灰褐色) 10R-5/6(赤色)	7.5YR-4/2(灰褐色)	砂粒、白色粒子	全面赤彩
5YR-6/6(褐色) 10R-5/6(赤色)	10YR-4/3(にぶい黄褐色)	砂粒、白色粒子	全面赤彩
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10YR-3/1(黒褐色) 10YR-6/6(明黄褐色)～10YR-3/1(黒褐色)	10YR-4/6(褐色)～10YR-3/1(黒褐色)	破碎土師器 白色粒子	二次的に被熱?
7.5YR-7/6(褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)	10YR-7/6(明黄褐色)～5Y-3/1(オリーブ黒色)	白色粒子	外面赤彩
2.5YR-5/4(にぶい赤褐色)～2.5YR-5/2(灰赤色) 2.5YR-6/8(褐色)～5Y-4/1(灰色)	2.5YR-5/4(にぶい赤褐色) ～7.5YR-5/3(にぶい褐色)	砂粒、雲母微粒	二次的に被熱
5YR-6/4(にぶい褐色) 10R-5/6(赤色)	7.5YR-7/4(にぶい褐色)～10YR-5/2(灰黄褐色)	白色粒子	外面赤彩
10R-4/6(赤色)～5YR-2/1(黒褐色) 10R-4/6(赤色)	5YR-6/4(にぶい褐色)	白色粒子 雲母微粒	全面赤彩
2.5YR-7/8(褐色)～2.5YR-6/8(褐色) 2.5YR-7/8(褐色)～2.5YR-4/6(赤褐色)	2.5YR-7/8(褐色)～2.5YR-6/8(褐色)	雲母	外面赤彩
7.5YR-5/6(明褐色) 10R-4/8(赤色)	2.5YR-6/6(褐色)	雲母微粒	外面赤彩
5YR-6/6(褐色) 2.5YR-6/6(褐色)	5YR-6/6(褐色)	砂粒、白色粒子	外面・口縁部内面赤彩
7.5YR-5/4(にぶい褐色)～5YR-5/4(にぶい赤褐色) 2.5YR-4/4(にぶい赤褐色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)	白色粒子 雲母微粒	
5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-6/8(褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)	10YR-8/4(浅黄褐色)～10YR-3/1(黒褐色)	砂粒、白色粒子 石英粒子	外面赤彩
5YR-6/6(褐色)～7.5YR-7/6(褐色) 5YR-6/6(褐色)～2.5YR-6/8(褐色)	5YR-6/6(褐色)～2.5YR-6/8(褐色)	白色針状物質	全面赤彩?
2.5YR-4/6(赤褐色)～5YR-7/6(褐色) 5YR-7/6(褐色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色)	10YR-3/1(黒褐色)		全面赤彩
2.5YR-4/6(赤褐色)～2.5YR-2/2(極暗赤褐色) 10R-3/6(暗赤色)～10R-4/6(赤色)	5YR-2/1(黒褐色)～2.5YR-6/8(褐色)	白色粒子 白色針状物質	全面赤彩
10R-5/8(赤色) 10R-5/8(赤色)～5YR-6/6(褐色)	5YR-6/6(褐色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色)	雲母微粒	
10R-4/8(赤色)	10YR-5/4(にぶい黄褐色)	白色針状物質	全面赤彩
10YR-7/4(にぶい黄褐色)～7.5YR-5/6(明褐色) 2.5YR-5/8(明赤褐色)～10YR-7/4(にぶい黄褐色)	10YR-7/4(にぶい黄褐色)～N-1.5/0(黒色)		外面赤彩?

第3表 出土遺物計測表（古墳・甕類）①

遺構	挿図	図版	遺物	種別	器種	口徑		縁帯幅	類部			最大径	底部			器高	焼成	
						内径	外径		内径	外径	高さ		外径	内径	最大厚			
SI-06	20	17	20	土師器	小型甕	10.1	10.7		10.5	12.8	2.2	12.8	5.8	-	1.0	10.4	B	
			21	土師器	無類壺	11.8	12.4						16.2	-	-	-	(6.3)	B+
			22	土師器	甕	12.2	12.6		10.9	11.6	3.2	-	-	-	-	(5.9)	B+	
			23	土師器	小型壺	10.7	10.9		6.4	7.6	3.0	11.8	-	-	-	(5.8)	A	
			24	土師器	甕	16.1	17.3		11.8	13.5	4.6	-	-	-	-	(8.0)	A	
			25	土師器	甕/壺	-	-		-	-	-	-	8.8	8.2	1.4	(4.0)	B+	
			26	土師器	甕/壺	-	-		-	-	-	-	7.0	6.0	1.0	(3.6)	B+	
			27	土師器	S字口縁甕	14.0	14.8	1.2	12.0	13.4	1.6	-	-	-	-	(3.0)	A+	
SI-07	24	17	3	土師器	甕	14.3	15.3		11.8	13.4	2.7	(23.4)	-	-	-	(13.6)	A+	
SI-11	28	19	21	土師器	小型壺	-	-		4.8	6.4	(0.2)	9.6	3.2	2.4	0.8	(6.5)	A+	
			22	土師器	小壺	8.0	8.2		3.8	5.0	3.1	5.4	2.8	2.8	0.5	6.1	A	
			23	土師器	埴	19.0	19.4		8.0	9.4	9.5	-	-	-	-	(9.7)	A	
			24	土師器	小型甕	12.6	12.9		9.8	12.3	3.0 2.8	18.0	6.1	6.4	1.3	18.6 18.2	B	
			25	土師器	台付甕	-	-		-	-	-	-	6.8	4.6	-	(4.0)	A	
			27	土師器	壺	13.6	14.0	3.2	-	-	(2.8)	-	-	-	-	(2.8)	A	
			28	土師器	甕	12.4	13.0		10.0	11.4	2.9	21.4	8.0	-	1.0	25.7	B+	
			29	土師器	甕	17.6	18.4		14.4	16.2	5.8	-	-	-	-	(9.6)	A	
			30	土師器	甕	15.0	15.8		11.4	12.8	5.3	(30.0)	-	-	-	(16.5)	A	
			31	土師器	甕	17.2	18.8		14.4	16.3	5.2	27.6	-	-	-	(20.2)	B+	
	32	土師器	甕	16.4	17.2		13.0	15.0	3.3	19.6	-	-	-	(17.5)	B			
	33	土師器	甕	24.0	25.2		22.6	23.8	3.7 3.0	27.2	-	-	-	22.0 21.6	A			
	34	土師器	甗	21.6	22.3		20.6	21.8	2.7	24.8	8.8	7.8	-	26.2	A			
	35	土師器	甗	25.3	27.3		-	-	-	26.0	7.3	6.3	-	21.0 20.4	A			
	36	土師器	甕	-	-		-	-	-	(23.0)	7.2	4.0	1.0	(10.2)	A			
	37	土師器	甕	-	-		-	-	-	(24.2)	8.4	8.4	1.8	(7.5)	B			
	38	土師器	甕	-	-		-	-	-	-	6.0	4.0	2.0	(2.8)	B			
	SI-12	48	22	7	土師器	小壺	-	-		4.4	5.4	(0.2)	5.8	2.2	2.0	0.6	3.1	A
SI-16	33	20	6	土師器	甕	14.8	15.6		12.0	13.2	2.8	(18.4)	-	-	-	(6.8)	A	
			7	土師器	甕	19.6	20.0		16.3	18.2	2.3	-	-	-	-	(7.0)	B+	
SI-17	9	15	7	土師器	壺	18.0	18.6	3.2	-	-	(4.1)	-	-	-	-	(4.1)	A	
			8	土師器	埴	18.4	18.8		-	5.0	7.4	-	-	-	-	(7.4)	A+	
			9	土師器	甕	12.8	13.9		11.9	10.3	3.2 2.9	24.1	8.5	4.0	0.8	25.0 24.8	A+	
			10	土師器	甕	14.4	15.0		10.2	11.8	3.4	21.0	-	-	-	(19.4)	B+	
			11	土師器	甕	18.2	18.6		12.4	14.6	3.2 2.8	23.8	4.7	4.0	1.3	24.2 23.8	A	
			12	土師器	壺	18.0	18.8		15.7	17.1	2.7	23.1	-	-	-	(15.4)	B+	
			13	土師器	小型壺	15.0	15.4		11.5	13.4	2.2	22.6	-	-	-	(9.7)	A	
			14	土師器	小型壺	9.6	9.6		5.6	6.4	3.0	6.8	2.4	3.2	0.7	6.0	A	
15	土師器	小型壺	13.0	13.4		8.9	9.8	3.0	10.0	3.2	4.8	1.0	8.0 7.7	A+				

色調	胎 土		備考
	色調	混入物	
7.5YR-4/6(褐色) 5YR-4/6(赤褐色)～N-1.5/0(黒色)	5YR-4/6(赤褐色)	白色粒子、雲母	
7.5YR-6/6(橙色) 7.5YR-6/6(橙色)～7.5YR-7/4(にぶい橙色)	7.5YR-7/4(にぶい橙色)	砂粒、白色粒子	
10YR-5/3(にぶい黄褐色)～5Y-2/1(黒色) 2.5YR-4/8(赤褐色)～7.5YR-5/4(にぶい褐色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)～2.5Y-5/2(暗灰黄色)		
7.5YR-7/6(橙色) 7.5YR-7/6(橙色)～2.5YR-6/8(褐色)	7.5YR-7/6(褐色)	砂粒	
5YR-7/6(褐色) 7.5YR-7/6(褐色)	2.5YR-7/8(褐色)～2.5YR-5/2(灰赤色)	黒色粒子、白色粒子	
7.5YR-6/6(褐色)～7.5YR-5/3(にぶい褐色) 5YR-5/6(明赤褐色)～7.5YR-4/3(にぶい赤褐色)	5YR-6/6(褐色)～5YR-6/2(灰褐色)	白色粒子 白色針状物質	外面スス付着
7.5YR-2/1(黒色)～7.5YR-2/3(極暗褐色) 5YR-5/6(明赤褐色)～7.5YR-4/4(にぶい赤褐色)	5YR-6/6(褐色)～5YR-1.7/1(黒色)	砂粒、白色粒子	内面焦付
10YR-6/3(にぶい黄褐色)～10YR-3/2(黒褐色) 10YR-5/3(にぶい黄褐色)～10YR-2/2(黒褐色)	10YR-6/3(にぶい黄褐色)	黒色砂粒、雲母微粒	搬入品? 外面スス付着
7.5YR-6/6(褐色)～5Y-2/1(黒色) 2.5Y-5/4(黄褐色)～7.5YR-5/6(明褐色)	2.5Y-5/4(黄褐色)～7.5YR-6/6(褐色)		
5YR-7/4(にぶい橙色) 5YR-7/4(にぶい橙色)～2.5YR-6/6(褐色)	5YR-7/4(にぶい橙色)		
7.5YR-5/4(にぶい褐色)～10R-4/8(赤色) 10R-4/8(赤色)	7.5YR-5/4(にぶい褐色)		外面・口縁部内面赤彩
10R-4/6(赤色)～10R-2/3(極暗赤褐色) 10R-4/6(赤色)～5YR-5/6(明赤褐色)	5YR-5/3(にぶい赤褐色)～N-1.5/(黒色)	砂粒、白色針状物質	全面赤彩
10YR-7/4(にぶい黄褐色)から OYR-7/2(にぶい黄褐色) 2.5YR-6/8(褐色)～10YR-7/6(明黄褐色)	2.5YR-6/8(褐色)～10YR-7/6(明黄褐色)	砂粒、白色針状物質	
7.5YR-6/4(にぶい褐色)～7.5YR-2/1(黒色)	7.5YR-6/4(にぶい褐色)	白色粒子	
10YR-7/4(にぶい黄褐色)～10YR-5/2(灰黄褐色)	10YR-7/3(にぶい黄褐色)	雲母、白色針状物質	
5YR-6/8(褐色)～5YR-2/1(黒褐色) 5YR-7/8(褐色)～5YR-3/1(黒褐色)	5YR-1.7/1(黒色)～7.5YR-7/3(にぶい褐色)	砂粒	
7.5YR-7/8(黄褐色)～7.5YR-7/6(褐色)	7.5YR-7/8(黄褐色)～7.5YR-7/6(褐色)	白色粒子	
2.5YR-5/8(明赤褐色)～2.5YR-3/1(暗赤灰色) 5YR-7/6(褐色)～5YR-4/3(にぶい赤褐色)	5YR-7/4(にぶい褐色)～5YR-4/2(灰褐色)	砂粒、白色粒子	
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10YR-2/3(黒褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-3/1(暗赤灰色)	2.5YR-1.7/1(黒色)～10YR-2/1(黒色)	白色粒子 白色針状物質	
2.5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-1.7/1(赤黒色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-1.7/1(赤黒色)	砂粒、白色粒子 白色針状物質	
5YR-6/6(褐色)～5YR-4/1(褐灰色) 7.5YR-7/6(褐色)～7.5YR-1.7/1(黒色)	5YR-6/8(褐色)	白色針状物質	
10YR-6/6(明黄褐色)～2.5YR-5/6(明赤褐色) 5YR-6/8(褐色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)	10YR-6/6(明黄褐色)	砂粒、白色粒子	
10YR-4/3(にぶい黄褐色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色) 7.5YR-6/4(にぶい褐色)～7.5YR-5/4(にぶい褐色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)	砂粒、白色針状物質	
10YR-7/4(にぶい黄褐色)～10YR-3/1(黒褐色) 10YR-7/4(にぶい黄褐色)～10YR-1.7/1(黒色)	7.5YR-6/6(褐色)	白色針状物質	
5YR-6/6(褐色)～5YR-4/2(灰褐色) 5YR-1.7/1(黒色)～7.5YR-5/3(にぶい褐色)	7.5YR-1.7/1(黒色)～5YR-6/6(褐色)	白色粒子、雲母 白色針状物質	
2.5YR-6/8(褐色) 7.5YR-6/4(にぶい褐色)～N-1.5/0(黒色)	2.5YR-6/8(褐色)	砂粒、白色粒子 白色針状物質	
5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-2/2(黒褐色) 5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-5/3(にぶい赤褐色)	10YR-4/2(灰黄褐色)～10YR-7/4(にぶい黄褐色)	砂粒、雲母粒	内面外面黒斑
5YR-4/6(赤褐色)～7.5YR-5/3(にぶい褐色) 5YR-4/6(赤褐色)～7.5YR-5/4(にぶい褐色)	10R-4/6(赤色)	砂粒、白色粒子 雲母粒子	外面黒斑・スス付着
5YR-5/6(明赤褐色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色) 7.5YR-6/4(にぶい褐色)	7.5YR-6/4(にぶい褐色)	砂粒	内面外面黒斑
10YR-5/4(にぶい黄褐色)～10YR-3/3(暗褐色) 10YR-5/4(にぶい黄褐色)～10YR-2/2(黒褐色)	10YR-4/4(褐色)	白色粒子、雲母微粒	
2.5YR-4/8(赤褐色)～5YR-1.7/1(黒色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-4/6(赤褐色)	10YR-7/3(にぶい黄褐色)～5YR-6/6(褐色)	白色粒子 白色針状物質	
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10YR-2/1(黒色) 10YR-6/4(にぶい黄褐色)～7.5YR-6/6(褐色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)	白色粒子、雲母粒	
5YR-7/6(褐色)～7.5YR-8/4(浅黄褐色) 5YR-6/6(褐色)～7.5YR-8/4(浅黄褐色)	10YR-8/4(浅黄褐色)	白色粒子、雲母微粒	内面外面黒斑
7.5YR-5/3(にぶい褐色)～7.5YR-4/4(褐色) 10YR-4/3(にぶい黄褐色)～5YR-3/3(暗褐色)	5YR-5/6(暗褐色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色)	白色粒子、雲母粒	
10YR-6/4(にぶい黄褐色)～10YR-5/3(にぶい黄褐色) 7.5YR-6/4(にぶい褐色)～10YR-4/2(灰褐色)	10YR-3/2(黒褐色)～7.5YR-6/4(にぶい褐色)	白色粒子、雲母粒	内面外面黒斑 内面炭化物、外面スス付着
2.5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-6/6(褐色)	2.5YR-3/1(黒褐色)～10YR-6/3(にぶい黄褐色)	砂粒、白色粒子	外面スス付着 内面外面黒斑
5YR-6/8(褐色)～2.5YR-7/8(褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-5/8(明赤褐色)	5YR-7/6(褐色)	白色粒子、雲母微粒	
2.5YR-5/8(明赤褐色)～2.5YR-2/2(極暗赤褐色)	5YR-7/6(褐色)	白色粒子、雲母微粒	外面・口縁部内面赤彩

第3表 出土遺物計測表 (古墳・甕類) ②

遺構	挿図	図版	遺物	種別	器種	口徑		縁帶幅	頸部			最大径	底部			器高	焼成	
						内径	外径		内径	外径	高さ		外径	内径	最大厚			
SI-17	9	15	16	土師器	小型壺	-	-	-	-	-	-	9.0	3.8	3.4	0.9	(4.3)	A+	
			17	土師器	甕	12.4	13.2	3.5	8.2	10.0	5.2	-	-	-	-	-	(5.8)	B
SI-18	35	20	1	土師器	甕	14.6	15.0	0.6	12.8	14.2	1.2	-	-	-	-	(5.7)	A	
			2	土師器	甕	15.0	15.4	/	10.6	12.6	3.1	(15.6)	-	-	-	-	(6.6)	A+
			3	土師器	甕	-	-	/	10.2	11.8	-	18.0	6.0	4.0	0.8	(14.8)	A	
			4	土師器	小型甕	-	-	/	5.2	6.6	(0.3)	(11.0)	-	-	-	-	(3.8)	A
			5	土師器	小型壺	-	-	/	-	-	-	10.0	3.6	2.0	0.7	(0.7)	B+	
			6	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	-	8.4	5.8	-	-	(2.8)	B+
			7	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	-	7.6	7.0	1.5	(2.6)	A	
SI-20	37	21	7	土師器	小型甕	-	-	/	9.8	11.0	(0.5)	10.8	4.0	6.0	0.8	(4.4)	B+	
SI-21	40	21	7	土師器	壺	-	-	/	7.0	8.0	(0.9)	15.2	-	-	-	(9.4)	B+	
			8	土師器	小型壺	9.6	10.0	/	7.4	8.2	1.9	8.8	-	-	-	5.1	A	
			9	土師器	壺	19.4	19.8	5.0	7.4	8.8	6.0	-	-	-	-	(6.3)	B+	
			10	土師器	台付甕	-	-	/	-	-	-	-	6.4	5.0	-	-	(3.3)	A
			11	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	(8.4)	4.0	3.6	0.7	(2.2)	A	
12	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	(8.6)	4.8	3.4	1.0	(2.7)	A				
SI-25	17	16	17	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	-	4.6	3.0	-	(2.6)	A	
			18	土師器	甕	15.6	16.0	/	11.8	13.6	3.5	(18.2)	-	-	-	(7.4)	B+	
SI-28 SI-29	42	21	1	土師器	甕	11.4	11.8	/	7.8	9.2	2.4	-	-	-	-	(4.0)	A+	
			2	土師器	小型壺	9.6	10.0	/	5.2	6.4	3.8	-	-	-	-	(4.3)	A	
			3	土師器	甕	12.3	12.8	/	9.2	10.6	3.0	-	-	-	-	(3.4)	B+	
			4	土師器	壺	18.0	18.4	4.8	-	-	(4.7)	-	-	-	-	(4.7)	A	
			5	土師器	甕	15.4	16.0	/	11.6	13.0	2.9	-	-	-	-	(2.9)	A	
			6	土師器	甕	18.4	18.8	/	14.2	16.4	3.1	-	-	-	-	(3.7)	A	
			7	土師器	甕	11.4	11.6	0.2	9.3	10.2	2.2	13.2	-	-	-	(9.5)	A	
SI-30	45	22	3	土師器	甕	18.4	19.4	/	15.0	17.0	3.7	23.0	-	-	-	(20.0)	B+	
			4	土師器	甕	18.8	19.3	/	14.8	16.6	3.6	22.6	-	-	-	(20.0)	B+	
			5	土師器	小壺	-	-	/	4.2	5.4	(0.2)	5.8	2.4	2.6	0.7	(3.1)	A	
SD-1	71	27	10	土師器	甕	16.0	16.3	0.8	13.2	14.6	2.7	22.0	-	-	-	(17.7)	A	
SK-43	77	27	1	土師器	甕	16.8	17.2	/	12.8	15.0	3.0 2.7	23.0	6.1	6.8	1.6	26.7 24.5	B+	
遺構外	81	28	6	土師器	壺	15.8	16.6	2.9	-	-	(5.8)	-	-	-	-	(5.8)	A	
			7	土師器	甕/壺	11.4	11.6	/	7.4	8.6	2.1	9.8	2.9	2.4	0.8	9.9 8.2	A	
			8	土師器	甕/壺	13.6	14.2	/	10.4	11.4	1.7	12.0	5.2	3.2	0.7	8.8 8.4	A	
			9	土師器	小型甕	12.8	13.4	/	9.0	10.6	2.4	13.6	-	-	-	(12.2)	A	
			10	土師器	甕	-	-	/	-	-	-	-	6.0	5.2	1.3	(2.6)	A	
			11	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	-	7.0	6.0	1.8	(2.2)	A	
			12	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	-	6.4	3.0	1.6	(3.4)	A	
13	土師器	甕/壺	-	-	/	-	-	-	-	5.8	5.4	1.4	(2.2)	A				

色調	胎 土		備 考
	色調	混入物	
7.5YR-7/4(にぶい 橙 色) 7.5YR-6/4(にぶい 橙 色)～10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色)	2.5YR-6/6(橙 色)	外面黒斑	
7.5YR-6/6(橙 色)～7.5YR-4/2(灰 褐 色) 5YR-6/6(橙 色)～5YR-5/4(にぶい 赤 褐 色)	10YR-4/3(にぶい 黄 褐 色)～10YR-3/2(黒 褐 色)	白色針状物質	
5YR-4/8(赤 褐 色)～10YR-5/3(にぶい 黄 褐 色) 5YR-5/6(明 赤 褐 色)～7.5YR-6/4(にぶい 橙 色)	5YR-5/6(明 赤 褐 色)	白色粒子	
5YR-5/6(明 赤 褐 色)～7.5YR-5/4(にぶい 褐 色) 7.5YR-3/1(黒 褐 色)～7.5YR-3/3(黒 褐 色)	5YR-5/6(明 赤 褐 色)	雲母微粒	
7.5YR-6/4(にぶい 橙 色)～10YR-5/4(にぶい 黄 褐 色) 2.5YR-4/4(にぶい 赤 褐 色)～10YR-5/3(にぶい 黄 褐 色)	7.5YR-6/4(にぶい 橙 色)	砂粒、白色粒子	
7.5YR-6/4(にぶい 橙 色) 7.5YR-6/6(橙 色)～10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色)	10YR-3/1(黒 褐 色)～10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色)	白色粒子、雲母微粒	
5YR-6/6(橙 色)～5YR-6/3(にぶい 褐 色) 5YR-5/8(明 赤 褐 色)～5YR-4/4(にぶい 赤 褐 色)	10YR-7/3(にぶい 黄 橙 色)	砂粒、白色粒子 白色針状物質	
2.5Y-6/1(黄 灰 色)～2.5Y-3/1(黒 褐 色) 5YR-5/6(明 黄 褐 色)	5YR-5/6(明 赤 褐 色)～2.5Y-6/1(黄 灰 色)	砂粒、白色粒子	
5YR-6/6(橙 色) 7.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～10YR-6/6(明 黄 褐 色)	5YR-6/6(橙 色)	砂粒、白色粒子	
2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～7.5YR-1.7/1(黒 色) 2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～5YR-5/6(橙 色)	5YR-6/6(橙 色)	白色粒子 白色針状物質	
7.5YR-7/6(橙 色) (口縁):10R-4/6(赤 色) 10R-4/6(赤 色)	10YR-8/4(浅 黄 橙 色)	白色針状物質	
7.5YR-6/4(にぶい 橙 色) (口縁):10R-5/6(赤 色) 10R-5/6(赤 色)	7.5YR-6/4(にぶい 橙 色)	白色粒子、雲母微粒	
2.5YR-5/8(明 赤 褐 色) 2.5YR-4/6(赤 褐 色)～2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)	2.5YR-6/6(橙 色)	白色粒子、雲母微粒 白色針状物質	
10YR-4/1(褐 灰 色)～10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色) 7.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～10YR-7/4(にぶい 黄 橙 色)	10YR-3/1(黒 褐 色)	黒色砂粒、雲母微粒	
5YR-5/6(明 赤 褐 色) 5YR-5/6(明 赤 褐 色)～7.5YR-5/4(にぶい 褐 色)	5YR-5/6(明 赤 褐 色)	白色粒子、雲母微粒	
10YR-7/4(にぶい 黄 橙 色)～10YR-5/4(にぶい 黄 褐 色) 10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色)	7.5YR-6/6(橙 色)	砂粒、雲母微粒	
2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)	7.5YR-6/4(にぶい 橙 色)	白色粒子 白色針状物質	
7.5YR-5/6(明 褐 色)～10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色) 5YR-5/6(明 褐 色)～5YR-5/2(灰 褐 色)	10YR-7/3(にぶい 黄 橙 色)	砂粒、雲母微粒	
5YR-6/4(にぶい 橙 色) 2.5YR-6/6(橙 色)～5YR-3/2(暗 赤 褐 色)	5YR-6/4(にぶい 橙 色)	黒色砂粒	
2.5YR-4/6(赤 褐 色)～2.5YR-6/6(橙 色) 2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～2.5YR-4/3(にぶい 赤 褐 色)	2.5YR-7/3(淡 赤 橙 色)	砂粒、白色粒子	
2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～5YR-7/4(にぶい 橙 色) 10R-5/6(赤 色)～2.5YR-7/8(橙 色)	2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～5YR-7/4(にぶい 橙 色)	砂粒、白色粒子	
7.5YR-6/6(橙 色)～5YR-6/6(橙 色) 5YR-6/8(橙 色)	7.5YR-7/6(橙 色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	
5YR-4/8(赤 褐 色)～5YR-5/6(明 赤 褐 色) 5YR-5/8(明 赤 褐 色)	10YR-8/3(淡 黄 橙 色)～7.5YR-7/6(橙 色)	砂粒、白色粒子 白色針状物質	
7.5YR-7/6(橙 色)～7.5YR-2/3(極 暗 褐 色) 7.5YR-7/4(にぶい 橙 色)～7.5YR-4/3(褐 色)	10YR-8/3(淡 黄 橙 色)	砂粒、白色粒子 白色針状物質	
7.5YR-7/6(橙 色) 7.5YR-7/6(橙 色)～10YR-7/3(にぶい 黄 橙 色)	7.5YR-7/6(橙 色)～10YR-7/3(にぶい 黄 橙 色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	外面下半スス付着
7.5YR-7/6(橙 色)～7.5YR-3/2(黒 褐 色) 7.5YR-7/6(橙 色)～7.5YR-4/3(黒 褐 色)	7.5YR-8/4(浅 黄 橙 色)	砂粒	
7.5YR-7/6(橙 色)～7.5YR-3/2(黒 褐 色) 7.5YR-7/6(橙 色)～7.5YR-4/3(黒 褐 色)	7.5YR-8/4(浅 黄 橙 色)	砂粒	
10YR-5/3(にぶい 黄 橙 色) 7.5YR-6/6(橙 色)～N-1.5/0(黒 色)	N-1.5/0(黒 色)～2.5Y-2/1(黒 色)	砂粒 白色針状物質	
5YR-5/6(明 赤 褐 色)～7.5YR-5/3(にぶい 褐 色) 5YR-5/6(明 赤 褐 色)～7.5YR-5/2(暗 赤 褐 色)	2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)	白色粒子	
2.5YR-3/4(暗 赤 褐 色)～2.5YR-2/3(極 暗 赤 褐 色) 2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～2.5YR-2/1(赤 黒 色)	10R-4/8(赤 色)～2.5YR-4/8(赤 褐 色)	白色粒子	
10R-4/4(赤 褐 色)	10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色)～5YR-6/6(橙 色)	砂粒	
7.5YR-5/2(灰 褐 色)～7.5YR-4/2(灰 褐 色) 10R-4/6(赤 色)～10R-1.7/1(赤 黒 色)	7.5YR-5/2(灰 褐 色)		
10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色)～7.5YR-7/3(にぶい 橙 色) 7.5YR-7/3(にぶい 橙 色)～N-2/0(黒 色)	7.5YR-7/3(にぶい 橙 色)～10YR-6/4(にぶい 黄 橙 色)	雲母、白色針状物質	
7.5YR-3/1(黒 褐 色)～7.5YR-5/2(灰 褐 色) 7.5YR-5/2(灰 褐 色)～5YR-3/4(暗 赤 褐 色)	5YR-3/4(暗 赤 褐 色)		
5YR-6/4(にぶい 橙 色) 10YR-6/3(にぶい 黄 橙 色)～10YR-4/2(灰 黄 褐 色)	5YR-6/4(にぶい 橙 色)	白色粒子 白色針状物質	
10YR-3/1(黒 褐 色)～10YR-4/2(灰 黄 褐 色) 7.5YR-3/2(黒 褐 色)～7.5YR-5/4(にぶい 褐 色)	2.5YR-5/8(明 赤 褐 色)～5YR-1.7/1(黒 色)	白色粒子 白色針状物質	
7.5YR-5/4(にぶい 褐 色)～7.5YR-3/1(黒 褐 色) 2.5YR-5/6(明 赤 褐 色)～7.5YR-6/4(にぶい 橙 色)	7.5YR-5/4(にぶい 褐 色)	砂粒	
2.5Y-3/1(黒 褐 色) 7.5YR-7/6(橙 色)～7.5YR-3/2(黒 褐 色)	7.5YR-3/2(黒 褐 色)	雲母、白色針状物質	

第4表 出土遺物計測表（古代・杯類）①

遺構	挿図	図版	遺物	種別	器種	技法			口径	底径	器高	高台		底厚	指数		焼成
						成形	底部	調整				径	高さ		口高	口底	
SI-12	48	22	1	土師器	杯	A	-	C	14.0	7.3	5.2 4.9	/	0.8 0.6	2.69 2.86	1.92	A	
			2	土師器	杯	A	-	C	13.0	6.5	4.9 4.3	/	0.7 0.5	2.65 3.02	2.00	A	
			3	土師器	杯	A	-	C	-	7.0	(3.1)	/	0.8 0.6	-	-	A	
			4	ロクロ土師器	杯	B	-	C	13.2	7.0	4.1	/	-	3.22	1.89	B+	
			5	ロクロ土師器	高台杯?	B	-	C	14.6	-	(4.2)	-	-	-	-	B	
			6	ロクロ土師器	皿	C	-	C	14.4	7.7	3.4	/	-	4.24	1.87	A	
SI-13	51	23	3	須恵器	杯	C	-	C	14.8	8.4	3.9	/	0.7 0.4	3.79	1.76	A+	
			4	須恵器	杯	C	-	C	-	6.9	(1.8)	/	0.7 0.5	-	-	A	
			5	須恵器	杯	C	-	C	12.2	8.0	3.7	/	(0.8) (0.5)	3.30	1.53	A+	
			6	ロクロ土師器	杯	B	-	C	14.4	-	(4.5)	-	-	-	-	A	
SI-14	53	23	1	須恵器	杯	C?	D	C'	-	6.2	(1.4)	/	0.5 0.3	-	-	A	
			2	ロクロ土師器	高台杯	B	C	A'	-	7.6	(1.7)	7.8 1.0	0.6 0.5	-	-	A	
			3	ロクロ土師器	高台杯?	B	-	C	16.6	-	4.5	-	-	3.69	-	B	
SI-15	54	24	1	須恵器	杯	C	-	C	-	6.4	(1.8)	/	0.6 0.4	-	-	A+	
			2	須恵器	杯	C	-	C	-	6.2	(2.0)	/	0.5 0.4	-	-	A+	
SI-21	40	21	1	須恵器	杯				14.0	9.0	4.2	/	0.7 0.6	3.33	1.56	A	
SI-23	59	24	1	須恵器	杯	C	-	C	13.0	6.5	4.4 3.7	/	0.6 0.4	2.95 3.51	2.00	B+	
			2	須恵器	杯	C	-	D	13.2	7.1	3.9 3.6	/	0.6 0.4	3.38 3.67	1.86	A	
			3	須恵器	杯	B	-	D	13.8	8.4	4.3	/	0.9 (0.6)	3.21	1.64	A	
			4	須恵器	杯	C	D	D'	12.0	7.0	4.6	/	(0.7) (0.4)	2.61	1.71	A	
			5	須恵器	杯	C	-	D	12.8	7.2	3.7	/	0.6 (0.5)	3.46	1.78	A	
			6	ロクロ土師器	杯	B	-	C	12.0	-	(4.5)	/	-	-	-	B+	
			7	ロクロ土師器	杯	C	B	C"	-	6.2	(2.5)	/	0.6 0.5	-	-	A	
			8	ロクロ土師器	杯	C	C	C	-	6.6	(2.7)	/	0.8 0.6	-	-	A	
			9	ロクロ土師器	高台杯	B	-	D?	15.8	8.5	(6.0)	-	-	-	1.86	A	
			10	ロクロ土師器	高台杯	B	-	-	-	4.4	(2.6)	6.2 0.7	(1.3) (1.0)	-	-	A+	
SI-26	62	25	1	須恵器	杯	B	A	C	12.3	7.0	4.2 3.9	/	0.6 0.4	2.93 3.15	1.76	A	
			2	須恵器	杯	B	-	C	13.0	5.5	4.0 3.8	/	0.7 0.3	3.25 3.42	2.36	B+	
			3	須恵器	杯	B	A	C	13.6	7.1	3.7 3.4	/	0.5 0.3	3.68 4.00	1.92	A	
			4	須恵器	杯	C	-	D	13.8	7.0	4.9	/	0.6 0.5	2.82	1.97	A+	
			5	須恵器	杯	C	-	D	12.4	6.8	4.3	/	0.6 (0.5)	2.88	1.82	B	
			6	須恵器	杯	C	-	D	10.6	4.7	4.5	/	0.6 (0.5)	2.36	2.26	C+	
			7	須恵器	杯	C	-	C	12.4	6.3	3.8	/	(0.5) (0.4)	3.26	1.97	A+	
			8	須恵器	杯	C	-	C	13.0	7.4	4.0	/	0.5	3.25	1.76	A	
			9	須恵器	杯	B	-	C	14.5	8.2	4.6 4.2	/	0.5 0.4	3.15 3.45	1.77	B	

色調	胎 土		備 考
	色 調	混 入 物	
5YR-5/8(明赤褐色)	5YR-5/8(明赤褐色)		
2.5YR-4/6(赤褐色)～7.5YR-5/6(明褐色)	2.5YR-4/6(赤褐色)		
5YR-5/6(明赤褐色)～7.5YR-6/4(にぶい橙色)	5YR-5/6(明赤褐色)～7.5YR-6/4(にぶい橙色)		
5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-4/2(灰褐色) 5YR-5/6(明赤褐色)～N-1.5/0(黒色)	2.5YR-6/6(橙色)～5YR-5/6(明赤褐色)		外面黒斑 内面ミガキ
2.5YR-6/8(橙色)～5YR-5/2(灰褐色) 2.5YR-6/8(橙色)～7.5YR-4/2(灰褐色)	7.5YR-5/3(にぶい褐色)		内面ミガキ
7.5YR-3/1(黒褐色)～7.5YR-5/4(にぶい赤褐色) N-1.5/0(黒色)～7.5YR-4/2(灰褐色)	5YR-6/6(褐色)		内面ミガキ
2.5Y-3/2(黒褐色)	7.5YR-6/8(橙色)		
5Y-2/2(オリーブ黒色)～10YR-2/3(黒褐色) 2.5YR-5/8(明赤褐色)～7.5YR-4/3(褐色)	5YR-6/6(褐色)		
5Y-4/1(灰色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色)	5Y-7/1(灰白色)～10YR-/2(灰黄褐色)	白色針状物質	
5YR-6/8(にぶい黄褐色)～10YR-7/4(にぶい黄褐色)	10YR-7/4(にぶい黄褐色)		内面ミガキ
7.5YR-5/4(にぶい褐色)	7.5YR-7/6(褐色)	白色針状物質	
5YR-3/2(暗赤褐色)～5YR-5/6(明赤褐色)	5YR-5/8(明赤褐色)	白色針状物質	内面ミガキ
7.5YR-3/1(黒褐色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色) 10YR-7/4(にぶい黄褐色)～5YR-6/6(褐色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)	白色針状物質	内面ミガキ
7.5YR-6/8(褐色) 10YR-5/4(にぶい黄褐色)～7.5YR-7/6(褐色)	7.5YR-6/8(褐色)	白色針状物質	
10YR-6/4(にぶい黄褐色)	5YR-4/6(赤褐色)		
2.5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-4/8(赤褐色)	5YR-4/6(赤褐色)		
7.5Y-3/1(オリーブ黒色)～2.5Y-6/2(灰黄色) 7.5Y-3/1(オリーブ黒色)～5YR-4/6(赤褐色)	2.5Y-6/2(灰黄色)?		焼歪み顕著
10YR-6/3(にぶい黄褐色)～10YR-2/2(黒褐色) 10YR-6/4(にぶい黄褐色)～2.5Y-4/3(オリーブ褐色)	2.5Y-6/3(にぶい黄色)		焼歪み
2.5Y-6/2(灰黄色)～2.5Y-4/1(黄灰色) 2.5Y-7/2(灰黄色)～2.5Y-5/2(暗灰黄色)	7.5Y-6/1(灰色)～5Y-4/1(灰色)		
5Y-4/1(灰色)	10YR-6/3(にぶい黄褐色)		
7.5YR-4/1(褐灰色)～7.5YR-3/1(黒褐色)	7.5YR-5/4(にぶい褐色)		
7.5YR-4/3(褐色)～10YR-3/2(黒褐色)	7.5YR-6/4(にぶい橙色)		
5YR-6/6(褐色)	5YR-6/6(褐色)	白色針状物質	
10YR-2/2(黒褐色)～10YR-6/4(にぶい黄褐色) 10YR-3/2(黒褐色)～5YR-6/6(褐色)	5YR-6/6(褐色)		
7.5Y-2/1(黒色)～2.5Y-3/3(暗オリーブ褐色) 2.5Y-2/1(黒色)～5YR-6/6(褐色)	7.5YR-6/4(にぶい橙色)		内面ミガキ
N-2/0(黒色) 5YR-5/8(明赤褐色)～7.5YR-4/4(褐色)	10YR-6/3(にぶい黄褐色)	白色針状物質	内黒、内面ミガキ
5YR-3/6(暗赤褐色)～5YR-2/2(黒褐色) 5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-2/1(黒褐色)	5YR-3/6(暗赤褐色)?		
5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-2/2(黒褐色) 2.5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-1.7/1(黒色)	5YR-5/3(にぶい赤褐色)		外面タール状物質
2.5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-3/1(黒褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～10YR-7/4(にぶい黄褐色)	5YR-4/6(赤褐色)		二次的に被熱 灯明具か?
5YR-4/8(赤褐色)	7.5YR-4/3(褐色)		
2.5YR-4/4(にぶい赤褐色)	2.5YR-4/6(赤褐色)		
5YR-3/2(暗赤褐色) 2.5Y-2/1(黒色)	5YR-4/8(赤褐色)		
5Y-5/1(灰色) 5Y-4/1(灰色)	7.5YR-5/6(明褐色)		
7.5YR-6/6(褐色) 7.5YR-6/6(褐色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)	7.5YR-6/6(褐色)		外面黒斑
2.5YR-4/2(灰赤色)～2.5YR-1.7/1(赤黒色)	5YR-4/4(にぶい赤褐色)		

第4表 出土遺物計測表(古代・杯類)②

遺構	挿 図	図 版	遺 物	種 別	器 種	技 法			口 径	底 径	器 高	高 台		底 厚	指 数		焼 成
						成 形	底 部	調 整				径	高 さ		口 高	口 底	
SI-26	62	25	10	須恵器	杯	C	-	D	13.0	6.7	4.0	/	-	3.25	1.94	A	
			11	須恵器	杯	B	-	C	13.4	6.8	4.2	/	0.6 (0.4)	3.19	1.97	B	
			12	須恵器	杯	B	B	C	12.6	6.2	3.8	/	0.5 0.4	3.32	2.03	A	
			13	須恵器	杯	C	-	C	-	7.2	(1.9)	/	0.5 0.4	-	-	A	
			14	須恵器	杯	C	-	C?	13.4	-	(4.3)	/	-	-	-	A+	
			15	須恵器	杯	C	-	C	13.8	7.4	3.9	/	0.6 0.4	3.54	1.86	C+	
			16	ロクロ土師器	杯	B	-	C	15.3	8.2	5.1 4.9	/	1.0 0.7	3.00 3.12	1.87	B	
			17	ロクロ土師器	杯	B	-	C	14.8	6.8	5.0	/	0.9 0.8	2.96	2.18	A	
			18	ロクロ土師器	杯	C	-	C	-	7.0	(2.0)	/	0.6 0.5	-	-	A	
			19	ロクロ土師器	杯	B	-	C	-	7.2	(2.0)	/	0.7 0.6	-	-	A	
	20	ロクロ土師器	杯	C	A	C"	-	8.8	(3.0)	/	0.6 0.5	-	-	A			
	63	21	ロクロ土師器	高台杯	C?	B	F	-	7.2	(1.4)	6.8 0.6	0.9 0.5	-	-	A		
	22	ロクロ土師器	高台皿	B	-	F	13.4	6.2	3.4	6.2 0.6	-	3.94	2.16	A			
23	ロクロ土師器	高台杯	C	-	-	14.4	-	(2.7)	- -	-	-	-	A				
SI-27	67	26	1	須恵器	杯	C	-	D	-	6.8	(2.0)	/	0.6 0.4	-	-	A	
SB-1	72	27	1	ロクロ土師器	杯	C	B	F	14.4	9.0	3.5	/	- 0.6	4.11	1.60	A	
SB-3	73	27	1	ロクロ土師器	高台杯	C?	-	F	-	4.4	(2.9)	6.5 1.5	0.7 0.6	-	-	A	
SB-4	75	27	1	須恵器	杯	C	A	C"	-	6.6	(2.5)	/	0.6 0.5	-	-	B+	
			2	須恵器	杯	C	B	C	13.9	6.4	4.3 3.9	/	0.6	3.23 3.56	2.17	A	
			3	須恵器	杯	C	B	C	13.0	6.4	4.2	/	0.8 (0.5)	3.10	2.03	A+	
			4	ロクロ土師器	杯	B	A	C"	-	6.6	(2.3)	/	1.1 (0.7)	-	-	A	
SK-44	82	27	1	須恵器	杯	C	B	C"	12.7	6.4	4.1	/	0.7 (0.5)	3.10	1.98	A+	
			2	須恵器	杯	C	-	C	12.4	6.0	4.1	/	0.6 (0.4)	3.02	2.07	A	
			3	須恵器	杯	C	-	C	-	6.0	(1.5)	/	0.7 0.6	-	-	A+	
			4	ロクロ土師器	杯	C	D	C	-	7.0	(1.0)	/	0.4 (0.2)	-	-	B+	
遺構外	87	28	15	須恵器	杯	C	-	C	-	7.0	(2.3)	/	0.9 (0.7)	-	-	A	
			16	ロクロ土師器	杯	B	D	C'	12.6	7.6	4.0	/	0.8 (0.7)	3.15	1.66	B	
			17	ロクロ土師器	杯	B	-	D	14.4	9.0	3.8	/	0.7 (0.2)	3.79	1.60	A	
			18	ロクロ土師器	杯	C	B	F	-	7.6	(2.1)	/	0.9 0.5	-	-	A	
			19	須恵器	杯	C	-	-	-	-	-	/	-	-	-	B+	
			20	須恵器	杯	C	-	-	-	-	-	/	-	-	-	B+	
			21	ロクロ土師器	高台碗?	C	-	C	15.0	-	(5.1)	- -	-	-	-	A	
			22	ロクロ土師器	高台杯	B?	B	F	-	7.6	(2.1)	6.0 0.7	0.8 0.6	-	-	A	
			23	ロクロ土師器	高台杯	B?	D	F	-	6.2	(2.3)	5.9 0.9	0.9 0.7	-	-	A	
			24	ロクロ土師器	高台杯	B?	B	F	-	5.6	(1.8)	5.8 0.7	1.2 1.1	-	-	B	

色調	胎土		備考
	色調	混入物	
10YR-2/2(黒褐色)	10YR-3/2(黒褐色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)		
7.5YR-5/6(明褐色)～7.5YR-2/1(黒色)	5YR-5/6(明赤褐色)		
2.5Y-4/1(黄灰色) 2.5Y-6/3(にぶい黄色)～7.5YR-3/1(黒褐色)	5YR-5/8(明赤褐色)		
5Y-5/1(灰色)	5Y-5/1(灰色)		
5Y-4/1(灰色)	2.5Y-6/2(灰黄色)		
10YR-1.7/1(黒色)	7.5YR-4/4(褐色)		
5YR-6/8(橙色)～5YR-5/8(明赤褐色) 5YR-6/6(橙色)～7.5YR-4/3(褐色)	5YR-6/8(橙色)	白色針状物質	内面ミガキ
7.5YR-7/6(褐色)	7.5YR-7/6(褐色)		内面ミガキ
5YR-6/6(橙色)～10YR-6/3(にぶい黄褐色) 10YR-2/2(黒褐色)	5YR-6/6(橙色)		内面ミガキ
7.5YR-7/4(にぶい褐色)～7.5YR-7/5(褐色)	7.5YR-7/6(褐色)		
7.5YR-6/6(褐色)	7.5YR-6/6(褐色)～7.5YR-8/4(浅黄褐色)	白色針状物質	体部外面墨書
5YR-6/8(褐色)～7.5YR-6/4(にぶい褐色) 7.5YR-7/4(にぶい褐色)～5YR-6/6(褐色)	7.5YR-7/4(にぶい褐色)		内面ミガキ
5YR-6/8(褐色)～5YR-6/6(褐色)	5YR-6/8(褐色)～5YR-6/6(褐色)		内面ミガキ
N-2/0(黒色) 7.5YR-7/6(褐色)～2.5Y-8/3(淡黄色)	2.5Y-8/3(淡黄色)		内黒、内面ミガキ 外面黒斑
2.5GY-2/1(黒色)	7.5YR-5/6(明褐色)～7.5Y-6/1(灰色)		
10YR-7/6(明黄褐色)～5Y-6/2(灰オリーブ色)	10YR-7/6(明黄褐色)		
N-1.5/0(黒色) 7.5YR-6/6(褐色)～10YR-8/4(浅黄褐色)	10YR-8/4(浅黄褐色)		内黒、内面ミガキ
7.5YR-3/1(黒褐色) 7.5YR-3/1(黒褐色)～7.5YR-5/4(にぶい褐色)	7.5YR-7/6(褐色)		
5YR-4/8(赤褐色)	5YR-4/8(赤褐色)		体部外面墨書
5YR-4/8(赤褐色)～5YR-3/1(黒褐色)	5YR-4/8(赤褐色)		内面粉痕
2.5Y-8/3(淡黄色)～2.5Y-3/2(黒褐色) 10YR-7/3(にぶい黄褐色)～10YR-4/2(灰黄褐色)	10YR-6/2(灰黄褐色)		外面タール状物質
5Y-6/2(灰オリーブ色) 5Y-5/1(灰色)	7.5YR-5/6(明褐色)～7.5Y-5/1(灰色)		
5YR-3/1(黒褐色)～7.5YR-5/3(にぶい褐色) 5YR-4/1(楊灰色)～5YR-5/8(明赤褐色)	5YR-4/1(褐灰色)		
N-3/0(暗灰色) N-4/0(灰色)～5Y-5/2(灰オリーブ色)	10YR-6/4(にぶい黄褐色)		底面に重焼痕
5YR-6/8(褐色)～10YR-8/3(浅黄褐色)	10YR-8/3(浅黄褐色)		二次的に被熱
5YR-4/4(にぶい赤褐色)	5YR-4/4(にぶい赤褐色)		
5YR-4/6(赤褐色)～5YR-3/2(暗赤褐色) 5YR-1.7/1(黒色)～5YR-4/3(にぶい赤褐色)	5YR-6/6(褐色)		
N-2/0(黒色) 5YR-6/6(褐色)	5YR-6/6(褐色)	白色針状物質	内黒、内面ミガキ
N-2/0(黒色) 7.5YR-7/6(褐色)	7.5YR-6/4(にぶい褐色)	白色針状物質	底部外面墨書 内黒、内面ミガキ
5YR-4/4(にぶい赤褐色)	5YR-4/4(にぶい赤褐色)		体部外面墨書
5YR-4/4(にぶい赤褐色)	5YR-4/4(にぶい赤褐色)		体部外面墨書
7.5YR-6/6(褐色) 7.5YR-5/4(にぶい褐色)	7.5YR-6/6(褐色)	白色針状物質	
7.5Y-6/8(褐色)	7.5YR-6/8(褐色)	白色針状物質	内面ミガキ
5YR-6/8(褐色)	5YR-6/8(褐色)	白色針状物質	内面ミガキ
7.5YR-6/6(褐色)～10YR-3/1(黒褐色)	7.5YR-6/6(褐色)～10YR-3/1(黒褐色)	白色針状物質	内面ミガキ

第5表 出土遺物計測表 (古代・甕類)

遺構	挿図	図版	遺物	種別	器種	技法		口径		縁帯幅	頸部			最大径	底部	器高	焼成	
						成形	調整	内径	外径		内径	外径	高さ					
SI-11	30	19	30	須恵器	甕	B	叩	-	-	-	-	-	-	-	(8.4)	A		
SI-12	48	22	8	土師器	甕	A	削	19.6	20.5	0.8	15.4	17.0	2.8	18.2	-	(11.1)	A	
			9	土師器	小型甕	A	削	-	-	-	-	-	-	-	5.3	(2.0)	A	
			10	須恵器	甕/甌	B	叩	31.0	31.6	1.4	27.2	8.2	2.0	28.8	-	(9.8)	A	
			11	須恵器	甕	B	叩	-	-	-	-	-	-	-	30.6	-	(16.4)	B+
			12	須恵器	甕	B	叩削	-	-	-	-	-	-	-	(42.8)	25.0	(13.6)	B
SI-13	51	23	7	土師器	小型甕	A	削	-	-	-	-	-	-	(10.4)	6.2	(4.3)	A	
			8	須恵器	甕	B	叩	36.4	37.6	1.8	32.4	34.0	3.5	(46.0)	-	(11.1)	B+	
			9	須恵器	甕	B	叩	43.4	43.6	1.3	28.2	39.6	2.8	(43.6)	-	(5.5)	B+	
			10	須恵器	甕	B	叩	28.8	29.8	1.5	-	-	(5.5)	-	-	(5.5)	B+	
			11	須恵器	甕	B	叩	-	-	-	-	-	-	-	-	(15.4)	A	
			12	須恵器	鉢	B	叩削	(28.0)	(28.8)	-	-	-	-	-	28.8	15.6	(16.5)	B
			13	須恵器	甕	B	叩削	-	-	-	-	-	-	-	(25.2)	13.2	(11.2)	A+
SI-14	53	23	4	須恵器	甕/甌	B	叩	-	-	1.3	-	-	2.0	-	(7.8)	B		
SI-23 SI-24	59	24	11	土師器	小型甕	B	削	12.2	12.8	0.8	9.8	10.8	2.0	13.0	-	(9.5)	A	
			12	土師器	甕	B	削	17.2	17.6	0.7	12.4	14.4	2.3	-	-	(4.4)	A	
			13	土師器	甕	A	削	13.3	13.6	-	10.8	12.3	2.6	(13.9)	-	(5.0)	B+	
			14	土師器	甕	A	削	13.4	13.6	0.7	10.2	11.6	2.0	-	-	(5.6)	A	
			15	須恵器	甕/甌	B	叩	29.6	30.0	-	25.0	26.4	1.8	26.8	-	(11.6)	B+	
			16	須恵器	甕/甌	B	叩	30.0	31.0	1.8	25.4	26.6	3.5	28.2	-	(10.8)	B+	
			17	須恵器	甕	B	叩	-	-	-	-	-	-	-	-	(10.7)	A	
			18	須恵器	甕	B	叩	23.0	24.2	1.3	15.0	16.4	7.2	(27.6)	-	(12.4)	A	
SI-26	64	26	26	土師器	甕	A	削	18.0	18.8	0.6	14.8	16.0	2.4	18.9	-	(17.4)	B+	
			27	須恵器	甌	B	叩削	13.6	14.8	-	11.6	13.6	2.6	18.4	11.8	(24.3)	A	
			28	須恵器	甌	B	叩削	17.8	18.9	-	17.0	18.2	2.4	20.0	12.4	35.1	A	
			29	須恵器	甌	B	叩削	16.2	17.8	-	14.6	16.3	2.5	19.4	12.5	38.6	B	
			30	土師器	甕	B	削磨	22.4	23.0	1.1	18.2	19.0	3.0	24.4	-	(28.6)	B	
			31	須恵器	甕	B	撫	37.2	38.2	2.2	-	-	(9.5)	-	-	(9.5)	A	
			32	須恵器	甕	B	叩	-	-	-	-	-	-	-	-	(22.0)	B+	
	33	須恵器	甕	B	叩削	-	-	-	16.0	17.8	(5.6)	(31.0)	15.0	(24.1)	A			
	34	須恵器	甕	B	叩削	26.4	27.0	1.2	17.0	18.8	10.4	36.3	20.0	44.2	A			
	35	須恵器	鉢	B	叩削	22.4	23.6	-	-	-	-	23.6	13.0	15.2	A+			
	36	須恵器	甕	B	叩削	-	-	-	-	-	-	(22.8)	16.0	(6.1)	B+			
	37	灰釉陶器?	鉢	B	撫	23.0	24.4	1.3	14.8	17.4	5.4	-	-	(7.3)	A+			
	SI-27	68	26	1	土師器	甌?	B	撫削	21.9	23.4	-	21.1	23.7	3.8	23.2	18.6	34.5 34.3	B+
2				土師器	甌?	B	撫削	21.6	22.8	-	20.8	22.0	3.8 3.5	23.2	18.6	34.8 33.3	B+	
3				土師器	甌?	B	撫削	23.1	24.3	-	22.2	23.2	3.6 3.4	23.9	17.4	32.8 31.0	B+	
SB-4	75	27	5	土師器	甕	B	削	16.8	17.4	-	13.0	14.3	2.5	(18.0)	-	(6.9)	B+	
SK-45	79	27	5	須恵器	甕	B	叩	-	-	-	-	-	-	-	(6.8)	C+		
遺構外	81	28	24	土師器	甕	A	削	-	-	-	-	-	-	-	(8.5)	B		
			25	須恵器	甕/甌	B	叩	-	-	-	-	-	1.8	-	-	(7.8)	A	
			26	須恵器	甕	B	撫	25.8	26.6	2.2	-	-	(4.8)	-	-	(4.8)	A	

色調	胎 土		備 考
	色 調	混 入 物	
7.5YR-3/1(黒褐色) 7.5YR-3/2(黒褐色)～7.5YR-3/4(暗褐色)	7.5YR-3/2(黒褐色)～7.5YR-3/4(暗褐色)	砂粒、白色針状物質	
2.5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-3/3(暗赤褐色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	
5YR-3/2(暗赤褐色)～5YR-2/1(黒褐色) 10YR-2/1(黒色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)	5YR-3/2(暗赤褐色)	砂粒、白色粒子	
5YR-3/1(黒褐色) 5YR-4/2(灰褐色)～5YR-5/4(にぶい赤褐色)	2.5YR-4/4(にぶい赤褐色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	
7.5YR-5/3(にぶい褐色)～5YR-7/4(にぶい橙色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～2.5YR-4/1(赤灰色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)	砂粒、白色粒子	
2.5Y-4/2(暗灰黄色)～2.5Y-3/1(黒褐色) 5Y-3/1(オリブ黒色)～10YR-3/2(黒褐色)	7.5YR-6/6(橙色)	砂粒、白色粒子	
10YR-7/2(にぶい黄褐色)～10YR-5/2(灰黄褐色) 5YR-6/6(橙色)～7.5YR-7/4(にぶい橙色)	5YR-8/3(浅黄褐色)～10YR-4/1(褐灰色)	砂粒、雲母微粒	
10Y-7/1(灰白色)	10Y-7/1(灰白色)～10YR-5/3(にぶい黄褐色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	
7.5YR-5/6(明褐色)～10Y-7/1(灰白色)	10Y-7/1(灰白色)～10YR-5/3(にぶい黄褐色)	砂粒、白色粒子	
2.5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-3/2(暗赤褐色) 2.5YR-5/4(にぶい赤褐色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	
2.5Y-5/2(暗灰黄色)～N-4/0(灰色) 10YR-3/2(黒褐色)～7.5YR-3/1(黒褐色)	7.5YR-4/3(褐色)～5YR-5/4(にぶい赤褐色)	白色微粒子 雲母微粒	
2.5YR-5/6(明赤褐色)～10YR-5/3(にぶい黄褐色) 10YR-3/2(黒褐色)～10YR-2/1(黒色)	5YR-5/6(明赤褐色)	砂粒	
2.5Y-4/1(灰赤色) 10YR-4/3(にぶい黄褐色)～2.5Y-4/1(黄灰色)	5YR-5/4(にぶい赤褐色)	白色粒子	
N-3/0(暗灰色) N-2/0(黒色)	5YR-5/6(明赤褐色)～N-7/0(灰白色)	砂粒、雲母微粒	
2.5YR-4/6(赤褐色)～5YR-3/1(黒褐色) 5YR-2/4(極暗赤褐色)～5YR-2/2(黒褐色)	2.5YR-4/6(赤褐色)	砂粒、白色粒子	
2.5YR-4/6(赤褐色)～2.5YR-2/1(赤黒色) 2.5YR-2/2(極暗赤褐色)～2.5YR-4/6(赤褐色)	2.5YR-4/6(赤褐色)	砂粒、白色粒子	
10YR-3/2(黒褐色)～10YR-2/1(黒褐色) 7.5YR-4/4(褐色)～10YR-3/2(黒褐色)	10YR-1.7/1(黒色)	雲母微粒 白色針状物質	
5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-2/1(黒褐色) 2.5YR-4/4(にぶい赤褐色)～2.5YR-2/1(赤黒色)	2.5YR-4/4(にぶい赤褐色)～7.5YR-4/2(灰褐色)	砂粒、白色粒子 白色針状物質	
2.5Y-6/2(灰黄色) 2.5Y-4/2(暗灰黄色)～2.5Y-4/1(黄灰色)	5YR-5/6(明赤褐色)	砂粒、雲母微粒	
2.5YR-4/6(赤褐色)～2.5YR-2/2(極暗赤褐色)	2.5YR-4/2(灰赤色)	雲母微粒	
5Y-4/1(灰色) 2.5Y-4/1(黄灰色)～7.5YR-4/3(褐色)	7.5YR-4/3(褐色)～5Y-4/1(灰色)	砂粒、白色粒子	
7.5YR-6/4(にぶい橙色)～7.5YR-7/2(明褐灰色) 5YR-7/4(にぶい橙色)～10YR-6/3(にぶい黄褐色)	5YR-7/4(にぶい橙色)	白色微粒子	
5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-4/4(にぶい赤褐色) 5YR-5/8(明赤褐色)～5YR-3/6(暗赤褐色)	5YR-5/8(明赤褐色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	
2.5YR-5/6(明赤褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-6/8(橙色)	5YR-6/8(橙色)	砂粒、白色粒子 雲母微粒	
2.5YR-5/6(明赤褐色) 2.5YR-5/6(明赤褐色)～10YR-7/6(明黄褐色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)～10YR-7/6(明黄褐色)	砂粒、白色粒子	外面黒斑 二次的に被熱
2.5YR-4/6(赤褐色)～2.5YR-3/3(暗赤褐色) 2.5YR-4/6(赤褐色)～2.5YR-3/2(暗赤褐色)	2.5YR-4/4(にぶい赤褐色)～2.5YR-4/6(赤褐色)	砂粒、白色粒子	二次的に被熱
2.5YR-5/8(明赤褐色)～7.5YR-5/4(にぶい褐色)	2.5YR-5/8(明赤褐色)～7.5YR-5/4(にぶい褐色)	砂粒、雲母片	
10YR-3/1(黒褐色) 10YR-2/1(黒色)	7.5YR-2/2(黒褐色)	砂粒 白色針状物質	
10YR-3/1(黒褐色)～7.5YR-6/4(にぶい橙色) 10YR-2/1(黒色)～2.5YR-4/6(赤褐色)	7.5YR-2/2(黒褐色)	砂粒 白色針状物質	
N-5/0(灰色)～5Y-5/1(灰色)	5Y-5/1(灰色)	砂粒、白色粒子	
5YR-7/6(褐色)～5Y-5/1(灰色)	5YR-7/6(褐色)～5Y-5/1(灰色)	砂粒、白色粒子	二次的に被熱
5Y-3/1(オリブ黒色)～10YR-3/2(黒褐色)	10YR-5/4(にぶい黄褐色)～5Y-3/1(オリブ黒色)	砂粒、白色粒子	
5YR-5/6(明赤褐色)～7.5YR-1.7/1(黒色) 7.5YR-1.7/1(黒色)～2.5YR-5/6(明赤褐色)	2.5YR-5/6(明赤褐色)～5YR-5/6(明赤褐色)	砂粒、雲母微粒	
5Y-6/1(灰色)(軸):5Y-5/3(灰オリブ色) 7.5YR-6/1(灰色)(軸):5Y-5/3(灰オリブ色)	7.5Y-7/1(灰白色)	黒色粒子	口縁部内面自然軸
5YR-7/6(褐色)～5YR-4/1(褐灰色) 5YR-7/6(褐色)～2.5YR-5/8(明赤褐色)	5YR-7/6(褐色)	白色微粒子	二次的に被熱
5YR-7/6(褐色) 5YR-7/6(褐色)～5YR-3/1(黒褐色)	5YR-7/6(褐色)	白色微粒子	二次的に被熱
5YR-7/6(褐色)～5YR-4/2(灰褐色) 5YR-7/6(褐色)～2.5YR-6/8(褐色)	5YR-7/6(褐色)	白色微粒子	二次的に被熱
5YR-6/4(にぶい褐色)～5YR-4/2(灰褐色) 5YR-5/4(にぶい赤褐色)～5YR-2/1(黒褐色)	2.5YR-6/8(褐色)		
7.5YR-4/2(灰褐色)～10YR-2/1(黒色)	5YR-7/3(にぶい褐色)～10YR-3/1(黒褐色)	白色針状物質	
10YR-5/2(灰黄褐色)～10YR-2/2(黒褐色) 7.5YR-5/4(にぶい褐色)～5YR-5/3(にぶい赤褐色)	2.5YR-6/8(褐色)	砂粒	外面へラ書
2.5YR-6/6(褐色)～2.5YR-4/4(にぶい赤褐色) 2.5YR-6/6(褐色)	2.5YR-6/6(褐色)	砂粒	
7.5YR-6/6(褐色) 5YR-6/6(褐色)	5YR-6/6(褐色)	白色粒子	

写 真 图 版

1. 遺跡遠景（北から）

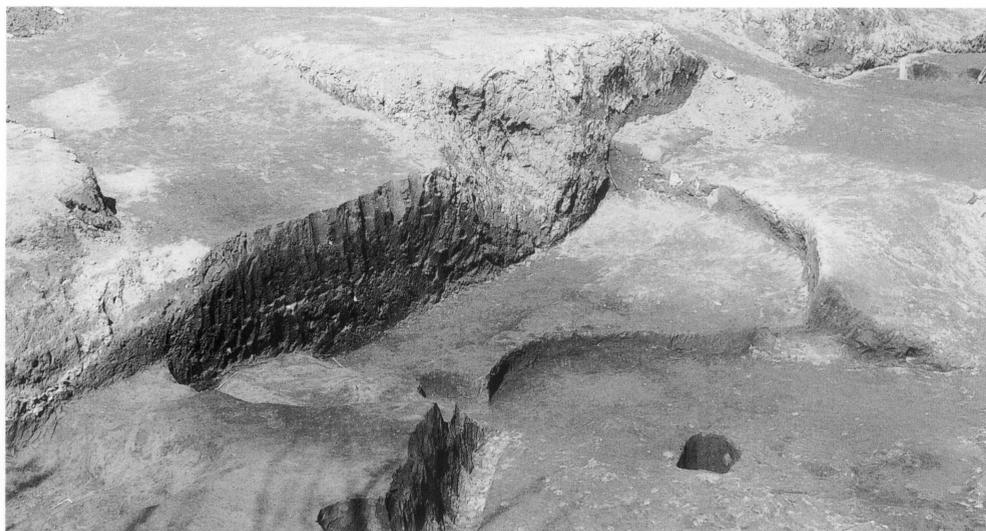


2. 遺跡遠景（東から）



3. 調査区全景（南西から）





1. SI-1 全景 (南から)



2. SI-17 全景 (南から)



3. SI-25 全景 (南東から)



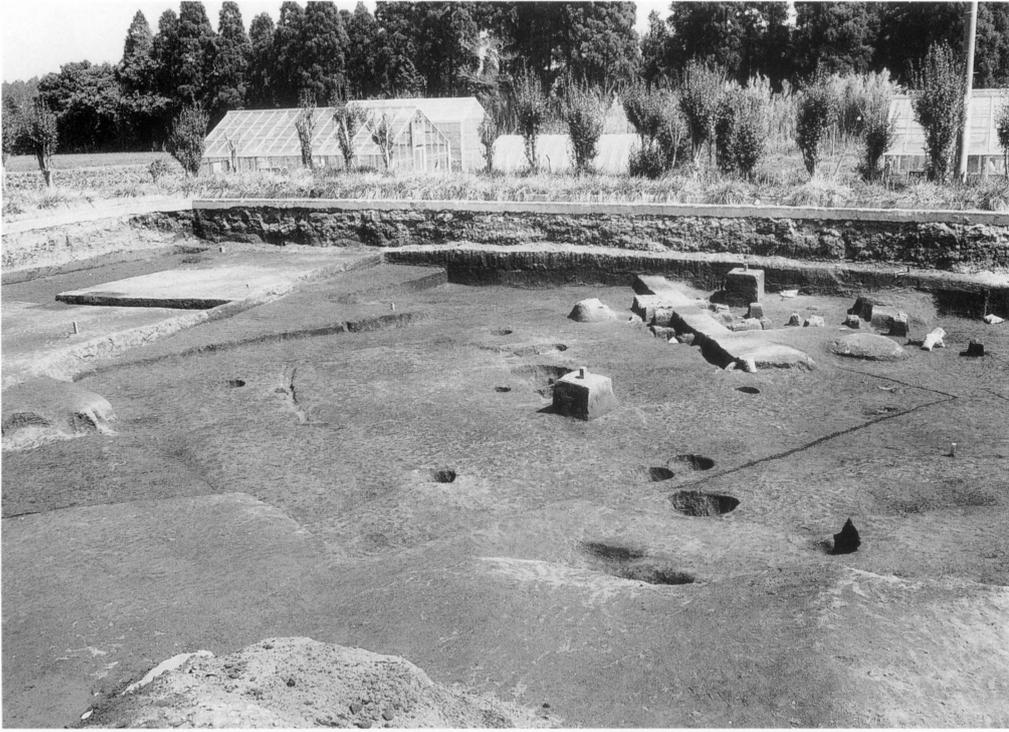
1. SI-6・SI-7 全景
(南西から)



2. SI-6 カマド 全景 (南から)



3. SI-6 掘形全景
(南西から)



1. SI-11 全景 (南西から)



2. SI-11 遺物出土状況



3. SI-11 貯蔵穴遺物出土状況



1. SI-16 掘形全景
(南東から)



2. SI-18・SI-19 全景
(北から)



3. SI-20 全景
(北西から)



1. SI-28・SI-29 全景
(北東から)



2. SI-30 カマド全景
(南から)



3. SI-30 遺物出土状況
(南西から)



1. SI-12 全景
(南西から)



2. SI-12 掘形全景
(東から)



3. SI-12 カマド全景
(南西から)



1. SI-13 全景 (南西から)



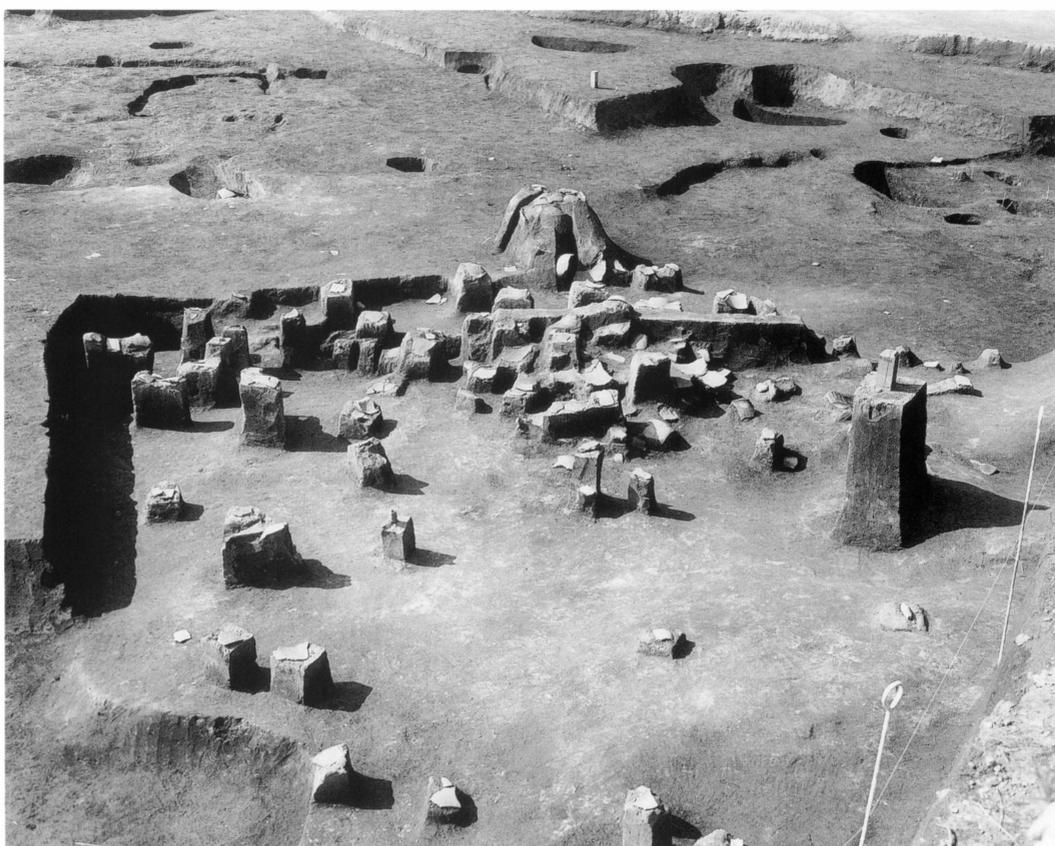
2. SI-13 カマド全景
(南西から)



3. SI-15 掘型全景
(西から)



1. SI-23, SI-26 全景 (南から)



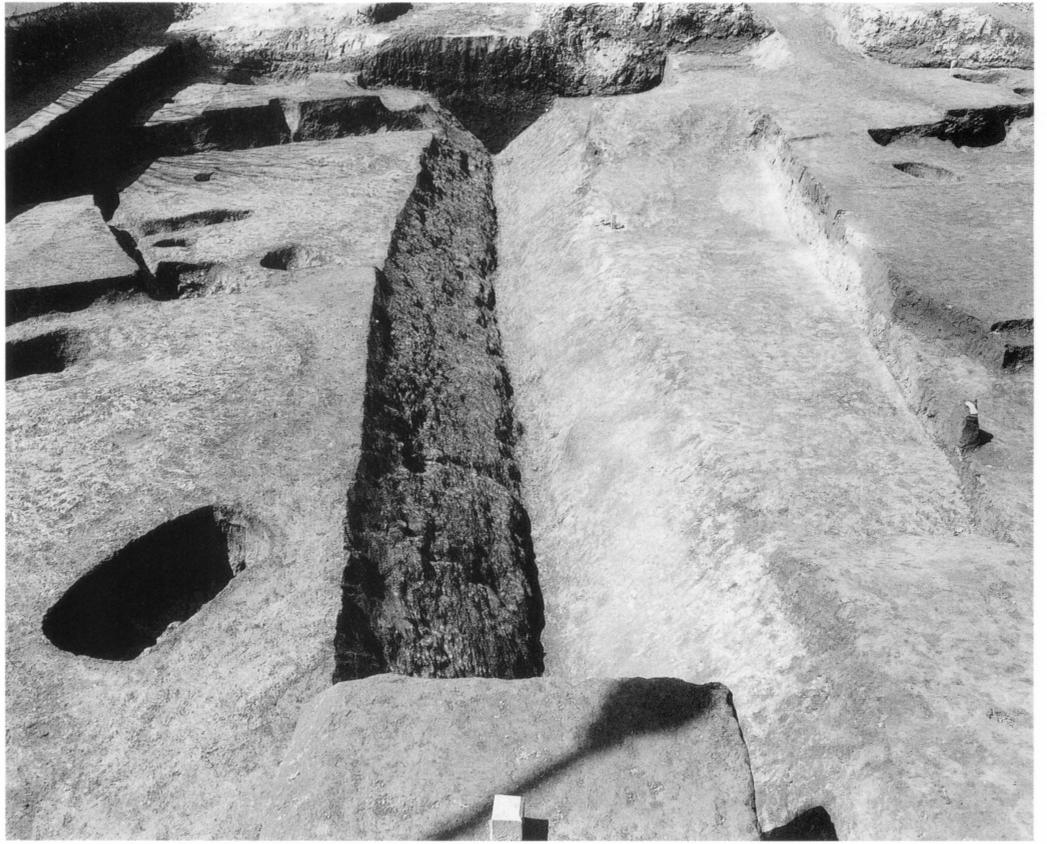
2. SI-26 遺物出土状況 (南から)



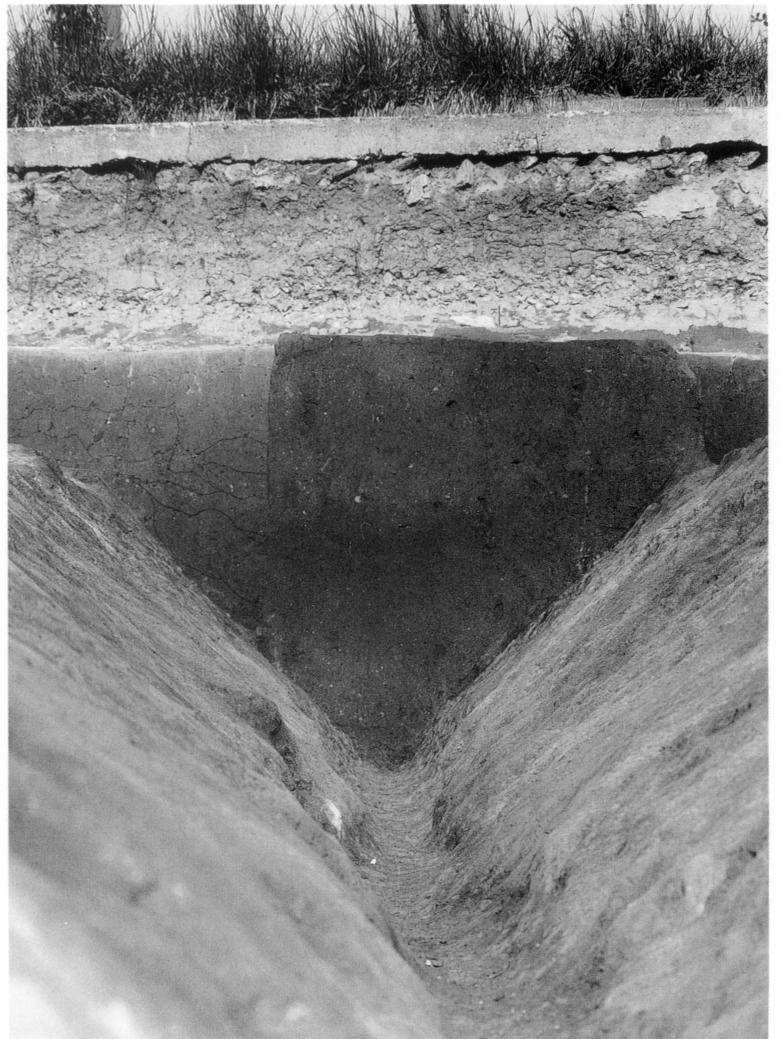
1. SI-27 全景 (南から)



2. SI-27 カマド遺物出土状況 (南から)



1. SD-1 全景
(東から)



2. SD-1 土層断面
(西から)



1. SB-1 全景
(北東から)



2. SB-4 全景
(北東から)



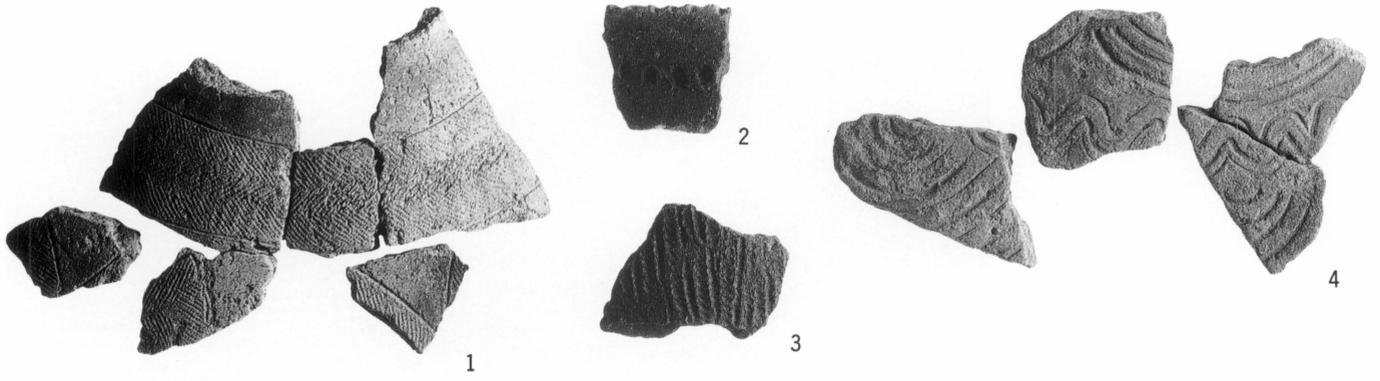
1. SK-42 遺物出土状況
(北から)



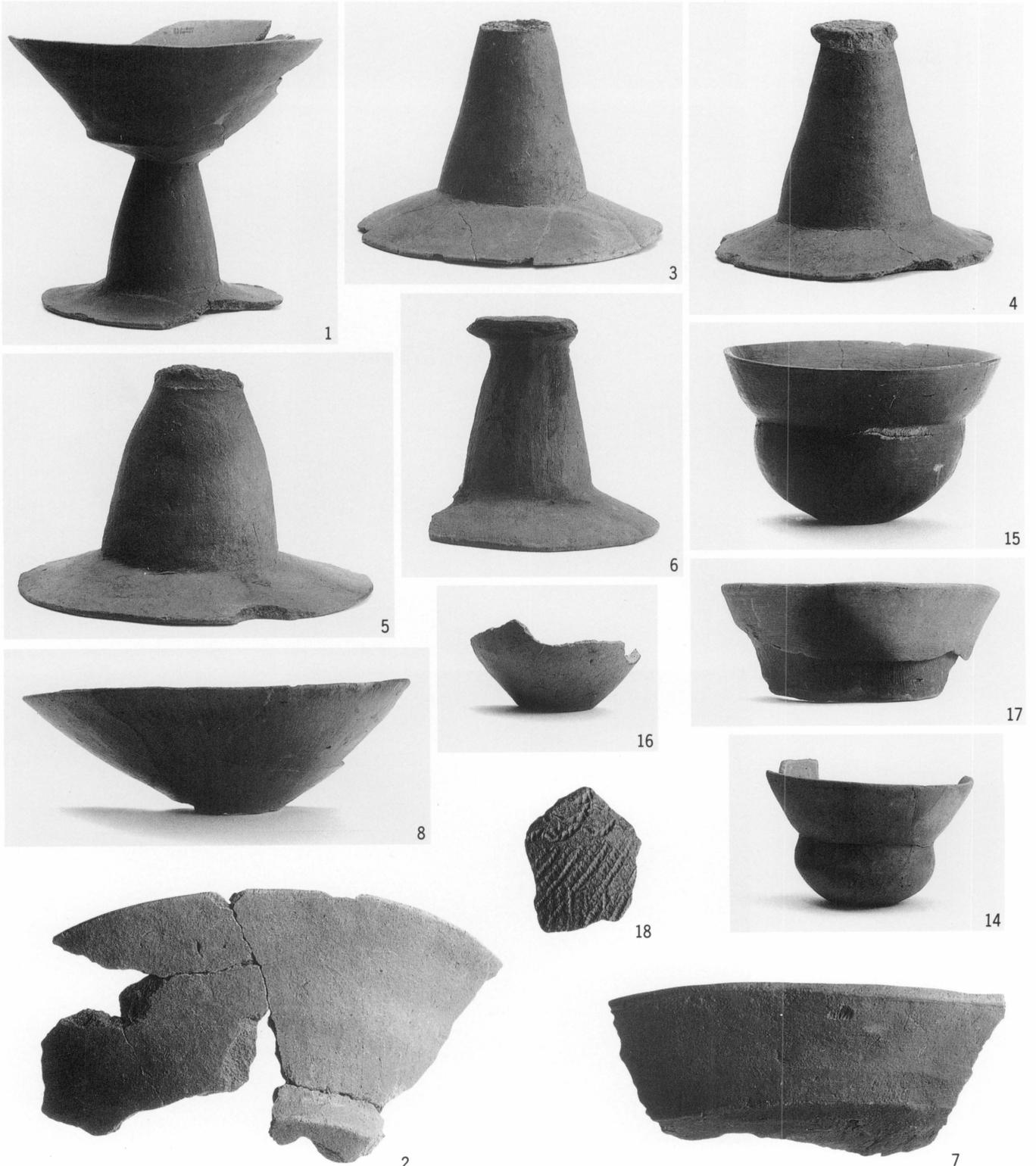
2. SK-44 全景
(北から)



3. SK-46 全景
(北西から)



SI-1



SI-17



9



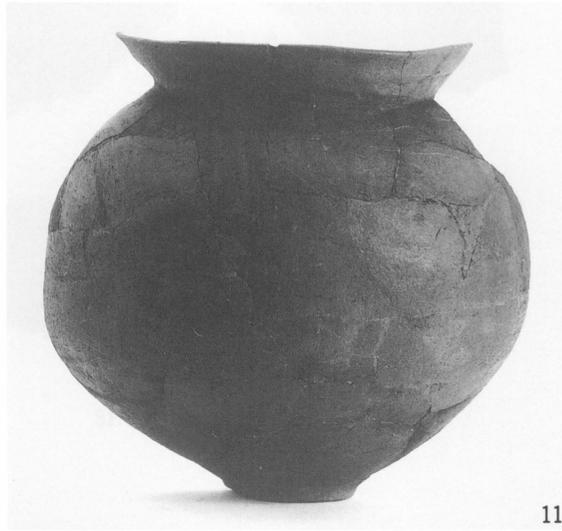
10



13



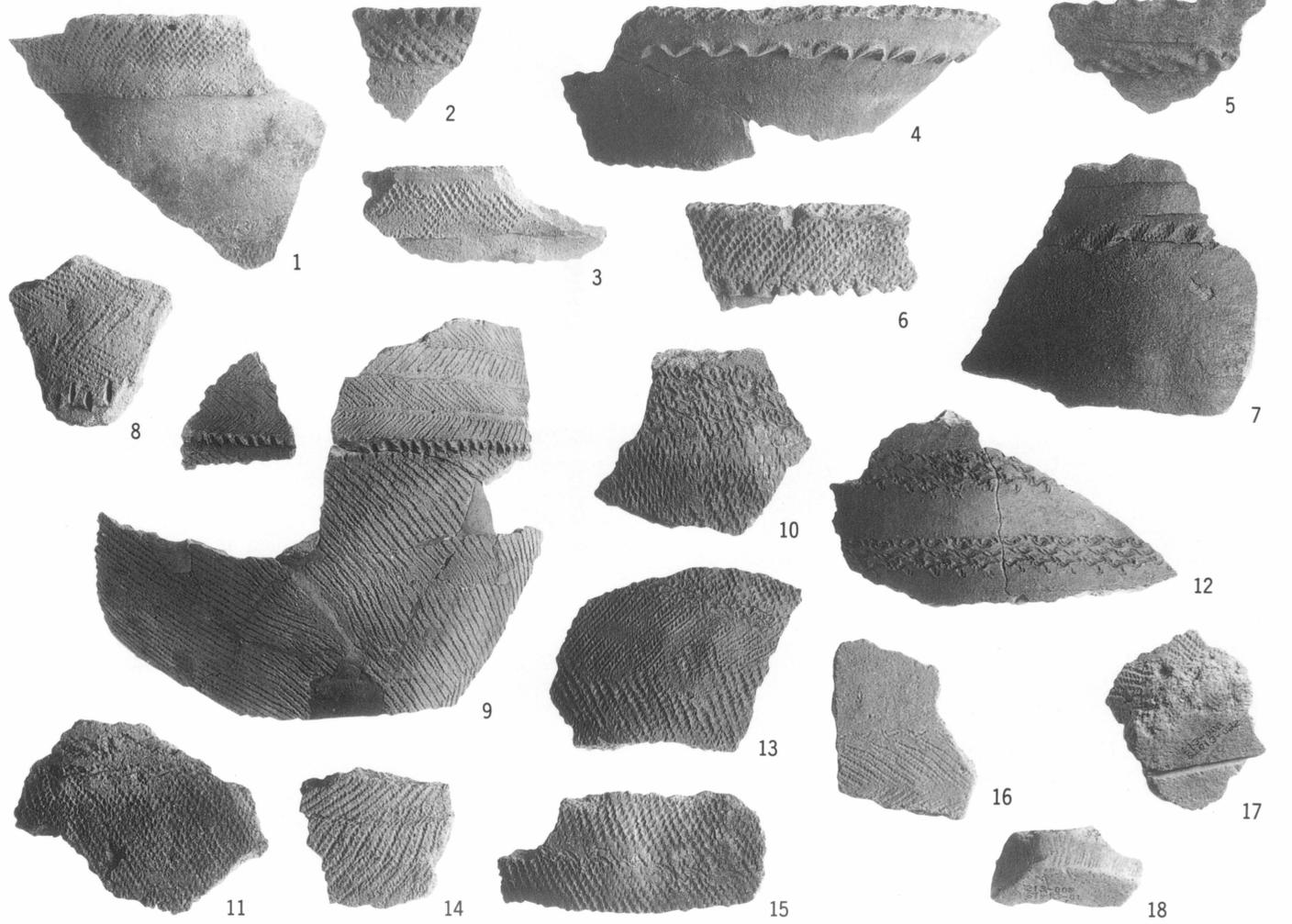
12



11

SI-17

SI-22



2

4

5

1

3

6

7

8

10

12

9

10

13

16

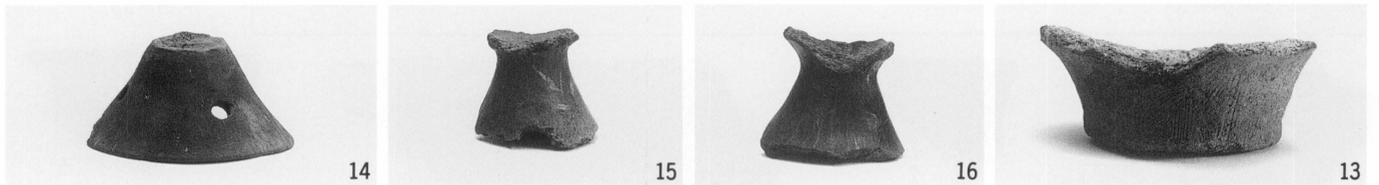
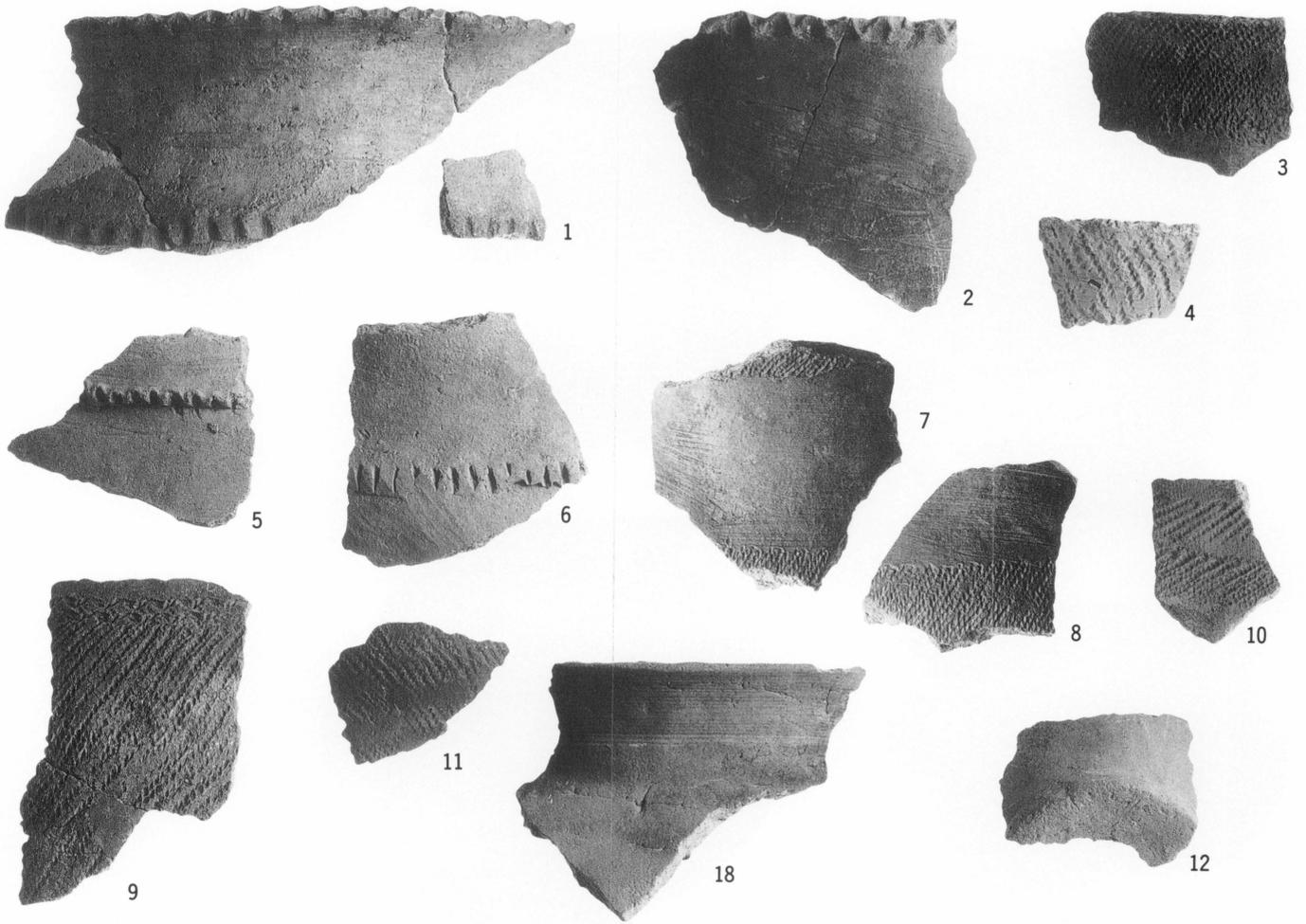
17

11

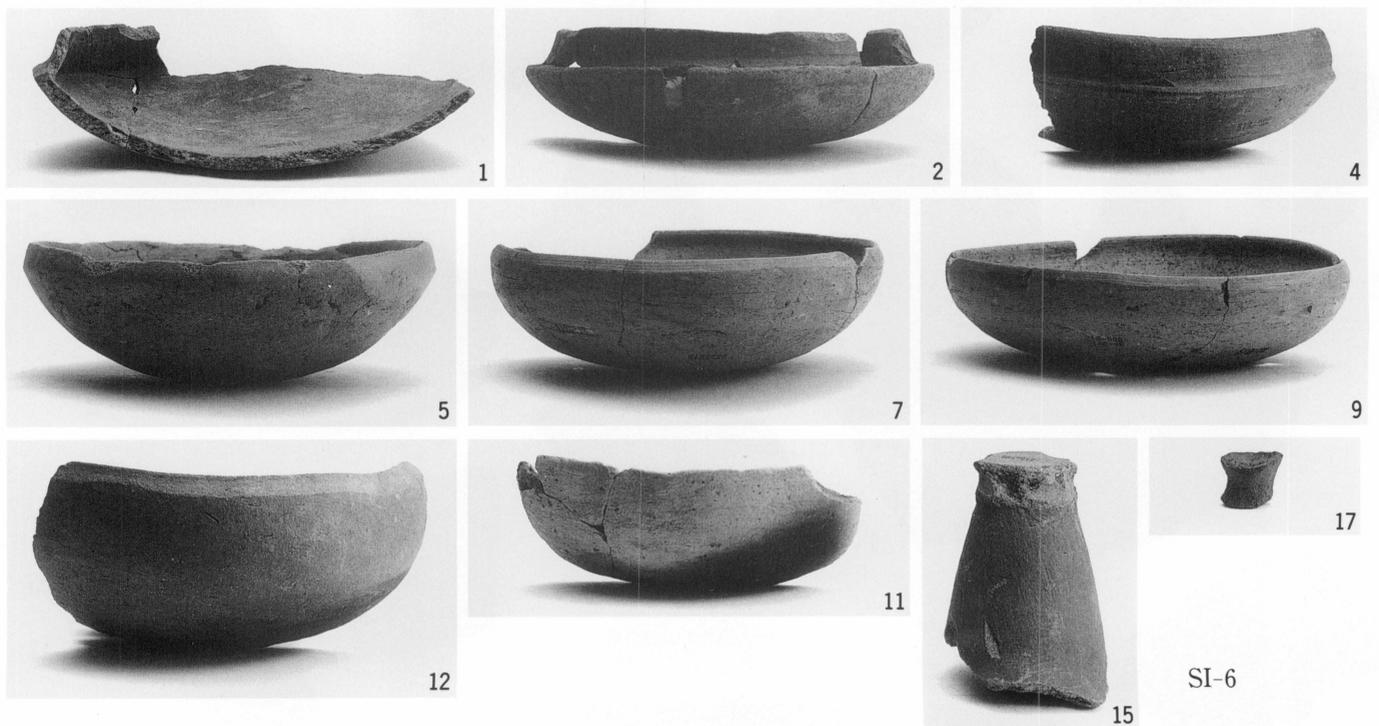
14

15

18



SI-25



SI-6



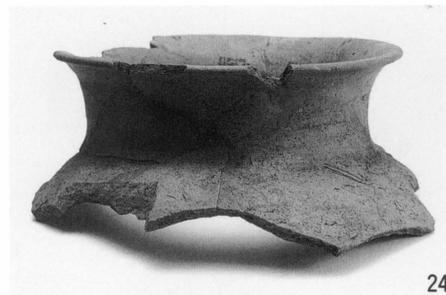
18



19



20



24



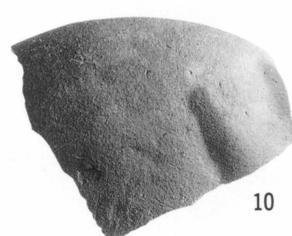
3



6



8



10



13



14



21



22



16



25



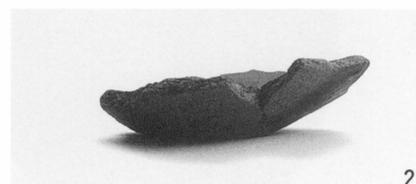
26



27

SI-6

SI-7



2



1



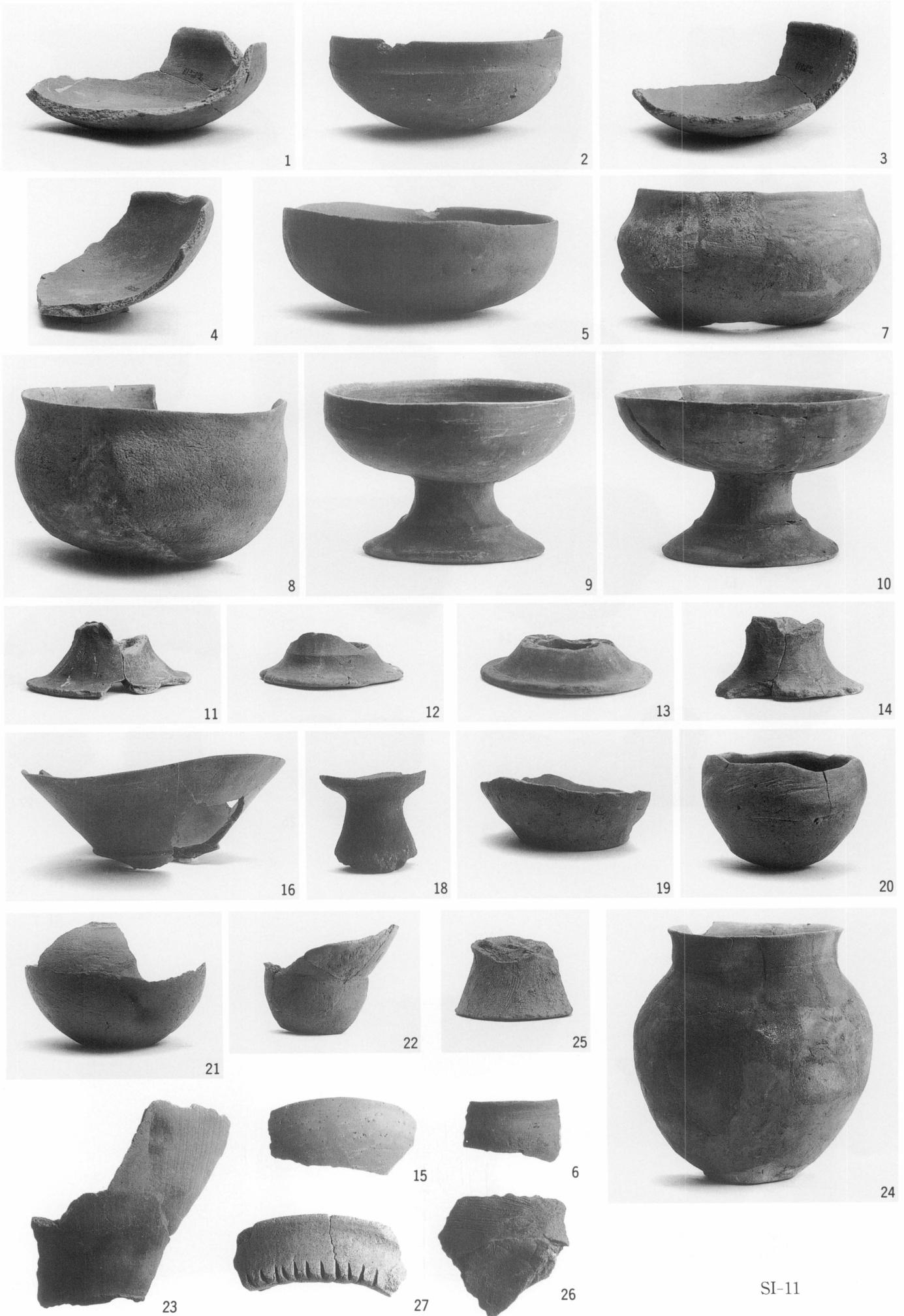
3

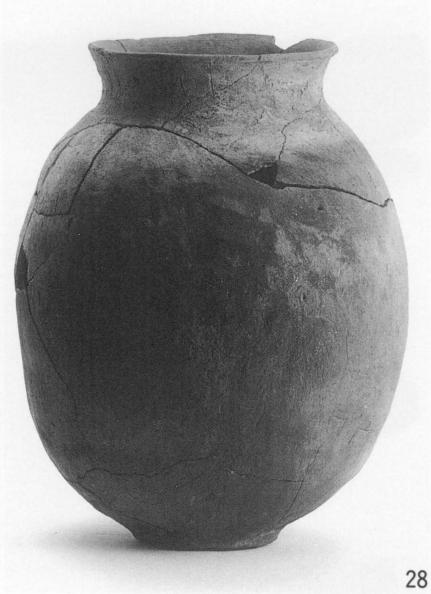


4



5





28



32



30



29



31



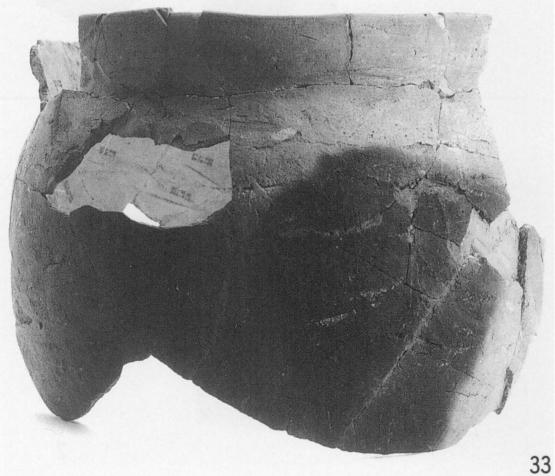
34



36



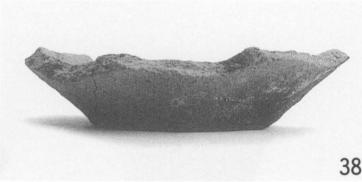
37



33



35

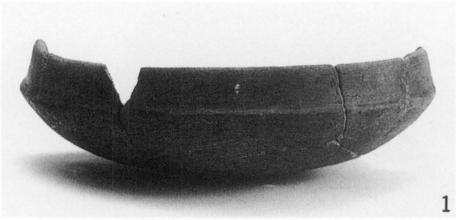


38



39

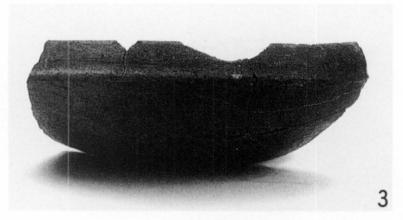
SI-11



1



2



3



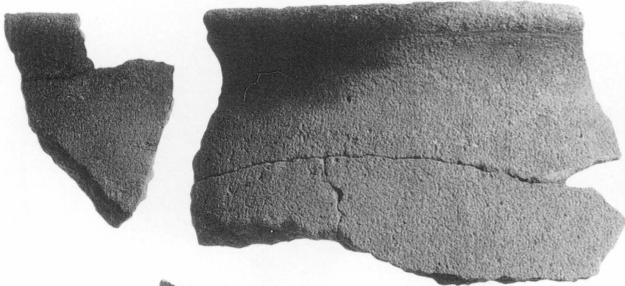
6



4



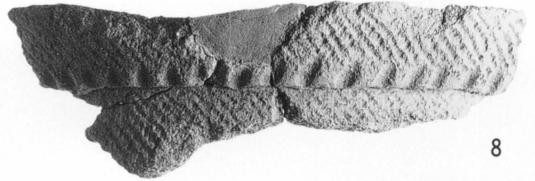
5



7



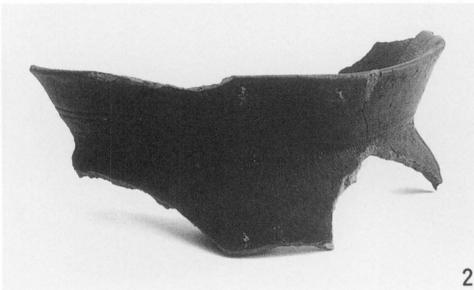
9



8

SI-16

SI-18



2



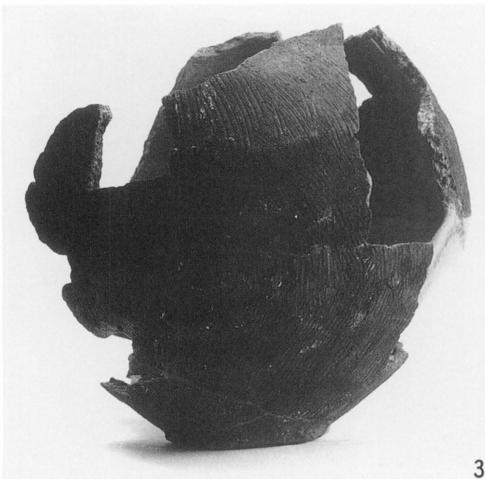
5



7



4



3



9



1



6



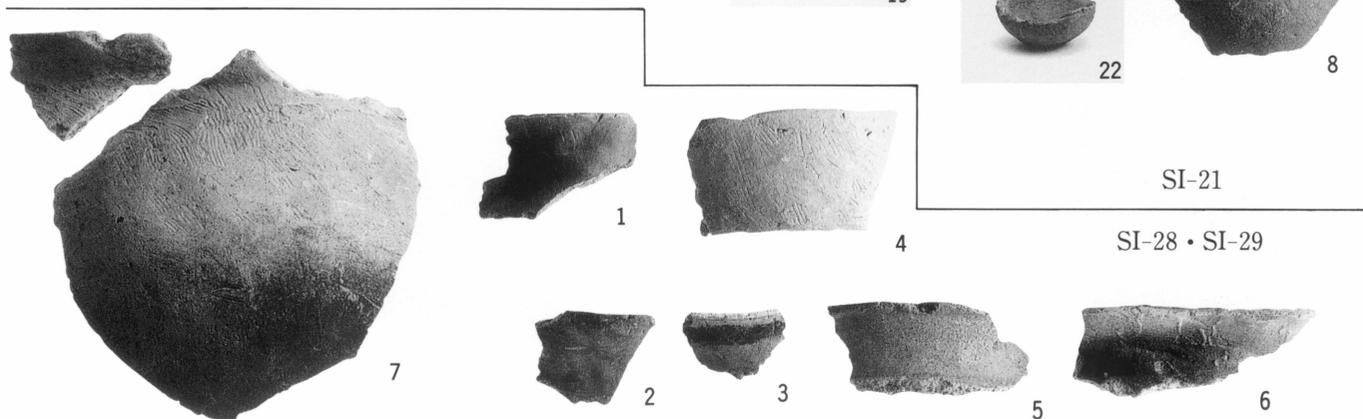
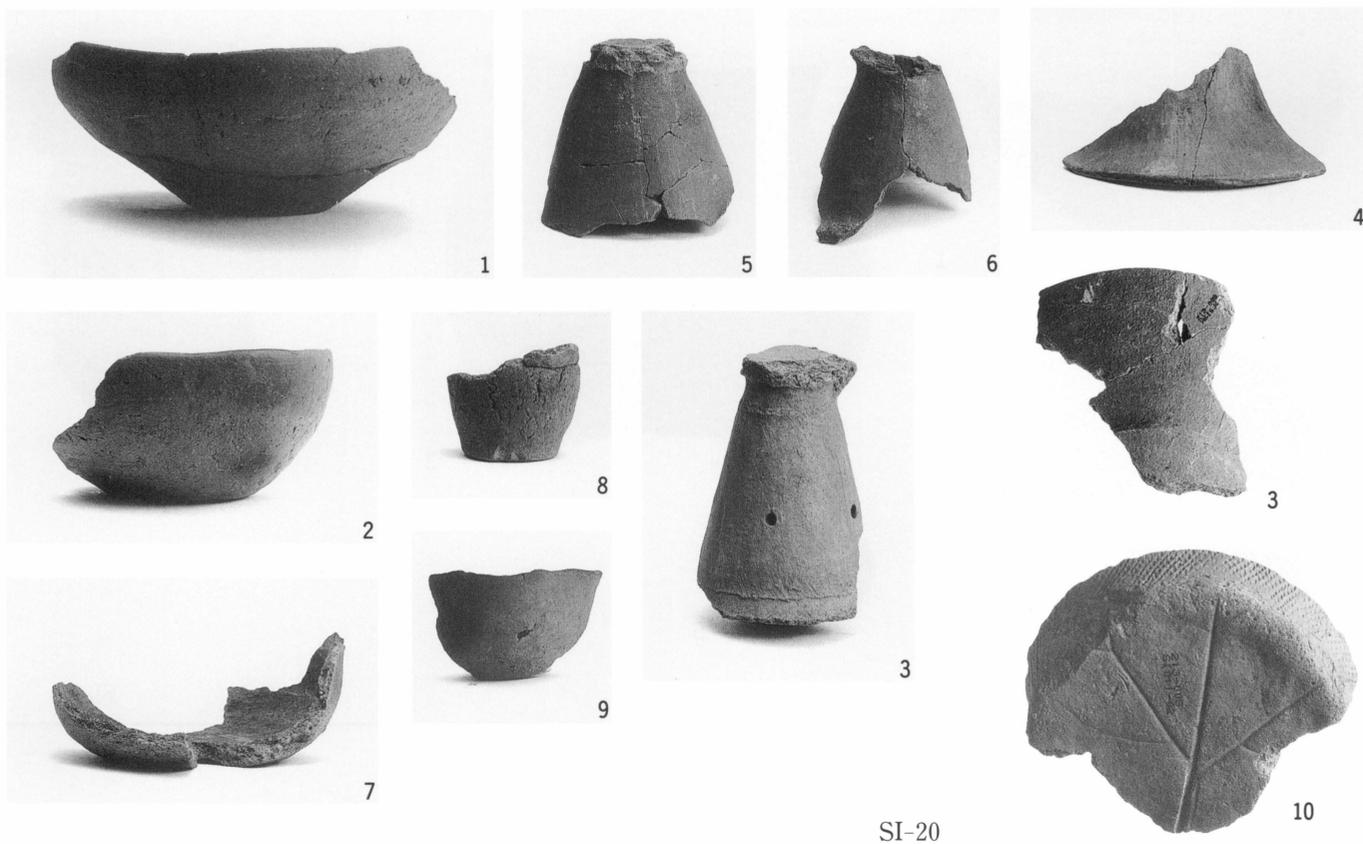
10



11

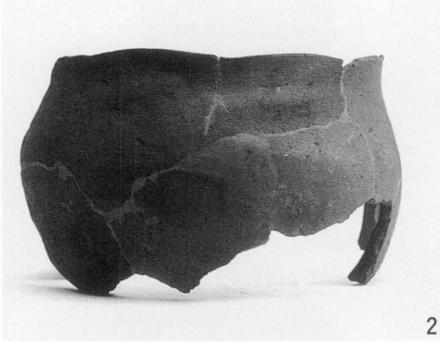


12





1



2



3



4



5

SI-30

SI-12



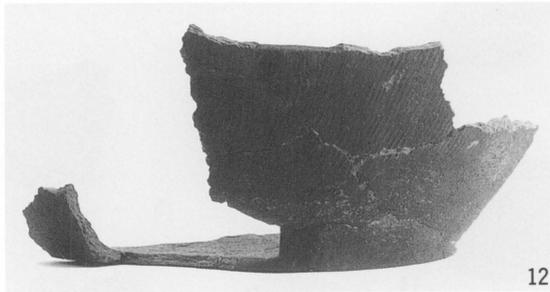
1



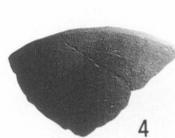
2



3



12



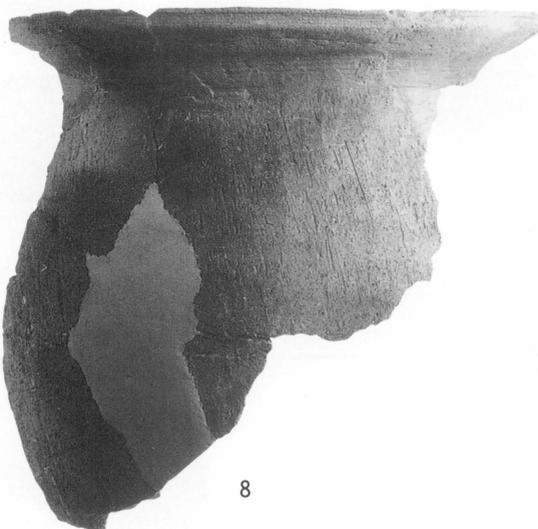
4



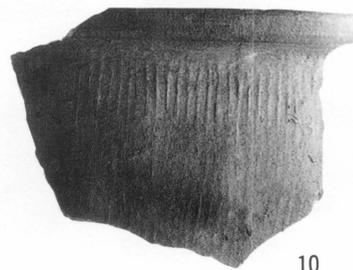
5



6



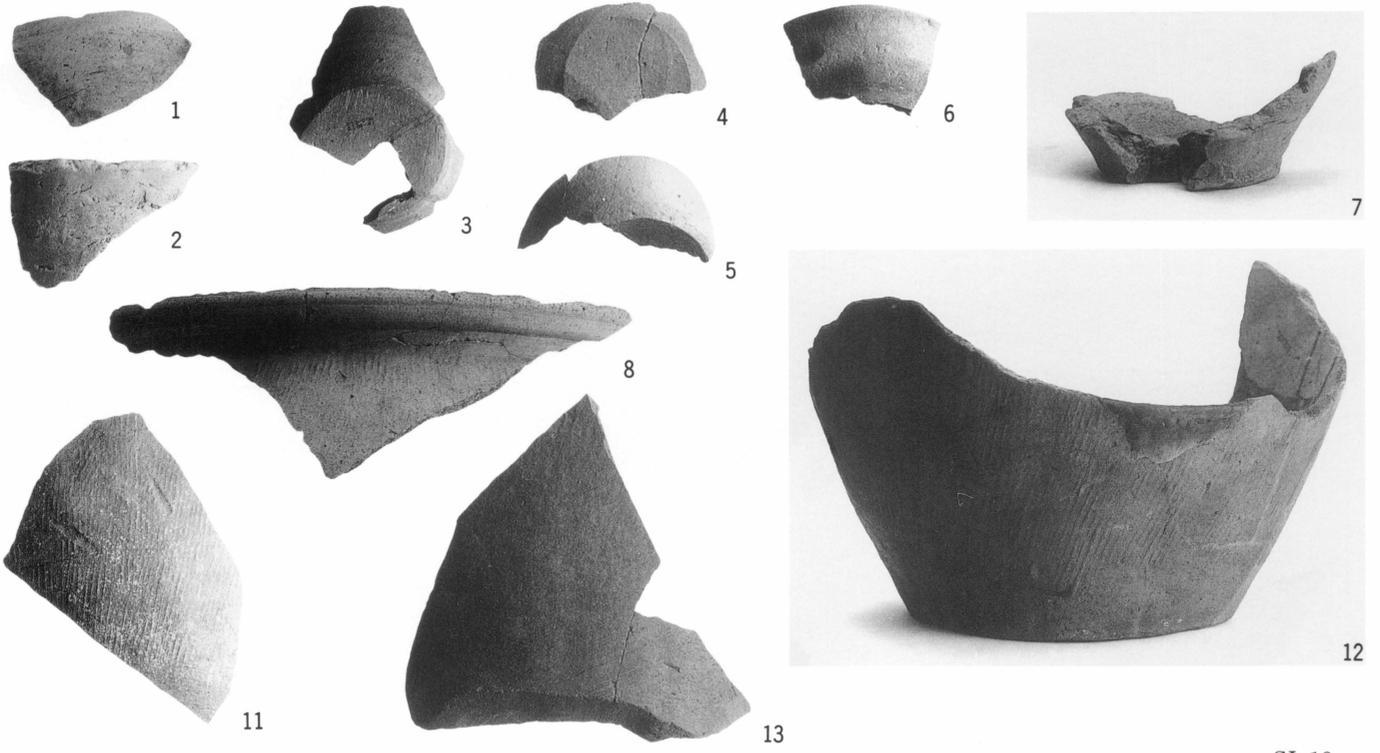
8



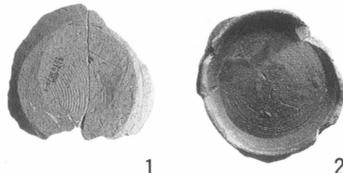
10



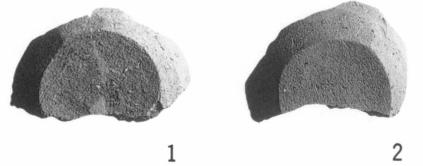
11



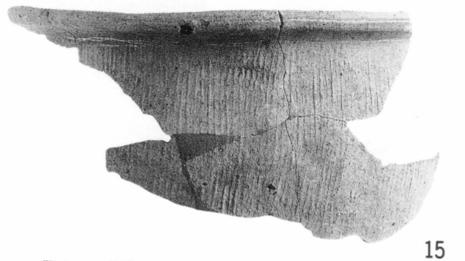
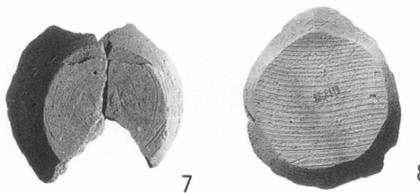
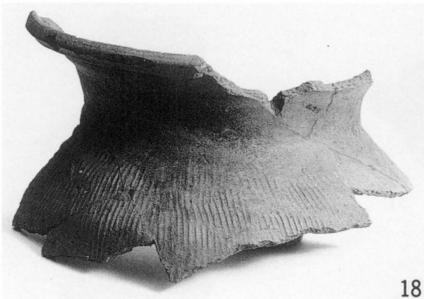
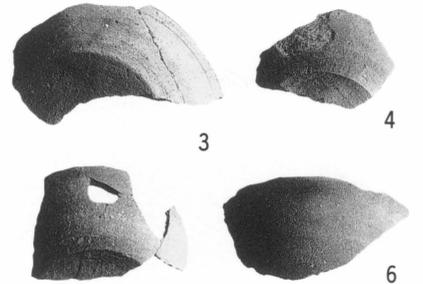
SI-13



SI-14



SI-15



11

SI-23 · SI-24

16



1



2



3



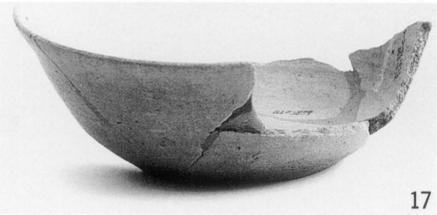
8



9



16



17



4



5



6



11



12



13



14



15



18



19



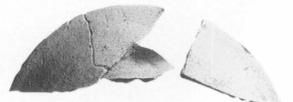
20



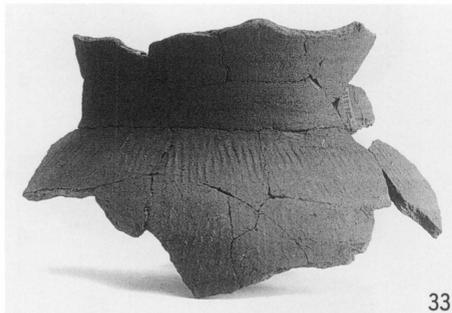
21



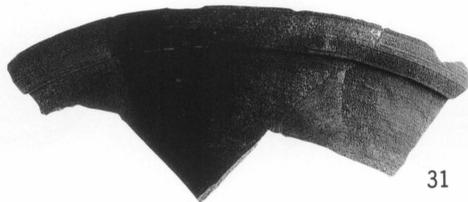
22



23



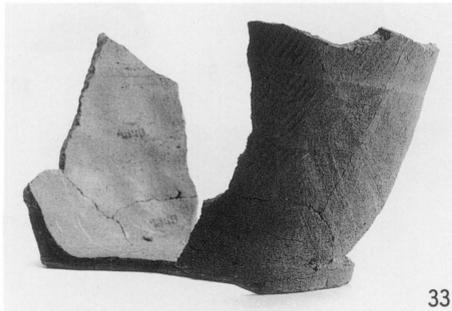
33



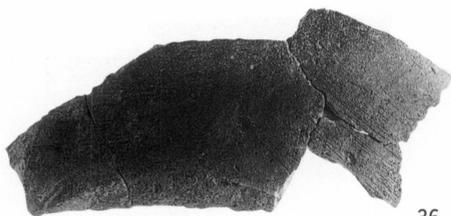
31



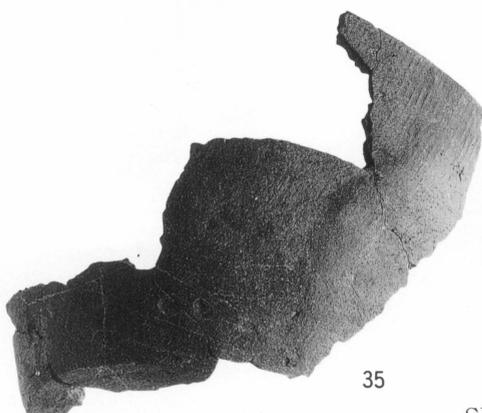
24



33



36



35



32



28



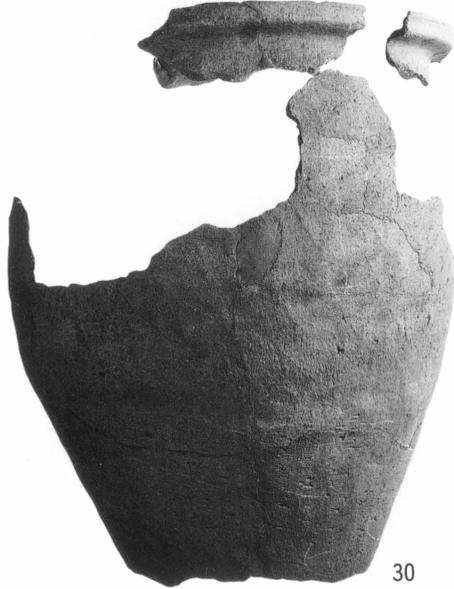
29



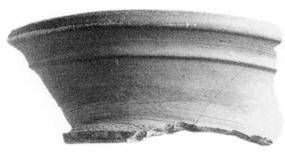
34



27



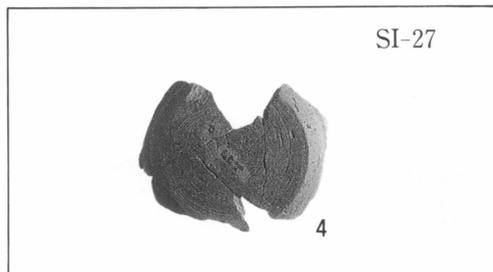
30



37

SI-26

SI-27



4



1



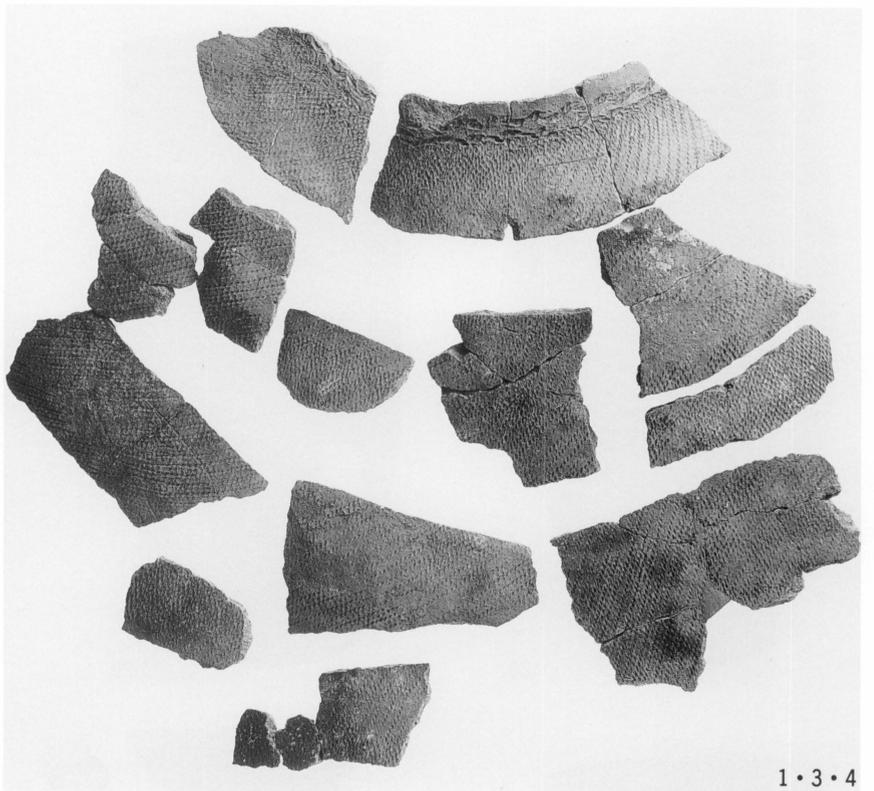
2



3



2



1・3・4



10



SD-1

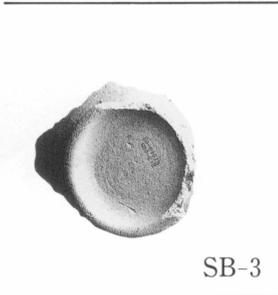
7



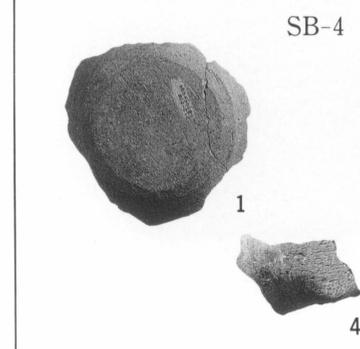
8



SB-1



SB-3



SB-4

1

4



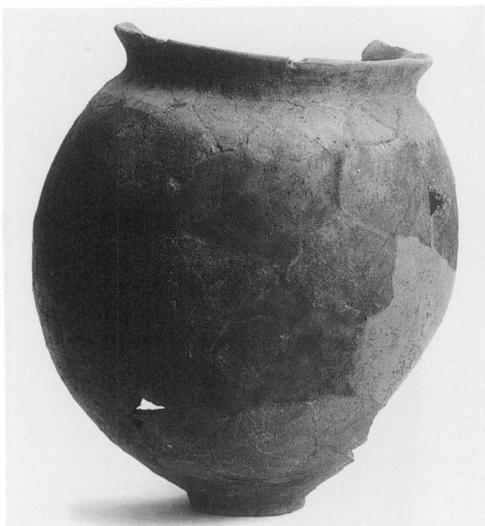
5



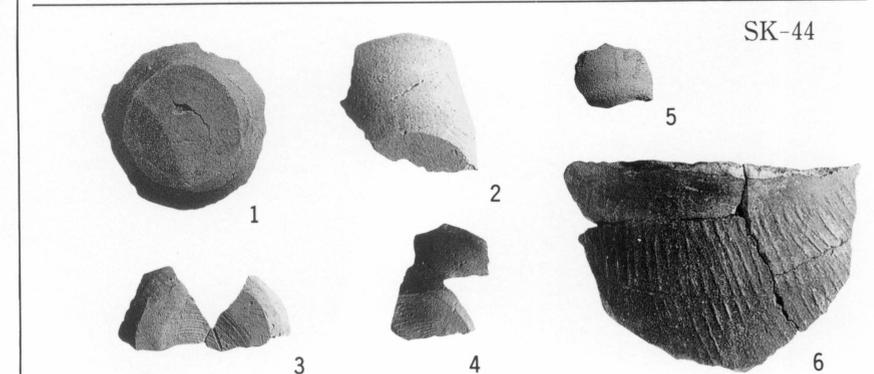
2



3



SK-43



SK-44

1

2

5



3



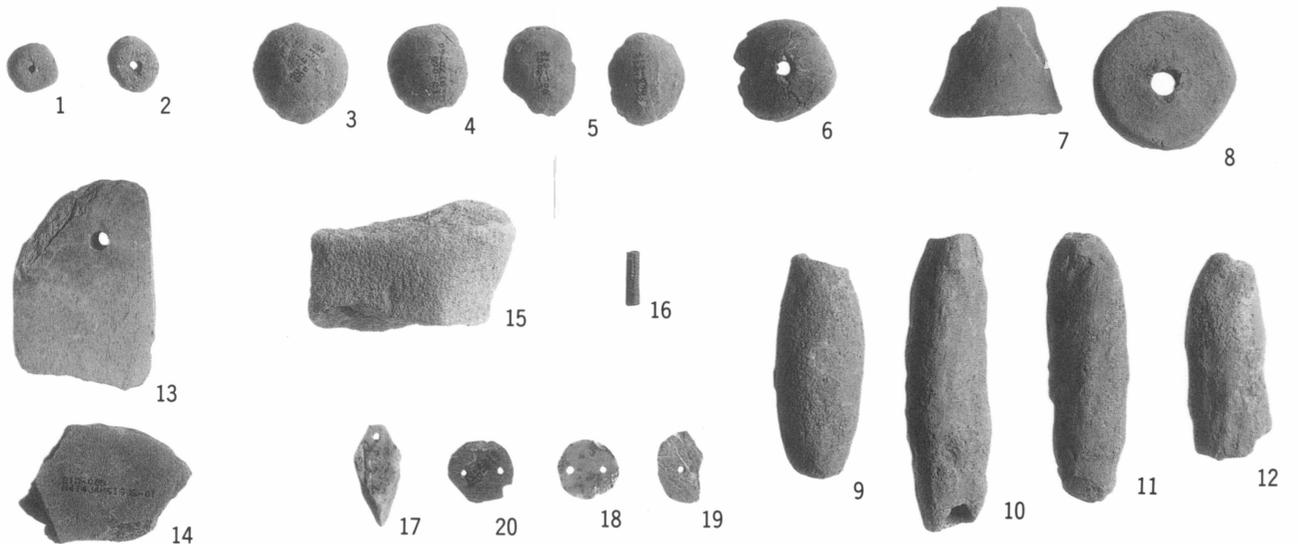
4



6



遺構外



石製品・土製品

報告書抄録

ふりがな	とうがねしどうにわいせき							
書名	東金市道庭遺跡							
副書名	農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書2							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第332集							
編著者名	城田義友							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
どうにわ 道庭	とうがねしいえのこ 東金市家の子 あざひがしおおみやだい 字東大宮台	12213	008	35度 35分 5秒	140度 23分 3秒	19970203 } 19970331 19970403 } 19970506	824 240	農業大学校 校舎建設に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道庭	散布地	縄文	なし		縄文土器、 石器（石鏃、磨石）			
	集落跡	弥生	竪穴住居跡	3基	弥生土器、石器、 軽石	環濠は第1次調査 からの続き		
		古墳	環濠	1条				
			竪穴住居跡	11基	土師器、須恵器	和泉式～鬼高式期 が中心。出土遺物 の半数を占める。		
			土坑	2基	石製模造品、菅玉 土製品、砥石（軽石）			
		奈良・平安	竪穴住居跡	7基	土師器、須恵器	「山邊□」墨書土 器、竪穴住居跡か ら上総国分寺創建 時瓦に酷似する平 瓦破片が出土		
			掘立柱建物跡	4棟	灰釉陶器、鉄製刀子			
			土坑	2基	鉄製品、平瓦、砥石、 土製品、鉄滓			

千葉県文化財センター調査報告第332集

東 金 市 道 庭 遺 跡

—農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書2—

平成10年3月31日

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 農 林 部
千葉県中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正文社
千葉県中央区都町2-5-5
